流星のロックマンF　SHINING DARK

青い光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマンＦ　　ＳＨＩＮＩＮＧ　ＤＡＲＫ

【Ｎコード】
Ｎ５５０３Ｕ

【作者名】
青い光

【あらすじ】
シャイニングオブダークからタイトルを変更しました。

電波技術がさらなる発展を遂げた世界。

世界を三度の危機から救った主人公、星河スバルは６年生になり平和な生活望んでいたが、地球に新たなる脅威が襲いかかる！

この作品は流星のロックマン、ロックマンエグゼについてわかって

いるとより面白いです。

キャラクター紹介（前書き）

連載一週間を記念して
キャラクター紹介ページを作って見ました。
簡潔の紹介なので足りないかもしれませんがよろしくお願いします。

1　名前
2　持ってるウィザード
3　電波変換後の名前
4　登場作品
5　紹介文

で見てください。

わからない単語が出てきたら感想を使って聞いて来て下さい。私がわかる限り説明し、このページに追加します。

キャラクター紹介

～ＷＡＸＡ遊撃隊メンバー～

１星河　スバル
２ウォーロック
３ロックマン
４流星のロックマン１～３
５宇宙が大好きな小学６年生。事故で父親が行方不明になり心を閉ざしていたが、数々の試練や、仲間との強い絆により、心やさしく明るい性格で誰よりも絆の強さを知っている。

１響　ミソラ
２ハープ
３ハープ・ノート
４流星のロックマン１～３
５大人気少女シンガーで、スバルの友達。小学６年生。過去に母親を亡くしている。

１牛島　ゴン太
２オックス
３オックス・ファイア
４流星のロックマン１～３
５スバルの友達。食いしん坊だけど仲間思いで、力自慢、牛丼が大好物。

小学６年生

１暁　シドウ
２アシッド
３アシッド・エース
４流星のロックマン３
５うまい棒が大好きで、少し前まで怪我で入院していた。ＷＡＸＡで働く、遊撃隊の隊長

１双葉　ツカサ
２ジェミニ（ヒカル）
３ジェミニ・スパーク
４流星のロックマン１~２
５もうひとつの人格であるヒカルを封じるため今までコダマタウンから離れていたが帰ってきた。小学６年生。

１ジャック
２コーヴァス
３ジャック・コーヴァス
４流星のロックマン３
５元ディーラーの幹部でスバル達の敵だったが今は仲間、小学６年生。

１神風　カケル
２ベルセルク
３××××××

４オリジナル
５オーパーツと同じ名前のウィザードを持つ少年

１クインティア
２ヴァルゴ
３クイーン・ヴァルゴ
４流星のロックマン３
５元ディーラー幹部でジャックの姉。今はＷＡＸＡで働いている。

～クラスメイト～

１白金　ルナ
２モード
４流星のロックマン１～３
５スバルの友達で、委員長と呼ばれている。ロックマンのファン。
小学６年生

１最小院　キザマロ
２ペディア
４流星のロックマン１～３
５スバルの友達。運動は苦手だけど、広い知識をいかして、スバルたちをサポートしてくれる。

～敵～

１Ｒ
４×××××
５ネットナビを復活させ人類に復習をたくらむナビ。頭から黒いマントを身に付けている。

１フォルテ・Ｒ
４ロックマンエグゼ１～６
５かつて電脳の破壊神と呼ばれたナビのデータから復活させたナビ。その強さは計り知れない。

～その他～

１星河　茜
４流星のロックマン１～３
５スバルの母親、料理が得意。大吾が帰ってきた今でもパートを続けている。

１星河　大吾
４流星のロックマン１～３
５事故で行方不明になり宇宙にいたがスバル達のがんばりで地球に帰ってきた。ＷＡＸＡで働いている。

１ヨイリー博士
４流星のロックマン１～３
５名前を呼ぶとき必ずしもちゃんを付けて、ＷＡＸＡで働いている。

１育田　道徳
４流星のロックマン１、２
５スバル達のクラスの先生で、子供好き。

１ＷＡＸＡ長官
４流星のロックマン３
５白髪のおじいさん。

～あらすじ～

一度目はＦＭ星人の侵略
二度目はムー大陸の復活
三度目はメテオＧの接近
の危機から世界を救った主人公、星河スバルは、新たなる脅威に再び立ち向かう。

～専門用語～

ビジライザー
大吾が作ったメガネで電波の世界を電波変換せずに見れるスゴイメガネ。

ハンターＶＧ

ウィルスバスティングのために新たに開発された携帯端末、ウィルスバスティングに特化された端末です。

ウィザード
ハンターＶＧなどの電子機器に連動した人格を持ったプログラム、電波体することも出来る。ウォーロックのような宇宙から来た電波生命体のほとんどかバトルウィザードとして暮らしている。

ブラザーバンド
本当に信頼し合う人同士を絆で結ぶシステム、ブラザーバンドを結ぶことによって、お互いのより強い信頼関係を築くことを目的とします。

ウェーブロード
普段は見えない電波でできた道、電波変換したさいによく使っている。

新たなる脅威（前書き）

初小説です。
初めてなので間違いがあるかも知れませんが読んでくれたら幸いです。

新たなる脅威

～月表面～

???「長かった……ようやく１００年前僕達を捨てた人類に復讐することができる。」

月から地球を見ながら頭から黒いマントを被った男は月の表面から地球を見ていた。

???「そのために準備が必要だ……人類と戦うためにの力が……フォルテ！」

男の呼ぶとすぐに光と共に体をマントに包んだ一体のネットナビが現れた。

フォルテ「……呼んだか…Ｒ。」

フォルテにＲと呼ばれた男は話を続けた。

Ｒ「お願いがあってね……今すぐ地球に向かって欲しい。」

男は地球を見るのをやめてフォルテの方を見ながら話した。

フォルテ「地球に……攻撃を開始するのか？」

R「違うよ……あるデータを集めてきて欲しいんだ。」

Rはフォルテの間違った考えをすぐに訂正した。

フォルテ「データを集める必要があるのか？」

フォルテはデータを集める必要性がわからなかった。

R「今の地球は昔と違って電波によって電脳世界作られているためネットナビは長時間電脳世界にいられないし本来の力を出すことが出来ない……だから地球にいる電波体などから本来の力を出すために必要なデータを取ってきて欲しいんだ。」

フォルテ「データを取りに行くだけなら俺が行かなくてもいいんじゃないか？」

R「言ったじゃないか……今の僕達は長時間電脳世界にいられないて……けど君のような強いネットナビなら他のよりは長時間電脳世界にいられるだろうし君にはゲットアビリティプログラムがある。だから君が適任だと思たんだ……どうかな？」

Rが言ったゲットアビリティプログラムは倒した敵やデータの残骸からデータを吸収して自分の物にできるプログラムでフォルテだけ

がこのプログラムを持っている。

フォルテ「……わかったが地球には強い奴はいるのか？」

フォルテは突然作戦に関係ない質問をした。

R「……いるよ……」

Rは何かを思い出すように呟いた。

フォルテ「そうか……お前が言うなら期待ができそうだ。」

フォルテは背を向けると地球を見つめた。

R「だからって自分から強敵と戦わないでね。」

フォルテ「わかっている……」

その言葉を最後にフォルテは光となって地球に向かっていた。

R「頼んだよフォルテ……」

Rは地球に向かっていくフォルテを見送りながら呟いていた。

新たなる脅威（後書き）

時間があれば続きを書こうと思います。

主人公の不在（前書き）

こんにちは暁シドウです。時は２２０Ｘ年、地球は三度に渡り滅亡の危機に直面したが主人公、星河スバルとＡＭ星人であるウォーロックが電波変換した姿ロックマンによって地球は救われた……

……読んでられるか！！

作者「どうしたんですか暁さん」

暁「どうして俺がプロローグを読んでんだよ！」

作者「それは暁さん以外に読んでくれるほど暇な人がいなかったからですよ。」

暁「なっ…」

作者「暁さんの出番を増やすので勘弁してくださね。さようなら」

暁「こら待て」

主人公の不在

～ＷＡＸＡニホン支部～

暁（スバルやつ大丈夫かな……）

暁シドウは、自分の机にある椅子座りながら１人の少年を心配していた。

その後気分転換に机の引き出しに入れていたうまい棒を取り出し食べ始めた。

「サクサクサクサクサク……」

なせシドウがスバルの心配をしているかと言うと、今この時代にスバルがいないからである。

今スバルはクロックマンに拐われたミソラを助けるために今から２００年前に行っているのだ。

暁「ヨイリー博士がいうには、あと４時間で装置が出来ると言っていたが……」

シドウがつぶやくと持っていたハンターＶＧからウィザードであるアシッドが出てきた。

アシッド『どうかしたんですか？シドウ。』

暁「いや……ただスバル達が帰ってくるまでは、地球は俺達で守らないといけないなと思ってな……」

アシッド『そうですね。』

♪～♪～♪～

そんな話をしていた時にハンターＶＧが鳴り出した。

アシッド『シドウ、メールが届きましたよ。』

アシッドに言われシドウはメールを確認した。

暁「何々……現在ドリームアイランド付近で強力なノイズが発生中……至急調査に迎えか……」

アシッド『向かいますか？』

暁「そうだなリハビリがてらいってみるか！」

シドウは数ヵ月前まで入院をしていて最近、リハビリが終わり仕事

に復帰していたがまだ少し体がなまっていた。

シドウは立ち上がり外に出ると電波変換に必要なトランスコードを唱えた。

暁「トランスコード！アシッド・エース！」

電波変換をしてアシッド・エースになったシドウは光となってノイズが発生している地点に向かった……

そこには危険な存在がいることを知らずに……

～ドリームアイランド付近～

シドウ「確かにここら辺はノイズ率が高いな……」

現場近くのウェーブロードに降りたアシッド・エースは呟いた。

すると背後にアシッドが現れた。

アシッド『シドウ……ノイズを産み出しているものはここから南東に5キロの地点です……ゆっくりとですが移動しています。』

アシッドには遠くの電波を探知する機能があるため電波体の位置を探知する事ができる。

シドウ「5キロも離れていているのにここら辺のノイズ率が上がっているのか？一体何がノイズを起こしているんだ？」

アシッド『詳しくはわかりませんが……ノイズを産み出しているのは電波体ではないようです。』

アシッドは発生源を割り出そうとしたがわからなかった。

シドウ「一体何が原因何だ……急ぐぞ、アシッド！」

アシッド『了解。』

アシッドが消えるとアシッド・エースは再び光となって目的地に向かっていった……

主人公の不在（後書き）

前書きはこんな感じで自由に使っていきたいと思います。

説明が遅れました。
ウィザードの声は『』
心の声は〈〉
その他は「」
にしたいと思います。

アドバイスなどお願いします。

ヒーロー？（前書き）

青い光です。
初めての感想ありがとうございます。

感想を貰えるとても嬉しいですね（笑）。

感想は返信しない変わりに前書き・後書きで返信します。

次からできるだけ長く書こうと思います。

アシッド『作者さん、早く本編に行きましょう』

作者「わかったよ。それではどうぞ。」

ヒーロー？

暁「なんなんだこれは……酷いな……」

目的地に向かっていたアシッド・エースはある光景が目に入りその場で足を止まった。

アシッド・エースが見た光景は酷いもだった……

ウェーブロードがあちこちが壊れ、ウィザードや電波ウィルス、デンパ君などの電波体の残骸が大量に落ちていた……

アシッド『シドウ！あそこにいるデンパ君がいますよ。』

アシッドはゴミ収集車の影に隠れたデンパ君を見つけたのでシドウに伝えた。

アシッド・エースはデンパ君の目の前に移動した。

暁「一体なにがここで起きたんだ教えくれないか。」

デンパ君はアシッド・エース近くに来た事に驚いていたがサテラポリスの人だとわかるとデンパ君は落ち着き取り戻し、ここで起きたことを話始めた……

デンパ君「突然現れたマントの奴が仲間やノイズで引き寄せられたウィルスやノイズを無くすために来たウィザードをたった一人ですべて破壊して言ったんです。」

暁「そいつどこに向かったかわかるか？」

現在強いノイズのせいで正確な位置を割り出せなくなっていた。

デンパ君「南の方角ですけど……」

暁「わかった……情報ありがとう。」

シドウが向かおうとしている姿を見て、あわててデンパ君は言った。

デンパ君「待って下さい！あんな化け物のところには行かない方がいいですよ！あなたも殺られてしまいますよ！」

その言葉を聞いたシドウはデンパ君に言った。

暁「心配ないさ、ヒーロー何でね。」

アシッド・エースは南に向かって行った……

フォルテ「確かに本来の力が出ないな……」

フォルテは、破壊したウィザードなどからデータを取りながら呟いていた。

フォルテ（データも揃った…そろそろ戻るか……！）

フォルテがそう思った瞬間に背後から銃声がなり、足元のウェーブロードに銃弾が直撃した。

暁「貴様！そこでなにをしている。」

アシッド・エースが放った銃弾だった。

フォルテ「愚かななやつだ……ここに来なければ俺にデリートされることもなかったものを……」

フォルテは話ながら振り返った。

暁「そのセリフ俺に勝てたら言うんだな…。」

アシッド・エースはブラスターを構え2人は睨みあった。

フォルテ（今まで倒した奴とはかなり違うな……Rが言っていた強い奴か……面白い……）

フォルテはRが言っていた事を思い出していた。

アシッド『シドウ……やはり奴は電波体では無いようです……一体何者なんでしょう……』

暁「それを確認するために戦うんだ……」

アシッド・エースは構えたまま呟いた。

フォルテ「いいだろ。Rには言われていないが貴様のデータもいただいて行こう。」

暁「R？……まあいい……行くぞ！」

こうして2人の戦いが始また……

ヒーロー？（後書き）

次回は初めてのバトルです。
上手く書けるか、わかりませんがよろしくお願いします。

感想・アドバイスをお待ちしてます。

いい勝負？（前書き）

青い光です。
アドバイス・感想などよろしくお願いします。

いい勝負？

フォルテ「シューティングバスター！」

フォルテは手をバスター展開すると銃弾を乱射した。

それを見たシドウはすぐさま回避行動を取るが……

アシッド『シドウこの技は威力が低いのでここはオーラで十分です。』

暁「わかった！バトルカード・オーラ！」

オーラを張って攻撃を防ぎながらフォルテに突っ込んで行く。

フォルテ「威力が足りんか……ダークソード！」

フォルテはバスターを撃つのを止め片手をソードに変えると突っ込んで来たアシッド・エースを斬りオーラが消える。

暁「ロックオンソード！」

ソードを振り切ったばかりのフォルテにアシッド・エースもブラスターにソードを展開させると斬りかかった。

フォルテ「オーラ！」

フォルテは紙一重でオーラを周りに張って攻撃を防いぐが……

暁「まだだ！」

アシッド・エースは再び斬りかかった。

フォルテ「ダークアームソード！」

フォルテは再びソードを展開してアシッド・エースのソードをソードで受け止めた。

暁・フォルテ「「うぉぉぉぉぉぉ！」」

2人の激しい斬りあいが始まり紙一重の攻防が続くが……

暁「なっ！…（消えた？）」

突然フォルテの姿かアシッド・エースの視界から消えた。

アシッド『シドウ後ろです！』

アシッドの言葉で後ろを急いで振り向いたが……

フォルテ「遅い！」

フォルテはアシッド・エースの背後に移動しており、フォルテはすぐにソードを振りきった。

暁「くっ……！」

アシッド・エースはとっさにソードでガードするが力に負けて後ろに吹っ飛んだ。

アシッド・エースはすぐに体勢を立て直して立ち上がろうとするがフォルテは次なる攻撃を仕掛けていた。

フォルテ「アースブレイカー！」

フォルテが飛び上がり手を降り下ろすとエネルギー波がアシッド・エースを襲った。

暁「バトルカード・バリア！」

アシッド・エースはバリアを張って攻撃を防ごうとしたがバリアは砕け散った……

暁「ぐっ……まだだ！」

かなりの衝撃がアシッド・エースを襲ったがけして倒れなかった。

暁「バトルカード・ヘビーキャノン！」

フォルテ「ヘルズローリング！」

2人は同時に技を放った。

アシッド・エースのブラスターから弾丸が放たれ、

フォルテが複数出した紫の炎のリングを突き破りながらフォルテに直撃して爆発した。

フォルテ「ぐっ……」

技が直撃したことでフォルテはひるんだ。

それを見たアシッド・エースはすぐに動いた。

暁「一気に行くぞ！バトルカード・グランドウェーブ、グラビティプラス！」

アシッド・エースから地を走る衝撃波が放たれた。

フォルテ「！追尾か……」

フォルテはすぐさま回避行動を取るがグランドウェーブの追尾機能を持っており避けきれずに直撃した。

フォルテ（動きを……）

グラビティプラスの効果でフォルテはその場から動けなくなっていた。

暁「これで決めるぞ！ウィングブレード！」

アシッド・エースは背中に光の翼を展開しフォルテに突っ込んで行く……

アシッド・エースの攻撃を見てフォルテは呟いた。

フォルテ「いい戦いのお礼だ……見せてやる……本当の力を！」

突然フォルテの体が光だし衝撃波が発生した。

暁「！」

衝撃波によってウェーブロードが壊れだしたのを見たアシッド・エ

ースは技をやめて距離を取った。

暁「一体何が起きているんだ?」

その言葉にいち早く答えたのはアシッドだった。

アシッド『信じられません……奴の体が我々と同じような電波体に変わって行きます。』

暁「何だと……!」

数秒間、フォルテから光が消え今までと比べ物にならないノイズを放っていた。

フォルテ「待たせたな……」

アシッド・エースの目の前にやって来たフォルテに暁は質問した。

暁「お前は……一体何なんだ?」

その質問にフォルテは答えた。

フォルテ「今の俺なら貴様など敵ではない……冥土の土産に教えてやる。」

フォルテは少しの沈黙のあとゆっくりと話始めた。

フォルテ「俺の名は、フォルテ・R……Rによって蘇ったネットナビだ。」

いい勝負？（後書き）

フォルテなどのキャラクターは基本的にロックマンエグゼ1～6までに使ったすべての技を使えるようにしたいと思てます。

Rとは？（前書き）

暁「なあ、作者さん」

作者「どうしたんですか暁さん？」

暁「これまで俺しか出てないしもう題名を流星のアシッド・エースに変えないか？」

作者「ダメですよ！何言ってるんですか！」

暁「だって俺以外に人間が出てないじゃないか！」

作者「何言ってるんですか？」

暁「？？？」

作者「次回からみんな出てきますよ？」

暁「何！」

作者「なので今回が暁さん最後の主人公です。」

それでは本編をどうぞ！

Rとは？

暁「フォルテ……だと」

シドウの言葉を無視してフォルテは話を続けた。

フォルテ「俺はRに頼まれて俺達ネットナビが最大限の力を出す為には電波体に変わる必要があった……そのために必要なデータを集めに来ていた……これから始まる人間との戦いの為にな。」

フォルテは言い終わる両手を前に出してアシッド・エースに向けた。

フォルテ「そろそろ戻らなくてはならないんでな……消えろ！ダークネスオーバーロード！」

フォルテの両手から紫色のエネルギーを産み出して、強力な一撃をアシッド・エースに放たれた。

暁（早い！）

フォルテの技を出すまでの早さにアシッド・エースは避けるのは難しいすぐに判断した。

暁「バトルカード・インビジブル！」

アシッド・エースはインビジブルにより姿が消え普通の攻撃は効かなくなったが……

アシッド『シドウ！その技にはきｋ…』

アシッドが喋り終わる前にフォルテが呟いた。

フォルテ「無駄だ……」

フォルテが使った技は対インビジブル性能を持っていた……

そのためインビジブルをしていても効果がない。

暁「しまっ……ぐおおおおおおおおおおお！！」

アシッド・エースは技をもろにくらい紫色のエネルギーにのみ込まれて行った……

フォルテはエネルギーを放ち終わると呟いた。

フォルテ「……まだ生きているのか」

暁「ぐっ……（体が動かない。）」

ダメージが酷くため動くことができないアシッド・エースをフォルテは見つめて質問した。

フォルテ「最後に俺も聞きたいことがある……貴様はウィザードとは違うな……お前は何だ？」

少しの沈黙のあとにシドウは答えた。

暁「俺はウィザードと電波変換した人間だ……」

フォルテ「そうか……さらばだ人間……」

フォルテは片手を上空に向けるとエネルギーの球体を作り始めた。

球体は徐々に大きくなっていく。

暁「……最後に聞かせてくれ……お前の言うRとは何だ？」

動くことができないアシッド・エースは最後の質問をした。

フォルテは叫んだ。

フォルテ「１００年前、居場所を失い、存在することも出来なくなったネットナビにとっての最後の希望、そしてネットナビ達の無念を晴らすために立ち上がった最後の存在であり最強の存在……それがRだ！」

フォルテが作っていた球体が出来上がった。

暁（ここまでか……）

アシッド・エースは覚悟を決めた。

フォルテ「消えろ！カオスナイトメ……！」

バキバキ

暁・フォルテ「「！」」

突然フォルテの左腕が崩れデータ化し始めた。

フォルテ「ぐっ……」

片手が消え集中力を乱したフォルテの手からエネルギーの球体が消えてしまった。

フォルテ「ぐっ……やはりまだ完全な電波体には慣れていなかったか……」

バキバキ

今度はフォルテのマントもデータ化し始めた。

フォルテ「（これ以上は無理か…）また会おう人間……」

フォルテはプラグアウトをしたように光となって去っていった……

暁「バトルカード・リカバリー」

バトルカードを使いある程度回復したアシッド・エースは立ち上がった。

アシッド『どうやらフォルテは不完全のようでしたね……おかげで助かりました……』

暁「アシッド、フォルテが言っていた事を覚えているか……」

アシッド『人間との戦い……ですか？』

暁「ああ……（地球にまた危機が迫っているのか……）」

アシッド・エースは光となって報告のためにＷＡＸＡニホン支部に戻って行った……

Rとは？（後書き）

フォルテの技名が間違っていたらすいません。

感想、アドバイスよろしくお願いします。

誤字、間違えがあったら教えて下さい。

帰ってきたロックマン（前書き）

ようやく主人公の星河スバル君が登場します。

話をロックマンエグゼＯＳＳと繋げるのが難しかった……。

帰ってきたロックマン

～ＷＡＸＡニホン支部～

ヨイリー「これでよし…」

ヨイリー博士が司令室の奥にある機械をいじっていた。

キザマロ「ヨイリー博士、スバル君とミソラちゃん帰ってくる準備が出来たんですか？」

ヨイリー「ええ。あとはスバルちゃんたちがクロックマンを倒せば自動的にワープホールがここと繋がるようになってるわ。」

委員長「じゃあロックマン様はもう帰って来るんですか？」

ゴン太「楽しみだぜ！」

ルナルナ団の３人である
白金ルナ、牛島ゴンタ、最小院キザマロが騒ぎ始めた。

ヨイリー「そうね…呼んだらスバルちゃんたちに聞こえるかも知れないわね。」

それを聞いて3人はスバルとミソラを呼びは始めた。

キザマロ「おぉーい！聞こえますか～～～～！？」

ゴン太「スバル～～！！ミソラちゃん～～！！そこに居るのか？？」

委員長「帰って来るなら、早く帰って来なさーい！」

3人が叫ぶとワープホールの向こうからわずかに声が聞こえた。

「……」

ヨイリー「どうやら上手く行ったみたいね。」

そして数分後ワープホールから2人の電波人間が出てきた。

スバル・ミソラ「「ただいま！」」

星河スバルと響ミソラは無事に現代に帰ってきた。

その後スバルは２００年前世界で熱斗君とロックマンエグゼに出逢い協力してクロックマンを倒したことなどを話した。

話の途中でミソラちゃんが言った、

ミソラ「向こうのロックマンが言ってたスバル君の大切な人て誰？」

との質問を委員長に聞かれせいで尋問と言う名の拷問にあったのは言うまでもない……

数十分後……

暁「スバル達は帰って来ましたか？」

シドウが帰って来たときにはスバル達はみんな帰っていた……

ヨイリー「ええ無事にみんな帰ってたわよ。」

暁「そうですか…。」

シドウは安心しながらヨイリー博士に言った。

暁「ヨイリー博士、今すぐあなたや長官たちに報告しなくてはならないことがあるんです。」

シドウは皆を集めると地球が新たな危機に直面していることを皆に話始めた……

～月内部～

フォルテは長時間いた影響でボロボロになりながらも帰ってきていた。

フォルテ「R……言われて通りにデータを取ってきぞ……」

Rはフォルテの状況を見て笑いながら答えた。

R「どうしたの？君ほどのナビがこんなになるなんて？」

フォルテ「電波世界に長時間いただけだ……」

R「時間を気にせずに敵と戦ってるからだよ……今回の戦闘で僕達の存在が人間に知られてしまったし……しっかりしてよ。」

Rはフォルテの頭の中を読んだの行動を見ていたのかフォルテの行動を全て知っていた。

フォルテ「（頭の中を読んだのか？）まあいい……R完全な電波体になるにはどのくらいかかるんだ。」

R「そうだね……実験も必要だし……完全になるには1ヶ月後くらいかな…？」

フォルテ「そうか…」

R「それより失ったデータを補充しないといけないから早くデータベースに行くよ。」

Rはその言葉を最後にフォルテと一緒に基地の奥にあるデータベースに向かって行った……

帰ってきたロックマン（後書き）

感想・アドバイスなどよろしくお願いします。

次回から
小声〈〉
恥ずかしい／／／／／／
など新しい記号を使って行きます。

六年生（前書き）

自分と同じく流星のロックマンを書いている人達のスバル君は凄く朝に弱いですよね。
でも自分の記憶が正しいければ、スバル君はゲームでは一度も寝坊をしていませんよね？

なのでこの作品のスバル君はそこまで朝に弱くないようにしたいと思います。

六年生

～ＷＡＸＡニホン支部～

フォルテとの戦いから1日後のＷＡＸＡニホン支部……

長官がサテラポリス遊撃隊隊長であるシドウと話をしていた。

暁「電波変換できる人を出来るだけ同じ町に集める……ですか？」

シドウの質問に長官が答えた。

長官「上と話あった結果、地球防衛のために遊撃隊に参加してくれる人達をここＷＡＸＡか、現在電波変換できる人が一番多く集まっているコダマタウンに住んでもらうことが決定したんだ。」

暁「遊撃隊に参加している人には伝えたんですか？」

長官「コダマタウンに住んでいない遊撃隊のメンバーには伝えたぞ。転校や引っ越しなどの準備があるからな。」

暁「反対した人は、いなかったんですか？」

長官「基本的にはＷＡＸＡの宿舎か、コダマタウンに住んでいるＷＡＸＡ社員の家に居候してもらうだけだから特に反対は無かったなが……そんなことよりヨイリー博士！」

長官に呼ばれてヨイリー博士がやって来た。

ヨイリー「はい。なんですか？」

長官「遊撃隊員の全員分の新しいのＰＧＭ開発はあとどのくらいで出来そうですか？」

ヨイリー「そうね……1週間ぐらいかしら。」

長官「そうですか……引き続き製作をお願いします。」

ヨイリーの言葉を聞くと長官は仕事に戻って言った。

暁「俺も仕事するか…」

シドウはポケットに入っていたうまい棒を食べながら仕事に戻っていった。

それから5日後…
～スバルの家～

AM　7：00

ウォーロック『スバル！今日から学校なんだろ、起きた方がいいぜ。』

スバル「ロック……わかってるよ……」

スバルはベッドから出ると階段を降りて着替え始めた。

主人公である星河スバルは現代に帰って来てからの5日間は疲れからかほとんど寝て過ごしていたが今日からスバルの通っているコダマ小学校は春休みが終わり6年生としての生活が始まろうとしていた……

着替えが終わりスバルは部屋を出てリビングに向かった……

スバル「おはよう、母さん」

リビングには母親のあかねがいた。

ちなみに父親である大吾は行方不明になっていたがＧメテオの事件の後に無事に帰ってきていた。

現在はＷＡＸＡに働いていて、今は仕事のためすでに出かけている……

茜「おはようスバル。待ってて、朝食の準備するから。」

朝食の準備が終わりスバルは食べ終わると学校に向かうとために玄関に向かった。

スバル「じゃあ行ってきます。」

ウォーロック『行ってくるぜ！おふくろ！』

茜「言ってらっしゃい」

２人を見送ったあと茜は呟いた。

茜「帰ってかきたときの反応が楽しみだわ♪」

そう……スバルは知らなかった。

これから起こることを……

六年生（後書き）

茜の言葉…気になりますね。

次回は、オリジナルキャラクターを出そうと思います。

感想・アドバイスなどよろしくお願いします。

転校生は誰？（前書き）

青い光です。

平日なので投稿できないかな～と思ったのですが、学校で話を考えられたので投稿できましたね。（笑）

できるだけ長く書こうとは思っているのですがなかなか書けませんね。

転校生は誰？

～通学路～

スバルが家を出て数分後、委員長たちと合流して学校に向かっていた。

キザマロ「そういえばスバル君、今日僕たちのクラスに転校生が２人来るのを知っていますか？」

スバル「転校生？転校生なんてジャック以来だね。」

ジャックとクインティアはＧメテオの事件の後、罪に問われたが暁さんの呼び掛けとＷＡＸＡの遊撃隊に参加する事を条件に無罪になりジャックはコダマ小学校に戻り、クインティアはＷＡＸＡで働いている。

委員長「知らなかったのスバル君？それじゃあツカサ君が復学するのも知らないのかしら？」

スバル「知らなかった……そっか、ツカサ君帰ってくるんだ……」

スバルは双葉ツカサ君の事を思い出していた。

ツカサは二重人格者でもう一つの人格であるヒカルとのけじめを着

けたら帰って来ると言っていた。

ゴン太「キザマロ、転校生はどんな奴何だ？」

キザマロ「さあ……検討もつきませ……」

ウォーロック『俺は知ってるぜ。』

全員「「「「！」」」」

突然ハンターＶＧから飛びだウォーロックに皆をが驚いた。

スバル「ロック……いきなり出て来ないでよ！ビックリするじゃないか！」

ウォーロック『いいじゃねか！それよりその転校生の１人はお前たちの知り合いだぜ！』

全員「「「「！」」」」

ウォーロックの発言にその場にいた全員が再び驚いた。

スバル「ど、どうしてロックがそんなことを知ってるの？」

ウォーロック『3日前に大吾に頼まれてＷＡＸＡに行った時に今日転校生してくる2人とツカサの奴にあって転校生してくることを聞いたぜ！』

スバル「（確かに3日前に父さんにウォーロックを預けたけど…）ねぇウォーロックどうして教えてくれなかったのさ！」

ウォーロック『俺が帰って来た時も寝てたじゃねーか！』

スバル「うっ……」

図星をつかれてスバルは、言葉が出なかった。

キザマロ「じゃあ転校生はＷＡＸＡの関係者なんですか？」

ウォーロック『それは学校で確かめるんだな！』

機嫌を悪くしたウォーロックはハンターの中に戻ってしまった。

ゴン太「結局、転校生はどんな奴なんだ？」

委員長「学校に着までのお楽しみてわけね……」

スバル・ゴン太・キザマロ（（（ヤバイ……））））

委員長の機嫌が悪くなりそうだったのでスバル達は委員長の機嫌をとりながら学校に向かった……

～コダマタウン上空～

コダマタウン上空のウェーブロードからスバルたちを見ているウィザードと電波変換した男の姿があった……

？？？『あのビジライザーを頭にかけている少年が星河スバル君のようだな。』

？？？「彼が世界を救ったヒーローのロックマンか……彼のウィザードにはあったけど彼はどんな人なのかな？」

×××『学校に行けばわかるさ。』

×××「そうだねベルセルク……」

2人は話が終わると光となって学校に向かって行った……

転校生は誰？（後書き）

宣言どうりにオリジナルキャラクターを出せて良かったです。
ウィザードの名前は今後の話に関わってきます間違いではありません。

感想・アドバイスをお待ちしています。

（オリキャラの名前を考えなくては…）

転校生の正体（前書き）

青い光です。

今回は長く書けていると思います。

それではどうぞ！

転校生の正体

～コダマ小学校～

体育館での始業式が終わり……

6―Aの教室……

委員長「ジャック！転校生が誰だか知ってるわね！誰だか教えなさいよ！」

ジャック「な、なぜそれを……」

スバル達はウォーロックに教えてもらえなかった転校生のことでジャックにに聞いていた。

委員長「簡単よ。転校生がＷＡＸＡの関係者ならＷＡＸＡの宿舎に住んでるあんたならわかると思てね……で誰なの！！！」

機嫌の悪い委員長に質問攻めにあっているジャックは不幸としか言いようがなかった……

ジャック「わかった言うよ……転校生は……」

ガラガラ

育田「おーいみんな席に着け！」

タイミングよく入って来た先生の一言でジャックは解放されてクラスのみんなが席についた。

その時どこからか〔た、助かった…〕と聞こえたのが委員長に聞こえないことをスバル達は祈った。

育田「みんな進級おめでとう。六年生になってお前たちは……」

……

先生の挨拶や話などが始まって5分が経過してようやく噂の転校生について話を始めた。

育田「みんなも知ってると思うが今日クラスに転校生2人と双葉が復学する……みんなパニックになるなよ！」

先生の最後の言葉にジャック以外の全員が頭の上に?を作っていた。

育田「じゃあ入って来てくれ。」

先生に呼ばれて3人がクラスに入って来た。

育田「じゃあ双葉から挨拶をしてってくれ。」

ツカサ「今日から復学する双葉ツカサです。みんなまたよろしくね。」

緑色の長い髪が特徴的の少年が挨拶をするが……

反応がない。

全員【……】

カケル「初めまして、神風カケルです。最近までアメロッパに住んでいました、帰国子女です。これからよろしくお願いします。」

黒いて長い髪を後で縛った少年が挨拶をするが……

全員【……】

反応がない……

なぜかクラスの人は誰も反応が無かった……

なぜか……3人目が飛んでもでもない人だったからだ。

ミソラ「仕事の都合で引っ越して来ました、響ミソラです。よろしくお願いします！」

赤髪の可愛らしい女の子が挨拶をすると……

全員【なに～～～～！】

クラスのみんな（ジャック以外）が奇声をあげ騒ぎ始めた。

なぜこんな事になったかと言うとこの響ミソラはニホンで大人気の少女シンガーで今はドラマに出たりと国民的アイドルなのだ。

スバル達とは友達で今までにもたくさんの思い出がある。

こんな有名人が転校生して来たためにクラスはパニックになった。

あちらこちらで、

「ミソラちゃん、サイン頂戴！」「ミソラちゃん、こっち向いて！」「ツカサ君お帰り！」〔あの人カッコいいな……〕〔ツカサ君といい勝負だわ。〕〔スバル君にも劣らないわ。〕

など色々な声が聞こえるが……

育田「お前ら静かにしろ。」

先生の一言でみんなは静かになった。

育田「挨拶も終わったし、3人が早くクラスに馴染めるように席替えをするぞ。女子から決めるから前に集まってくれ。」

その瞬間、クラスの男子（スバル、ジャック、転校生2人を除く）の心の叫び聞こえて来た。

男子達（席替えてことは…上手く行けばミソラちゃんの隣の席になれる！！）

男子のテンションが上がる中、スバルはビジライザーをかけていた。

ビジライザーはかけることで電波の世界を見ることが出来る。

スバル（ロックはハープと何を話てるんだろ？）

ウォーロックとミソラのウィザードであるハープと教室のウェーブロードの上で何かを言い争っていた。

2人とも実体化をしていないのでスバルにしか見えていない。

育田「女子の席が決まったから次は男子が前に集まってくれ！」

先生の一言で男子が前に集まったがミソラの隣の席になるためにミソラが選びそうな席の隣をめぐって言い争っていた……

ジャック「俺はここでいいぜ。」

カケル「僕はここでお願いします。」

ツカサ「僕はここで……」

その間にミソラの隣の席を狙っていない3人が自由に選んでいた。

スバル「（僕もさっさと選ぼうかな…）じゃあ僕は……」

ウォーロック『ス、スバル……』

スバル〔何があったの……ロック……〕

突然戻って来たウォーロックはいつの間にかボロボロになっていて息を切らしていた……

ウォーロック『気にするな……それよりスバル……席は6番にするんだ……』

ウォーロックの言う6番とは……

○　1　2　○　3　○

4　?　○　5　6　○

○　7　○　ツ　カ　ジ

？＝ミソラちゃん予想地点ツ＝ツカサ選択済み
カ＝カケル選択済み
ジ＝ジャック選択済み

のことである。

スバル「別にいいけど……（もともとそこを選ぶつもりだったし。）」

スバルは6番を選んだ。

数分後……

決まった席は……

女　キ　女　男　女　男
ゴ　委　男　女　ス　ミ

女　男　女　ツ　カ　ジ

委＝委員長
ゴ＝ゴン太
キ＝キザマロ
ミ＝ミソラ
ス＝スバル
ツ＝ツカサ
カ＝カケル
ジ＝ジャック
になった。

ゴン太〔オックス！話が違うじゃないか！俺の隣はミソラちゃんのはずだろ！〕
ゴン太は小声でハンターＶＧの中にいるウィザードであるオックスに話かけていた。

オックス『ブルルルッ～確かにハープに聞いたらここだと教えてくれたのだが？』

ゴン太「くそ、どうなって……」

ゴン太が愚痴っていると…

委員長「ゴン太、私が隣だと不満？」

委員長の背後から黒いオーラが見えた。

ゴン太「！全然そんなことないぜ……」

委員長はスバルの隣がミソラだったのでとても機嫌が悪かった……

ミソラ「スバル君、これからよろしくね♪」

スバル「こちらこそよろしくね、ミソラちゃん。」

委員長とは違いミソラはとても機嫌がよかった……

転校生の正体（後書き）

オリジナルキャラクターは神風　カケル君です。
とくに名前には意味はありません。
本編にはカケル君の特徴についてなにも書いてないのでここに書きます。
身長はスバルと同じぐらいで髪の毛の色は黒の美少年です。
髪は長く後ろで縛っています（ポニーテールみたいな感じです）。
服装は、皆様のご想像におまかせします。

感想・アドバイスをお待ちしています。

ブラザーバンド（前書き）

青い光です。
感想を書いていただきありがとうございます。
皆様の感想を参考にしてより良い作品にしていきたいと思います。
文章が長く書けるように頑張ります。

間違いの指摘、本当にありがとうございました。
×ゲットアンビリティプログラム
〇ゲットアビリティプログラム
ですね。

感想・アドバイスなどよろしくお願いします。

席替えが終わり休み時間…

ミソラ「ねえ、スバル「ミソラちゃん握手してください！」「ミソラちゃんサイン頂戴！」「ミソラちゃん……」」

休み時間になると国民的アイドルであるミソラにクラスメイトからの質問が集中した。

ミソラ（スバル君と話ができない……）

ミソラの心の声も聞こえずスバルは後の3人と話していた。

カケル「始めましてスバル君。話はジャック君とツカサ君から聞いてるよ。本物のヒーローに会えるなんての夢のようだよ。」

Gメテオの事件のあとロックマン正体が星河スバルと言う名前であることだけはＷＡＸＡの発表で世界中に知られている。

スバル「そんな大層なものじゃないよ……それよりカケル君は、２人と知り合いなの？」

ツカサ「3日前の同じ日にＷＡＸＡの宿舎に引っ越して来たときに

仲良くなったんだ。」

ジャック「部屋が俺の隣なんだ。」

2人の話を聞いて疑問に思ったことをスバルはしつもんした。

スバル「カケル君はＷＡＸＡの関係者なの？」

カケル「そうだよ。」

スバル「どこに所属してるの？」

カケル「それはまたの機会に教えるよ。」

カケルはそれ以上教えてくれなかった……

スバル「そう言えばツカサ君、ヒカル君との決着はどうなったの？」

スバルは気になっていた事を質問した。

ツカサ「決着は着いたよ……ヒカルはジェミニの中にいるんだ……

ヒカルはジェミニとして生まれ変わったんだよ。」

そう言ってツカサはハンターＶＧを取りだしウィザードのジェミニを見せてくれた。

確認するとジェミニはヒカルの人格になっていた……

ヒカル『この俺がウィザードになるなんて思わなかったぜ……』

などと言っていた。

スバル「じゃあさツカサ君お願いがあるんだけど……いいかな？」

ツカサ「何かなスバル君？」

スバル「僕とブラザーになってください！」

ツカサ「……」

スバル「ダメかな…？」

ツカサ「……僕なんかで良ければ……喜んで。」

スバル「ありがとうツカサ君。」

スバルはツカサとブラザーを結んだ。

その後、休み時間が終わり授業が始まったが主に勉強に必要なデータをパソコンに入れたりクラスの係を決めるだけだった。

それに今日は学校が午前中のみだったのであっという間に学校が終わった……

スバル「ミソラちゃん一緒に帰……」

スバルはミソラと一緒に帰ろうと思っていたがまたミソラはファンに囲まれていた。

ミソラ（スバル君助けて…）

ミソラがスバルにアイコンタクトを送るが……

スバル「ツカサ君一緒に帰ろ。」

ツカサ「いいよ。」

ミソラ（スバル君！）

スバルはミソラからのアイコンタクトに気付かずツカサ達（ジャックとカケル）と帰ってしまった……

ハープ『ミソラ……まだチャンスはあるわ。』

ミソラ〔そうだよね……〕

ミソラは急いで帰るためにファンの質問の山と戦った……

～通学路の駅近く～

ツカサ「委員長達は大変そうだね。」

スバル「そうだね。初日から生徒会長の仕事があるなんてね。」

ジャック「しかしまたのクラスの委員長に立候補するとはな……」

カケル「白金さんて去年も委員長だったの？」

スバル達は雑談をしながら駅に向かっていた。

ジャック「そう言えばスバル……お前も大変だな。」

スバル「何の話？」

ジャック「何ってお前の家に……」

ツカサ「ジャック君それは言っちゃいけないて言われたでしょ！」

ジャック（！……危うく言っちまうところだったぜ……）

スバル「何なの？」

スバルが聞き直した後、すぐに駅にウェーブライナーがやって来た。

ジャック「やべ！乗り遅れちまう。じゃあなスバル！」

ツカサ「また明日、スバル君。」

カケル「これからよろしくね。スバル君。」

3人は駅に向かって走って行った……

スバル「ロック……何の話だかわかる？」

ウォーロック『知らん。』

スバルは考えるのをやめると家に向かって歩き始めた……

ブラザーバンド（後書き）

スバル「ねえ、作者さん」
作者「どうしたのスバル君？」

スバル「席替えのときウォーロックがボロボロで帰って来たけど何かあったんですか？」

作者「それはね、ウォーロックがハープに攻撃されたからだよ。」

スバル「何をしたんだ……ウォーロック？」

作者「ハープに何かしたんじゃないの？」

ウォーロック『なわけあるか！ビーストスイング！』
作者「ギャ～～～～！」

居候！（前書き）

ミソラ「作者さん！どうゆう事なの！」

作者「どうしたんですか？ミソラちゃん？」

ミソラ「どうして私がスバル君の隣の席になれたのにどうしてスバル君と話せないの？」

作者「そんなこと言われても…」

ミソラ「アイドルだって仕事が無いときぐらい普通の女の子になりたいのに……（涙目）」

作者「……わかりました。今回の話からミソラちゃんの出番を増やすので安心してください。」

ミソラ「本当！やった♪」

作者（演技だったのか？）

ミソラ「じゃあ早く本編にいこう♪♪」

居候！

ツカサ達と別れて数分後……

スバルが自宅に向かっていると突然スバルの視界が真っ暗になった。

???「だーれだ♪」

スバル「……ミソラちゃんでしょ……」

スバルは少し考えると戸惑いながら答えた。

ミソラ「あれどうしてわかったの？」

と言ってミソラは手を離した。

スバル「直感かな……（前にも同じことされたしね……）」

ミソラ「それよりスバル君一緒に帰ろう♪」

スバル「いいけど…ミソラちゃんはどこら辺に引っ越して来たの？ここら辺にマンションなんてであったけ？」

スバルの知る限りこの先にマンション、アパートの類いがない。
委員長が住んでいるマンションは反対方向である。

ミソラ「実は私は、スバル君の家に居候する事になってるんだ♪」

スバル・ウォーロック「『えぇぇぇぇぇ！』」

スバルだけではなくハンターＶＧから出てきたウォーロックも驚いた。

ウォーロック『転校してくるとは聞いたがスバルの家に居候するなんて聞いてな「ドス」うっ……』

ウォーロックのお腹にハープの重い一撃が決まっていた……

ハープ『ハイハイ、私達は上に行きましょうね。』

動かないウォーロックを連れてハープはウェーブロードに消えていった……

スバル「…ねえ……ミソラちゃん……本当なの？僕なにも聞いて無いんだけど……」

スバルは全くその話を知らなかった。

ミソラ「だってスバル君には言わないようにスバル君のお母さんとお父さんにお願いしといたの。」

スバル「何で？」

ミソラ「スバル君を驚かせたかったんだもん♪」

スバル「ははははは……」
スバルは笑うしかなかった……

この後2人は学校で喋れなかった分を取り戻すようにいろいろな事を話ながら帰っていった……

～スバルの家～

スバル「母さん、何でミソラちゃんのことを言ってくれなかったの！」

帰ってきたスバルはすぐに茜にたずねるが……

ミソラ「お邪魔します。」

茜「お帰りなさい。お昼ご飯出来てるから席についててね。」

スバル（僕の話は無視？）

そう思いながらもスバルとミソラは席についた。

茜「そう言えばミソラちゃん。これからはこの家に住む家族なんだから敬語じゃなくていいわよ。」

ミソラ「えっ…でも……」

茜「私のことも気がるにお母さんて読んでいいからね♪」

ミソラ「……じゃあ私の事もミソラと呼んでね……お…お母…さん／／／／／」

ミソラが顔を真っ赤にしていた。

茜「可愛い娘が出来て嬉しいわ。よろしくねミソラ♪」

ミソラ「はい♪」

2人が仲良く話していたが……

スバル（話ずらい……）

スバルは話に入れずとても困っていた……

お昼ご飯を食べ終わり…

茜「スバルの部屋の向かい側の部屋に届いた荷物を運んでおいたからだから自由に使ってね。」

ミソラ「わかりました。」

茜「スバルは、ミソラの部屋の整理を手伝ってあげてね。」

スバル「わかった。行こっミソラちゃん。」

ミソラ「うん。」

スバルとミソラは二階に上がって行った……

ミソラの部屋……

スバル「ねえ、ミソラちゃん。」

ミソラ「何？スバル君？」

ミソラの部屋を整理しながらスバルは気になっていたことを聞いてみた。

スバル「ミソラちゃんは仕事の都合で引っ越して来たって行ってたけど……どんな都合なの？」

ミソラ「表向きはそうなんだけど……実際はＷＡＸＡに言われて引っ越して来たの。」

スバル「どうして？」

ミソラ「何でも遊撃隊のメンバーを一ヶ所に集めていた方が突然の襲撃にも対処しやすいし、メンバーを召集するときも効率がいいから引っ越すように言われてきたの。」

スバル「そうだったんだ…大変だったね。」

ミソラ「そんなことないよ。（スバル君にも会えたし）それより早く荷物を整理して一緒に遊ぼう♪」

スバル「そうだね。」

スバル達は黙々と荷物の整理を続けた。

居候！（後書き）

感想・アドバイスお待ちしてます。

家族（前書き）

青い光です。
書き始めてもうすぐ一週間になります。
だいぶ書き慣れて来たのでこれからは感想の返信にも取り組んでいきたいと思います。
感想・アドバイスお待ちしてます。

家族

～スバルの部屋～

二時間ほどでミソラの荷物の整理が終わり、2人はスバルの部屋にいた。

ミソラ「ねぇ……スバル君……」

スバル「どうしたのミソラちゃん？」

ミソラ「家族て何かな……？」

スバル「家族？」

ミソラはゆっくりとスバルの近くにやって来た。

ミソラ「私、ママ以外の人に家族て言われてとても嬉しかったの…
…だけど私はスバル君の家族にふさわしいのかな……」

ミソラは不安そうな顔をしていた。

そんな顔をしていたミソラに少しの沈黙のあとスバルがやさしく言った。

スバル「ミソラちゃんはこれから家族になって行くんだからそんなに深刻に考え無くてもいいと思うよ……だからそんな顔をしないで……」

ミソラ「スバル君……」

ミソラちゃんは涙目になるとスバルに突然抱きついた。

スバル「なっ／／／／／／！」

突然の出来事にスバルの顔が一瞬で真っ赤になった。

ミソラ「ごめん……少しの間このままでいさせて……」

ミソラの声は少し震えていて泣いているようだった……

スバル「……うん。」

スバルは優しい声で答えるとミソラを優しく抱き締めた……

このあとスバルはミソラが落ち着いて離れるのを待っていたがミソラはいつまでたっても離れようとしなかった……

気づけば時間が何時間もたっていた……

3時間後……

茜「2人とも～ご飯よ！」

スバル・ミソラ「「！」」

抱き締めあっていた2人は一階から聞こえた茜の声にとても驚いたがミソラはけして離れようとしなかった。

一向に離れようとしないミソラにスバルは戸惑いながら言った。

スバル「……ミソラちゃんそろそろ離れるよ。」

ミソラ「いや♪」

スバルが少し強引に離れようとしたがミソラが離れないようにさっきより強い力で抱き締めた。

スバル「離れてよ……」

ミソラ「やだ♪」

ミソラはまるで小さな子供のようにスバルを困らせていた。

スバル「……どうしたら離れてくれるの？」

少しの沈黙のあとミソラはスバルを見つめた。

ミソラ「……寂しくなったら……またスバル君に抱きついていい？」

スバル「いいけど……」

戸惑いながらもスバルは答えた。

ミソラはスバルの言葉を聞くとすぐに離れた。

ミソラ「約束だからね♪」

ミソラは嬉しそうに一階に降りていった。

スバルは呆然としながらもゆっくりと一階に降りて行った……

スバルの家の外……

スバルの家の近くのウェーブロードからスバル達を見ているものがいた……

ハープ『2人ともいい感じね♪』

ウォーロック『どこがだよ……あいつら三時間ぐらい固まってただけじゃねーか？』

ウォーロックにはハープの言っている事がよくわからなかった。

ハープ『2人にとっては一瞬の出来事だったのよ♪』

ウォーロック『……お前の言っていることがわからん……そろそろハンターに戻らせて貰うぜ。』

ハープ『いいけど……2人の邪魔しちゃ駄目よ！』

ウォーロック『わかってる。』

そんな事を話ながら2人はハンターVGに戻って行った。

スバルの家のリビング…

一階に降りると大吾が帰ってきていた。

大吾「遅かったな2人とも。」

スバル「お帰り、父さん。帰って来てたんだ。」

ミソラ「お帰りなさい……お、お父さん。」

茜から聞いていたのか、ミソラにお父さんと呼ばれても大吾は少し驚いただけだった。

大吾「今日からよろしくなミソラ。」

ミソラ「はい！」

茜「それじゃご飯にしましょう。」

4人は席に座り仲良く夕飯を食べ始めた。

夕飯を食べ終えると茜は2人に気になっていたこと聞いてみた。

茜「スバルとミソラて付き合ってるの？」

スバル・ミソラ「「！」」

スバルとミソラの顔が一瞬にして真っ赤になった。

ミソラ「私達はまだそんな関係じゃないです／／／／」

スバル「そうだよ！僕とミソラちゃんはブラザーで友達なだけだよ／／／／／／」

2人は茜の言ったことを否定するとスバルは二階に上がって行った。

ミソラ「私もこれで……」

ミソラも席を立ち二階に上がろうとすると……

茜「待ってミソラ。」

茜に呼び止められたミソラは立ち止まり茜の方を向いた。

茜「ミソラはスバルのこと好きなの？」

ミソラ「えっ！……いや、そのう……」

ミソラは茜に図星をつかれ言葉が出なかった。

茜「スバルは気づかなかったみたいだけど……あなたさっきまだ付き合ってませんて言ってたわよ♪」

ミソラ「あ……／／／／／／／」

ミソラの顔がさらに赤くなった。

茜「私はミソラの恋を応援するわよ……家族なんだから♪」

ミソラ「お母さん……」

茜「がんばってね♪」

ミソラ「はい♪」

ミソラはスバルを追いかけ二階に上がって行った。

茜「若いっていいわね♪」

大吾「そうだな。」

2人はこのあと楽しそうに話していた……

家族（後書き）

いい忘れてましたがが私はスバミソ派です。（笑）

深まる思い……（前書き）

連載一週間を記念してキャラクター紹介ページを作って見ました。

深まる思い……

～スバルの部屋～

部屋に戻って来たスバルはウォーロックと話していた。

ウォーロック『スバル、ウィルスでも狩りに行こうぜ。』

ウォーロックは体を動かしたいのかウィルス狩りに誘っていたが……

スバル「やだ。」

スバルは夜なのでウィルス狩りに行くのを嫌がっていた。

ウォーロック『最近寝てばっかで全然暴れてねーじゃねえか！』

スバル「……別に暴れなくてもいいじゃん。」

ウォーロック『俺は暴れたいん……』

トントン

ウォーロックと話していると突然のドアからノックが聞こえた。

ミソラ「スバル君、入っていい？」

スバル「いいよ。」

ミソラが入って来るとゆっくりとスバルに近づくとスバルに抱きついた。

スバル「！／／／／／／／／」

突然ミソラに抱きつかれたスバルは硬直した。

その姿を見たウォーロックはハンターＶＧに戻っていった……

ミソラ「スバル君……♪」

スバル「ど、どうしたの…ミソラちゃん？／／／／／／」

ミソラ「約束したでしょ…スバル君に好きなときに抱きついていいって♪」

スバル「寂しくなった時でしょ……」

ミソラ「寂しくないと……ダメ？」

少し離れるとミソラは涙目でスバルを見てきた。

スバル「うっ……ダメじゃないけど…／／／／」

あまりのミソラの可愛さにスバルは視線を反らした。

ミソラ「ありがとう！」

ミソラは嬉しさのあまりたあスバルに強く抱きついた。

茜「スバル～ミソラ～、お風呂が空いてるからどっちか入って～……それとも2人で入る～？」

茜が一階から冗談混じりの声が聞こえてきた。

スバル・ミソラ「／／／／／／／／／／／／／／」

茜の言葉を聞いた2人は顔を赤くした。

スバル「ミソラちゃん入ってきたら……」

ミソラ「……せっかくだし…その／／／／一緒に入らない？」

スバル「冗談だよね？」

ミソラ「……だめ？」

ミソラの目を見ると本気だとすぐにわかった。

スバル「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

スバルはハンターＶＧを取りだしトランスコードを唱えてロックマンになって逃げようとしたが……

スバル「あれ……？」

スバルはロックマンに電波変換出来ていなかった。

スバルがハンターＶＧを見るとウォーロックが中にいなかった……

ミソラ「ロック君ならハープと出ていったよ。」

スバル「なっ！」

ミソラ「それにしても私とお風呂に入るのをそこまで嫌がるなんて

……酷いよ……」

ミソラは泣きそうな声をしていた。

スバル「ごめん……でもやっぱりお風呂はちょっと……」

ミソラ「酷いよスバル君……」

ミソラはそう言うとさっきより強く抱きついた。

スバル「ごめん……」

スバルもミソラを抱き締めた。

数分間の沈黙のあとミソラが喋った。

ミソラ「冗談だよ♪」

スバル「……えっ？」

ミソラはゆっくりとスバルから離れた。

ミソラ「さすがに一緒にお風呂わね……（私も恥ずかしいし……）／／／／／／じゃあ私お風呂入って来るね♪」

そう言い残すとミソラは部屋から出ていった……

ミソラが部屋から出てって数分後ウォーロックが帰ってきた。

ウォーロック『酷い目にあったぜ……どうしたスバル？』

呆然とドアの方を見ていたスバルにウォーロックはたずねた。

スバル「ロック……ひさしぶりにウィルスでも狩りに行こうよ。」

ウォーロック『お！いいぜひさしぶりに暴れてやるぜ！』

スバル「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

ロックマンになった2人は外に出るとウィルスを狩って狩って狩りまくった……

一時間後……

ロックマンでウィルスを狩るのやめて部屋に戻って来ると丁度ミソラがスバルを呼びに来たところだった。

ミソラ「スバル君、お風呂空いたから入ったね。」

スバル「うん、わかっ……」

スバルはパジャマ姿のミソラを見て言葉を失った。

スバル（可愛い……）

ミソラ「どうしたのスバル君?」

スバル「な、何でもないよ／／／／／／」

スバルはお風呂に入る準備をすませると一階に向かって行った……

ハープ『これからどうするのミソラ?』

ミソラ「スバル君をびっくりさせるために何するか考えよう♪」

ハープ『楽しいそうね、ミソラ。』

ミソラ「だって仕事を一週間も休みにして貰ったんだよ。これを気にスバル君と思い出を作りたいな／／／／」

ミソラの顔が赤くなった。

ハープ『思い出だけでいいの？あなたはスバル君と付き合いたいんでしょ！』

ミソラ「そうだけど……もしスバル君に振られたら……私……」

ミソラは泣きそうになった。

ハープ『スバル君があなたを振るとは思えないけど…』

ミソラ「でも……」

ハープ『告白するなら急いだ方がいいわよ。スバル君モテるから誰かに取られちゃうかも知れないし…』

ミソラ「そうだね……」

ハープ『それよりスバル君をびっくりさせる方法を考えるんでしょ？』

ミソラ「うん♪」

このあとミソラとハープはスバルをびっくりさせる方法を考え始めた……

深まる思い……（後書き）

感想・アドバイス・コメントよろしくお願いします。

寝顔（前書き）

感想・アドバイス・コメントお待ちしてます。

寝顔

数十分後……

スバルがお風呂から出て部屋に戻ると部屋には誰も居なかった。

ウォーロック『これから何かするのか、スバル？』

スバル「今日は宿題もないし……もう寝るよ。」

ウォーロック『そうか……』

そう言うとウォーロックはハンターＶＧに戻って行った。

スバル「僕も寝よ……」

階段を上がって布団に入ろうとした時にスバルは異変に気づいた。

ベットの毛布が不自然に盛り上がっていた。

スバル「……」

ガバッ

スバルはベットにかかっている毛布を取った。

スバル「ミソラちゃん……」

スバルのベットでミソラが幸せそうに寝ていた。

ハープ『さっきまで起きてたんだけどね。』

突然ミソラのハンターＶＧからハープが飛び出してきた。

スバル「ハープ、どうしてミソラちゃんが僕のベットで寝てるの？」

ハープ『スバル君を驚かせたかったんだって♪』

スバル「ミソラちゃん……」

改めてミソラの顔を見るとあまりの可愛さに思わず声が出てしまった。

スバル「可愛い……」

ハープ（ミソラが起きてたら喜んだのに……）

スバル「……僕は床で寝るかな。」

ハープ『ミソラと一緒に寝ればいいじゃない♪』

スバル「なっ……／／／／／」

ハープ『冗談よ。お休みスバル君』

そう言い残すとハープはハンターＶＧに戻って行った……

スバル「……寝よ。」

スバルはミソラに毛布をかけ直すと部屋にあった座布団を布団代わりにして寝ることにした。

４月とはいえ少し寒かった……

ＡＭ４：００

ミソラ「……あれ…私……どうしたんだっけ？」

ミソラは目が覚め、ゆっくりと起き上がった。

そしてミソラは夜のことを思い出した。

ミソラ「そっか……私、寝ちゃったのか……」

ミソラは立ち上がり自分の部屋に戻ろうとしたとき床で寝るスバルが目に入った。

ミソラ（そっか……私がスバル君のベットで寝てたから床で寝てたんだ……）

ミソラはゆっくりとスバルに近づくとスバルの頬を突っついた。

ミソラ「可愛い♪……」

ミソラは数分間スバルの寝顔を見たあとスバルに毛布をかけて部屋から出ていった。

ＡＭ７：００

スバル「そろそろ起きなきゃ……」

スバルが起きると自分に毛布がかかっていることとミソラがベットからいなくなっていることに気づいた。

スバル（ミソラちゃんが毛布をかけてくれたのかな？）

スバルはそう思いながら着替えて一階に降りて行った……

スバルは一階にいた茜と大吾に挨拶を済ませると朝食を食べ始めた。

１０分後ぐらいにミソラが降りて来てみんなに挨拶を済ませるとスバルの隣に座って朝食を食べ始めた。

ミソラ「スバル君……昨日はごめんね。」

スバル「何の話？」

ミソラ「昨日、私がスバル君のベットで寝ちゃったからスバル君…
…床で寝てたでしょ……ごめんね…」

ミソラが申し訳なさそうに言っていると……

スバル「全然気にしてないから謝らないで。」

スバルは笑顔で言っていた。

ミソラ「でも……」

スバル「それにミソラちゃんが僕に毛布をかけていってくれたんで
しょ……それだけで嬉しかったよ。」

ミソラ「スバル君……」

スバル「それより早く食べて学校に行こう。」

ミソラ「うん♪」

茜「あら二人とも朝から仲がいいわね♪」

スバル・ミソラ「「／／／／／／／／／／」」

茜の一言で顔を真っ赤にした2人は朝食を食べ終えると学校に向かった……

寝顔（後書き）

もう一話、今日中に更新したいと思います。

メール（前書き）

何とか間に合いました。

メール

～通学路～

スバルとミソラが家を出て数分後、今一番あってはならない人にあってしまった……

委員長「どうしてあなたがスバル君と一緒にいるのよ！」

スバル（しまった……委員長達にはミソラちゃんが僕の家に居候していることを知らないんだ……何とかばれないようにしなくちゃ……）

スバルが言い訳を考えていると……

ミソラ「だって私、スバル君の家に居候してるんだもん、一緒に学校に行ったていいじゃない♪」

この一言にスバルの頭の中が真っ白になった。

委員長「なっ！スバル君！説明してもらうわよ！」

委員長の背中からどす黒いオーラが吹き出した……ように見えた。

ゴン太「説明しろよ！スバル！」

キザマロ「ミソラちゃんがスバル君の家に居候してるて本当ですか！」

ゴン太とキザマロもスバルを問い詰め始めた。

このあと学校に着くまでスバルは説明が続け、ようやく委員長達も納得してくれたが委員長の機嫌が悪くなった……

休み時間……

説明を続けたスバルはくたくたになっていた。

スバル「……疲れた。」

ミソラ「お疲れ様。」

ぐったりとしているスバルに後ろの席の3人が声をかけてきた。

カケル「どうしたのスバル君？」

ツカサ「委員長と何かあったの？」

ジャック「とばっちりはごめんだぜ。」

後ろの席の３人に事情を話した。

ツカサ「それは大変だったね。」

カケル（女性はやっぱり怒らせると怖いな……）

ジャック「俺達は知ってたからな……」

などと話していたら休み時間が終わり授業が始まった……

放課後……

ミソラ「スバル君♪一緒に帰ろう♪」

スバル「うん。」

スバルが席を立った瞬間、

♪～♪～♪～

スバルのハンターＶＧが鳴り出した。

ウォーロック『メールが届いたぞ。』

スバル「わかった…ミソラちゃん、ちょっとごめんね。」

スバルはミソラから少し離れるとメールを確認した。

～メール～

星河　スバル君へ

放課後屋上に来てください。

スバル君にお願いしたいことがあります。

神風カケルより

スバル「お願いしたいことて何かな？……ロック？」

ウォーロック『さあな♪（やっと来たか腕がなるぜ。）』

メールを見た途端にウォーロックはなぜかとても喜んでいた。

スバル（ロック……なんか嬉しそうだな…）

ウォーロック『早く屋上に行ったほうがいいんじゃないか♪』

ウォーロックは屋上にいきたいようだ。

スバル「そうだね。」

スバルはミソラの前に戻ると、

スバル「ごめんミソラちゃん、用事が出来たから先に帰ってて。」

そう言い残すとスバルは荷物を持って急いで教室を出ていった。

それを見たミソラは、

ミソラ「あやしい……」

と呟いていた。

ハープ『誰かに呼ばれた見たいね。』

ミソラのハンターＶＧからハープの声が聞こえミソラはハンターＶＧを取り出した。

ミソラ「誰にかな…？」

ハープ『女の子かもね。』

ミソラ「えっ……」

ミソラの頭に不安がよぎった。

ハープ『冗談よ……それよりこれからどうするの？…このまま帰る？』

少しの考えるとミソラは答えた。

ミソラ「スバル君のあとをつける！」

ハープ『わかったわ♪……どうやらスバル君は屋上に向かったみたいよ。』

ハープはウォーロックの電波を感じとりスバルがどこに向かっているか割り出した。

それを聞いたミソラは人気のない所に移動するとトランスコードを唱えた。

ミソラ「トランスコード！ハープ・ノート！！」

ハープ・ノートになったミソラはこっそりとスバルのあとをつけて行った……

～コダマ小学校の屋上～

エレベーターが止まり屋上で降りるとカケルが待っていた。

カケル「待ってたよ、スバル君。」

スバル「急にメールが届いたから驚いたよ。」

カケル「いきなりでごめんね。お願いしたいことがあってね。」

スバル「お願い？」

カケル「僕と戦って欲しいだ……ロックマン。」

スバル「えっ……」

突然の発言にスバルは言葉が出なかった。

カケル「ウォーロックには話したけどロックマンの実力を見てみたくね。」

スバル「（それでウォーロックの機嫌が良かったのか……）でもカケル君は電波変換出来るの？」

スバルは生身の人間と戦う訳にはいかないのでカケルに確認した。

カケル「出来るよ。僕もスバル君と同じく遊撃隊のメンバーなんだ。僕のウィザードを見せてなかったね……ウィザード・オン！」

カケルのハンターＶＧ呼び出すと中から出て来たのは中世の鎧を身に付けたていて背中に見覚えのある剣を背負った人形のウィザードだった。

ベルセルク『初めまして、スバル君。私の名はベルセルク……これからよろしく頼むよ。』

スバル「ベルセルク！？」

スバルはカケルのウィザードの名前がオーパーツと同じ事に驚いた。

カケル「ベルセルクはアシッドの次に電波変換出を可能としたウィザードなんだ。しかもオーパーツから採取したデータも掛け合わせている。相手にとっては不足は無いでしょ。」

カケルがベルセルクの説明をしていると……

ウォーロック『そんな事はどうでもいい……約束通り戦え！』

ウォーロックが突然飛び出してきた。

スバル「本当に戦うの？」

戦いたくないスバルはウォーロックを止めようとしたが……

ウォーロック『当たり前だ！』

ウォーロックはやる気満々のよいだ。

カケル「ウォーロック……もしかしてスバル君に何もいってないの？」

スバルが戸惑っているのを見たカケルはウォーロックにたずねた。

ウォーロック『細かい話はＰＧＭが出来てからだって言ってたじゃねーか。』

カケル「模擬戦の話ぐらいしとこうよ……」

何も話していない事にカケルは少しあきれていた。

ウォーロック「いくぞスバル！」

スバル「うん……」

ベルセルク『カケル行くぞ！』

カケル「うん！」

2人はハンターVGを持つとトランスコードを唱えた。

スバル・カケル「「トランスコード！！」」

スバル「シューティングスターロックマン！！」

カケル「ベルセルク・ビー！！」

2人は電波変換した……

メール（後書き）

次回、久しぶりの戦いです。

ベルセルク（前書き）

青い光です。
感想・コメントありがとうございます。
感想・コメントを貰えると本当に嬉しいです。

頑張って書いて行くので、応援よろしくお願いします。

ベルセルク

カケル「スバル君がベルセルクの姿になった時にそっくりでしょ。」

ベルセルク・ビーの姿はロックマンがサンダーベルセルクになった時とそっくりの姿だった。

違うのは左手にウォーロックの顔が無く、代わりにバトルカードを読み取る機械が着いていた。

スバル「本当にそっくりだね。」

カケル「ここで戦うと学校が壊れちゃうから少し離れるよ。」

スバル「うん。」

ロックマンとベルセルク・ビーは学校の上空にあるウェーブロードに移動していった……

その姿をハープ・ノートはこっそりエレベーターの影から見ていた……

ハープ『どうやら告白ではなかったようね。』

ミソラ「よかった……」

ハープ・ノートは安心してその場に座り込んだ。

ハープ『そんなに心配するなら早く告白した方がいいと思うんだけど……』

ミソラ「それが出来れば苦労しないよ…」

ハープ・ノートは下を向いた。

ハープ『一度家に戻ってどうするか考えましょ。』

ミソラ「……うん。」

ハープ・ノートは光になって家に帰って行った……

～上空のウェーブロード～

カケル「ここならいいかな？」

スバル「そうだね。」

２人がいる場所の周りには建物はなくウェーブロードだけが広がっていた。

ロックマンとベルセルク・ビーは向かい合った。

カケル（世界を救った力……見せてもらうよ！）

スバル・カケル「「ウェーブバトル、ライド・オン！！」」

２人の戦いが始まった。

スバル「ロックバスター！」

ロックマンはバスターを六発を連射しが……

カケル「あまいよ。」

ベルセルク・ビーは右手に稲妻剣を持つとロックバスターをすべて剣で弾いた。

スバル（なら……）

カケル「その程度じゃ当たら……！」

ロックマンはウォーロックアタックを使ってベルセルク・ビー目の前に移動していた。

スバル「バトルカード・ウッドスラッシュ！」

ベルセルク・ビーは素早く後ろに飛んだ。

シュッ！

ウッドスラッシュが空を斬る。

カケル「バトルカード・ベビーキャノン！」

ベルセルク・ビーは後ろに飛びながら左手をキャノンに変えて放つが……

スバル「シールド！」

ロックマンはシールドを展開してキャノンを防いだ。
ベルセルク・ビーはその間に後方のウェーブロードに着地した。

カケル（さっきのがウォーロックアタック……かなり速いな。）

スバル（さっきのが避けるなんて……すごい。）
お互いに相手の戦闘を分析していると……

ウォーロック『スバル本気でいくぞ！』

ウォーロックはスバルを急かした。

スバル「うん！ノイズチェンジ・ウルフノイズ！！」
ロックマンが光に包まれると姿がウルフノイズに変わっていた。

カケル（あれがノイズチェンジ……木属性に変えてきたか……）

スバル「行くよ！」

ロックマンはウォーロックアタックを使い再び近づくが……

カケル「同じ手は効かないよ！」

ベルセルク・ビーはロックマンの動きに反応して迎え撃つ。

スバル・カケル「「バトルカード・ファイターソード！」」

ロックマンのソードのベルセルク・ビーは受け止めて激しい斬り合いになるが……

パキ！

カケル「！」

ベルセルク・ビーのソードにヒビが入る。

カケル（ウルフノイズはソードの攻撃力を上げるのか？）

カケルは左手のソードでロックマンのソードを押さえながら右手の稲妻剣を振り斬った。

カケル「サンダースラッシュ！」

カケルの放ったサンダースラッシュはワイドショットの形をしてい

た。

スバル「ぐっ……！」

ロックマンは何とかソード使い防ごうとしたが防ぎきれずに少し痺れた。

カケル「使い手によってサンダースラッシュの形が変わるんだよ。バトルカード・ダバフレイム！」

スバルは痺れたのせいですぐには動けなかった。

ベルセルク・ビーが放った炎がロックマンを飲み込んだ……

カケル（弱点の炎属性を当てたからウルフノイズがとけたかな？）

ベルセルク・ビーがダバフレイムを打ち終わり炎が晴れるとそこには誰もいなかった……

カケル「えっ……ぐっ！」

ベルセルク・ビーは気づくと背後から斬りつけられていた。

スバル「バトルカード・ヘンゲノジュツ……」

ヘンゲノジュツは攻撃を受けることで発動する木属性の攻撃で電気属性のベルセルク・ビーには倍のダメージだった。

カケル「やるねスバル君……」

ベルセルク・ビーはロックマンから距離をとった。

スバル「ギリギリで動けるようになったんだ。」

ロックマンは得意げに言っていた。

カケル「まだまだ行くよ！バトルカード・ウォリアーブラッド！」

バトルカードを使うとベルセルク・ビーから放つ光が強くなっていった……

ベルセルク（後書き）

最後にカケルが使ったバトルカード・ウォリアーブラッドは原作と効果を変えようと思ています。
効果は次回に説明したいと思います。

ベルセルク2（前書き）

ウォリアーブラッドの効果は本編でカケルが説明しています。

ベルセルク2

スバル「そんなバトルカードあったけ？」

ロックマンはベルセルク・ビーが使ったバトルカードを知らなかった。

カケル「僕が使ったウォリアーブラッドは、ベルセルク・ビー専用のバトルカードで一定時間バトルカードを読み込めない代わりに運動能力強化とチャージ攻撃を連射できる。」

スバル「なっ！」

カケル「いくよ！サンダースラッシュ！」

ベルセルク・ビーはサンダースラッシュを連射した。

スバル「くっ！」

ロックマンは素早く横に飛びサンダースラッシュを避けたが……

カケル「まだまだ！」

サンダースラッシュの連射が続く！

スバル「くっ……ショッククロー！」

ロックマンはチャージショットで弾くがサンダースラッシュの連射を全て防ぎきれず避けるしかなかった。

ロックマンが再び横に飛ぶと……

カケル「はぁぁぁぁ！」

避けた先にはベルセルク・ビーが先回りしていた。

スバル「バトルカード・バルカンシード・ウッド＋３０」

ロックマンは向かってくるベルセルク・ビーにバルカンを撃つが構わず突っ込んできた。

カケル「サンダースラッシュ！」

スバル「ショッククロー！」

ベルセルク・ビーの一撃をロックマンは、爪で受けたが……

スバル「ぐっ！」

ロックマンはベルセルク・ビーの力に負けて後ろに吹っ飛んだ。

ロックマンはウェーブロードに叩きつけられたがすぐに立ち上がりベルセルク・ビーの攻撃に備えた。

カケル「サンダーボルトブレイド！」

スバル「バトルカード・ソード・ワイドソード・ロングソード！ギャラクシーアドバンス・ジャイアントアックス！」

スバル・カケル「「うおおおおおおおおお！！」」

2人の技が激しくぶつかり凄い衝撃派が広がっていった……

～スバルの家～

ミソラは家の前に着くと電波変換を解除して家に入った。

ミソラ「ただいま～」

茜「お帰りなさい。ミソラ。」

ミソラが玄関を開けて入ると茜がやって来て出迎えてくれた。

ミソラ「お母さん…♪」

茜「どうしたの……何か嬉しいことがあったの？」

ミソラ「何でもないの♪」

ミソラは家族が出迎えてくれるだけでミソラはとても嬉しかった。

いつもは帰っても誰もいなかったから……

茜「？」

ミソラ「それよりお母さん、相談があるんだけど……」

ミソラは茜にあの事を相談する事にした。

茜「何かしら？」

ミソラはスバルの事を話して相談した。

茜「そう……ミソラは本当にスバルのことが好きなのね♪」

ミソラ「／／／／はい／／／／」

茜「スバルも幸せね♪」

ミソラ「でもスバル君にどう伝えればいいかわかなくて……どうすればいいかな？」

茜「そうね……じゃあこう言うのはどうかしら？」

２人はリビングに向かいながら楽しそうに作戦を練り始めた……

～上空のウェーブロード～

2人の電波体は向かい合っていた……

カケル「まさか…あれを止める…なんて……」

スバル「出しきる前に技をぶつけただけだよ……まだやるの？」

カケル「いや……僕の負けだよ……そろそろウォリアーブラッドが切れ……」

言い切る前にウォリアーブラッドの効力が切れ、ベルセルク・ビーはその場に倒れた。

スバル「！大丈夫、カケル君。」

ロックマンはウルフノイズを解除してベルセルク・ビーに駆け寄った。

カケル「大丈夫だよ……バトルカード・リカバー…」

ベルセルク・ビーのライフをある程度回復した。

カケル「心配させてごめんね……ウォリアーブラッドが切れたから発動中に受けたダメージが一気に体に来ただけだから。」

ベルセルク・ビーはゆっくりと立ち上がった。

スバル「よかった……」

カケル「ちょっと話があるんだけど屋上に戻って良いかな？」

スバル「うん。」

2人は学校の屋上に戻ると電波変換を解除した。

そのあとカケルが喋り始めた。

カケル「まず、このあとメールが来ると思うけど明日の午前10時に遊撃隊のメンバーはWAXAニホン支部に来ること。学校には事情を説明あるから休んでいいよ。」

スバル「どうして？」

カケル「細かいことは明日話してくれると思うけど、遊撃隊のメン

バーの新しいＰＧＭが出来るからそれの受け渡しと、新しい敵の情報をメンバーに話すことになってるんだ。」

スバル「新しい敵？」

カケル「地球また存亡の危機に直面してるかも知れないんだ。」

スバル「えっ……」

カケル「詳しい話は僕も知らないんだ……明日になればわかるよ。」

スバル「そうなんだ…」

カケル「そうだスバル君、よかったら駅までまで一緒に帰ろ。」

スバル「うん。」

スバルとカケルは駅に向かうためエレベーターに乗って下に向かって行った……

ベルセルク2（後書き）

バトルを書くのは難しい。
感想・アドバンス・コメントお待ちしてます。

失敗…（前書き）

考えがまとまらない……

失敗…

～通学路～

2人は駅に向かいながらいろいろな事を話していた……

スバル「そう言えばカケル君はどうして遊撃隊に入ったの？」

カケル「僕がベルセルクを作ったからかな……」

スバル「えっ！ベルセルクてカケル君が作ったの！」

カケル「うん。大学の依頼でＷＡＸＡの仕事を手伝っていたときヨイリー博士がアシッドの設計データを見せてくれてね……そのデータと僕が当時調べていたオーパーツのデータを元にして作った僕専用のウィザードなんだ。」

スバル「大学て……カケル君は今まで大学にいたの？」

カケル「アメロッパの大学で電波について研究していたんだ。」

スバル「そうだったんだ……」

カケル「でもベルセルクを完成させる為に必要なＰＧＭを作るためのデータが足りなくてね……遊撃隊に入ることを条件にあるお願いをしたんだ。」

スバル「お願い？」

カケル「ＰＧＭが必要なデータを集めるのにウォーロックに協力要請をする許可を貰ったんだ。」

スバル「それでロックはＷＡＸＡに行ったのか…」

カケル「そしたらバトルしようて話になったんだよ。」

スバル「でも何でロックのデータが必要だったの？」

カケル「正確にはウォーロックに残ったオーパーツの残留データが必要だったんだ。スバル君もオーパーツの力を使ったことあるでしょ。」

スバル「なるほど……」

こんなことを話している間に2人は駅に着いた。

スバル「また明日、じゃあねカケル君。」

カケル「じゃあねスバル君明日ＷＡＸＡでね。」

スバル「うん。」

2人は別れてスバルは家に帰って行った……

～スバルの家～

スバル「たたいま～」

スバルは家に入りリビングに向かうと、

茜「お帰りスバル。」

ミソラ「お帰りスバル君♪」

リビングで2人が出迎えてくれたが近づいて来たミソラを見てスバルは視線をそらした。

スバル（か、可愛い……）

ミソラはピンクのエプロンを着けていた。

ミソラ「どうしたのスバル君？」

スバル「な、何でもないよ。」

スバルは必死に動揺を隠した。

ミソラ「夕御飯できてるから一緒に食べよ♪」

スバル「うん。」

夕御飯はカレーだった。

茜「そのカレーはミソラが作ったのよ。」

スバルをカレーを食べた。

ミソラ「スバル君……カレー美味しい？」

スバル「うん。とっても美味しいよ♪」

ミソラ「よかった……味に自信が無かったの……」

スバル「大丈夫、とっても美味しいよ♪」

スバルは美味しそうにカレーを食べていた。

ミソラ「いっぱい食べてね♪」

ミソラはとても嬉しそうに言っていた。

茜「まるで新婚さんね♪」

スバル（／／／／／／／／／／／／／／）

スバルは顔を真っ赤にしながらカレーを食べていた。

～スバルの部屋～

スバルとミソラは夕御飯を食べ終えるとスバルの部屋に集まって宿題をしていた。

ミソラは仕事で学校にいけない事が多かったので勉強が遅れていた。

ミソラ「やっと終わった……」

スバル「お疲れさま。」

ミソラ「もうすぐ仕事休みも終わっちゃうし…勉強についていけるかな……」

スバル「そのときは僕ができる限り教えてあげるよ。」

スバルはミソラに優しく言った。

ミソラ「スバル君……ありがとう。」

ミソラはスバルに抱きついた。

スバル「！いきなり抱きつかないでよ／／／／／／／」

スバルの声はこの時ミソラには聞こえていなかった。

ミソラ（お母さんに言われた通り2人っきり……告白か……よし！）

ミソラは覚悟を決めた。

ズバル「……ミソラちゃん？」

反応がないミソラにスバルが戸惑っていると……

ミソラ「ズバル君！！」

ミソラは少し離れスバルの目を見た。

スバル「何？」

ミソラ「私……スバル君のことが……」

♪～♪～♪～

ミソラが大切なことを言い切る前にスバルとミソラのハンターＶＧが鳴り出した。

ミソラ「メールかな（大切な時に……）」

スバル（カケル君が言ってたメールが届いたのかな？）

スバルの予想通りＷＡＸＡからのメールだった。

ミソラ「……」

スバル「母さんに明日のことを伝えて来るよけど……ミソラちゃんさっき何て言おうとしたの？」

スバルの一言でミソラは顔が真っ赤になった。

ミソラ「何でもないの／／／／／／／」

スバル「そう……？」

スバルは一階に降りて行った……

ミソラ「何で大切な時にメールが来るのよ～」

ミソラが愚痴ていると…

ハープ「惜しかったわね…ミソラ……」

ミソラ「ハープ……」

ハープ「まだチャンスはあるわ……がんばりましょ。」

ミソラ「うん……」

このあとスバル、ミソラの順でお風呂に入り明日に備えて2人は自分の部屋で寝た……

失敗…（後書き）

スバミソ…難しい。

新しいＰＧＭ（前書き）

ユニーク１０００人突破！！

ここまで呼んでいただきありがとうございます。
青い光です。

これからもがんばって書いて行くので応援よろしくお願いします。

新しいＰＧＭ

次の日……

～コダマ小学校～

６―Ａのクラスは６人の生徒がお休みである。

キザマロ「６人も用事で休みって何かあったんですかね？」

委員長「知らないわよ！」

キザマロ（委員長の機嫌が今日も悪いですね……）

このあとキザマロは委員長の機嫌を直すためにがんばっていた……

その頃……

～ＷＡＸＡニホン支部～

ヨイリー「みんな集まったわね。」

新メンバーも含め、遊撃隊のメンバーであるスバル、ミソラ、ゴン太、カケル、ツカサ、ジャック、シドウ、クインティアの８人のメンバーが集まっていた。

ヨイリー「これから遊撃隊専用の新しいＰＧＭと新しい敵の情報について話すわね。」

集まる理由はメールに書いてあったので誰も驚きはしなかった。

ヨイリー「ますばみんなにこれを渡すわ。」

ヨイリー博士は遊撃隊メンバーに新しいＰＧＭを渡した。

スバルはロックＰＧＭ
ミソラはロールＰＧＭ
ゴン太はヒートＰＧＭ
カケルはトライブＰＧＭ
ツカサはエレキＰＧＭ
ジャックはキラーＰＧＭ
シドウはブルースＰＧＭ
クインティアはアクアＰＧＭを手に入れた。

ヨイリー「新しいＰＧＭを着ければ以前より攻撃の威力が上がるし、

強いノイズに耐えられるようになるわ…それに新機能として使用者の心に反応して、新たな変身をして新たな力を使うことが出来るわ。」

全員【心に反応?】

遊撃隊メンバー全員が聞き直した。

ヨイリー「何て言えばいいかしら……強い思いや感情によって発動出来るわ。」

ミソラ「どんな姿に変身するんですか?」

ミソラが代表して質問した。

ヨイリー「ＰＧＭの力を最大限に出せるように変身するわ。今の姿をもとに変身するからそこまで変わらないと思うわ。」

スバル「この心を力に変える技術はヨイリー博士が考えたんですか?」

ヨイリー「私じゃないわ。この技術は過去から届いたプログラムを元に作った物なの。」

スバル「過去からですか？」

ヨイリー「今から約１５０年前の光熱斗博士の技術を参考に作った物なの。」

スバル「えっ！熱斗君ですか！」

スバルはクロックマンに拐われたミソラを助けに行く際に子供の頃の光熱斗にあった事があるスバルは驚いた。

ヨイリー「ええ、光博士はスバル君から子供のころに貰ったＳＳプログラムに心を力に変える技術を加えて未来に送ってくれたの……この力を正しく使って欲しいってメッセージを入れてね。」

スバル「熱斗君……」

スバルは熱斗君の事を思い出していた。

ヨイリー「スバル君のロックＰＧＭには光博士が送ってくれたプログラムのオリジナルを使っているわ。ロックＰＧＭでもエースＰＧＭのファイナライズが出来るから上手に使ってね。」

スバル「えっ…でも、もうファイナライズは出来ないんじゃ……」

現在メテオGが粉々になり地球から離れたためメテオGの中にあるサーバーにアクセス出来ないのでファイナライズが出来なかった……

ヨイリー「それなら問題ないわ、新しく作ったWAXAのサーバーを使ってファイナライズ出来るようにしたから。」

スバル「そんなこと出来るんですか？」

ヨイリー「ええ。それとオリジナルにはまだ現在でも解析出来ないプログラムがあるの……もしかしたらまだ隠された力があるかも知れないわ。使いこなせるようにがんばってね。」

スバル「はい。」

ヨイリー「スバル君とカケル君のPGM以外はWAXAのデータベースに残っていたネットナビの能力データをあわせた物なの。」

ゴン太〔なあ、ネットナビってなんだっけか？〕

ゴン太は小声で隣にいたカケルに聞いた。

カケル〔約100年前まで使われていたウィザードみたいなものだ

よ。」

ゴン太〔へぇ〜〕

ゴン太は納得したようだ。

ジャック「何で俺達のＰＧＭにはネットナビの能力データを使ってるんだ？」

ヨイリー「光博士の開発したプログラムはネットナビの能力データと相性が良くて最大限の力を引き出せるのよ。」

ジャック「ふ〜ん。」

ツカサ「変身の名前は何って言うのですか？」

ヨイリー「それがね……まだ決まってないのよ。」

ヨイリー博士は困っているようだった。

シドウ「まだ決まってなかったんですか！」

クインティア「もう決まっていると思っていたわ…」

ヨイリー「そうなのシドウちゃん、クインティアちゃん。だから敵の話の前にみんなで考えて欲しいの。」

ヨイリー博士のお願いに全員が頭を抱えた……

新しいＰＧＭ（後書き）

説明ばかりでしたね。
次回も説明ばかりになると思います。

変身の名前……明日までには……

敵について（前書き）

いい忘れていましたが、
この作品ではスバルのＰＧＭ　はエースＰＧＭしかありません。ジョーカーＰＧＭは存在しません。

あと【】は複数の
「「」」の集まりです。ウィザードでもこれを使います。

敵について

数十分後……

ヨイリー「じゃあ新しい変身の名前はココロフォースでいいわね。」

全員【はい。】

変身の名前はなかなか決まらず結局読み方を変えただけとなった。

ヨイリー「それじゃあ次は敵について説明するわ。クインティアちゃん。」

クインティア「はい。」

クインティアはパソコンを動かし空中にディスプレイを表示した。

ヨイリー「今、写っているのは1週間前にシドウちゃん達が戦った相手よ。」

ディスプレイにフォルテの姿か写った。

ゴン太「何か弱そうだな～」

ゴン太が笑っていると……

暁「俺はその弱そうな奴に殺されかけたがな……」

シドウが横から呟いていたと、

ゴン太「えっ……」

ゴン太は固まった。

ヨイリー「シドウちゃんが交戦中に相手から聞いたことからいろいろなことがわかったわ。シドウちゃんが戦ったのは約２００年前に電脳の破壊神と呼ばれていたフォルテと言うネットナビだったわ。」

カケル「本当ですか！」

カケルはネットナビから攻撃だと知り興味を持ったようだ。

ヨイリー「ええ。でも復元された物だけどね。Ｒと呼ばれるネットナビが復元したとシドウちゃんがフォルテから聞いていたの……おそらくＲは１００年前に破棄されたデータを使ったと思われるわ。」

スバル「破棄されたデータて何ですか？」

わからないことにスバルは質問した。

ヨイリー「今から約１００年前まで使われていたインターネット技術のすべてのデータのことよ。おそらくその中にあったネットナビのデータから復元したんだわ。」

ジャック「？破棄したのにどうしてＲってネットナビはそのデータを持ってんだ？」

続いてジャックが質問した。

ヨイリー「言い方が悪かったわ……破棄したって言うのは消去した訳じゃないの。昔の人達は良くも悪くも今まで作り上げた膨大なデータを消去出来なかっの、だから全てのデータを一ヶ所のデータベースに集めて隠すことにしたのよ。おそらくＲは隠し場所を見つけて使っているんだわ。」

ミソラ「ヨイリー博士は隠し場所を知っているんですか？」

ヨイリー「データベースの場所はわからないの……隠し場所は１００年前も一部の科学者しか場所を知らなかったみたいなの。だから今は誰も場所を知らないわ。」

ツカサ「場所を突き止める方法は無いんですか？」

ヨイリー「敵が動き出すまで突き止める方法は無いわ。」

ツカサ「そうですか……」

ツカサは残念そうに呟いた。

このあと復元されたネットナビの強さは本物と変わらないことやネットナビの歴史的などの話が数時間続いた……（重要じゃないのでカットします。）

ヨイリー「ひとまずこれで話は終わりよ。敵が動き出すまでは待機しててね。」

全員【はい。】

このあとスバル・ミソラ・ゴン太はウェーブランナーに乗ってコダ

マタウンに帰って行った……

敵について（後書き）

今回は短いですね……　長く書けるようにがんばります。

良い点、悪い点、一言
などの感想お待ちしてます。

展望台（前書き）

青い光です。
皆様に聞きたいことがあります。

アクセス解析に書いてある
ＰＶ：×××アクセス
ユニーク：×××人

について教えて下さい。
ＰＶとユニークの意味がよくわからないです。

よろしくお願いします。

展望台

～ＷＡＸＡニホン支部～

スバル達が帰ったあと…

ヨイリー「シドウちゃんちょっといいかしら。」

シドウ「……例のことですか？」

ヨイリー「ええ……彼を遊撃隊のメンバーに加えられないかしら。」

シドウ「何度も勧誘に行きましたが断われましたよ。」

ヨイリー「わかっているわ……ひとまず彼にあってこれだけでも渡しといてもらいたいの。」

ヨイリーはシドウにカーネルＰＧＭを預けた。

シドウ「これは新しいＰＧＭ……なぜ彼に？」

ヨイリー「忘れたの？遊撃隊のメンバーじゃなくても電波変換できる人全員にＰＧＭを渡すことになってるわ。」

シドウ「それはココロプログラムが搭載されていないＰＧＭですよね……でもこれには……」

ヨイリー「確かにそのＰＧＭには搭載されてるわ。これを渡すのは彼以外にこのプログラムと相性がいい人がいないからよ……それに彼は一人でいるから敵と戦うことになったら危ないのよ…だから…」

シドウ「…わかりました。明日から彼を探して渡してきます。」

ヨイリー「よろしくね、シドウちゃん。」

シドウ「はい。」

シドウは部屋から出ていった……

～コダマタウン～

3人がコダマタウンに着く頃にはすっかり暗くなっていた……

ゴン太「じゃあな～スバル、ミソラちゃん。」

スバル・ミソラ「「じゃあね～」」

ウェーブランナーから降りてすぐにゴン太と別れた。

スバル「ミソラちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど……」

ミソラ「何？スバル君？」

スバル「帰る前に展望台に行ってもいいかな？今日は星がよく見えそうなんだ。」

スバルは大吾が帰って来たので展望台に行く回数が減っていたが今もよく通っている。

ミソラ「いいよ。」

2人は展望台に向かって行った……

～展望台～

スバル「星が綺麗だよミソラちゃん。」

ミソラ「綺麗……」

今日は雲一つ無くとても星が綺麗に見えていた。

ニ十分後……

スバル「……」

ミソラ「……はぁ～…」

スバルは星をずっと見ていたがミソラはスバルの顔を見ながら考えごとをしていた。

ミソラ（どうしたらスバル君に伝えられるのかな……）

思い詰めた顔をしていると……

スバル「どうしたのミソラちゃん？」

ミソラ「！えっ……」

突然の言葉にミソラは驚いた。

スバル「悩みごとがあるなら相談に乗るけど……」

スバルは心配そうにミソラを見ていた。

ミソラ「……じゃあ相談していい？」

スバルの言葉に少し戸惑ったが思いきってスバルにスバルの事を相談することにした。

スバル「もちろんだよ。ミソラちゃんは僕の家族でありブラザーな

んだから。」
2人は近くにあるベンチに座るとミソラは話始めた。
ミソラ「実は……私、好きな人が入るの。」
スバル（えっ！）
スバルは声には出さなかったがとても驚いた。
ミソラ「でも私、その人に告白したいんだけど怖くてできないの……」
スバル「怖い？」
ミソラ「うん……もし断られて嫌われたらと思うと怖くて告白できないよ……スバル君。」
暗くてよく見えないがミソラは泣いているよいだった。
スバル「そっか……」
スバルは一瞬顔を暗くしたがすぐに元に戻った。
スバル「怖くなんかないよミソラちゃん。」

ミソラ「えっ……」

スバル「好きな人に告白することは素晴らしいことだよ。それにこのまま思いを伝えずにいたらその人、誰かにとられちゃうかも知れないよ。」

ミソラ「でも……」

スバル「こんな僕が言っても説得力ないかも知れないけどミソラちゃんが好きな人だもん断るはずないよ。」

ミソラ（スバル君……）

スバル「そろそろ帰ろ、遅きなると母さんが心配するし。」

スバルはベンチから立ち上がったが……

ミソラ「……」

ミソラは動こうとしなかった。

スバル「どうしたの？ミソラ……！」

振り向く同時にスバルは喋れなくなった……

口が塞がれていたからだ…ミソラの唇で……

スバルは突然の出来事に何も考えられなかった。

ミソラはゆっくりと唇を離した。

ミソラ「スバル君……私、スバル君のことが好きです。付き合って下さい。」

2人の沈黙が続く。

スバル「……僕なんかで…いいの？」

ミソラ「スバル君以外考えられないよ……」

スバル「ミソラちゃん……僕で良ければ……こちらこそよろしくお願いします……」

ミソラ「うん……」

このあと2人は抱き締めあいながらキスした……

展望台（後書き）

書いてて恥ずかしいですね。

感想お待ちしてます。

幸せかも？（前書き）

ミソラの仕事休みが終わるまで当分のスバミソです。

幸せかも？

～展望台付近のウェーブロード～

ハープ『うまくいったみたいね。』

ウォーロック『そうみたいだな。』

ハープ『よかったわ……ミソラの思いが届いて。』

ウォーロック『そろそろハンターに戻ろうぜスバル達も家に帰るみたいだしな。』

ハープ『そうね。』

２人はハンターＶＧに戻っていった……

～スバルの家近く～

2人は家に向かっていた。

ミソラ「スバル君♪」

スバル「どうしたのミソラちゃん？」

ミソラ「せっかく付き合えたんだから手……繋いで♪」

スバル「……うん。」

2人は手を繋いだ。

ミソラ「♪～」

スバル「／／／／／／／」

ミソラは嬉しそうだったがスバルは恥ずかしそうだった。

数分後……

スバル・ミソラ「「ただいま～～」」

茜・大吾「お帰り～～」

2人が家の中に入るとリビングに茜と大吾の姿があった。

大吾「俺より先に帰ったのに遅かったな。」

スバル「ちょっと展望台によってたんだ……」

ミソラ「♪」

大吾「そうだったのか……（ニヤリ）」

大吾はミソラが嬉しそうにしているのを見て何かに勘づいたようだ。

茜「うまくいったみたいね。ミソラ♪」

ミソラ「はい♪告白成功しました♪」

茜「スバルをよろしくね。」

大吾「スバルをよろしく頼むぞ。」

ミソラ「はい♪」

スバル「／／／／／／／／／／／／／／」

スバルは恥ずかしくて何も言えなかった。

そのあとみんなで夕御飯を食べたがミソラとスバルは質問攻めにあいずっと顔を真っ赤にしていた……

その後、夕御飯を食べ終えると2人は逃げるように自分の部屋に向かって行った……

～ミソラの部屋～

ミソラ「♪～♪～」

ミソラは嬉しそうにベットに座って鼻歌を歌っていた。

ハープ『嬉しそうねミソラ。』

ミソラ「だってスバル君と付き合えたんだよ♪」

ハープ『思いが通じてよかったわね。』

ミソラ「うん♪」

ハープ「でもこれからどうするの？」

ミソラ「これから？」

ハープの言葉の意味がよくわからなかった。

ハープ「付き合えたからって浮かれちゃだめよ！なんの進展もしなかったらそこまでなんだから！」

ミソラ「そっか……そうだよね！スバル君と付き合えたからって浮かれてる暇ないよね！」

ミソラは勢いよく立ち上がった。

ハープ『がんばってね、ミソラ。』

ミソラ「うん！」

ミソラはスバルの部屋に向かった。

～スバルの部屋～

ウォーロック『スバル！せっかく新しく貰ったロックＰＧＭを試しにいこうぜ！』

スバル「明日は土曜日だから明日試そうよ。」

ウォーロック『俺は今試したいんだ！』

スバル「僕は風呂に入りたいの！」

ウォーロック『俺は暴れたいん……』

コンコン

ミソラ「スバル君入っていい？」

スバル「いいよ。」

ウォーロック『はあ～明日だぞスバル……』

そう言うとウォーロックはハンターＶＧに戻っていった。

ガチャ

ミソラ「ロック君と何か話してたの？」

スバル「うん、ちょっとね……それよりどうしたのミソラちゃん？」

ミソラはスバルに近づくといきなり抱きついた。

ミソラ「理由なんてないよ…ただ好きな人と一緒に居たいだけだよ♪」

スバル「だからっていきなり抱きつかないでよ／／／／／／／／」

ミソラ「スバル君……私のこと嫌いなの……」

抱きつくのをやめてスバルから離れたミソラは泣きそうになっていた。

スバル「嫌いじゃない！好きだよ！」

ミソラ「……ホントに私の好きなら……愛してるて言って。」

スバル「えっ！」

ミソラ「私のこと嫌いなんだ……酷いよスバル君。」

スバル〔愛してる／／／／〕

そう言うとスバルはミソラを抱き締めた。

ミソラ（スバル君／／／／／／／）

スバル「／／／／／／／／／／」

ミソラ（幸せかも……）

ミソラもスバルを抱き締めた。

スバルは最後まで気づかなかったがミソラの涙は演技だった……

幸せかも？（後書き）

たまに本文を修正してます。機会があれば読み返して見てください。
（別に見なくても全然問題ないです（笑））

タオル？（前書き）

青い光です。

感想を参考に行のあけかたを変えてみました。

もし見にくい、前の方がいいと思う人がいたらいってください。
かなりの反対意見がでたら前に戻します。

感想・アドバイス・一言
送ってくれると嬉しいです。

タオル？

2人は抱き合うのをやめて色々話していた。

ミソラ「ねぇ、スバル君♪土曜日か日曜日に一緒に出掛けよ♪」

スバル「日曜日ならいいけど……どこ行くの？」

ミソラ「ヤシブタウンにある１０３デパートに買い物に行こう。」

スバル「わかった。」

スバルが答えるてすぐに一階から声が聞こえて来た。

茜「スバル！ミソラ！どっちかお風呂入って～」

スバル「ミソラちゃんお風呂だって」

ミソラ「……」

スバル「どうしたのミソラちゃん？」

ミソラ「スバル君……一緒に入らない？」

スバル「入りません！」

ミソラ「そこまで強く言わなくてもいいのに……」

スバル「ごめん……」

ミソラ「謝らなくていいよ♪スバル君先に入って♪」

スバル「わかった。」

スバルは着替えを持って一階に向かった。

ミソラ（ニヤリ）

数分後ミソラも着替えを持って一階に向かった。

ウォーロック『……』

ミソラが一階に行くのをハンターＶＧの中から見たウォーロックはお風呂場に向かった。

～一階～

一階では茜と大吾がテレビを見ていた。

茜「あらミソラ、お風呂？」

ミソラ「はい♪」

大吾「今お風呂にはスバルが入ってるぞ？」

ミソラ「知ってます。」

ミソラの一言で2人はミソラの考えがわかったようだ。

茜「ミソラ頑張ってね。」

大吾「頑張れよ。」

ミソラ「はい♪」

ミソラはお風呂場に向かった。

～お風呂場～

ウォーロック『おいスバル。』

ウォーロックは壁をすり抜けて入ってきた。

スバル「どうしたのウォーロック？」

スバルは浴槽に浸かっていた。

ウォーロック『これ腰に付けとけ。』

そう言うとウォーロックはスバルに白いタオルを渡した。

スバル「ウォーロック？いきなり何？」

ウォーロック『気にするな……明日のトレーニング忘れるなよ。』

そう言うとウォーロックは二階にあるハンターＶＧに戻っていった。

スバル「……？」

スバルはウォーロックがなぜ来たのかわからなかったが腰にタオルを付けた。

ウォーロックの気遣いに感謝したのは１分後のことである。

ガラガラ

突然空いた扉の方を見るとそこにはタオルを巻いたミソラが立っていた。

スバル「な！／／／／／／」

ミソラ「失礼します／／／／」

ミソラは浴槽に入ってきた。

スバル「ミソラちゃん入ってこないでよ！」

ミソラ「私のこと愛してるならいいじゃん♪」

スバル「この歳で男女が一緒にお風呂に入るのは色々まずいよ……」

ミソラ「愛してる同士が一緒にお風呂に入って何がいけないの？」

スバル「それは……」

ミソラ「いいでしょ♪」

スバル「……今日だけだよ。」

ミソラ「ありがとう♪」

ミソラはスバルに抱きついた。

スバル「ちょっと／／／／／／」

ミソラ「気にしないの♪」

いつもと違い2人ともタオル一枚しか身に付けてなかったのでいつもより相手を近くに感じた。

数分後

スバル「ミソラちゃん……体洗いたいんだけど……」

ミソラ「じゃあ背中流してあげる♪」

スバル「そんなことしなくていいよ……」

ミソラ「私達付き合ってるんだしいいじゃん♪」

スバル「……じゃあ僕もミソラちゃんの背中流してあげるよ。」

ミソラ「えっ！／／／／／／」

スバル「僕達付き合ってるんだしいいんでしょ。」

ミソラ「……」

ミソラが困った顔をしていたので「冗談だよ」と言おうとしたときミソラが喋った。

ミソラ「……いいよ／／／／その代わりスバル君の背中流させてね／／／／／／／」

スバル（えっ！）

2人は浴槽から出ると体を洗う準備を始めた。

ミソラ「じゃあ背中洗うね♪」

スバル「うん／／／／」

ミソラ「どうかな？」

スバル「何か恥ずかしい／／／／／／」

ミソラ「そんなに恥ずかしい？」

スバル「うん。」

スバルは洗い終わったので次はミソラの番になった。

スバル「じゃあ背中洗うよ。」

ミソラ「うん／／／／／／」

スバル「どうかな？」

ミソラ「……恥ずかしい／／／」

スバル「僕だって恥ずかしかったよ。」

ミソラ（でも…いいかも♪）

ミソラの背中が洗い終わるとスバルは浴槽に浸かりながら待つこと

になった。
なぜなら

ミソラ「私か洗い終わるまで出ちゃダメだよ。」

スバル「何度も言わなくてもわかってるよ。」

ミソラ「こっち見ちゃダメだよ。」

スバル「見ないよ。」

ミソラ（見てくれないんだ……）

言っていることと思っていることが違うミソラであった。

ミソラが体を洗い終わったようなので出ようとしたらミソラに止められて再び2人で浴槽に入った。

スバル「ミソラちゃんそろそろ出たいんだけど。」

ミソラ「ダメ♪」

ミソラはスバルに抱きついた。

スバル「このままだとのぼせそうなんだけど……」

ミソラ「のぼせたら私が助けてあげる♪」

スバル「……僕を殺す気ですか？」

ミソラ「スバル君が私のお願いを聞いてくれたら出ていいよ♪」

スバル「お願い？」

ミソラ「せっかく付き合えたんだし……一緒に寝よ／／／／／」

スバル「えっ！でも…」

ミソラ「聞かないとのぼせちゃうよ♪」

スバル「……今日だけだよ。」

スバルの言葉を聞いたとたんミソラは抱きつくのをやめた。

ミソラ「約束だからね♪」

スバル「うん。（前にも同じようなことがあったような……）」

そんなことを思いながらスバルは脱衣場に向かった。

ミソラ「♪～♪～♪～」

ミソラは嬉しそうに鼻歌を歌いながら脱衣場が空くのを待っていた。

タオル？（後書き）

本当は昨日の夜に更新しようと思ったのですが予想より長くなってしまい書き終わりませんでした。

今日はもう一話更新しようと思っています。

やはりスバミソは書いてて恥ずかしい。

眠れない夜（前書き）

青い光です。

最近ずっとスバミソを書いてる気がします。（笑）

たまには違う話を書きたいんですが頭の中にあるストーリではここで書かないとスバミソ無くなっちゃうんですよね。

話のまとめるのが難しい。

感想・アドバイス・一言
お待ちしてます。

眠れない夜

～リビング～

お風呂から出たスバルは茜と大吾の所に向かった。

スバル「父さん、母さん、何でミソラちゃんがお風呂に入るの止めないの！？」

茜「2人は付き合ってるんだし別に問題ないでしょ♪」

スバル「問題あるよ！」

大吾「いい思い出になったな、スバル。」

スバル「大変だったよ…」

ミソラ「スバル君♪早く一緒に寝よ♪」

スバルが2人と話してるうちにミソラがお風呂場から出てきた。

茜「あらミソラ今日はスバルと寝るの？」

ミソラ「はい♪」

大吾〔スバル、ミソラに変なことするなよ。〕

大吾はミソラに聞こえないようにスバルに言った。

スバル「しないよ。」

ミソラ「どうしたのスバル君？」

スバル「なんでもないよ。早く行こ…」

2人はスバルの部屋に向かった。

～スバルの部屋～

ミソラ「スバル君早く寝よ♪」

スバル「ホントに寝るの？」

ミソラ「うん♪」

ミソラに言われスバルは2人でベットに入った。

スバル「ミソラちゃん……抱きつかないでよ。」

ミソラ「スバル君も抱き締めてよ♪」

スバル「えっ！」

ミソラ「ダメ？」

スバル「……はぁ～」

スバルはミソラを抱き締めた。

ミソラ「♪」

数分後

ミソラ「ス～ス～」

スバル（早っ）

スバル〔僕も寝よ……〕

1時間後……

スバル〔寝れない……〕

スバルは寝れずに目を開けるとミソラの寝顔が目に入った。

ミソラ「……」

スバル〔……可愛い……〕

ミソラの寝顔を見てスバルは呟いた。

ミソラ「／／／／／／／／／／」

スバル〔早く寝よ……〕

スバルはこのあと30分ほどで寝ることができました。

スバルが寝た10分後…

ミソラ〔スバル君寝たかな？〕

ミソラもスバルと同じように眠れていなかった。

スバル「……」

ミソラ「スバル君……好きだよ♪」

ミソラはスバルささやくと眠りについた。

AM9：00

茜「そろそろ起きな……」

スバルとミソラを起こそうとやって来たが2人の姿を見て起こすのをやめた。

茜（幸せそうね♪）

2人の寝顔がとても幸せそうだったので起こせなかった。

茜は静かに部屋から出ていった。

30分後

スバル「朝か……」

スバルは上半身を起こして隣を見た。

ミソラ「ス～ス～」

ミソラが幸せそうに寝ていた。

スバル「先に起きるね…」

寝ているミソラに言うとスバルは一階に降りていった。

～リビング～

スバル「おはよう母さん。」

茜「おはよう……あれ？ミソラは？」

スバル「ミソラちゃんはまだ寝てるよ。」

茜「起こさなかったの？」

スバル「ミソラちゃんの寝顔を見たら起こせなかったよ……」

ミソラ「だからって先に起きちゃうなんてひどいよ。」

スバル「！」

ミソラがいきなり話しかけてきたのでスバルは驚いた。

ミソラ「ひどいよスバル君…」

スバル「ごめん……」

ミソラ「謝らなくていいよ♪でも次から起こしてね♪」

スバル「うん。（次はないと思うけど……）」

茜「2人とも朝御飯食べるなら席についてね。」

スバル・ミソラ「「は～い。」」

2人は仲良く朝御飯を食べ始めた。

～ウェーブロード～

時がたちＰＭ１：００
電波変換したスバルが立っていた。

ウォーロック『さて新しいＰＧＭを試すとしようぜ！』

スバル「ウォーロックは暴れたいだけでしょ。」

ウォーロック『最近は色々気を使ってて暴れられねんだよ！』

スバル「そう言えば昨日のタオルありがとね。」

ウォーロック『気にすんな！さっさと始めようぜ！』

スバル「うん。」

ロックマンは新しいＰＧＭを試しながらウィルスと戦い続けた。

眠れない夜（後書き）

ウォーロックいいやつですね。

スバミソまだまだ続きます。

デート（前書き）

ＰＶ：１００００アクセス突破～

話がまとまらず間に合わないところでした。

デート

～スバルの部屋～

五時間ほどウィルスと戦い新しいＰＧＭを試したスバルは部屋に戻っていた。

ウォーロック『バスターの威力が上がってたな。』

スバル「うん。ブラックエースにも問題なくなれたね。」

ウォーロック『でもよ……新機能が発動しなかったな……』

スバル「うん……ココロフォース……どうすれば発動するのかな？」

ウォーロック『さーな……ただ言えることはいつ発動するかもわからない力なんか宛にするなってことだ。』

スバル「そうだね……」

スバルとウォーロックが話してると茜の声が聞こえてきた。

茜「夕御飯ができたから2人とも降りてきて！」

茜の声が聞こえたあと扉の向こうから声が聞こえてきた。

ミソラ「スバル君、一緒に行こう。」

スバル「うん。」

2人は一階に降りていった。

夕御飯を食べ終わりスバルの部屋。

ミソラ「スバル君♪お風呂開いたから入ってだって♪」

スバル「……ミソラちゃん先入ったら？」

ミソラ「私はいいからスバル君入ってきなよ♪」

スバル「……僕はミソラちゃんが入ったら入るよ。」

ミソラ「えっ！スバル君私が入った後のお風呂に入りたいの……何か恥ずかしいよスバル君／／／／／」ミソラの顔が真っ赤になった。

スバル「違うよ！昨日みたいにミソラちゃんがお風呂に入ってきたら困るからあとに入るの！」

ミソラ「今日はスバル君がお風呂に入ってる所に入らないから……先に入って♪」

スバル「わかった……ミソラちゃん入って来ちゃ駄目だからね。」

ミソラ「うん。」

ミソラの返事を聞くとスバルは着替えを持って一階に向かった。

ミソラ「ハープ行くわよ！」

ハープ『えぇ。』

ミソラ「トランスコード！ハープ・ノート！！」

ハープ・ノートに電波変換したミソラはお風呂場に向かった。

～お風呂場～

スバル「一様タオル付けとくか。」

スバルはミソラが入って来るのを警戒してタオルを腰に巻いた。

ガラガラ

扉をを開けると一人の女の子が入っていた。

ミソラ「スバル君♪今日も背中の流し会おうね♪」

スバル「……はぁ～」

スバルの口からため息が出た。

～スバルの部屋～

スバルは結局ミソラとお風呂に入り部屋に戻っていた。

ミソラ「スバル君♪一緒に寝よ♪」

スバル「……いいよ。」

スバルは断る方法を考えたが無理だと諦めた。

ミソラ「ありがとう♪スバル君♪」

ミソラは嬉しさのあまりスバルに抱きついた。

スバル「いきなり抱きつかないでよ／／／／／／」

ミソラ「いいの♪」

スバル「明日買い物に行くんだから早く寝ようよ。」

ミソラ「うん♪」

昨日と違い2人はすぐに寝ることができた。

次の日

スバル・ミソラ「「いってきます。」」

茜・ミソラ「「いってらっしゃい。」」

2人は仲良く家を出た。

スバル「ミソラちゃん、電波変換とウェーブランナーどっちで行く？」

ミソラ「せっかく変装したんだしウェーブランナーで行こう。」

ミソラは帽子をかぶって、だて眼鏡を着けていつもと違う服装をしていた。

スバル「わかった。」

スバルとミソラはウェーブランナーでヤシブタウンに向かった。

～ヤシブタウン～

ミソラ「スバル君！どっちが似合ってる？」

スバル「どっちも似合ってるよ。」

スバル達はヤシブタウンにある１０３デパートでミソラの服の買い物をしていた。

ミソラ「そう♪じゃあどっちも買おうかな♪」

ミソラはレジに向かった。

数分後…

ミソラ「次はこっちに行こう♪」

スバル「うん。」

2人は買い物を続けた。

お昼……

2人は１０３デパート近くにあるクレープ屋さんのクレープをベンチに座りながら食べていた。

スバル「ここの一番人気すごい名前だからどんな味か心配だったけど美味しかったね。」

ミソラ「そうだね。」

スバル「買い物も終わったしこれからどうする？」

ミソラ「遊ぼう！」

スバル「うん。」

このあとスバル達はボーリングをしたりゲームセンターに行ったりと楽しい休日を送った。

帰り道の
～ウェーブランナー～

ミソラ「楽しかったね♪スバル君♪」

スバル「うん。ミソラちゃんと一緒に遊べて楽しかったよ。」

ミソラ「……明日からまた仕事であまり一緒にいられなくなるけどまた休みが出来たら一緒に出掛けようね♪」

スバル「うん。」

2人は仲良く帰っていった。

デート（後書き）

デートが上手く書けずに短くなってしまいました。

これから一気に話を進めたいと思います。

動き出す敵（前書き）

時間ぎりぎりでしたね……

後書きに大切なことを書くのでぜひ見てください。

動き出す敵

一週間後の
～月内部データベース前～

フォルテ「1ヶ月どころか2週間でできたな。」

R「試作プログラムだけどね。活動時間の問題は解除したよ……
…力は80%ぐらい出せるよ。」

フォルテ「雑魚が付けたら戦えないと言うわけか。」

R「できれば量産したいし…最終的には120%の力を出せるようにしたいんだ。」

フォルテ「お前の目標などどうでもいい……これからどうするばいいんだ?」

R「あわてないで……
データベースアクセス…」

Rが唱えるとデータベーススが稼働しRの前に5体のネットナビを産み出した。。

フォルテ「新たな仲間てどころか……」

R「先ずは名前かな……」そう言うとRは五体に

肌の色が少し黒く、背中に羽衣を着けたナビには
セレナード・R

長髪で髪の色が白く、黒いバイザーを付けた赤いナビには
ブルース・R

頭にアンテナを付けた緑の迷彩柄のナビには
サーチマン・R

緑のマントと黒いコートに身を包んだナビ
カーネル・R

髪飾りを付けた人間の女の子にそっくりなナビ
アイリス・R

と名前を着けた。

R「記憶がないのは不便かも知れないけど必要な記憶データを入れ

ておいたから僕の名前わかるよね？」

セレナード「なぜ私達を産み出したのですかR？」

R「いい質問だね……これから君たちには現在の情報を集めて来て貰うために産み出したんだよ。」

ブルース「基本的にはどこからどんなデータを集めればいいんだ。」

R「2人一組になって世界各地にあるWAXAのデータベースから電波関係のこと…できれば電波で起きた事件とフォルテが言ってた電波変換について調べてきて。」

サーチマン「電波変換？」

R「うん。僕の予想では一番僕達の計画の障害になると思うんだ…
……だから情報を集めようと思ってね。」

カーネル「作戦はわかったがアイリスは戦闘向きのナビではない…
作戦には他のナビの方がいいんじゃないか？」

R「カーネルの完全な力を使うにはアイリスと融合する必要があるからアイリスを作戦のメンバーにしたんだけど……ダメかな？」

アイリス「…私も戦う。」

カーネル「アイリス……」

R「大丈夫そうだね……今から言うように2人一組になってね。」

Rは
フォルテ、サーチマン
セレナード、ブルース
カーネル、アイリス
にわけた。

R「みんなに試作プログラムを渡しとくね。」

6人に試作プログラムを渡した。

R「バトルチップを使えるナビは叫べば使えるから上手く使ってね。
それとみんな無事に帰ってきてね！」

全員【はい】

6体は光と共に地球に向かって行った。

R「君達の働き見せて貰うよ……」

Rは近くの椅子に座ると目を閉じた。

数時間後…

～世界各地のＷＡＸＡ～

フォルテ視点

フォルテ「シューティングバスター！」

サーチマン「バトルチップ・スーパーバルカン！」

ウィザード達【うぁぁぁぁぁぁぁ～～】

2体の技をくらい多くの警備ウィザードがデリートされていく。

フォルテ「つまらん……弱すぎる……」

サーチマン「命令は実行するものだ……つまらないものはない。」

ウィザード1「うぉぉぉぁ～」
ウィザードの一体が弾幕をよけフォルテに切りかかるが……

フォルテ「ダークソード！」

刹那近づいてきたウィザードのソードとぶつかるがソードごと真っ二つにした。

サーチマン「私はデータベースからデータを取ってくる……ここは任せた。」

サーチマンはデータベースに向かって行った。

フォルテ「…くだらん。」
フォルテはサーチマンが戻ってくるまで戦い続けた。

セレナード視点

セレナード「どうやら警備に引っ掛かったようですね。」

ブルース「そのようだな……」
セレナードとブルースの前方には３０体ほどのウィザードがいた。

セレナード「あなたはいってくださいこのくらい私１人でどうにもできますから。」

ブルース「わかった！バトルチップ・エリアスチール！」
ブルースはウィザードの大群を抜けるとデータベースに走って行った。

ウィザード２「待て！」
数体のウィザードがブルースを追いかけようとしたが

セレナード「おとなしくしていて貰えませんか？」

ウィザード２「な！」

セレナードは追いかけようとしたさきに移動していた。

セレナード「私はあなた達と戦うつもりはありません。おとなしくしていてくれませんか？」

ウィザード3「データを盗もうとしている奴を見逃せるか！バトルカード・キャノン！」

一体の攻撃をきっかけにセレナードに他のウィザードの攻撃も降り注ぐが……

セレナード「愚かな……」

セレナードへの攻撃は全て効かず放った数だけソニックブームがウィザード達を襲った。

ウィザード達【ぐぁぁぁぁぁ～～～】

セレナード「待ちますか……」

全てのウィザードを倒したセレナードは呟いた。

カーネル視点

カーネル「全てのシステムを操ることができるオペレーション能力

……さすがだ。」

アイリス「私はこれくらいしかできないから……」

カーネル達が潜入したＷＡＸＡの施設はアイリスのオペレーション能力によって全てのシステムが制圧されていた。

アイリス「データベースに向かいましょ……兄さん。」

カーネル「ああ。」

２体はデータベースに向かって行った。

動き出す敵（後書き）

青い光です。

ようやくロックマンエグゼのネットナビが出てきたので皆様にこれからのお話で出てきて欲しいネットナビのアンケートを取りたいと思います。

感想を使って送ってください。

例

アイリス

ロックマンエグゼ6のラストは泣きました。

などこんな感じに書いてください。

下の文はそのナビとロックマンを戦わせて欲しいなどでもいいです。

可能な限り皆様の意見を参考にしたいと思います。

期限などはありません。

たくさんの意見お待ちしてます。ｍ（＿）ｍ

攻撃できない？（前書き）

書いていて改めて思ったのですがセレナードて強いですよね。攻撃効かないですし……
ゲームでは攻撃中と足場を無くせば攻撃を当てられますが実際だったら攻撃しなければ攻撃を受けませんし足場も関係なく浮いてそうですよね……

雑談でした。

攻撃できない？

数時間後の
～コダマ小学校～

ジャックとツカサは学校に来たスバルとゴン太をすぐに屋上に呼び出し数時間前に起きた世界各地のＷＡＸＡにネットナビが襲撃してきたことを伝えていた。

ゴン太「知らなかったぜ…」

ツカサ「今は情報規制をかけているからね。」

ジャック「そのせいで世界各地の遊撃隊のメンバーや姉ちゃんと暁、カケルは襲撃れていないＷＡＸＡの警備などで忙しそうだったぜ。」

スバル「僕達は何をすればいいの？」

ツカサ「学校が終わったらＷＡＸＡに集まれるメンバーは集まるようにだって。」

スバル「ミソラちゃんは集まれそうにないね……」

ミソラは仕事のためここ一週間は学校を休み夜遅くまで仕事に追われていた。

ツカサ「スバル君はミソラちゃんに伝えといてね。」

スバル「わかった。」

ジャック「話しは終わったし教室に戻ろうぜ。」

屋上にいた４人は教室に戻っていった……

……世界各地で起きている戦いも知らずに……

～世界各地のＷＡＸＡ～

セレナード視点

セレナード達は新たに潜入したＷＡＸＡのデータベースの電脳で電波変換した２人の人間と向き合っていた。

セレナード「あなた方は確か……」

ブルース「アシッド・エースとクイーン・ヴァルゴだセレナード。」

奪ったデータを見たのか２人の名前を知っていた。

セレナード「そうでしたね。なにかご用ですか？」

暁「勝手に侵入して来てそれは無いんじゃないか？」

クインティア「あなた方を排除します！」

２人は構えつつシドウはクインティアに耳打ちした。

暁〔赤い方は俺がやる……もう一方を頼む。〕

クインティア〔わかったわ。〕

セレナード「私は戦うつもりはないのですが……」

ブルース「斬る！」

戦闘が始まった。

ブルース「バトルチップ・フミコミザン！」

暁「ロックオンソード！」

ブルースがフミコミザンを使いクイーン・ヴァルゴに斬りかかるがアシッド・エースのソードに止められ競り合いになった。

暁「お前の相手はこの俺だ！」

ブルース「……面白い。」

ブルースは勢いよく離れるとアシッド・エースと共にその場から離れていった。

セレナード「……私はあなたと戦わなくてはいけないようですね。」

クインティア「行くわよ！ヴァルゴ！」

ヴァルゴ『キャハハハハ！行くわよティア！』

クイーン・ヴァルゴは杖を振った。

クインティア「ゴッドレイン！」

セレナードの真上から水が降るが……

セレナード「無駄ですよ……」

セレナードに当たった攻撃は効かず、ソニックブームにしてクイーン・ヴァルゴに跳ね返した。

クインティア「アクアヴェール！」

ソニックブームを水のバリアで防ぎアクアウェーブでセレナードに攻撃したが…

セレナード「はぁ！」

セレナードにアクアウェーブが当たるが効かず、ソニックブームにして再び跳ね返した。

クインティア「！」

再び跳ね返したセレナードを見たクインティアはソニックブームを避けた。

セレナード「今度は防がないのですか？」

クインティア「あなたは攻撃を跳ね返す力を持っているようね……」

セレナード「あなたも持っているではありませんか。」

クインティア（これじゃ攻撃できない……どうすればいいの？）

クインティアが打開策を考えていると。

セレナード「あなたが攻撃できなくても私は出来ますよ。」

クインティア「！」

セレナード「ホーリーショック！」

セレナードの周りからランダムに生まれた複数の光の玉がクイーン・ヴァルゴを襲う！

クインティア「くっ…」

クイーン・ヴァルゴは光の玉をひたすら避け続けたが徐々に避けきれなくなり技を使った。

クインティア「アクアヴェール！」

水のバリアで光の玉を防ぎ防いだ数だけアクアウェーブを生み出しセレナードを襲うがクインティアはそれを全ての跳ね返されると思ったが……

セレナードは横に飛びアクアウェーブを避けた。

クインティア「（今なら当たるの？）ハイドロドラゴン！」

セレナード「はぁ！」

セレナードにハイドロドラゴンは当たるが効かず、ソニックブームになってクイーン・ヴァルゴを襲う！

クインティア「バトルカード・バリア！」
クイーン・ヴァルゴはソニックブームを防いだ。

クインティアは今までの戦闘でセレナードの力について仮説をたてた。

クインティア「あなたの力は攻撃中には発動しない見たいね。」

セレナード「もうわかってしまいましたか……でもわかったとしても攻撃しにくいことには変わりませんよ。」

クインティア「……」

このあと2人は動かず、こうちゃく状態が続いた。

攻撃できない？（後書き）

久しぶりの戦闘ですがバトルチップ、バトルカードを余り使わなかったので書くのが難しかった。

次回はブルース、アシッド・エースの戦いです。

感想・アドバイス・一言
お待ちしてます。

VSブルース（前書き）

遅れるところでした。

VSブルース

その頃……
～ブルース視点～

ブルース「バトルチップ・ワイドブレード！」

暁「ロックオンソード！」

クインティア達から離れた2人は激しい斬りあいを繰り広げていた。

ブルース「ぐっ！……バトルチップ・バリアブルソード！」

ブルースはアシッド・エースから離れながらワイドショットの形をした衝撃波を放った。

暁「バトルカード・ワイドウェーブ！」

2人の技は空中で激しくぶつかり相殺した。

暁「バトルカード・ステルスレーザー×3！」

アシッド・エースは3機のステルスを出し3方向からブルースを襲う！

ブルース「バトルチップ・エリアスチール・Zソード！」

チップを使った瞬間、ブルースは高速で移動し攻撃を避けながら3機のステルスを斬った。

ブルース「バトルチップ・エレキソード！」

速度はそのままにブルースはアシッド・エースに斬りかかるが……

暁「バトルカード・ウィンディアタック！」

アシッド・エースはブルースのソードが届く前に風圧でブルースを後方へ吹き飛ばした。

ブルース「ぐっ！」

吹き飛ばしたブルースは体勢を戻し着地したどころを……

暁「バトルカード・ヘビーキャノン！」

攻撃した。

ブルース「！」

攻撃は当たった、ブルースが展開したシールドに……

暁「なっ！」

ブルースはそのまま高速で近づきアシッド・エースに斬りつける

ブルース「サプライズソード！」

暁「ロックオンソード！」

ブルースのソードを受け止め競り合いになる！

暁「なぜＷＡＸＡを襲っているんだ！」

ブルース「言うと思っているのか……」

暁「Ｒの命令か？」

ブルース「！」

暁「計画の序章と言うわけか？」

ブルース「……バトルチップ・エンゲツクナイ。」

暁「！」

アシッド・エースは危険を感じすぐさま離れた。

シュッ！

ブルースの回りにクナイが表れ一周した。

暁「図星だったか？」

ブルース「貴様を斬る！」

ブルースの言葉を聞くとアシッド・エースは背中に光の翼を展開した！

暁「出来るかな？」

ブルース「バトルチップ・フミコミクロス！」

暁「ウィングブレード！」

２人の技は激しくぶつかった！

暁・ブルース「「うぉぉぉぉぉぉ……」」

パキン

ブルースのソードが衝撃に耐えきれず折れた。

ブルース「ぐぁぁぁぁぁぁ……」

ブルースは攻撃をくらい吹っ飛んで倒れた。

暁「これまでのだな……」

暁は勝利を確信した。

～月内部～

R「ブルースがここまで苦戦するなんてね……」

Rは目を閉じたまま呟いた。

R「ブルース……君はまだ負けられない……だって世界の変革を見てないのだからね。」

Rは笑っていた。

時は少し戻り
ブルース視点

ブルース「私は……まだ負けて……いない……」

ブルースはゆっくりと立ち上がっりソードを再展開して構えた。

暁「もうやめた方がいいんじゃないの？」

ブルース「私はまだ負けていなぁぁ…ぁ……」

ブルースは突然黙った……

暁「？」

そして再び喋り始めた。

ブルース「……だって世界の変革を見てないのだからね。」

刹那、ブルースから黒いオーラが吹き出した。

暁「！」

アシッド・エースは構えた。

ブルース「君で試し切りさせてもらうよ。」

ブルースは笑っていた。

暁「……お前は誰だ？」

暁の言葉にブルースは笑うのをやめた。

ブルース「知る必要はない……君は死ぬのだから」

言い終わった瞬間ブルースが一瞬光った。

暁「！」

ブルースは高速でアシッド・エースを3回斬っていた……

暁「な……に……」

ブルース「トランスムーブ……」

アシッド・エースはその場に倒れた……

VSブルース（後書き）

技の名前を調べていたら遅くなりました。

バトルの時はなんのバトルチップ、バトルカードを使うか迷いますね。

感想・アドバイス・一言をお待ちしてしてます。

いままで感想を書いたことがない人でも気軽にお書きください。

ココロフォース（前書き）

最近の更新時間が日に日に遅くなってます。

ココロフォース

ブルース視点

ブルース「セレナードを加勢にいくかな……」

ブルースはセレナードのところに移動しようとしていた。

暁「……待て！」

アシッド・エースは何とか立ち上がりブラスターを構えた。

ブルース「さっき君がブルースに言ったことを言うけどもうやめた方がいいんじゃないの？」

暁「やはり中身が変わっているのか……お前がRか？」

ブルース（R）「わかったところで勝機はないよ……君を殺したあとお連れの人もあの世に送ってあげるよ。」

ブルースはソードを展開した。

暁「クインティアは殺らせない！……俺が守る！」

ブルース（R）「守れないさ……」

ブルースは一瞬でアシッド・エースの懐に移動していた。

暁「！」

ブルース（R）「君はここで死ぬのだから。」

ブルースはソードを構えた。

暁（俺は守れないのか……俺は！……俺は！！）

シドウの脳裏に大切な人の顔が浮かんだ……

暁「……クインティア…」

……強い思い確認……

ココロフォース……始動…

ブルースフォース…発動！

暁・ブルース（R）「「！？」」

突然アシッド・エースは赤い光のに包まれた。

ブルースは構わずソードを振るうが光に当たると当たった部分が消滅した。

ブルース（R）「！」

ブルースはすぐさまアシッド・エースから離れた。

光が消えるとアシッド・エースの姿は変わっていた。

白かった装甲は赤くなり今まで赤かったところは紫に変わり左手に小さなシールドを付けていた。

ブルース（R）「……ブルースソウル？」

アシッド・エースの姿がブルースソウルの姿にとても似ていたためブルースは呟いていた。

暁（力の使い方が頭に伝わってくる！）

アシッド・エースはブラスターを腰に戻すと右手をソード展開しブ

ルースを見た。

暁「お前を倒す！」

ブルース（R）「倒せ…！」

言い終わる前にアシッド・エースはブルースの懐に入っていた。

暁「フミコミザン！」

ブルース（R）「バトルチップ・イアイフォーム！……なっ！」

ギリギリでアシッド・エースの一撃を止めたが勢いにに負け後ろに吹っ飛んだ！

ブルース（R）（バトルチップも無しに技を……）

そんなことを考えている間にアシッド・エースはソードを振るい衝撃波を産み出していた。

ブルース（R）「バトルチップ・バリアブルソード！」

ブルースは吹っ飛びながらもソードを振った。

暁・ブルース（R）「「ソニックブーム！！」」

2人の技はぶつかったがアシッド・エースが産み出した衝撃波はブルースが産み出した衝撃波を打ち消しブルースに直撃した。

ブルース（R）「なぜ負ける？同じ技なのに……」

ブルースは地面に着地した。

暁「これで決める！」

アシッド・エースは再び背中に光の翼を展開した！

ブルース（R）「1度見たせた技が通用すると思って……！」

ブルースが叫んでいると目の前にいたはずのアシッド・エースが消えていた。

暁「ネオウィングブレード……」

ブルース（R）「！」

後ろから声が聞こえたため振り向こうとしたが振り向けなかった…

……

体がクロスに切られていて……

ブルース（R）「な……」

ブルースの体が崩壊しはじめた……

同じ頃
セレナード視点

2人の膠着状態はまだ続いていた。

クインティア（シドウは大丈夫かしら……）

セレナード「……」

R（セレナード……）

セレナード（！…頭に声が……）

突然セレナードの頭の中に声が響いた。

R（今すぐブルースの所に迎え……）

セレナード「？」

R（ブルースは殺られた…記憶データを回収しろ記憶から場所を知られては困る。）

セレナード「わかりました……」

クインティア「？」

セレナード「どうやらあなたとはここまでのようですね。」

セレナードは光となってブルースのところに向かった。

クインティア「待て！」

クイーン・ヴァルゴも光となってセレナードを追いかけていった。

ブルース視点

ブルース（R）「電波変換の力見せてもらった……まさかブルースが負けるとは……」

崩壊しながらもブルースは話続けた。

暁「……」

ブルース（R）「今度は自分で戦ってみ…たい……な……（これ以上は無理か）」

ブルースは突然黙った。

暁「？」

そして再び喋った。

ブルース「……私は……いったい？……ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ブルースは完全に消滅しブルースがいた所にはデータチップが浮いていた。

暁「！……このデータチップがあれば敵についてわかるはずだ……」

アシッド・エースはデータチップを取ろうと近づいた。

セレナード「ホーリーショック！」

暁「！」

上空に行きなり表れたセレナードの攻撃にアシッド・エースは左手のシールドを大きくし攻撃を防ぎながら後退した。

セレナード「危うく取られるところでした。」

セレナードはデータチップを手に取った。

暁「渡すかよ！ソニックブーム！」

アシッド・エースはソードを振るい衝撃波を産み出し攻撃しが。

セレナード「はぁ！」

セレナードに攻撃は当たるがセレナードは全て跳ね返した。

暁「なっ！」

クインティア「シドウさがって！アクアヴェール！」

クイーン・ヴァルゴはアシッド・エースの前に立ち水のバリアで防いだ（アクアヴェーブは出さなかった）。

暁「何が起きたんだ？」

クインティア「攻撃を衝撃波にして跳ね返したのよ。」

セレナード「今日はこのまま失礼させて頂きますよ。」

暁「逃がすと思っているのか？」

アシッド・エースはソードを構えた。

セレナード「そんなにボロボロで私に勝てるとは思えませんよ。」

暁「くっ……」

セレナード「失礼しますよ。」

セレナードは光となって去っていった。

ココロフォース（後書き）

アシッド・エースのココロフォースの見た目はロックマンＥＸＥのブルースソウルのアシッド・エースバージョンだと思ってください。
ちょっと強くしすぎなかな？

感想・アドバイス・一言、お待ちしてます。

アンケートもお待ちしてます。

各地の戦い（前書き）

青い光です。
今回のお話でもう一人のオリジナルキャラクターが登場します。
個人的なイメージは天使です。

各地の戦い

その頃……
フォルテ視点

フォルテとサーチマンも3ヶ所目で待ち伏せしていたアメロッパの遊撃隊メンバーの八木けん太が電波変換したゴート・カンフーに会いフォルテはサーチマンにデータを取りにいかせ自分は戦っていた。

八木「シャドースマッシュ！サー！」

ゴート・カンフーは3人に分身して正拳を繰り出していた。

ゴート・カンフーはバトルカード・クサムラステージやグリーングレネードをたくさん使い足場を全て草むらパネルにして草むらパネルを吸収してパワーアップしていた。

フォルテ「ダークソード！」

戦っていてこの勝負は圧倒的だった……フォルテの……

八木「メェェェェ！」
ダークソードによって分身も含め本体も斬られていた。

フォルテ「弱いな……まだ白い奴の方が楽しめたぞ……」

八木「ぐっ！まだ諦めないサー」

フォルテの圧倒的な強さにゴート・カンフーはアンダーシャツと草むら回復で何とか持ちこたえている状態だった……

フォルテ「お前どの戦いも飽きた……そろそろ消えろ。」

フォルテは手にゴスペルの顔を作り出した。

八木「！」

フォルテ「燃え尽きろ！！ゴスペルキャノン！」

ゴスペルの口か出た炎が草むらパネルによって威力を増してゴート・カンフーに直撃し……

×××「アクアヴェール！」

フォルテ「！」

突然ゴート・カンフーの回りに水のバリアでき炎の直撃から身を守

った。

×××「大丈夫？八木君。」

八木「助かったサー。」

ゴート・カンフーに近寄って来たのは、杖を持ち上半身はアイスペガサスで下半身はクイーン・ヴァルゴに似た姿をした女の子だった。
（色はペガサスをベースで左手に顔はない。）

フォルテ「一人増えたぐらい何も変わらん、消えろ！バニシングワールド！」

再びゴスペルの口から強力な一撃が放たれた。

×××「変わるよ！」

女の子は杖を回した。

×××「マジシャンズフリーズ！」

女の子は地面から巨大な氷柱を出しフォルテのバニシングワールドの盾にして防いだ。

フォルテ「……こいつは楽しめそうだ。」

フォルテはゴスペルを消して再び戦闘体勢に入った。

R（フォルテ……

フォルテ（！頭に声が……）

R（ブルースが殺られた……データも十分手に入ったからもう戻っていいよ。）

フォルテ「待てこれから面白くなりそうなんだ。」

八木・××××「？」

R（君は一度かなりの損傷をしたから君の修復用データが余り残ってない……もう一度前ぐらいの損傷をしたら直せない……今すぐ戻って来るんだ。）

フォルテ「……わかった。」

フォルテは光となって消えていった。

八木「……逃げたみたいサー。」
×××「……そうみたいね……」

ゴート・カンフーは膝をついた。

×××「大丈夫？」

八木「殺されるところだったサー」

×××「ごめんね遅くなっちゃって……」

八木「遠い支部守ってたししかたいサー……今は2人しかいない居ないしサー。」

×××（……カケルがいればな……）

女の子はそんなことを考えていた。

～とあるウェーブロード～

カーネル視点…

カーネルとアイリスは何事もなく４ヶ所のＷＡＸＡ支部に潜入しデータを盗み出していた。

アイリス「どうしたの？……兄さん？」

カーネルは突然立ち止まった。

カーネル「Ｒからの連絡だ……データはもう十分だそうだアイリス引き返すぞ。」

フォルテと同じように連絡が入った。

アイリス「はい。」

カケル「サンダースラッシュ！」

カーネル・アイリス「「！」」

カーネルとアイリスはすぐにその場を移動し攻撃を避けた。

ベルセルク「探すのに苦労したぞ！」

カケル「盗んだデータを返してもらうよ。」

2人の前に現れたのはベルセルク・ビーだった。

カーネル「貴様は確か……ベルセルク・ビー。」

カケル「！……大分データを見たようだね。」
電波変換した姿の名前を知っていることに驚いた。

カーネル「丁度いい……自分の実力を知りたかったところだ……
……」

カーネルはソードを構えた。

カケル「僕もだよ……ダブルトライブ！」

そう言うとベルセルク・ビーの回りに葉っぱが大量に舞った。

カケル「ベルセルクシノビ！」

ベルセルク・ビーの姿がベルセルクシノビに変わった。

カーネル「アイリス……手を出すな。」

アイリス「はい。」

カケル「行くよ！ベル！」

ベルセルク「ああ！」

ベルセルクシノビとカーネルの戦いが始まった。

各地の戦い（後書き）

作者「ねぇカケル君。」

カケル「どうしたんですか？」

作者「最後にベルセルクのことベルて呼んでたけどどうしたの？」

カケル「名前で呼ぶには長いから新しい呼び方を考えたんだ。」

作者「そうなんだ……」

ベルセルク「我は認めていないのだが……」

カケル「いいじゃないか……ベル♪」

作者「じゃあこれからは台詞のところもベルでいいね♪」

ベル「そんな……」

ベルの手から剣が落ちた。

ＶＳカーネル（前書き）

前回のお話でフォルテの修復用データがないとありましたがそれは月内部にあるフォルテに関するデータの一部です。
このデータには限りがあり作れるのは一体までと言う設定にしています。
（フォルテ量産などを無くすためです。）

VSカーネル

カーネル「カーネルアーミー！……撃て！」

カーネルが叫ぶとカケルの周囲に無数のカーネルの小さな人形が現れ一斉にマシンガンで攻撃し始めた。

カケル「！バトルカード・オーラ・マッドバルカン！」

ベルセルクシノビはオーラでカーネルアーミーの攻撃を防ぎながらバルカンでカーネルアーミーを破壊した。

カーネル「スクリーンディバイド！」

カーネルがソードを振るとベルセルクシノビのオーラがくの字に斬れた。

カケル「！（こんな技を使うのか……）バトルカード・ピラニアキッツ！」

カーネルの足場から無数のピラニアがカーネルに向かって飛び出した。

カーネル「下か！」カーネルは直ぐにジャンプしピラニアをかわした。

カケル「シノビシュリケン！」

空中のカーネルに向かって手裏剣を3つ投げた。

カーネル「はぁ！」

カーネルは向かって来る手裏剣をソードを使い全て弾いた。

その間にベルセルクシノビはカーネルに突っ込んだ！

カケル「バトルカード・ハンマーウェポン！」

ベルセルクシノビは巨大なハンマーを出し振り切った。

カーネル「ぐっ……」

カーネルはとっさにソードを防ぐが衝撃を防ぎきれずにウェーブロードに叩き落とされたがカーネルはすぐさま体勢を立て直した。

カーネル「インダクトミサイル！」

カーネルは空中のベルセルクシノビに大量のミサイルを放った。

カケル「！バトルカード・バリアー！」

ベルセルクシノビはバリアーを張りミサイルの一撃目が直撃し受けた爆風で移動したため他のミサイルは当たらずにウェーブロードに着地した。

カーネル「カーネルアーミー！」

カーネルは自分の周りに無数のカーネルアーミーを出した。

カケル「その人形の攻撃なら効かないよ！バトルカード・オー……！」

ベルセルクシノビは異変に気付き上を見た。

上からはさっきカーネルが打ち上げた大量のミサイルがベルセルクシノビに向かって飛んできた

カケル「くっ！」

ベルセルクシノビはすぐさまミサイルを避け始めたが……

カーネル「撃て！」

カーネルの周りのカーネルアーミーが一斉にベルセルクシノビに攻撃した。

上からは大量のミサイル、横からはカーネルアーミーの攻撃が一斉に襲った。

カケル「ベル！」

ベル「わかった！」

カケル「うぉぉぉぉー！」

直後、大量の攻撃がベルセルクシノビを襲った……

……

カーネル「この程度か……」

攻撃が終わりカーネルの前には煙が立ち込めていた。

カケル「危なかった。」

カーネル「！」

カーネルは後ろに飛んで距離を取り再び構えた。

煙の中には一人の少年が立っていた。

カケル「トリプルトライブしなかったらヤバかった。」

トライブキング姿のカケルが立っていた。

カーネル「まだパワーアップが可能だったのか。」

カケル「君か強いんでね……本気を出させてもらうよ。」

ベル〔カケル……時間制限を忘れるなよ。〕

カケル「一気に行くぞ！」

トライブキングはカーネルに接近した。

カーネル「カーネルアーミー！……う…」

カケル「遅い！オーバースラッシャー！」

カーネルアーミーが攻撃する前にチャージショットで全て破壊した。

カーネル「なっ！」

カケル「はぁぁぁぁ！」

カーネル「ぐっ！」

カーネルはトライブキングの稲妻剣の一撃をソードで受け止めたが一瞬で吹っ飛んだ。

カケル「オーバースラッシャー！」

吹っ飛ぶカーネルにチャージショットを放った。

カーネル「ネ…ネオスクリーンディバイド！」

カーネルはチャージショットをZの字に切り相殺した。

カーネルはウェーブロード上に着地

カケル「バトルカード・ムーテクノロジー！」

する瞬間に攻撃しカーネルにレーザーが直撃した。

カーネル「ぐおおおおおおおお～～～」

アイリス「兄さん！」

アイリスはカーネルに近づいた。

カーネル「はぁ……はぁ……」

アイリス「今……傷を直すから……リカバリー。」

アイリスはカーネルの傷を直した。

カケル「……」

トライブキングはΔの形をを剣で描く。

アイリス「兄さん私の力を使って……」

カーネル「……わかった。」

カーネルはアイリスの手をとった。

するとカーネルとアイリスは融合し……金色に輝くカーネルが立っていた。

カケル「！融合したからってこの技は防げないよ……カイザーデルタブレイカー！」

カーネル「ネオスクリーンディバイド！」

2人の技は激しくぶつかり……相殺した。

カケル「な……」

カーネル「私も本気でいこう！」

カーネルはソードを構えた。

カケル「はぁぁぁぁ！」

カーネル「うぉぉぉぉ！」

2人は向き合い激しい斬り合いが始まった。

VSカーネル（後書き）

もうすぐバトル終わります。

金色の力（前書き）

ギリギリセーフ。

金色の力

数十分後……

２人の激しい戦いは続いていた。

カケル「バトルカード・リュウエンザン！」

カーネル「バトルチップ・フレイムソード！」

カケル・カーネル「うぉおおおおおおおおおお！」

２人の技がぶつかるたびに起こる衝撃で周りのウェーブロードはボロボロになっていた。

２人の斬り合いが続く。

カケル「くっ……（時間が……）」

カーネル「はぁ！」

カーネルのソードを防ぎなら後ろにさがりバスターを構える。

カケル「オーバースラッシャー！！」

カーネル「スクリーンディバイド！」

再び2人の技がぶつかり相殺しあう。

カーネル「はぁぁぁぁ！」
カーネルはトライブキングに突っ込む

それを見たトライブキングは剣で応戦しようとしたが……

突然トライブキングの体が光だし光が消えるとベルセルク・ビーの姿に戻ってしまった。

カケル「！しまっ……」

カーネル「この時を待っていた！」

カーネルはマントをベルセルク・ビーに投げて視界を奪った。

カケル「！」

カーネル「アスパイアブレイク！」

カケル「がぁ…ぁ…ぁ…」

あまりの激痛に気絶しそうになったがなんとか耐えた。

カーネル「盗んだデータにトライブキングでいられる時間が書いてあって助かったぞ。」

カケルはトライブキングには３０分しか連続でなれない。

カケル「はぁ…はぁ…はぁ（アンダーシャツがなければやられていた。）」

ベルセルク・ビーは剣を構えた。

カーネル「やめておけ…」

カーネルはベルセルク・ビーの前に移動すると首を片手で掴み持ち上げた。

カケル「ぐっ……」

ベルセルク・ビーはカーネルの移動速度に反応できなかった。

カーネル「今、楽にしてやる……」

カーネルはソードを構えた。

カーネル「死ね！」

カーネルはソードでベルセルク・ビーを切り裂いた。

ベルセルク・ビーの体から大量の血が流れた……

カケル（…死ぬのか……いや……やっと父さんと母さんの所に行ける……）

カケルはゆっくりと目を閉じた……

すると走馬灯のように今までの記憶が見えた……

一番悲しい記憶も……

〜回想〜

5年前……

僕の両親は科学者だった…

…両親は幼い僕に科学について色々教えてくれた。僕も自然と両親のような科学者になることを夢見ていた……

両親は仕事がら海外に行くことが多く僕は家の近くに住んでいた友人夫婦の家に預けられることが多かった……

友人とは小学生の頃からの親友らしい

友人の人も優しく娘さんとは歳も同じだったので仲がよかった。

両親もできる限り時間を作り僕に会いに来てくれたので寂しくなかった。

あのときもすぐに帰って来ると思っていた……

～友人の家～

（注意、子供にしてはやたら難しい言葉を使いますが気にしないで下さい。）

×××「カケル…つまんない…」

カケルと女の子は部屋でカケルは家から持ってきた科学の本（大人向け）、女の子は普通の絵本を読んでいた。

カケル「シズク……何がつまらないの？」

シズクと呼ばれた女の子は絵本を読むのが飽きたようだ。

シズク「カケルが遊びを選ぶといつも読書なんだもん。」

カケル「シズクだておままごとを選ぶことが多いよ。」

シズク「私はいいの！」

シズクとそんなことを話しているとシズクの父親が慌ててシズクの部屋にやって来た。

カケル「どうしたんですか……おじさん？」

シズクの父親の慌てぶりにカケルは疑問を覚えた。

シズク父「カケル……両親が亡くなった……」

カケル「え……」

衝撃的な出来事だった。

原因は飛行機の墜落事故だった……原因は不明……死者３００人を超える大事故だった。

僕は友人夫婦に引き取られることになり生活には困らなかったが両親の死に僕は泣いてばかりだった。

２週間後……

両親の遺品が届いた……

両親のトランサーだった。

父さんのトランサーには、友人夫婦に僕のことや研究データの取り扱いなど友人夫婦に当てたことが書いてあった。

母さんのトランサーには、僕に対してのメッセージが書かれていた。

カケル…これからつらい事悲しい事、苦しい事、たくさんの事があると思うけど……私達の分まで生きて……

このメッセージを見てから僕は泣くのをやめた……両親の分まで生きようと決めたから……

カケル「僕は…生きる！」

……強い思い確認……

ココロフォース……始動！

パーフェクトライブ発動！（以後Pトライブ）

ベルセルク・ビーは光に包まれた。

カーネル「！」

カーネルは距離をとった。

光が消えそこに立っていたのはカーネルと同じように全身金色に輝くトライブキングだった。

カーネル「カーネルアーミー！」

カーネルはPトライブが動く前に大量のアーミーは出した。

カーネル「う…」

言い切る前にPトライブは左手を構えた。

カケル「ジェノサイドブレイザー！」

強力な炎でカーネルアーミーを一撃でなぎ払った。

カーネル「な……」

カーネルは大量のアーミーが一撃で全滅したことに驚いた。

カケル「フウマシップウジン！」

Pトライブは3人に分身し空中から手裏剣を3方向から大量に投げた。

カーネル「ネオスクリーンディバイド！・スクリーンディバイド！」

大量の手裏剣を攻撃し撃ちを落とすが全て落とす事ができず直撃した。

カーネル「くっ……」

Pトライブの3人の内の1人が手裏剣を投げるのをやめたカーネルに突っ込んだ。

カケル「サンダーボルトブレイド！」

カーネル「（これ以上はまずい……）バトルチップ・エスケープ！」

激しい雷撃が落ちるがそこにはカーネルも誰もいなかった。

カケル「…消えた……」

突然の消えたカーネルをPトライブは見つけられなかった。

金色の力（後書き）

訂正……

以前フォルテの技でドリームソードと書いていましたがダークソードが正しいので直します。

お見舞い（前書き）

青い光です。

今まで休まず書いてきましたがどうですか？
面白いですか？
直した方がいいことありますか？
今まで読んでどう思いましたか？

感想、アドバイス、一言を書いていただくと参考になりとても助かります。

応援メッセージを貰えるととても嬉しいです。

今まで書いたことない人でも大歓迎です。

感想お待ちしてます。

お見舞い

～ＷＡＸＡニホン支部～

学校が終わりスバル、ゴン太、ジャック、ツカサの４人はＷＡＸＡに集まっていた。

そこでスバル達が学校に行っている間に起きた戦いをヨイリーが話していた。

スバル「それでみんな大丈夫だったんですか。」

ヨイリー「シドウちゃんとカケルちゃんが怪我で入院してるけど３日もすれば退院できるわ。」

ゴン太「それじゃこのあとお見舞いにいこうぜ！」

ツカサ「何を持っていったら喜ぶかな？」

ジャック「それより２人がココロフォースを発動したて本当なのか？」

ヨイリー「ええ…シドウちゃんとカケルちゃんは発動させてたわ。でも2人とも入院中だから話が聞けないの。」

スバル「ネットナビの目的は何だったんですか?」

ヨイリー「8ヶ所のWAXAの施設からデータを持ち出しことが確認されているわ。今回はデータを集めるのが目的だったようね。」

ジャック「データなんか集めてどうすんだ?」

ヨイリー「わからないわ……またいつ現れるかわからないからみんな気をつけてね。」

全員【はい。】

ヨイリーの話も終わりスバル達は外に出た。

ゴン太「それじゃカケルと暁さんのお見舞いに行こうぜ。」

スバル「何が持っていった方がいいよね。」

ツカサ「それなら３０分後に病院前に集合てことにしようよ。」

ジャック「いいぜ。」

全員【トランスコード！】

みんな電波変換すると各地に飛んでいった。

ウォーロック『スバル、何持っていくんだ？』

スバル「カケル君はどうしようかな……暁さんはあれかな……」

スバルも迷いながら飛んでいった。

～月内部～

R「みんなお帰り。」

Rの前にはセレナード、フォルテ、サーチマン、カーネル、アイリスの5体のネットナビが集まっていた。

R「みんなに集めて貰ったデータは今解析してるからこれを使えば今よりも完成度の高いプログラムが作れるよ。」

セレナード「ブルースはどうしますか？」

セレナードはRにブルースのデータチップを渡した。

R「ブルースの核となるこのデータとデータベースに残っているデータを使えば直せるよ。」

セレナード「そうですか……」

フォルテ「そんなことどうでもいい……次は何をすればいい？」

R「データを解析して面白い事がわかってね、場所を割り出してるから終わるまでは待機かな。」

アイリス「……場所？」

R「うん。ある3ヶ所の場所を割り出してるだ。わかったらそこからあるデータの残骸を集めて来て欲しい。」

サーチマン「それが任務か……」

カーネル「どれくらいかかるんだ?」

R「プログラムの開発やブルースの修復もやるからいつになるかわからないな…」

カーネル「そうか……」

R「それまでみんな待機しててね。」

Rの話が終わりみんな消えていった……

～病院～

コンコン

暁「どうぞ。」

スバル達【失礼します。】

スバル達が入った部屋にはシドウとカケルの部屋だがシドウしか居なかった。

スバル「暁さん怪我大丈夫ですか?」

暁「このくらいの怪我大したことないさ。」

ジャック「カケルの奴どこ行ったんだ?」

暁「カケルなら屋上に行ってるぞ。」

ゴン太「何で屋上なんだ?」

暁「さっきカケルに電話がかかってきてな……女の子からの電話だったからからかったら屋上に逃げられた。」

暁は笑いながら話していた。

このあとスバル達はシドウにお見舞いの品を渡した。

ちなみに持ってきたのは

スバル…うまい棒３０本入り（サラミ味）

ツカサ…花束

ジャック…うまい棒３０本入り（サラダ味）

ゴン太…牛丼（レトルト）

スバルはジャックと被ったが味が違ったのでシドウは喜んでくれた。

（ゴン太の牛丼には顔がひきつっていた）

このあとシドウと話していると……

コンコン

クインティア「シドウ入るわよ。」

クインティアが果物の詰め合わせを持ってやって来た。

ツカサ「……暁さん僕達そろそろ屋上に行ってみます。」

クインティアが来たのを見てツカサが言った。

ジャック「……！そうだなそろそろ屋上に行こうぜ。」

ジャックもツカサの考えがわかり話を会わせた。

スバル「？そうだね…」

ゴン太「？？？」

スバルとゴン太はよくわかってなかったが屋上に向かうことにした。

シドウに挨拶して部屋から出ていった。

暁（あいつら……

クインティア「何か食べる？」

暁「ああ…」

クインティアは持ってきた果物からリンゴを取り出しシドウ隣に座て皮を剥き始めた。

2人はいろいろな事を話ながらすごした。

お見舞い（後書き）

ポイントをつけてくれると足りない物がわかるので機会があったらつけて見てくださいお願いします。

お見舞い２（前書き）

アンケートお待ちしてます。

お見舞い２

スバル達が来る１０分前…

～病院（部屋）～

シドウ「……暇だ。」

カケル「クインティアさんが買い出しに行ってからそればっかですね。」

カケルは本を読みながら話した。

シドウ「誰か来ないかな……」

カケル（聞いてないな…）

カケルがそんなことを考えていると……

♪～♪～♪～

カケルのハンターＶＧのが鳴った。

誰からの電話か確認するとカケルは出るのをやめた。

♪～♪～♪～

暁「カケル、ハンター鳴ってるぞ。」

カケル「わかってます。」

カケルは何か考えているようだ。

♪～♪～♪～

暁「出ないのか？」

カケル「……よし！」

カケルが電話に出ると空中にディスプレイ出た。

シズク「遅いよ！」

カケル「ごめん。」

ディスプレイに写ったのは青髪の可愛らしい女の子だった。

シズク「ネットナビと戦ったて聞いたけど大丈夫？怪我とかしてない？」

カケル「……怪我とかしてないから心配しないで。」

カケルは戸惑いながらウソをついたが……

暁「何言ってる。今怪我で入院してるだろ。」

隣にベットにいたシドウがカケルが言った事を訂正するように言った。

シズク「カケルそんな大怪我してるの……」

シズクはとても心配そうな顔をしていた。

カケル「暁さん、心配しないようにウソついたのにどうして言うんですか。」

暁「俺は本当の事を言っただけだ……それにしてもお前の電話の相手、今日フォルテと戦った奴だよな?」

カケル「えっ…シズク!ネットナビと戦ったの?怪我とか無い?大丈夫か?」

カケルはその事を知らなかったらしく少し取り乱していた。

シズク「私は大丈夫だけど先に戦ってた八木けん太君がひどい怪我で1ヶ月くらい入院するそうよ……」

カケル「そうか……シズクが無事でよかった。」

シズク「心配してくれてありがとう……さっきから気になってたんだけどカケル以外に聞こえる声てもしかして暁シドウさん？」

カケル「そうだよ。」

2人が楽しいそうに話している姿を見てシドウは気になった事を聞いてみた。

暁「1つ聞くが……お前ら付き合ってるのか？」

カケル・シズク「「えっ！」」

シドウの突然の質問に2人は驚いた。

暁「遠距離恋愛とはカケル……やるな。」

シドウが感心しながら言っていると……

カケル「シズクはただの幼馴染みです。」

カケルは否定したらが

シズク「私とカケルはそんな／／／／／／／／／／／／」

シズクは顔を真っ赤にしていた。

シドウ「……カケルがんばれよ。」

カケル「違いますよ！すまんシズクかけ直すから。」

カケルは電話を切ると立ち上がった。

暁「どこか行くのか？」

カケル「屋上で電話してきます。」

暁「恋人にか？」

カケル「恋人じゃないです！」

カケルは屋上に上がって言った。

シドウ「……暇だ。」

スバル達が来たのはこの3分後である。

～病院（屋上）～

部屋を出て２０分後…

シズク「カケル……戻ってこれないの？」

カケル「新しいＰＧＭの開発に必要なデータを貰うために日本の遊撃隊に参加したから無理だよ。」

シズク「私…1人で不安だよ。」

カケル「シズクは臨時遊撃隊メンバーなんだからこれ以上作戦に参加する必要は無いよ。」

正式な遊撃隊メンバーは日本に入る8人だけで外国の遊撃隊メンバーは緊急時のみ協力してもらう臨時メンバーとなっている。

シズク「でも……せっかくカケルが……」

カチャ

カケル「！誰か来たみたいだからを切るね。」

シズク「切っちゃうの？」

シズクは寂しそうだった。

カケル「シズク専用の新しいＰＧＭも作ったから後で送るね。」

カケルはそのまま電話を切りハンターＶＧをしたまった。

スバル「カケル君お見舞いに来たよ。」

ツカサ「動いて大丈夫？」

ジャック「元気そうでよかったぜ。」

ゴン太「いろいろ持ってきたぜ?」

カケル「みんなありがとう。来てくれて嬉しいよ。」

スバル達はカケルといろいろ話た後お見舞いの品を渡した。

カケルへのお見舞いの品は

スバル…宇宙の魅力（本）

ツカサ…花束（シドウと違う種類）

ジャック…お菓子の詰め合わせ

ゴン太…牛丼（レトルト）

カケル「ゴン太君……何で牛丼なの?」

ゴン太「牛丼はうまいからな元気になるぞ。」

ゴン太は笑っていた。

数分後……

カケル「じゃあねみんな。」

スバル達はカケルに別れを告げ帰って行った。

カケル「……病院に電子レンジ無いんだけどな……どうしよう。」

カケルはレトルトを見ながら考えていた。

お見舞い２（後書き）

次からは学校生活について書きたいと思います。

久しぶりの学校（前書き）

言い忘れてましたがシズクの細かな説明はしっかり登場してからしようと思います。

みなさまが面白いと思えるスバミソが書けるか不安です。

久しぶりの学校

ネットナビとの戦いから1週間後……

～スバルの家～

ウォーロック『スバル！起きろ！朝だぞ！』

スバル「うん……」

スバルはウォーロックに起こされて起きようとしたが……

ミソラ「……」

隣で寝ていたミソラがしっかりとスバルを抱き締めていたので動けなかった。

スバル「ミソラちゃん勝手にベットに入らないでよ～」

ミソラは最近、スバルが寝ている間にベットに入り込んでいた。

ミソラ「……」

スバル「……ミソラちゃん起きてるでしょ。」

ミソラ「何でわかったの？」

スバル「勘かな……それより学校に行くから離してよ。」

ミソラ「あっ！私も今日から学校だった！」

ミソラはあわてて部屋に戻って行った。

スバル「……ミソラちゃん学校なんだ。」

スバルはそんことを呟きながら着替えて1階に降りていった。

数十分後

スバル・ミソラ「「行ってきます。」」

茜・大吾「「行ってらっしゃい。」」

スバルとミソラは茜と大吾に見送られて家を出た。

スバル「ミソラちゃん、よく1週間も休みとれたね。」

スバルは疑問に思った事を聞いてみた。

ミソラ「事務所の方には言ったんだけど出来るだけ仕事を音楽関係だけにして学校に行ける時間を増やして貰ったの。」

スバル「どうして？」

ミソラ「学校に行かないと勉強について行けないし〔スバル君と一緒に居たいし／／／／／／〕」

ミソラは顔が真っ赤になった。

スバル「最後の方がよく聞こえなかったんだけど……？」

ミソラ「気にしないで／／」

ミソラは顔を真っ赤にしたまま誤魔化した。

スバル「？……つまり勉強に力を入れるために学校に行ける時間を増やしたの？」

ミソラ「うん。だからこの休みが終わっても毎日仕事に追われることは無いの♪」

ミソラは嬉しそうだった。

このあとも2人は楽しそうに学校に向かっが……学校まであと１００メートルのところでスバルの足が止まった。

ミソラ「どうしたの？」

急に止まったスバルにミソラは問いかけた。

スバル「ミソラちゃん……約束して欲しいことがあるんだけど……」

ミソラ「？」

スバル「僕達が付き合っていることを誰にも言わないこと……わかった？」

ミソラ「どうして？スバル君……私のこと嫌いなの？」

ミソラは涙目になっていた。

スバル「違うよ。付き合っていることがばれたらミソラちゃんの仕事に影響が出るかも知れないでしょ。僕のせいでミソラちゃんに迷惑かけたく無いんだ。」

ミソラ「スバル君／／／／」

スバル（委員長に何言われるかわからないし……）

スバルの本音はこっちだった。

ミソラ「わかった……けど……」

スバル「？」

ミソラ「スバル君とならスキャンダルになってもいいよ♪」

スバル「えっ／／／／／／／／」

ミソラの言葉にスバルの顔が真っ赤になった。

ミソラ「早く行かないと遅刻しちゃうよ。」

そう言うとミソラは学校に走って行った。

スバル「あっ……待って～」

スバルはミソラを追いかけて行った。

～教室～

スバルが教室に入ると久しぶりに学校に来たミソラに人が集まっていた。

スバル（アイドルが久しぶりに学校に来たらこうなるよね。）

スバルはそんなことを考えながら席について先生が来るのを待った

……

時間がたち
５時間目……

今日重大な発表が行われようとしていた。

育田「白金頼むぞ。」

委員長「はい。」

返事を聞くと先生は教室から出ていった。

委員長が教卓の前に立った。

委員長「クラスのみんなに発表があります。」

クラスのみんなが発表の内容を知らなかった。

委員長「実は去年行った劇が好評だったので今年もやることになったの。」

委員長の発表にクラス全員が驚き（知らない人を除く）騒ぎ始めた。

カケル「ねぇ、ジャック君去年の劇は何やったの？」

ジャック「俺が転校してくる前の事だからわからね……ツカサ、去年はどんな劇やったんだ？」

ツカサ「委員長が作ったロックマンが主人公のお話だよ。」

ジャック「じゃあ去年の主人公はスバルだったのか？」

前の席のスバルに聞いてみると……

スバル「違うよ。その頃は正体がばれてなかったし学校にも通い始めた頃だったから余り物の木の役だったよ。」

ミソラ「木てスバル君…」

ミソラは少し笑っていた。

ツカサ「でもスバル君は休んだ僕の変わりに主人公役をやったんでしょ。」

カケル「じゃあ主人公はツカサ君だったんだ。」

こんな感じて楽しく話していると……

委員長「うるさいわよ！」

全員【……】

委員長が怒鳴り教室は静まりかえった。

委員長「これから何の劇をやるか決めるわよ。１人１人発表してもらうわよオリジナルでもいいからね。そのあと投票で決めるから……」

そう言うと前の席の人から指されて発表していった。

クラスの人数は１８人

～～～（教卓）～～～

女　キ　女　男　女　男

ゴ　委　男　女　ス　ミ

女　男　女　ツ　カ　ジ

右上から

女1「え…白雪姫かな。」

キザマロ「え～ドンブラー湖のドッシーを探せです。」

女2「赤ずきんかな」

男1「何でもい…！（ガタガタ）桃太郎かな。」

何でもいいと言おうとしたら委員長ににらまれ適当に行ってしまった。

女3「ちょっと思いつかないな……」

委員長「別にいいわよ。」

男全員【（理不尽だ～～）】

男子全員の心の声が響いた。

男2「きょ、去年見たいにロックマンで良いんじゃないか。」

ゴン太「牛丼クエスト。」

男3「ミソラちゃんがヒロインなら何でもいい。」

男全員【ばか…死ぬぞ！】

委員長の攻撃が来るかと男子全員（男子3を除く）が思ったが何もなかった。

女4「かぐや姫かな。」

スバル「僕もミソラちゃんかヒ（ピュン）…えっ。」

ジャック（危ね～）

カケル（……）

スバルが言っている最中にチョークが凄いスピードで頬をかすめてジャックの机に直撃し砕け散った。

みんなスバルの発表するのを見ていたのでスバルとジャックとカケ

ルしか誰が投げたのか見えなかった。

委員長「どうしたの？」

優しく問いかける委員長だが背中からは黒いオーラが見えた。

スバル「鶴の恩返しでいいです。」

ミソラ「私はロックマンがいいな♪」

女5「長靴を履いた猫。」

男4「浦島太郎かな…」

女6「シンデレラがいい。」

ツカサ「ロックマンがいいな……」

カケル「ロックマンで。」

ジャック「ロックマンで。」

ツカサは楽しそうに言っていたがカケルとジャックは何かにおびえるように言っていた。

このあと紙に今出た作品の中でやりたい作品を書いて提出した……

久しぶりの学校（後書き）

みんなで劇をすることにしてみました。

個人的にはお話は

ロックマン＋ミソラヒロイン＋α（童話）

にしようと思ってます。

どうしようかな～～

劇の役は？（前書き）

委員長「作者さん……台本書いてくれない？」

作者「？今回も委員長が台本を書くんじゃないの？」

委員長「私は忙しいし本番まで2週間しかないから今回はあなたが書くのよ！」

作者「そんな……」

委員長「ゼニーは払うから道具の準備もお願いね。1日で準備しなさいよ！」

作者「1日てそんな無茶な……」

委員長「私がやれと言ったらやるのよ！」

作者「……はい。」

委員長は返事を聞くと帰っていった。

作者（悪役にしてやる…）

作者はそんなことを考えていた。

劇の役は？

数分後……

委員長「決まったわよ…」

委員長は何だか暗くなっていた……

ブラックボードに書いてあった題名と数が書かれていた。

白雪姫……4

ミソラちゃんがヒロイン……6

ロックマン……6

赤ずきん……1

シンデレラ……1

となった。

ゴン太「これってどうなるんだ？」

キザマロ「つまりロックマンが主人公でヒロインはミソラちゃんと言うことです。（いいな…スバル君。）」

ミソラ（やった～♪）

心の中でミソラはとても喜んだ。

委員長「でもミソラちゃんは仕事が忙しいからヒロインは無理じゃないかしら。」

委員長はミソラがヒロインは難しいと言い始めた（ミソラをロックマン（スバル）のヒロインにしたくないため）。

ミソラ「大丈夫だよルナちゃん。発表会の日付を教えてくれればその日のスケジュールを開けとくから問題ないよ。」

委員長「でも練習にあまり参加できないミソラちゃんには厳しいと思うんだけど……」

ミソラ「確かにそうかも……」

委員長（ヒロインは貰ったわ。）

委員長は説得が成功したと思ったがこの行動が裏目に出ることになる……

悲しそうな顔をしていたミソラにスバルは助け船を出した。

スバル「だったら劇を白雪姫にすれば良いんじゃないかな?白雪姫の役だったら台詞も少ないだろうし……」

ミソラ「!スバル君ナイスアイディアだよ。ルナちゃんそうすればいいよ。」

委員長「それじゃロックマン様が出ないじゃないの!」

委員長が怒っていると

ゴン太「だったらよ白雪姫にロックマンを出せば良いんじゃねーか?」

ほぼ全員【それだ!】

一部の人を除いてみんなの声が重なった。

委員長「ゴン太!良い考えだわ!」

委員長がゴン太をほめていると……

ジャック「台本や道具はどうするんだ？」

ジャックは疑問に思い質問した。

委員長「その事なら大丈夫。作者に頼んであるので明日には台本と衣装と道具は届くわ。」

委員長以外全員【えっ！】

委員長が作者を脅している事を知らなかったようだ。

委員長は手に持った紙を読み始めた。

委員長「役は作者が決めたようね……なにこれ！」

委員長は自分の役が気に入らなかったようだ。

役メモ

王子様…双葉ツカサ

白雪姫…響ミソラ

ロックマン…星河スバル

悪い魔女…白金ルナ

語り手…女子１

敵…牛島ゴン太

魔法の鏡…女子２

小人…最小院キザマロ

小人…男子１～４

兵士…ジャック

リンゴを届ける人…神風カケル

裏方…女子３～６

となっていた。

このあと委員長が持っていた紙をみんな見て自分の役を知った。

スバル（ロックマンて何やるの？）

ミソラ（スバル君が王子様がよかったな…）

キザマロ（小人……背で決めてないよね……）

ゴン太（ロックマンと戦うのか？）

委員長（何で私が悪い魔女なのよ！）

ツカサ（また主人公か…）

ジャック（兵士て誰の？）

カケル（リンゴを届ける人……それだけ？）

みんないろいろな事を考えていた。

劇の役は？（後書き）

残念なお知らせ

今回のお話は考えるのに時間がかかり間に合いませんでした。

２８日で連続投稿に失敗しました……残念です。

これからもがんばって書いて行くのでよろしくお願いします。

練習（前書き）

青い光です。

書いてて思ったのですが日常て書くのが難しいですね全然面白いのが書けません……

日常のお話は戦いの間に入れようと思い考えていますが面白い話が思い付きません……

今まで読んでくださったみなさまどのような話を書いて欲しいですか？

どんな内容でもいいのでアイディアを募集します。

ウォーロックがいつも何をやっているのか、シドウとクインティアのお話、スバルとミソラの危ないお話など何でもいいのでアイディアをください

お願いします。

練習

このあと五時間目も終わり練習は2日後の放課後からとなった。

～スバルの部屋～

ミソラ「スバル君ここ教えて。」

スバル「ここは……」

学校から帰ってきた2人は今日出た宿題（算数）をやっていた。

ミソラ「それにしてもスバル君が王子様がよかったな～～」

スバル「役は決まってるから仕方ないよ。」

ミソラ「白雪姫て事はキスがあるかも知れないよ。」

スバル「！……あったとしてもキスのふりだよ……多分。」

スバルが不安そうな顔をしているとミソラがスバルに抱きついた。

スバル「ミソラちゃん？／／／／／／」

ミソラ「私はスバル君としかキスしないから心配しないで……」

スバル「……うん」

スバルもミソラを抱き締めていた……

ウォーロック（……バカップルて奴だな……）

ハープ（嬉しそうねミソラ♪）

ハンターＶＧの中にいたウォーロックとハープはこんなことを考えていた……

２日後の放課後……

～体育館～

放課後の体育館にクラスのみんなが集まっていた。

委員長「それじゃあ練習始めるわよ……」

昨日の内に台本と道具、衣装が届いたため台本と照らし合わせながら練習は始まった。（衣装は着ていません。）

委員長は台本を読んだためか何だか暗かった。

昨日の内に台本をみんな読んでいたので練習はすぐに始まった。

ゴン太「スバル、ここはどうするんだ？」

スバル「思いっきり戦ったら体育館が壊れちゃうよね…」

台本には思いっきり戦えと書いて合った。

ゴン太「炎で攻撃したら火事になるしな……」

スバル「やっぱり近接武器で戦った方がいいね。」

ゴン太「そうだな……」

こんな感じで自分の役について考える人もいれば……

カケル「ジャック……本当にリンゴを渡すだけだったよ……」

ジャック「良いじゃねーか俺なんか台詞も少ないし…すぐ死ぬぜ…」

体育館の隅で暗くなっている人もいた。

ツカサ「嬉しそうね響さん。」

ミソラ「そうかな♪」

台本を読んだミソラはとても嬉しそうだった。

ツカサ「台本を読む限り主人公は王子様じゃなくてロックマンだったね。」

ミソラ「うん♪」

この会話を読んで白雪姫の主人公て王子様か白雪姫じゃ無いの？と

思う人もいるかも知れませんが台本では明らかにロックマンが主人公だった。

とても不思議なお話が始まろうとしていた……

本番当日……

～体育館～

体育館には多くの生徒が集まっていた。

スバル（こんな話で大丈夫かな……）

スバルの不安をよそに本番が始まる……

練習（後書き）

劇が終わり次第戦いです。
戦いになったらとうとうあのキャラクターの登場します。

白雪姫　前半（前書き）

キャラクターが普段言わないようなセリフを言うのでそこら辺を楽しんでください。

白雪姫　前半

白雪姫の始まり始まり……

語り手「むかしむかしあるところに世界1美しい魔女がいました。」

幕が開きながら語り手の声が聞こえ黒い服に身を包んだ委員長と鎧に身を包んだジャックが舞台に立っていた。（セットは古い城の中）

委員長「今日もやるわよ。」

ジャック「はい。」

ジャックは箱から魔法の鏡を取り出した。

語り手「魔女は自分の美しさが世界1であることを証明できる何でも答えてくれる魔法の鏡を持っていました。」

委員長「鏡よ鏡、世界で1番美しいのは誰なの……今回も私よね！」

委員長は凄い勢いで鏡に問い詰めた。

魔法の鏡「……申し訳ありませんがあなた様は世界で2番目になりました。世界で1番美しいのは隣の国に住んでいる白雪姫でございます……」

委員長「なっ…何ですって!!」

語り手「魔女は自分より美しい者が現れたことを知りとても怒りました。」

ジャック「落ち着いてください。」

委員長「うるさい!」

委員長はジャックに手をかざした。

ジャック〔トランスコード!ジャック・コーヴァス!〕

ジャックは電波変換して人には見えなくなった……

観客「消えた!どうやってきえたんだ?」

突然ジャックが消えたため観客がさわめいた。

語り手「怒った魔女は部下の兵士を消してしまいました。」

委員長「私が世界1番美しくなるには白雪姫が邪魔なら消してやるわ……」

委員長「そこのお前！」

カケル「はい。」

カケルが委員長の前に舞台袖から出てきた。

委員長「この私が作ったこの毒リンゴを隣の国に住んでいる白雪姫に届けて来るのよ。」

そう言うと委員長はリンゴが沢山入ったバスケットを渡した。

カケル「わかりました。」

語り手「兵士は答えるとバスケットを受け取り白雪姫が住む隣の国に向かいました。」

委員長「白雪姫が死ねば私がまた世界で1番美しくなれるわ。」

語り手「魔女は笑いながら白雪姫が死ぬのを待った……」

舞台が暗くなりセットを動かした。

再び明るくなるとセットは町になりミソラが1人立っていた。

カケル「すみません。」

カケルは舞台袖からミソラの元に走ってきた。

ミソラ「何でしょうか?」

カケル「白雪姫と言う人を探しているのですが知りませんか?」

ミソラ「私が白雪姫ですけど……」

カケル「あなたでしたか…あなたにお届け物ですよ。」

カケルはミソラにバスケットを渡した。

ミソラ「ありがとう……一体誰からなの？…あれ？」

目の前にいたはずのカケルは（電波変換を使い）いなくなっていた。

ミソラ「いない……どこに行ったんだろう？」

ミソラはバスケットの中に合ったリンゴを1つ手に取った。

ミソラ「せっかく頂いたんだし1つ貰おうかな…」

ミソラはリンゴを食べようと口に近づけた……

スバル「食べるな！」

ミソラ「！」

突然の声が聞こえたあとミソラの前に光と共にロックマンが現れた。

スバル「そのリンゴは食べない方がいい……毒が入っている。」

ミソラ「えっ……あなたは誰？」

スバル「僕の名前はロックマン。今君にリンゴを渡したのは魔女の手先だ…」

ミソラ「どうしてそんなことがわかるの?」

ロックマンはバスケットの中にあるリンゴを1つ手に取った。

ロックマン「わかるさ……」

手に持っていたリンゴを握り潰しリンゴの汁を近くの足元に咲いていたお花にかけた。

舞台が一瞬暗くなりまた明るくなると……

語り手「さっきまで元気に咲いていた花はリンゴの毒で枯れてしまいました。」

ミソラ「本当に毒リンゴだったんだ……」

手に持っていたリンゴをバスケットに戻した。

スバル「君は魔女に命を狙われている……君の身を守るために一緒に来て欲しい。」

ロックマンはミソラに手を差し出した。

ミソラ「1つ教えて……私はどうして命を狙われているの？」

スバル「……あなたが美しいから。」

ミソラ「えっ？／／／／／／」

ミソラは台本通りの反応をしたがスバルが普段言わないようなセリフに顔が赤くなっていた。

スバル「……なぜあなたが狙われているかは移動しながら細かく話しますので……」

ミソラ「……はい。」

ミソラは少し迷ったがロックマンの手を取っり舞台袖に走っていった。

語り手「2人は町の外れにある森に向かっていった。」

舞台から明かりが消えセットを動かした。

再び古い城の中のセット…

委員長「鏡よ鏡、世界で1番美しいのは誰？」

魔法の鏡「白雪姫です。」

委員長「……あなたはリンゴを渡すのに失敗したようね……」

カケル「確かにリンゴは渡したのですが……」

委員長「うるさい！」

委員長はカケルに手をかざすとカケルも消えてしまった。

委員長「こうなったら……オックス・ファイア！」

委員長の前に光と共にオックス・ファイアが現れた。

ゴン太「お呼びでしょうか……」

委員長「今度はあなたを連れて白雪姫を殺しに行くわ……準備ができしだい出発よ！」

ゴン太「ブルルルルルッ…わかりました……」

語り手「魔女はオックス・ファイアを連れて白雪姫を殺すために動き始めた……果たしてどうなる！……後半に続く！」

白雪姫　前半（後書き）

思ったより長くなり前半、後半で分けました。

毒リンゴと証明する方法を考えるのに時間がかかりました。

ツカサをどこで出すか……迷う……

白雪姫　後半（前書き）

後半の方がかなり長くなりました。

白雪姫　後半

舞台が明かるくなりセットが森と一軒の家に変わった。

語り手「ロックマンと白雪姫は時間を掛けて国の外れにある森にやって来ました。」

ミソラ「ここが目的地？」

ロックマン「うん。ここなら魔女でも君を簡単には見つけられない。」

コンコン

ロックマンは森の中に立っていた家のドアを叩いた。

キザマロ「は～い……ロックマンどうかしたんですか？」

ドアが開きキザマロが現れると残りの小人も出てきた。

ロックマン「久しぶりだね小人達……実はお願いがあってね。」

語り手「ロックマンは小人達に白雪姫が狙われていることを話、白

雪姫を魔女を退治するまで預かって欲しいと話した。」

キザマロ「わかりました。白雪姫は僕達に任せてロックマンは魔女を退治をがんばってください。」

スバル「白雪姫……話した通りだ、君は魔女を退治するまでここでこのから離れないでね。」

ミソラ「……あなたはまた来てくれる……」

悲しげにミソラは聞いた。

スバル「……また来るさ……」

ロックマンは言い残すと光となって去っていった。

ミソラ「……ロックマン……」

語り手「白雪姫の声が静かに響いていた。」

再び舞台が暗くなりセットが動き明るくなると燃える町のセットになりオックス・ファイアとツカサが出ていた。

ゴン太「ブルルルルッ！王子ひきいる最強の部隊はこの程度か。」

ツカサ「強い……」

片膝を付きながらツカサは呟いた。

委員長「居ない……白雪姫が居ないわ……これじゃあ町を襲った意味がないわ……」

舞台袖から委員長が出てきた。

ゴン太「どうしますか？」

委員長「もう1度白雪姫を探さなくてわ……オックス・ファイア！邪魔な王子は殺してしまいなさい。」

ゴン太「ブルルルルッ！わかりました。」

オックス・ファイアはツカサに拳を振るったが…

そこにはツカサがいなかった。

ゴン太「ど、どこに行った？」

委員長「……！オックス・ファイア後ろよ。」

ゴン太「！」

2人の後ろにはツカサとロックマンがいた。

ツカサ「ロックマン……助かったよ。」

スバル「王子が無事で何よりです。」

委員長「くっ……ここでロックマンと戦うのは……オックス・ファイア引くわよ。」

オックス・ファイアは委員長連れ光と共に去っていった……

ツカサ「ぐっ……」

ツカサは突然膝を付いた。

スバル「！大丈夫ですか王子。」

ロックマンはツカサを支えた。

ツカサ「僕は大丈夫……何とかして魔女を捕えなくてわ……」

ロックマン「今度現れたら僕が必ず捕まえて見せます。」

ツカサ「ありがとう…」

舞台が暗くなり古い城の中のセットに変わった。

語り手「町の襲撃から数日たったが魔女は白雪姫の居場所を見つけられなかった。」

委員長「どうすれば白雪姫の居場所を見つけられるの?」

委員長は舞台を行ったり来たりしていた。

ゴン太「誰かが居場所を教えてくれないものですかね。」

委員長「誰が白雪姫の居場所を知っているかわからないわ……教えて……それよ。」

委員長は近くに置いてあった魔法の鏡を手に取った。

委員長「鏡よ鏡、白雪姫の居場所を教えて。」

魔法の鏡「白雪姫は隣の国の外れにある森にいます。」

委員長「これで白雪姫を殺して私か世界で1番美しくなれるわ……
…オックス・ファイア行くわよ！」

ゴン太「はい。」

2人は光と共に消えた。

語り手「オックス・ファイアと委員長は白雪姫のいる森に向かっていった…」

舞台が暗くなりセットが森に変わり明るくなった。

語り手「白雪姫はロックマンと別れたあと小人達と協力しながら楽しく暮らしていました。」

ゴン太「ブルルルルッ！」

委員長「見つけたわよ！」

ミソラ「！」

語り手「突然の空から声が聞こえ白雪姫の前に魔女とオックス・ファイアが現れました。」

委員長「あなたには死んで貰うわよ！」

小人１「白雪姫から離れろ！」
白雪姫の危機に小人達が武器を持って白雪姫の前に立った。

小人２「逃げてください。」

小人３「ロックマンが来るまで耐えるんだ！」

小人４「白雪姫に手は出させない。」

キザマロ「僕達だって戦えるんだ！」

ゴン太「……バトルカード！グレートアックス！」

小人達【うわぁー】

オックス・ファイアの豪快なスイングに小人達は舞台袖まで吹き飛んでしまった……

ミソラ「みんな……」

ゴン太「ブルルルルッ！お前の命……貰った！」

オックス・ファイアはグレートアックスを振り下ろしたが……

ガキン！

グレートアックスは止められていた……

ミソラ「信じてた……来てくれるって。」

ロックマンのソードによって……

ロックマン「これ以上は好きにはさせない！」

オックス・ファイアは後ろに下がりグレートアックスを再び構えた。

ゴン太「お前らごとき我が力で殺してくれる！」

スバル「白雪姫はやらせない！」

2人は激しい斬り合いになり……

バキン！

ゴン太「……バカな…」

スバル「戦いは力だけじゃない……」

グレートアックスが折れロックマンのソードはオックス・ファイアを斬っていた……

ゴン太「ぐぉぉぉぉ…」

ゴン太は周波数を変え消えていった……

オックス・ファイアが消えるとソードを委員長に向けた。

ロックマン「魔女これまでだ……」

委員長「くっ……（何で私が捕まるのよ……）」

心の中で委員長は愚痴を言っていた。

語り手「このあと駆け付けた王子様と兵士達に捕らえられた魔女は城にて町の襲撃の容疑で処刑されました。」

次の話でエピローグです。

白雪姫　後半（後書き）

エピローグに続きます。

場所……（前書き）

感想・アドバイス・一言をお待ちしてます。

書いたことない人でも大歓迎です。

場所……

舞台が暗くなり再び明るくなるとセットが草原になりロックマンとミソラがいた。

スバル「これであなたの命を狙うものはいなくなりました……王子とお幸せに。」

ミソラ「……」

語り手「王子は魔女の身柄を受け取りに来たときに白雪姫に一目惚れをして白雪姫に告白をしていました。このとき白雪姫は突然の出来事にしっかりとした返答をしていませんでした。」

スバル「白雪姫、僕はこれで……」

ロックマンは背を向けて達去ろうとすると

ミソラ「待って！」

スバル「！」

ミソラはロックマンに抱きついた。

ミソラ「私は王子様とよりあなたと一緒にいたい……行かないで……」

ミソラは泣いていた（演技です。）

ロックマンもミソラを抱き締めて言った。

スバル「……ごめんそれはできない。」

ミソラ「どうして……」

ロックマンは抱き締めるのをやめてミソラの顔を見た。

スバル「僕はこれからも多くの人を救うために行かなくては……」

ミソラ「また……会いに来てくれる？」

スバル「もちろん。」

言葉を聞くとミソラがロックマンの首の後ろに手を回した。

ミソラ「最後にこのくらいいいよね……」

２人はの唇が近づくと舞台の暗くなった……

語り手「このあとロックマンは多くの人を救うために飛んでいき、白雪姫は王子様の告白を断り大切な人の帰りを待った……ロックマンの帰りを……ロックマンが来てくれることを信じて……」

このあと幕がゆっくりと下がり体育館は拍手に包まれた。

幕が下がりきり舞台に明るくなりロックマンはミソラから離れ電波変換を解除した。

このときスバルとミソラの顔が真っ赤だった。

スバル〔ミソラちゃん場所を考えようよ／／／／／〕

ミソラ〔だってお話通りにならないでしょ／／／／／／〕

スバル〔演技なんだからしなくても……〕

小声で話しているとみんながよってきた。

委員長〔あなた達もっと離れなさいよ！〕

委員長は2人の間に入った。

ツカサ「スバル君いい演技だったよ。

」

ゴン太「ミソラちゃんの演技を間近で見れて感動だぜ。」

キザマロ「2人共顔が赤いですが大丈夫ですか?」

カケル「2人共抱きつくのが恥ずかしかったからじゃないの?」

（一部を除く）男性達【（羨ましい……）】

ジャック「そんなことより早くかだつけようぜ……」

ジャックの一言でセットをかだつけ始めた……

なぜスバルとミソラの顔が真っ赤だったのは数分前に真っ暗な舞台で起きた出来事……

～回想～

舞台から明かりが消えて暗くなり語り手が喋り始めてすぐ……

スバル〔無事に終わったね。〕

ミソラ〔うん♪〕

スバルとミソラは至近距離で話していた。

ミソラ〔スバル君♪／／／／〕

スバル〔……！／／〕

2人は見つめあっているとミソラが本当にキスして来た。

スバルはパニックになりそうになったが暗闇とは言え舞台の上なので動けなかった。

2人のキスは舞台の幕が下りきるまで続いた……

学校も終わり夜……

～スバルの部屋～

スバル「ミソラちゃん真っ暗だったからよかったけど学校でもうあんなことしちゃダメだよ……」

ミソラ「スバル君は抵抗しなかったよ……」

スバル「それはミソラちゃんがやって来たから……」

少しの沈黙……

ミソラ「……わかったもうしないよ……」

そう言うとミソラはスバルに抱きついた。

ミソラ「学校でわね♪」

スバル「えっ……ん！」

ミソラは再びスバルにキスをした。

スバルは顔を赤くしたがミソラを抱き締めていた……

数分後…

2人はキスをやめた…

ミソラ「／／／

スバル「本当にしないでよ／／／／／／／／」

ミソラ「うん♪／／／／／／／／」

スバルは恥ずかしそうだったがミソラは嬉しそうに言っていた……

……

場所……（後書き）

後半にスバミソを入れてみたのですが書くのが難しいですね……

次回からは敵が再び動き始めます。

技名を調べたり戦いの準備しなくては……

戦力……（前書き）

青い光です。

最近は更新する時間がバラバラになっていてすいません。

夏休みになったのに最近忙しくて大変ですががんばって書いていくので応援よろしくお願いします。

戦力……

スバル達の劇の本番の3日前……

～月内部データベース前～

R「みんな集まって！」

その声に6体のネットナビが集まった（ブルースの修復は終わっています）。

R「場所がわかったから僕に言われたナビはそこにデータ取りにを向かってもらうよ。」

セレナード「その前になぜデータを取りに行く必要があるのか教えてくれませんか？」

R「戦力が欲しいからさ。今戦っても恐らく人間には勝てない……だから地球を危険に追い込んだ3体…アンドロメダ……ラ・ムー……クリムゾン・ドラゴンの残骸データを集めて復元させようと思ってね。」

カーネル「その3体はデータを集めればすぐに復元できるのか？」

R「いや……3体共大型の電波体で復元には時間がかかるけど復元すれば戦力になるからね。」

ブルース「戦うなら戦力は必要だな……」

サーチマン「確かにそうだな。」

Rの考えにブルースとサーチマンは納得したようだ。

R「わかってくれたかな？それじゃあ誰が行くか言うね……まずセレナードは宇宙ステーション絆……フォルテはメテオGに行ってね。

フォルテ「今度は単独行動なんだな。」

R「この2ヵ所は宇宙にあって邪魔されないしフォルテやセレナードのような強いナビじゃないと危ないからね。2人に任せるよ。」

このあとRは2人にその場所への行き方を伝えた。

R「セレナードの方は問題無いと思うけどフォルテの行くメテオGは粉々に砕けてるからデータを集めるのは大変だと思うけどがんばってね。」

セレナード「わかりました。」

フォルテ「わかった。」

セレナードとフォルテの目的地は地球から離れていて行くまでにとても時間がかかるので先に出発した。

R「じゃあムー大陸に行ってもらうナビを言う前に…データベースアクセス…」

Rが唱えるとデータベースが稼働して4体のネットナビを産み出した。

Rは

胸に扉を着けた茶色のネットナビ
ゲートマン・R

方に丸い装甲を着けた赤いネットナビ
パンク・R

剣道着を身につけたネットナビ
ケンドーマン・R

アメリカンフットボールの防具を身につけたしたネットナビ
フットマン・R

と名前を着けた。

R「ムー大陸にはブルース、サーチマン、ケンドーマンに行って貰うよ。」

ブルース「なぜ3人で行くんだ?前みたいに2人でよかったんじゃないか?」

R「ムー大陸は今地球の海に沈んでるから探すのに時間がかかるから電波人間と遭遇する可能性が高い……ブルースはもう1度酷い損傷をすると直せないだから戦闘になったら2人に任せてブルースは戻ってね。」

ブルース「……わかった。」

このあとRは3人にムー大陸の場所を伝えた。

R「ケンドーマンわからない事が多いかも知れないけど頼むよ。」

Rはそう言いながらケンドーマンに試作プログラムを渡した。

ケンドーマン「任された。」

3人はムー大陸が沈む海に向かっていった。

パンク「……残った俺達は何をするんだ？」

パンクは疑問に思いＲに質問した。

Ｒ「残った５人には３体を復元する場所の確保に行って貰うよ。ここじゃ狭いんでね。」

ゲートマン「具体的にはどこなんだ？」

Ｒ「現在は破棄されたサテライト、ペガサス・レオ・ドラゴンの３基さ。アイリスの能力を使えば人間にバレずにコントロールを制圧できるからね。頼むよアイリス。」

アイリス「はい。」

Ｒは３基のある場所を伝え試作プログラムを持っていない３人にプログラムとある機械を渡した。

フットマン「なんだ？……この機械は？」

Ｒ「ウイルス製造機だよ。データベースにバクからウイルスの作り

方が書いてあってね、ノイズでもウイルスが作れるから作ってみたんだ。」

カーネル「制圧後はサテライトに装置を設置して復元対象が来るまでウイルスを作れと言うことか。」

R「うん。でもウイルスの製造は新人3人に任せるからカーネルとアイリスはコントロールを奪ったら帰ってきてね。」

パンク「ウイルスなんて戦力になるのか?」

R「作ったウイルスは僕達ネットナビの言うことを聞くようになってるから使えると思うよ。」

ゲートマン「この機械はどう使うんだ?」

R「セットすれば勝手にノイズでもバクでも集めて勝手に作るから見張っていればいいよ。みんながんばってね。」

全員【はい。】

5体はサテライトに向かっていった……

R「……カーネル達が戻ったら次の行動に移ろう……」

Rは1人で呟いていた。

戦力……（後書き）

新たなネットナビが登場しました。

この４体は名人と呼ばれるロックマンエグゼに出てきた人のネットナビです。

最近思ったのですがネットナビの人数を書くときに１人か１体で迷います。自分はどちらも使っていますが気にしないで下さい。

メン！ドウ！コテ！（前書き）

アンケート…書いてくれる人募集中……

メン！ドウ！コテ！

3日後……
～海上のウェーブロード～

ブルース「あそこまでウィルスが多いとは……」

サーチマン「思ったより時間がかかってしまった。」

ケンドーマン「全くだ……」

ムー大陸で残骸データを集めていた3人はウェーブロードに集まっていた。

サーチマン「データも手に入ったそろそろ戻……！そこだ！スコープガン！」

サーチマンは突然振り返り技を放った。

当たった先には電波障壁によって守られたブライが立っていた。

ソロ「先制攻撃するつもりたったが先に攻撃されるとはな……」

ケンドーマン「なんだあのバリアーは見たことがない……」

ブルース「あれはたしか電波障壁……盗んだデータにあったな…名はたしかブライ……」

サーチマン「こんな海のど真ん中に現れるとはな……」

ソロ「貴様らがあいつが言ってたネットナビか……ムー大陸から何を集めたか知らんが貴様にやるような物はない……消えろ！ブライナックル！」

敵3体【！！！】

ブライは拳の形をしたエネルギー弾を複数放つが3体はすぐさまバラバラに飛び攻撃を回避しブルースを囲むようにまた集まった。

ケンドーマン「やる気のようだな……」

ケンドーマンは竹刀を構えた。

サーチマン「ブルースはデータを持って先に帰ってくれこいつは2人でやる。」

ブルース「……わかった。」

ブルースはRの言葉を思いだし2人からデータを受け取り月に向かっ……

ソロ「ラプラス、ダンシングブレード！」

ラプラス『……』

ブライの影から現れたウィザードが剣の形になりブルースに向かうが……

ケンドーマン「ドウ！」

ケンドーマンはブルースの前に立ち竹刀を横に振り剣を弾いた。

ケンドーマン「行けブルース！」

ブルース「ああ。」

ブルースは光と共に消えていった。

ソロ「……」

ブライは無言で近くのウェーブロードに刺さった剣を抜き構えた。

サーチマン「俺は援護する頼むぞケンドーマン。」

ケンドーマン「しっかり頼むぞ。」

サーチマンは後方に下がりケンドーマンは竹刀を再び構えた。

ソロ「ムーを荒らすものは俺が許さん！」

サーチマン・ケンドーマンＶＳブライの戦いが始まった。

サーチマン「コウガクメイサイ！」

サーチマンが技を使うと姿が見えなくなった。

ソロ「ラプラスソード！」

ケンドーマン「バトルチップ・バンブーソード！」

ケンドーマンは竹刀の刃を木属性に変え剣を受けとめ競り合いにな

った。

サーチマン「バトルチップ・メガキャノン！」

ソロ「！」

背後から声が聞こえブライの背後にメガキャノンが直撃したが電波障壁で防いだ。

ケンドーマン「……私が木属性の武器にしたかわかるか？」

ソロ「？」

ケンドーマン「攻撃を当てたあとでもすぐ攻撃が出来るからだ！」

ケンドーマンはすり足で下がると竹刀を打ち込んできた。

ケンドーマン「メン！」

ブライは剣で攻撃を防ぐが……

ケンドーマン「コテ！ドウ！メン！メン！ドウ！コテ！コテ！ドウ！コテ！メン！メン！ドウ！メン！ドウ！メン！ドウ！コテ！コテ

！メン！……」

ソロ「ぐっ……」

ケンドーマンが放つが連続攻撃をブライは剣で応戦するが反応仕切れずに少しずつ攻撃が当たっていく…

ソロ（あと2秒……）

ケンドーマン「……コテ！ドウ！コテ！メン！メン！コテ！メン！メ…！」

ソロ「（ここ！）ブライスラッシュ！」

電波障壁が復活してケンドーマンの攻撃止めて隙が出来た瞬間、剣を振りワイドショットの形のエネルギー波を放った。

ケンドーマン「ぐぁ…ぁ…ぁ……ぐっ！」

ケンドーマンは攻撃をくらい後方に吹っ飛んだがすぐに体勢を立て直した。

ソロ「ブライバースト！」

ブライの回りからグランドウェーブに似たエネルギー波が放たれケンドーマンを襲う！

ケンドーマン「バトルチップ・バリア！」

ケンドーマンはバリアを発動し攻撃を防いだ。

ソロ「ブライ……！」

ケンドーマンに続けて攻撃しようとしたとき足下にサーチグレネードが3つほど落ちていた……

ソロ「！」

ブライはすぐに上に飛んだ。

するとサーチグレネードが全て爆発した。

サーチマン「バトルチップ・マグナム！」

サーチマンは空中のブライにピンポイントでマグナムを放つが復活した電波障壁によって防いだ。

普段の戦いならこのあとブライの反撃だが今戦っているのはサーチマンだけではない……

ケンドーマン「バトルチップ・センシャホウ！」

ソロ「！バトルカード・インビ……」

バトルチップが間に合わずに攻撃をもろにくらいブライは後方に吹っ飛んだ。

ソロ「……ぐっ！」

ソロは体勢を立て直し後方のウェーブロードに着地した。

ソロ（消えてる方が厄介だ……）

ケンドーマン「カカリゲイコ！」

ソロ「ブライアーツ！」

2人の突っ込み竹刀と拳が激しくぶつかり合っていた……

メン！ドウ！コテ！（後書き）

さすがのブライも苦戦してますね……

初めて2対1の戦闘を書いたのですがどうでしたか？感想を書いてくれるとありがたいです。

次はもう少しコンビネーションを……

孤高の戦い（前書き）

最近この小説を読み返して見ました。

最初と比べるととても読みやすく一話一話が長くなっていくのを感じました。

皆様のアドバイスが無ければ何の進歩もしなかったと思います。

本当にありがとうございました。

孤高の戦い

数十分後……

3人の激しい戦いは続いていた……

ケンドーマン「バトルチップ・ソード・ワイドソード・ロングソード・プログラムアドバンス・ドリームソード！」

ソロ「ブライブレイク！」

ケンドーマンとブライの技が激しくぶつかり競り合いになった。

ケンドーマン「これを止めるか……」

ソロ「……その程度か？」

ケンドーマン「ふっ…」

ケンドーマンは競り合いをやめて後ろに下がった。

サーチマン「サテライトレイ！」

頭上にサテライトが現れレーザーをブライに発射した。

ソロ「バトルカード・スカルアロー！」

ケンドーマン「ぐっ…」

ブライはレーザーを気にせずにスカルアローをケンドーマンに当てた。

その後レザーがブライに直撃したが電波障壁によって防いだ。

ソロ「（ここからだ……）バトルカード・カウントボム！」

ケンドーマン・サーチマン「「？」」

ケンドーマンとサーチマンはブライの行動を見て疑問に思った。

ブライはカウントボムを出したが足場が無いところに出したため海に向かって落ちていった……

ブライは落としたあと高い位置にあるウェーブロードに移動し始めた。

ケンドーマン「逃がすか……！（動けない……）」

ブライを追いかけようとしたケンドーマンはスカルアローが当たったため動けなくなっていた。

サーチマン「（何を考えている）バトルチップ・サークルガン！」

サーチマンは移動するブライに攻撃するがブライはすぐに横に飛び攻撃を避けた。

ソロ〔時間だ……〕

ブライが呟くと水中で爆発が起きて大量の海水が上空に舞った。

サーチマン「目眩ましか……」

大量の海水がサーチマンとケンドーマンに降り注いだ。

ソロ「違う。」

サーチマン「！」

サーチマンの後ろから声が聞こえサーチマンは振り替え……

ソロ「ブライアーツ・ラプラスソード！」

サーチマン「ぐぁ…なぜ……」

サーチマンは攻撃をくらったためコウガクメイサイのとけて姿を表した。

ソロ「グラウンドブレイクソード！」

ブライは連続で攻撃を放つ。

ケンドーマン「バトルチップ・エリアスチール！」

ブライの技が決まりウェーブロードに穴が空いたがそこには誰もいなかった。

ソロ「……」

ブライが振り向くとケンドーマンとサーチマンがいた。

サーチマン「すまない……助かった。」

ケンドーマン「気にするな……まさか海水をかけて場所を

割り出すとは……」

サーチマンはコウガクメイサイで姿を消していたが海水を被ったため水が体を覆い姿が浮き出たところを攻撃されていた。

ソロ「……もう十分だ。」

サーチマン「……何を言っている？」

ソロ「ココロフォース！」

ココロフォース…始動

カーネルフォース発動！

サーチマン・ケンドーマン「「！」」

ブライは突然光に包まれ光が消えるとそこにはカーネルのコートを身につけて肩に白いアーマーをつけたブライが立っていた。

ソロ「あいつが言っていたネットナビがどれほどの者かと思ったがこの程度か……もう消えろ！ダンシングブレード！」

サーチマンとケンドーマンは左右に飛び攻撃を回避した。

ケンドーマン「姿が変わったぐらいで我々に勝てるか！バトルチップ・ムラマサブレード！」

ケンドーマンの竹刀が刀に変わり今まで受けたダメージが刀の力に加わる。

サーチマン「ケンドーマン援護する突っ込め！メガキャノン×３！プログラムアドバンス・ゼータキャノン！」

サーチマンは後方に下がりながらゼータキャノンを連射した。

ソロ「……」

ブライはゼータキャノンを避けずにくらいながら左手をソードを展開した。

ケンドーマン「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ソロ「ネオスクリーンディバイド！」

２人のソードが激しくぶつかった……

ケンドーマン「……」

ソロ「……やはりこの程度か……」

ケンドーマン「……バカな……ムラマサ…ブレードが……」

ケンドーマンは刀ごと斬られていた……

サーチマン（最大出力のムラマサブレードを折ったのか……）

ケンドーマン「ぐぉぉぉぉぉ……」

ケンドーマンは消滅しデータチップが浮いていたが……

サーチマン「スコープガン！」

サーチマンはケンドーマンのデータチップを破壊した。

サーチマン「取られるぐらいなら破壊しろと言われているんでね。」

サーチマンは武器を構えた。

ソロ「勝てると思っているのか？」

サーチマン「逃げられるとも思えないんでね。バトルチップ・？？

？？」

サーチマンは？？？？を発動した。

サーチマン（ゼータキャノンでは全くダメージを与えられなかった……今度は強力な一撃を決める！）

サーチマンはブライに向かって行った。

孤高の戦い（後書き）

ソロはココロフォースに必要な強い思いを持っていたので貰ってすぐに発動させた事になっています。

次回にはソロの強い思いが何なのか書くつもりです。

最後の方にあった、バトルチップ・？？？？は間違いではありません。カワリミなどの種類を使うと相手にわからないように？？？？と表示されるのでそうしました。

？？？？が何なのかはお楽しみに。

ケンドーマン……エグゼ４で戦う前にあった剣道のコマンドがなかなか出来なくて苦労したな……

ロックマンエグゼ４レッドサンの内容です。

サーチマンの覚悟（前書き）

遅くなりました。

サーチマンの覚悟

少し前…
～月内部データベース前～

ブルース「R大変だ…」

ブルースは無事に月内部に戻っていた。

R「大変だったねブルース電波人間と戦闘になるなんてね……」

ブルース「知っていたか……」

R「君達が見たものは全て僕に見えるようになってるからね……
…」

ブルース「集めたデータの方はどうする?」

R「今カーネル達がサテライトのコントロールを奪いに行っている
からそこに向かって。場所を教えるから。」

Rはブルースにサテライトの場所を教えた。

R「今カーネル達は1つ目のドラゴンを制圧が終わりそうだからそこに向かってね。」

ブルース「わかった。」

R「待って復元作業に必要なナビを連れてって……データベースアクセス！」

Rが唱えるとデータベースから10体の市販のナビ（ノーマルナビなど）を産み出した。

R「まず名前を……！」

Rは突然喋るのをやめた。

ブルース「どうかしたのか？」

R「ケンドーマンが殺られた……サーチマンも危ないな……」

ブルース「何……」

R（ケンドーマンはともかくサーチマンを追い込むとは……あの

力詳しく調べた方がいいな。）

世界各地から奪ったデータにはココロフォースの事は詳しく載っていなかった（ココロフォースの詳しいデータはニホンにしかない）。

ブルース「サーチマンは大丈夫なのか？」

R「いやサーチマンはあの状態だと回収は無理だね。」

ブルース「どうするんだ？」

R「サーチマンには覚悟があるみたいだから見守るとするよ。」

ブルース「？」

R「ブルース、１番から１０番を頼むよ。」

ブルース「わかった。」

ブルースは１番から１０番のネットナビを連れてドラゴンに向かって行った。

R「サーチマン……その覚悟見せて貰うよ。」

Rは1人呟いていた。

サーチマン視点……

ソロ「インダクトミサイル！」

サーチマン「バトルチップ・バルカン×3プログラムアドバンス・ムゲンバルカン！」

サーチマンはブライが打ち上げたミサイルを片っ端から撃ち落とした。

サーチマン「！」

サーチマンはブライのダンシングブレードが近づいていることに気づき横に飛んだ。

移動したためムゲンバルカンが消えた。

サーチマン「（あの剣…オートで攻撃してくるのか……）バトルチップ・マークキャノン！」

空中でサーチマンはブライをロックオンしてキャノンを放つが……

ソロ「くだらん……ムーガーディアン！」

ブライはキャノンを避けてるとウェーブロード上に大量のガーディアンを出した。（カーネルのカーネルアーミーがムーのガーディアンになった技です。）

サーチマン「なんだ……」

ソロ「撃て！」

ソロが言うとガーディアン達が主砲のビームを発射した（カーネルアーミーぐらいの大きさです）。

サーチマン「！バトルチップ・ドリームオーラ！」

サーチマンは大量のビームを防ぎながら着地し……

ソロ「スクリーンディバイド！」

サーチマン（！ドリームオーラを意図も簡単に…）

サーチマンが着地する瞬間に攻撃しドリームオーラはくの字に斬れ消滅した。

サーチマン「またか…」

サーチマンはまた後ろから剣が近づいて来たのでまた横に避けたが剣はそのまま近づいていたブライの右手に戻りブライは剣を振り下ろした。

ソロ「クロスロードブライブレイク！」

サーチマン「ぐぁぁぁぁ……「ボン！」」

シュ！

ブライの頭上から手裏剣が飛んで当たるが電波障壁で防いだ。

サーチマン「（今しかない！）バトルチップ・スプレットガン×３・プログラムアドバンス・ハイパーバースト！」

サーチマンはブライの後方に回り込みプログラムアドバンスで攻撃したが……

ソロ「アスパイアブレイク！」

技を出しきる前にブライが消えたため攻撃は外れた。

ソロ「遅いな……」

サーチマン「く…そ…」

サーチマンは高速で斬られブライは後ろに立っていた。

サーチマンの消滅が始まった。

サーチマン「（データは取られる訳にはいかない……）サーチグレネード……」

ソロ「まだやるのか？」

サーチマン「いや……これは……自決ようだ……」

サーチマンはサーチグレネードを胸に押し当てた。

サーチマン〔すまない……R……〕

数秒後グレネードは爆発しサーチマンは消滅した……データチップと共に……

ソロ「……いつまで隠れてるんだ。」

暁「……バレてたか。」

上空のウェーブロードからアシッド・エースが降りてきた。

ソロ「何のようだ……」

暁「ただ強いノイズが発生した地点に行ったらお前がいただけだよ。しかしその姿……ココロフォースを発動させてるとはな。」

ソロ「……お前に渡されてすぐに発動した……俺の絆を否定する思いに反応したそうだ。」

暁「そうか……ネットナビはここで何をやっていたんだ？」

ソロ「知らん。」

ブライはそう言うと光となって去っていった。

暁「……もう少し協力的になってくれないかな……」

アシッド『シドウそれは無理だと思いますよ。』

暁「そうかな……」

２人はそんなことを話ながらＷＡＸＡに戻って行った。

サーチマンの覚悟（後書き）

？？？はカワリミでした……すいません。
ホントはシラハドリにしたかったのですが上手く書けなかったのでカワリミにしました。

戦いは書くのが難しいですね……

戦いも終わったので次は日常を書きたいですね……

当たり前？（前書き）

青い光です。

これまで
感想・アドバイス・一言を書いてくださった皆様本当にありがとうございます。

感想・アドバイス・一言を貰うことで作品に足りない物などがわかるので遠慮なく書いてくれると嬉しいです。

今まで一度も感想を書いたことがない人でも大歓迎です。

新たな意見が作品をより良くするので書いてくれると助かります。

よろしくお願いします。

当たり前？

視点は戻りスバル視点…

～スバルの部屋～

ミソラ「スバル君お風呂入ろ♪」

スバル「……」

ミソラ「？どうしたのスバル君……」

スバル「ミソラちゃん……おかしいよね。」

ミソラ「？何もおかしくないよ♪」

スバル「何でミソラちゃんとお風呂に入るのが当たり前みたいになってるの！」

ミソラ「当たり前じゃないの？」

スバル「違うよ……ミソラちゃん……もう一緒にお風呂入るのやめよ。」

ミソラ「どうして？」

スバル「この歳で異性と一緒にお風呂に入るっておかしいでしょ！」

ミソラ「何歳までしか異性と一緒にお風呂に入っちゃダメて誰が決めたの？」

スバル「そ…それは……」

スバルは答えようが無いことを聞かれ困った。

ミソラ「答えられないなら入っても良いよね♪」

スバル「ダメ！」

ミソラ「……何でスバル君は私とお風呂に入る事をそんなに嫌がるの……私の事……嫌い？」

ミソラはスバルを見つめた。

スバル「ぐっ……（可愛すぎる……）嫌いじゃないよ…ミソラちゃんはどうして僕と入りたいの？」

ミソラ「スバル君と一緒にいると……寂しくないから。

スバル「えっ……」

ミソラ「スバル君は私にとって一番大切な人／／／／／／／／／だからできるだけ一緒にいたいな／／／／／／」

ミソラは顔が真っ赤になっていた。

スバル「ミソラちゃん……」

ミソラ「スバル君……ダメかな。」

ミソラが聞き直すとスバルはミソラを抱き締めた。

スバル「一番大切な人にそこまで言われたら断れないよ。」

ミソラ「うん♪（やった♪）」

ミソラもスバルを抱き締めた。

ミソラは時間がある時はスバルとこのようなやり取りをしている…

……

～お風呂場～

2人とも体を洗い終わり浴槽に浸かっていた。

スバル「まだ復元されたネットナビと会ったことないけどどんな相手なのかな?」

ミソラ「会わないことっていいことじゃないかな?」

スバル「確かにそうだね。」

ミソラ「でも心配しないでスバル君♪」

スバル「？」

ミソラ「私がスバル君を守るから♪」

ミソラはスバルにウインクした。

スバル（か…可愛い……）

ミソラ「？どうしたのスバル君？」

スバル「いや……それって情けないと思って。」

ミソラ「そうだね。」

スバル「……僕もミソラちゃんを守るよ……必ず。」

ミソラ「／／／／／／／／／／」

ミソラは何も言わなかったがとても嬉しそうだった……

～スバルの部屋～

お風呂から出た2人は自分の部屋に戻っていた。

トントン

スバル「はい。」

ミソラ「スバル君一緒に寝よ♪」

ミソラはパジャマ姿で枕を手に持っていた。

スバル「……いいよ。」

スバルはミソラの言葉を思いだし断らなかった。

ミソラ「早く寝よ♪」

スバル「うん。」

2人ともスバルのベットに入った。

ミソラ「スバル君……抱き締めていい？」

スバル「……いいよ。」

スバルの許可をもらいミソラはスバルに抱きついた。

ミソラ「♪……スバル君も抱き締めて。」

スバル「…わかった。」

スバルもミソラに抱き締めた。

ミソラ「ありがとう♪……（温かい♪）」

数分後ミソラは幸せそうに眠りについた。

スバル（寂しくないか…）

スバルはミソラの言葉を思い出すとミソラを抱き締める力に少し強

くなった。

スバル〔ミソラちゃんを守るよ……絶対に……〕

スバルもこのあと眠りについた……

～ＷＡＸＡニホン支部～

暁「なかなか終わらないな……」

シドウは残業をしていた。

アシッド「頑張ってくださいシドウ。今日のブライとネットナビの戦いの報告書は私がやっておきますから。」

暁「助かる……こっちは新しい遊撃隊メンバーのいろいろな手続きで忙しいからな……遊撃隊隊長は辛いぜ。」

そう言いながらシドウは机の上に置いてあるうまい棒手に取った……

パシ！

クインティア「サボらない……」

シドウの隣の席では丸めた雑誌を持ったクインティアがいた。

暁「はい……」

シドウはうまい棒を戻し仕事に戻った……

数十分後……

シドウの残業も終わり2人はＷＡＸＡの宿舎に向かっていた。

暁「ごめんな遅くなって……」

クインティア「別に構わないわ。ジャックにも遅くなる事は伝えてあるし……」

暁「まさか急な仕事が入るのとわな……」

シドウはブライと話したあとＷＡＸＡニホン支部に戻って戦いの報告書を書こうとしたがヨイリー博士に呼ばれて行ってみると遊撃隊に新しいメンバーが加わる事になりいろいろな手続きをすることになったのだった……

クインティアもヨイリー博士に言われてシドウの手伝いをしていた。

クインティア「それにしても最初の勧誘の時は断ったのにどうして参加する気になったのかしら？」

暁「最初の勧誘の時はまだ電波変換が出来るようになって間もなかったから断ったそうだ。」

クインティア「この事彼に伝えなくていいの？」

暁「伝えた方がいいんだろうが彼女の参加条件に伝えないで欲しいとあったからな……」

クインティア「そう言えば彼女の参加条件……よく何もなく通ったわね……」

暁「元々一緒に暮らしていたから問題ないて判断されたそうだ……クインティアもジャックと一緒の部屋での宿舎で暮らしてるじゃないか。」

クインティア「確かにそうね……近々みんなを集めないとね。」

暁「そうだな。」

シドウとクインティアは楽しそうに宿舎に帰っていった。

当たり前？（後書き）

今回のお話の前半はあまり重要のように見えませんが話の後半に起こる出来事のきっかけになります。

覚えておくと良いかもしれません。

後半にはほとんどの次回予告でした。

幼馴染み（前書き）

オリジナルキャラクターのシズクが本格的に出てきます。

今回はスバル視点ではないです。

今まで書いていませんでしたが、カケルは個人的にはシドウにならぶ準主人公だと思っています。

絵が書ければ説明しやすいのですが私は絵がまるで書けないので説明文を読んでどのようなキャラクターなのか考えて下さい。

絵が書ければな……

幼馴染み

数日後……

～ニホン空港～

空港に1人の少女とウィザードが降り立った。

シズク「久しぶりのニホンだよエル♪」

青髪で髪の長さが腰まである可愛い女の子の隣にウィザードが現れた。

ウィザードは全体的に青色の人形で髪の部分は後ろにまとめて、翼があり白いアーマーがついていた。

リエル『私は初めてなんだけどな……』

シズク「そうだったね……」

リエル『これからどうするの？』

シズク「何が？」

リエル『ＷＡＸＡの人に午後５時に着くようにしますって言ったのにまだ午前８時よ。まだ９時間も余裕があるわよ？観光でもするの？』

シズク「観光なんてしないよ……やる事は決めてあるから大丈夫♪」

リエル『？』

シズク「カケルが学校でどのような生活をするか見に行くの♪」

リエル『怒られるわよ……ただでさえ黙って遊撃隊に参加したんだから……』

シズク「今さら怒られる事が１つや２つ増えたって変わらないよ♪行こうよ、エル♪」

リエル『仕方ないわね。』

シズクは周りに人がいないことを確認した。

シズク「行くわよエル！」

リエル『ええ。』

シズク「トランスコード！リエル・フェザー！」

電波変換したシズクの姿は上半身はペガサスに似ていて翼があり下半身はクイーン・ヴァルゴに似たスカート（スカート周りの赤い装甲が無くもう少し小さい）姿はだった（色はペガサスに似ている）。

髪は後ろでまとめてあり手には杖を持っていた。

シズク「コダマ小学校にレッツゴー！」

リエル・フェザーは光となってコダマ小学校に向かっていった……

……

５０分後……
～学校～

一時間目が始まる前…
スバルの席の周りにいつものメンバーが集まっていた。

スバル「転校生？」

キザマロ「はい。朝、日直の仕事で職員室に行ったときに先生が話しているのを聞きました、間違いありません。」
委員長「こんな時期に転校生なんて変わってるわね。」

ゴン太「男と女どっちなんだ？」

キザマロ「そこまではわかりませんが明日、転校してくるそうですよ。」

ミソラ「転校生なんて私とカケル君以来だね。」

カケル「そうだね。でも転校生なら今度は隣のクラスに普通くるんじゃ……」

キザマロ「転校生同士ならすぐに仲良くなれると考えたらしいですよ。」

ツカサ「一体どんな人なのかな？」

ジャック（カケルにはバレていないようだな。）

カケル「どうしたのジャック？」

ジャック「何でもない……（知られたらねえちゃんに怒られる……）」

ジャックは真実を知りながら黙っていた……

外のウェーブロード……

シズク「……カケル楽しそうだね……」

シズクは寂しそうだった。

リエル『寂しいのシズク？』

シズク「少しね……」

リエル『……だったら甘えればいいじゃない。』

シズク「えっ？」

リエル『だって会いたくてニホンまで来たんだし、また一緒にいられるだから…ね♪』

シズク「／／／／うん／／／／」

シズクは顔を真っ赤にしていた……

このあとシズクはしばらく学校を見ていたが午後くらいからからはコダマタウンや近くの町を見て回ったりしていた。

学校も終わり
～ウェーブライナー中～

ツカサ「今日の訓練どうしよっか。」

カケル「射撃の練習を最近してないし射撃がいいな…ジャックは何がいい？」

ジャック「ああ……」

3人は仲良くＷＡＸＡニホン支部に向かっていたが……

カケル「ジャックホントにどうしたの大丈夫？」

ツカサ「今日のジャック君……何か変だよ？」

ジャック「何でもないんだ何でも……」

ジャックは新しいメンバーの情報が漏れないように口数を減らしていたが逆に不自然に見えたようで2人に心配されていた。

ツカサ「ＷＡＸＡについたら医務室に行った方がいいよ。」

カケル「今日は訓練を休んだ方がいいよ。体を休める事も大切なことなんだから。」

ジャック「大丈夫だから心配するなって。」

ツカサ「そう……？何かあったら言ってね。僕達はブラザーなんだから。」

カケル「そうだよ、何でも言ってね。」

ジャック（お前ら……）

ジャックは2人の言葉に心打たれていた。

このあといろいろ話したがジャックは情報を漏らすような事はしなかった。

幼馴染み（後書き）

今回は少し話が短いですね。

長く書けるようにがんばります。

このあとカケルに災難？が続きます。

幼馴染み2（前書き）

感想・アドバイス・一言、お待ちしてます。

幼馴染み2

ＰＭ７：０５

～ＷＡＸＡニホン支部～

カケル・ツカサ・ジャックの３人は火曜と木曜は午後７時から９時まである遊撃隊の訓練（強制ではない。）によく参加している。

ツカサ「暁さんとクインティアさん遅いね……」

カケル「残業でもしてるんじゃないかな？」

ジャック「暁がいい始めた事なのにな……（新メンバーに案内でもしてるのか？）」

この訓練の最初に提案したのはシドウで最初の訓練の目標はヒーローになるだった（今は強くなる事が目標）。

ジャック「ひとまず俺達だけで始めようぜ（探しに行かれたら困る）。」

カケル「そうだね。」

ツカサ「何しようか……」

ジャック「じゃあツカサにリベンジだ！」

カケル「そうだね……そうしよう。」

2人はツカサを見た。

ツカサ「いいよ。でもその前に少しアップしよ。」

カケル・ジャック「「わかった。」」

ジャックは真実を上手く隠しながら訓練を始めた。

約一時間半後……

暁「すまない遅くなった。」

休憩していた3人のところにシドウがやって来た。

ツカサ「こんばんは、暁さん。」

カケル「はぁ…はぁ…はぁ…！暁さん、遅かったですね。」

ジャック「はぁ…はぁ…！遅かったな。」

ちなみに3人がやっていた訓練はバトルカード・ソードとキャノンだけを使った実戦式訓練でジェミニ・スパーク―B、ジェミニ・スパーク―W対ジャック・コーヴァス、ベルセルク・ビーで戦っていたが結果は……ツカサの圧勝。ジェミニ・スパーク達のコンビネーションに翻弄され2人はやられていた……

暁「なんだお前らまた負けたのか？」

この訓練内容でツカサに勝てたことは2人はない……

カケル「全力勝負なら負けませんよ。」

ジャック「俺だって勝てるはずだ。」

ツカサ「僕も2人に負けないようにがんばるよ。」

ナンスカから帰って来たツカサは強くなっていた。

暁「俺もがんばらなくちゃな。」

4人が話していると……

クインティア「シドウ、私達の事忘れてない。」

クインティアもやって来た。

カケル（達？）

暁「そんなことないぞ。これから言おうと思ってたんだ。」

ツカサ「？僕達に何か伝える事があるんですか？」

暁「ああ。実は遊撃隊に新メンバーを迎える事になった。」

カケル「新しいメンバーですか？……全然聞いていませんが……」

暁「今まで言わなかったからな……じゃあ入って来てくれ。」

暁に呼ばれて1人の少女が入ってきた。

ジャック（こいつがカケルの……）

カケル「！……シズク…」

シズク「カケル……」

カケルを見たシズクは涙目になっていた。

カケル「シズク！遊撃隊には参加するなって……」

シズク「カケル～会いたかったよ～」

シズクは泣きながらカケルに抱きついた。

カケル「！シズク、行きなり抱きつ……」

シズク「カケルがいなくて寂しかったんだから……私に何も言わずにニホンに住むこと決めいなくなっちゃうし……本当に寂しかったんだから……」

シズクは泣きながらカケルを強く抱き締めた。

カケル「……ごめん…寂しい思いをさせて……泣かないでシズク……」

このあとシズクが落ち着くまで5分ほどかかった。

5分後……

シズク「取り乱してすいません……私、天野シズクです。カケルとは幼馴染みです。よろしくお願いします。」

ツカサ「よろしくね。天野さん。」

ジャック「よろしく頼むぜ。」

カケル「……」

暁「天野は明日からコダマ小学校にも通うことになるから仲良くしろよ。」

ツカサ「明日転校生してくる人て天野さんだったんだ……」

ジャック「ウィザードを見せてくれよ。」

シズク「学校でほかの遊撃隊メンバーの人と一緒に見せるよ。」

みんなでいろいろ話していると……

クインティア「もうすぐ9時になるからそろそろ宿舎に戻って。」

クインティアの一言でクインティアとシドウ以外は帰る事になった。

クインティア「カケル君、ちょっといいかしら。」

カケル「何でしょうか?」

クインティア「シズクちゃんはあなたの部屋で相部屋になっるけど大丈夫?」

カケル「…それってシズクがお願いしました?」

クインティア「ええ。」

カケル「……別に構いません。シズクは自分にとって兄妹みたいなものですから、部屋も広いですし。」

クインティア「ならいいけど……」

カケルがクインティアと話が終わると４人は宿舎に向かって行った

……

～ＷＡＸＡ宿舎～

シズク「宿舎の部屋って広いんだね。」

カケル「僕も最初は誰かと相部屋になるのかと思ってたよ。」

２人はカケルが今まで使っていた部屋に入って来ていた。

宿舎の部屋は２ＬＤＫで１人で使うにしては広い。

カケルや隣の部屋のツカサも部屋の半分ぐらいしか使っていない…

……

シズク「またカケルと暮らせるんだね♪」

カケル「……そう言えばおじさんとおばさんから何の連絡がなかったけど……シズク、何か貰ってない？」

シズク「あ、お父さんから手紙を預かってるよ。」

シズクは手紙をカケルに渡した。

カケルは手紙を受けとり開いて見ると一言書いてあった。

手紙…

シズクを泣かせるなよ。

父より（読んだら連絡しろ）

カケル（ごめん、おじさん……守れなかったよ。）

読む前に泣かせてしまったカケルであった……

数十分後……

カケル「明日は学校だし荷物の本格的な整理は明日にしてお風呂に入って寝たら？」

シズク「そうする……」

このあとカケルはおじさんに連絡したりお風呂に入ったりリエルの調整など忙しく過ごした。

幼馴染み2（後書き）

ツカサとヒカルのコンビネーションは侮れませんね。

今回はＷＡＸＡでやっている訓練や宿舎の設定などオリジナルな設定を多く作りました。

次回は学校かな……

スバル君が最近出番が少ないな……

嫉妬！（前書き）

遅くなりました。

次の日の朝……

～学校～

育田「それじゃあ入ってくれ。」

シズク「はい。」

育田に呼ばれてシズクは入って教室に入って来た。

シズク「転校してきた天野シズクです。よろしくお願いします。」

シズクが言い終わると拍手が起こった。

男子【（可愛い……）】

男子は全員（カケル、ツカサ、ジャック以外は）拍手をしながら思っていた。

育田【みんな、天野と仲良くしろよ。】

全員【はい。】

育田「生徒も増えたこと出し……席替えをするぞ。」

男子（一部を除く）【（来た！）】

スバルの学校は基本的に二ヶ月ごとに席替えをするがシズクが来たことで前倒しになったようだ。

男子（一部を除く）【（ミソラちゃんか転校生の隣になって見せる！）】

スバル、カケル、ツカサ、ジャック以外の男子は心に火が灯った。

女子達も隣になりたい人がいるらしく熱意が伝わってくる。

女子達はスバルかツカサかカケルの誰かを狙っているようだ。

育田「今回は男子から選んでくれ。」

育田の一言で男子は教卓に集まった。

今度の振り分けは、

男子……

×　1　女　2　女　3
4　女　5　女　6　女
女　7　女　8　女　9
10　女
女子……
×　男　1　男　2　男
男　3　男　4　男　5
6　男　7　男　8　男
男　9
となっている。
ミソラ〔ハープ、よろしく♪〕
ハープ『わかったわ。』
ミソラはこっそりとスバルのハンターＶＧにハープを送った。

ハープ『失礼するわよ。』

ウォーロック『……ハープか…行きなり何のようだ?』

ハンターVGでさっきまで寝ていたウォーロックは適当にハープに質問した。

ハープ『あなたに用は無いわ……スバル君!ちょっと聞きたい事があるんだけど。』

スバル〔!どうしたのハープ?〕

場所を決めたばかりのスバルは驚いた。

ハープ『スバル君はどこの席にしたの?』

スバル〔……ミソラちゃんに頼まれたの?〕

ハープ『そうよ。』

スバル〔……じゃあミソラちゃんにこう伝えて……〕

スバルはハープにあることを伝えた。

育田「今度は女子が集まってくれ。」

先生に言われて男子と入れ替わりに女子が教卓に集まった。

その時ミソラがスバルとすれ違った時にハープはミソラのハンターVGに戻った。

ミソラ〔ハープ、何だって?〕

ハープ『2度も隣になると不正してるんじゃないかて疑われるから教えられない……だって。』

ミソラ〔……わかった（スバル君のバカ……）……こうなったら自力で隣になって見せるわ!〕

ミソラは拳を握りしめた。

シズク「先生、お願いがあるのですが……」

育田「天野?どうした。」

シズク「実は……」

育田「そうか……わかった。元々この席替えは天野がすぐにクラスに馴染めるようにするためだからな、知り合いが近くにいた方がいいだろう。ただし今回だけだぞ。」

シズク「はい。」

シズクは嬉しそうに返事をした。

シズクの場所は先生が決めたようだ。

ミソラ（スバル君…どこ選んだのかな……）

ミソラが考えている内に徐々に決まって行く……

気づいた時はもう1、3、7しか残っていなかった……

ミソラ「……7かな…」

ミソラは前の席が嫌だったので7を選んだ……

数分後……

結果は…

×男　女キ　女男

ジ委　スシ　カ女

女ゴ　ミツ　女男

男女

キ…キザマロ
ジ…ジャック
委…委員長
ス…スバル
シ…シズク
カ…カケル
ゴ…ゴン太
ミ…ミソラ
ツ…ツカサ

となった。

キザマロ（視力が悪いと前しかないんですね……）

ジャック（ミスった…）

委員長（余り物にはホントに福があるのね……）

スバル「星河スバルです。よろしくね、天野さん。」

シズク「！星河スバルてあのロックマンの？！すごい世界を救ったヒーローに会えるなんて……こちらこそよろしくお願いします。星河君……」

カケル（……）

ゴン太（よっしゃ～～～！ミソラちゃんの隣だ！）

ミソラ（3にすれば良かった……スバル君、転校生と仲良くしてる……）

ミソラは顔には出さなかったが嫉妬しているようだ。

ツカサ「よろしくね、響さん。」

席替えも終わり授業が始まった……

放課後…

～学校の屋上～

遊撃隊メンバーが集まっていた。

スバル「天野さんて遊撃隊の新メンバーだったんだ。」

シズク「あらためてよろしくね。」

ミソラ（スバル君…また……）

シズクと仲良く話している事にミソラはまた嫉妬していた。

ジャック「みんなそろったしウィザードを見せてくれよ。」

シズク「了解♪ウィザード・オン！」

シズクはウィザードを呼び出した。

リエル『はじめまして皆さん。私の名はリエル、これからよろしくお願いします。』

リエルの挨拶が終わるとハープとウォーロックがハンターＶＧから出てきた。

ハープ『……あなたＦＭ星人では無いわね。』

リエル『ええ。私は宇宙人ではないです。』

ウォーロック『じゃあアシッドやベルセルクと同じ感じか？』

リエル『はい。私はベルと同時期にカケルが私を作りました。』

ツカサ「カケル君は他にもウィザードを作ってるの？」

カケル「いや、作ったのはこの２体だけだよ。あの頃は時間も無かったし。」

ツカサ「そうなんだ……」

ゴン太「なあ、電波変換した姿を見せてくれよ。」

シズク「いいわよ。トランスコード！リエル・フェザー！」

シズクは電波変換した。

スバル「……ペガサスに似ている……」

カケル「ペガサスの面影があって当然だよ。リエルは水属性の電波体のデータが入ってるんだ。スバル君が戦った事がある水属性の宇宙人のデータは全て入っているよ。」

持っている杖はクイーン・ヴァルゴに似ているがキャンサー・バブルに似たカラーリングをしていた。

スバル「どうしてムーの電波体は使ってないの？」

カケル「使っても良かったけど作るには十分なデータが集まってたから使わなかったんだ、それに……見た目が酷くなるんだね……」

カケルは遠くを見ていた。

スバル「……」

ムーの電波体と電波変換した姿を思い出した。

イエティ・ブリザードとブラキオ・ウェーブを……

……

スバル「そうだね。」

スバルは笑いながら答えた。

シズク「良かったら誰か戦ってみない？どんな技か見れるわよ。」

シズクは強気だった。

ウォーロック『スバル♪久しぶりに暴れようぜ♪』

ウォーロックは戦う事が出来そうでとても嬉しそうだ。

スバル「……わかった……僕と……」

ミソラ「待って！私が戦う。」

スバル「！ミソラちゃん、どうしたの？」

ミソラ「私は負けないわ！」

ミソラの瞳は燃えていた。

スバル（聞いてないし…）

ウォーロック『ミソラ……戦いの邪魔を……』

ハープ『ショックノート！』

ウォーロック『が……』

ウォーロックは倒れた。

ハープ『女の子には譲れない物があるのよ。』

スバル「……ウィザード・オフ……」

ウォーロックはハンターＶＧに戻された。

ミソラ「あなた何かに（スバル君は）渡さないわ！」

ミソラが嫉妬の炎は強さを増した。

シズク「？よくわからないけど戦いましょ。」

2人のヒロインを賭けた戦いが今、始まる？

嫉妬！（後書き）

更新が遅れました。

戦いのために技の名前を調べていたら遅くなりました。

すみません。

最近ストーリーが頭の中で追加したり減らしたりしています。

どれを書けばいいか最近迷っています。

ミソラとシズクのヒロインを賭けた戦い？委員長は入れなくていいのかな？

久しぶりに戦いが書けそうです。

ミソラの思い（前書き）

前回、ハープがショックノートを単体で出せたのは、ウォーロックのビーストスイングと同じ感じです。

ミソラの思い

ミソラ「トランスコード！ハープ・ノート！」

ミソラも電波変換してリエル・フェザーと向かい合った。

シズク「ここで戦うと学校に被害が出るから移動しましょ。」

ミソラ「ええ。」

ハープ・ノートとリエル・フェザーは光となって上空のウェーブロードに移動していった。

スバル「僕達はどうしよう……」

カケル「追いかけよう。」

全員【トランスコード！】

5人は電波変換してハープ・ノート達を追いかけて言った……

～ウェーブロード～

シズク「手加減なしで行くわよ。」

ミソラ「望むところよ。」

2人のが話していると5人はやって来た。

カケル「危なくなったら僕とスバル君で止めるから。」

ツカサ「2人ともがんばって。」

ゴン太「がんばれよ。」

ジャック「怪我すんなよ。」

スバル「ミソラちゃん、がんばって。」

カケル「シズクもがんばれよ。」

ミソラ〔スバル君……〕

シズク〔カケル……〕

ミソラ・シズク「「！この勝負、負けられない！」」

2人は向かい合った。

ミソラ・シズク「「ウェーブバトル、ライド・オン！」」

2人はの戦いが始まった。

シズク「バブルポップ！」

リエル・フェザーが杖を振ると大量の泡が現れミソラに向かって飛んで行った。

ミソラ「ショックノート！」

ハープ・ノートの周りに2つのコンポが現れ、大量の音符の形の衝撃波を打ち出した。

空中で泡と音符がぶつかり打ち消し会うが……

ミソラ「！」

打ち消した泡からカニのウィルスが何体か現れそのままハープ・ノートに突っ込んでいったがハープ・ノートはすぐさま場所を移動しよけた。

スバル「あの技はキャンサー・バブルの……本当にほかの電波体の技を使ってる……」

カケル「驚くのはこれからだよ。」

ミソラ「マシンガンストリング！」

ハープ・ノートはギターの弦を伸ばしリエル・フェザーを貫こうとしたが……

シズク「アイスエッジ！」

リエル・フェザーが唱えると近くに氷の剣が現れマシンガンストリングを斬り攻撃を防いだ。

ミソラ「！…ショックノート！」

ミソラはコンポを出しひるまず攻撃を続けた。

シズク「フロストミサイル！」

リエル・フェザーが杖を振ると2つの鋭い氷が現れ音符の衝撃波を打ち消しながら突っ込み2つのコンポを破壊した。

ミソラ「あっ……」

シズク「ゴットレイン！」

リエル・フェザーが杖を振るとハープ・ノートに頭上から水が降り注ぐ。

ミソラ「バトルカード・オーラ！」

ハープ・ノートは素早くはオーラを展開し攻撃を防いだ。

シズク「やるわね。」

ミソラ「私だってバトルの練習してるんだから！」

ハープ・ノートはリエル・フェザーに突っ込んだ。

ジャック「さっきのはねえちゃんの技だ……ホントに技をコピーしてるんだな。」

カケル「オリジナルの技も使えるけどね。それにココロフォースを使えれば水属性以外の技も使えるようになってるんだ。」

ミソラ「（コンポはまだ使えない……なら）パルスソング！」

ハープ・ノートはリエル・フェザーに近づくとギターからパルスが広範に放射した。

シズク「ブリザード！」

リエル・フェザーもハープ・ノートが技を出すのと同時に翼から強力な冷気を広範に放射した。

2人は技がぶつかるが……

ミソラ「きゃ～」

パルスはブリザードを防げずハープ・ノートは吹っ飛びオーラが消えた。

スバル「ミソラちゃん！」

吹っ飛んだ姿を見て助けに行こうとしたがジェミニ・スパーク―Wが止めた。

ツカサ「よく見なよスバル君、響さんはオーラで大丈夫だよ。」

スバル「……そうだね。」

ロックマンは助けたい気持ちを押さえながら戦いを見守った。

シズク「ハイドロドラゴン！」

リエル・フェザーは落ちていくハープ・ノートに攻撃したが……

……

シズク「……あれ？」

ハイドロドラゴンは大きく外れていった。

リエル・フェザーは気づいていなかったがハープ・ノートが出したパルスはブリザードを突き抜けて当たっていた。

そのためリエル・フェザーは混乱し攻撃を外した。

ミソラ「足場を……」

ハープ・ノートは音符型の空飛ぶボードを出してそこに乗った。

ミソラ（負けたくない……私も戦える事を……スバルを守れる事を証明したい！）

……強い思い……確認

ココロフォース…始動…

ロールフォース…発動！

全員【！】

ハープ・ノートは光に包まれていった……

ミソラの思い（後書き）

ハープ・ノートは使える技が少ないですね……

リエル・フェザーは使える技が多いですね……

ハープ・ノートはココロフォースを使ってペガサス、キャンサー、ヴァルゴの力を持つリエル・フェザーに勝てるのか？

次回をお楽しみに。

感想待ってます。

がんばってね！（前書き）

次回、日常……何書こうかな。

光が消えるとヘルメットのヘッドホンが黄色くなりそこから黄色い帯が一本ずつ伸びていた（ロックマンのロールソウル、ハープ・ノートバージョンみたいな感じです……ほかにもロールに似たような変化をしてますがご想像にお任せします）。

カケル「……響さんココロフォースを発動させたみたいだよ。」

スバル「あれがミソラちゃんのココロフォース……」

ゴン太「ホントに対して変わらないんだな。」

ジャック「あんなのでホントに強くなるのか？」

ツカサ「どんな風に強くなったのかな？」

ヒカル『……』

６人はココロフォースを見ていろんな考えを持っていた。

ミソラ（……すごい……力の使い方がわかる……）

ハープ・ノートは構えた。

シズク「あれがカケルが言っていた新たな力……その力が使えなくても負けないわよ！バブルポップ！」

リエル・フェザーが杖を振ると大量の泡がハープ・ノートに向かう。

ミソラ「さっきまでの私と一緒にされたら困るわ。ショックノート！」

ハープ・ノートの周りに9つのコンポが現れ音符の衝撃波が泡を破壊していった。

シズク「さっきより速いし……くっ！ブリザード！」

さっきとは違い音符は泡を貫きリエル・フェザーを襲ったが……

リエル・フェザーは空を飛び後退しながら音符を凍らしながら回避した。

ミソラ「フォーメーション3・4・2！」

ハープ・ノートが唱えるとコンポが3つ後方に下がり4つが周りに

2つはリエル・フェザーの衛星のように周り始めた。

シズク「？」

ミソラ「行くわよ！ショックノート！」

ミソラの周りとリエル・フェザーの周りのコンポからショックノートが連射された。

シズク「四方から……バトルカード・インビジブル！」

リエル・フェザーは当たる前に姿を消し攻撃が当たらなくなった。

その瞬間リエル・フェザーの周りを回っていた2つはのコンポが破壊された。

ミソラ「（近づかれるのはまずいな…）ティンパニー！」

ミソラが叫ぶと後方のコンポの3つが鳴り出した。

シズク「（動けない……けど！）フロストミサイル！」

ティンパニーの効果は動きを封じること……

リエル・フェザーは動けなくても鋭い氷の塊を飛ばしてハープ・ノートの後方のコンポを2つ壊した。

ハープ『インビジブルの効果が消えたら攻撃するわよ。』

ミソラ「うん。」

ハープ・ノートは周りの4つのコンポを頭上に集めて□□
□□
の形を作った。

シズク「（全部壊せない……）なら……」

リエル・フェザーは杖で前方で?を描く。

数秒後、リエル・フェザーのインビジブルが解けた。

ミソラ「いた!スーパーショックノート!」

4つのコンポから4倍の大きさのショックノートが連射された。

シズク「アクアレーザー!」

?から水属性のレーザーが発射されスーパーショックノートと激し

くぶつかり爆発が起きた。

シズク「……まだよ。」

音が止み動けるようになったリエル・フェザーはハープ・ノートに突っ込んだ。

ミソラ「バトルカード・ライメイザン！」

ミソラも電気のソードを展開し突っ込んだ。

シズク「そんな剣じゃ私の一撃は防げないわ、ブリザードブレード！」

唱えるとリエル・フェザーが持つ杖の先端から氷の刃が作られて全長3メートルはある大剣になった。

ミソラ「……」

シズク「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

リエル・ブリザードの大剣がハープ・ノートを襲う！

ミソラ「オウエンカ！」

ハープ・ノートが叫ぶと後方のコンポが鳴り出した。
コンポが鳴り出してすぐに大剣が直撃するが……

シズク「……えっ？」

リエル・フェザーの大剣がハープ・ノートを切り裂くがハープ・ノートには全く効いていなかった。

ミソラ「今の私には攻撃は効かないわよ！」

ハープ・ノートは電気のソードでリエル・フェザーを攻撃した。

シズク「きゃー！」

リエル・フェザーはソードを受けたため痺れて動けなくなった。

ミソラ「次で決めるわよ！フォーメーション０・９・０」

近くのウェーブロードに着地しながらハープ・ノートが叫ぶと壊れた４つのコンポも復活しハープ・ノートの頭上に９つのコンポが集まり
□□□
□□□
□□□

の形を作った。

ミソラ「行くよ！ハイパーショックノート！」

通常の9倍の大きさのショックノートが連射された。

リエル・フェザーは痺れていて動けず自分を守ることも出来なかった。

シズク（……カケル…助けて……）

恐怖のあまり目を瞑った……

カケル「カイザーデルタブレイカー！」

シズク「……えっ…」

リエル・フェザーが目を開けるとPトライブ状態のカケルが立っていた……

少し前……

ハープ・ノートの上空でコンポが集まるのを見ていた6人は……

ゴン太「あのミソラちゃんがあんなに強くなるなんてな……」

ジャック「勝負がつきそうだな……」

ヒカル『ココロフォースか……いいな。』

ツカサ「ヒカル……今、危ないこと考えたでしょ。」

スバル「すごい……」

カケル「（あれはヤバイな……）ココロフォース！」

ベルセルク・ビーが唱えると光に包まれPトライブの姿が変わった。

そしてリエル・フェザーに向かって行き前に立った。

そしてすぐにΔを描いた。

カケル「カイザーデルタブレイカー！」

Pトライブの技はハイパーショックノートを全て打ち消しハープ・ノートの頭上のコンポを全て破壊した。

ミソラ「……すごい…」

一撃でハイパーショックノートが破られたミソラは思わず言葉を漏らした。

カケル「……この戦いは響さんの勝ちだね。危ないんで割り込ませてもらったよ。」

カケルが話していると……

シズク「……カケル…」

カケル「シズク、怪我大丈夫?」

カケルは気づかなかったがシズクは涙目になっていた。

シズク「……うん。……その～」

カケル「？」

シズク「ありがとう…助けてくれて／／／／／／／」

カケル「シズクが謝るなんて……明日は雨かな？」

シズク「！ひどいよカケル、私は本当に感謝してるのに……」

カケル「ごめん、冗談だから……」

2人が話していると……

ミソラ「……なるほど。」

ミソラは何か感づいたようだった。

～学校の屋上～

数分後……

全員、学校の屋上に戻っていた。

シズク「戦ってくれてありがとう。これからもよろしくね。ミソラちゃん。」

ミソラ「こちらこそよろしくね、シズクちゃん。」

シズク「うん。」

シズクが返事をするとミソラは近づき耳元で呟いた。

ミソラ〔カケル君とがんばってね。〕

シズク「えっ！／／／／／／」

シズクの顔は真っ赤になった。

がんばってね！（後書き）

今回の戦いでわかったと思いますが、ココロフォースは元々の力を増幅させるプログラムなのでココロフォースにも強さに差が出ます。

なのでミソラとカケルが戦ったらカケルが圧勝します。

なのでココロフォースは元々の力が強ければ強いほど強い力が発動します。

今回、ミソラは攻撃がほとんどでしたがミソラのココロフォースは支援能力がメインで回復技なども使えます。

その力のまた次の機会に書きたいと思います。

呼び捨て（前書き）

遅くなりました。

呼び捨て

数十分後……

ミソラ「シズクちゃんなら出来るよ。」

ミソラはシズクの手を取った。

シズク「私はそんな／／／／／／／／」

リエル『ミソラちゃんの言う通りよシズク、あなたなら出来るわ。』

シズク『エルまで……私はただ……』

ハープ『ただ？』

シズク「一緒にいたいな……って／／／／／／／／」

ミソラ「だったらしっかり伝えなきゃ、思いは言わなきゃ伝わらないよ。」

戦いのあとミソラとシズクは話しに花が咲いていた。

そのため男たちは帰ってしまった。

スバルとカケルを残して……

ミソラ達から少し離れたところ……

スバルとカケルは手すりに腰掛けながら話していた。

スバル「男って悲しい生き物だね……」

カケル「そうだね……シズクを置いて帰る訳にもいかないし……」

ウォーロック『スバルは大丈夫だろ。』

スバル「カケル君が居るのに僕が帰ってたら家で何されるかわからないよ……」

ウォーロック『……確かにそうだな……』

カケル「ごめんね付き合わせちゃって……」

スバル「気にしなくていいよ……？そういえばカケル君は天野さんと知り合いなの？」

カケル「うん。シズクとは幼馴染みなんだ。」

スバル「そうなんだ……」

カケル「シズクには昔から振り回されてばかりだよ……」

カケルは昔を思い出していた。

スバル「そうなんだ……」

カケル「今となってはいい思い出だけどね。」

2人はミソラ達の話が終わるまで話ながら時間を潰した。

一時間後……

シズク「カケル！そろそろ帰ろ♪」

ミソラ「スバル君、帰ろ♪」

スバル・カケル「「うん。」」

長かったミソラ達の話も終わり４人で帰ることになった。

～帰り道～

４人はスバルの家に向かう途中にあるウェーブライナーの駅に向かっていた。

シズク「星河君１つ聞いていいかな？」

スバル「何かな？」

シズク「ミソラちゃんと付き合ってるの？」

スバル「！どっどうしたの急に……」

スバルはミソラの関係を聞かれ焦った。

シズク「ミソラちゃんが言ってたの…星河君といると……」

ミソラ「シズクちゃん！言わないでよ／／／／／／／」

ミソラは慌てて話に割り込んだ。

シズク「ミソラちゃんが言ったんだよ♪思いは言わなきゃ伝わらないって♪」

ミソラ「でも実際に言うとなると勇気がいるの！それに……一番伝えたいことは伝えたから／／／／／／／」

ミソラの顔が真っ赤になった。

カケル「つまりスバル君と響さんは付き合ってるて事か……2人とも動揺しすぎだよ。」

カケルは笑っていた。

ミソラ「／／／／バレちゃったね、スバル君……」

スバル「2人とも！この事は誰にも言わないで欲しいんだけど……」

カケル「わかった、誰にも言わない。世界を救ったヒーローと国民的アイドルが付き合ってる事がバレたら大変だろうしね。」

シズク「了解♪」

スバル「ありがとう、カケル君、天野さん。」

カケル「でも……」

スバル「でも？」

カケル「……ゴン太君以外の遊撃隊メンバーはスバル君と響さんの関係に勘づいてるよ。2人とも顔に出やすいから……」

スバル・ミソラ「「えっ……」」

スバルとミソラは顔を見合わせていた……

そんなことを話しているとウェーブライナーの駅に着いた。

カケル「じゃあね2人とも。」

シズク「2人とも今日はありがとう。これからもよろしくね。」

スバル「うん。」

ミソラ「こちらこそよろしくね、シズクちゃん。」

シズク「うん、じゃあねミソラちゃん。」

スバルとミソラはカケルとシズクと駅で別れてスバルの家に帰っていった。

～スバルの部屋～

家に戻った2人はスバルの部屋で宿題に取りかかっていた。

ミソラ「……」

スバル「……」

ミソラ「……スバル君…私の事名前で呼んでみて……」

スバル「？……ミソラちゃん？」

スバルはミソラが言った通りに名前で読んだが……

ミソラ「違うよ！……呼び捨てで呼んでみて……」

ミソラはゆっくりとスバルに近づいた。

スバル「え／／／／どうしたのミソラちゃん？」

ミソラ「違うよ……スバル君は私の名前もわからなくなったの？」

ミソラはスバルを見つめながら質問した。

スバル「／／／／／／ミ、ミソラ／／どうしたの……」

スバルは恥ずかしそうに名前を呼んだ。

ミソラ「だってカケル君とシズクちゃんが呼び捨てで呼び合ってたからその……」

スバル「自分も呼んで欲しくなったの？」

ミソラ「／／／／うん／／／／」

スバル「……じゃあ僕の事も名前で呼んでよ。」

ミソラ「どうして？」

スバル「僕だけ呼び捨てって不自然でしょ！」

ミソラ「……スバル、好きだよ♪」

ミソラはスバルの首に手を回すとキスをした。

スバル「！／／／

スバル「ミソラちゃんに言われると心臓に悪い……」

ミソラ「心臓？」

ミソラはスバルの言ったことの意味がわからなかった。

スバル「とにかく呼び捨てはやめてね。」

ミソラ「いや。」

スバル「……」

スバルは少し考えるとミソラを抱き締めた。

ミソラ（えっ……）

スバル「ミソラ、好きだよ。」

スバルは耳元で呟いた。

ミソラ「！／／／

スバルは普段こんなセリフを言わない（言ったとしてもミソラが言わせてる）のでミソラの顔が真っ赤になった。

スバルは抱き締めるのをやめた。

スバル「呼び捨てじゃなくていいよね。」

ミソラ「／／／／う／／／／ん／／」

ミソラは顔を真っ赤しながら下を向いていた。

スバル「どうしたの……ミソラ？」

ミソラ「／／／／／／／／／／／／」

ミソラの顔がさらに真っ赤になった。

スバル「呼び捨てはもう少したってからにしようね。」

ミソラ「／／／／／／はい。」

この日初めてミソラが口で負けた……

呼び捨て（後書き）

近々大きな戦いが起きるので日常を書きたいのですが何かないいのありますかね？

数日後で行きなり戦いにしもいいのですがバランスを考えると日常を入れたい……何かいいアイデアありませんか？

感想、アドバイス、一言をお待ちしてます。

幼馴染み3（前書き）

皆さんお久しぶりです。

青い光です。

一週間ほど用事のため更新出来ませんでしたがこれから再び頑張ります。

読むのが久しぶりの方は、「幼馴染み」から読み返すと良いです。

感想、アドバイス、一言をお待ちしてます。

幼馴染み3

数時間後……

～ＷＡＸＡ宿舎～

カケルとシズクは部屋に戻ったあと宿題を終わして食堂で食事を済ませた。

そのあとカケルはお風呂に入り出たあとは部屋でミソラとシズクの戦闘データをまとめていた。

シズクはカケルと入れ替わりにお風呂に入っていた。

シズク「私はどうすればいいのかな？エル。」

リエル『そうね……ミソラちゃんが言った通り言わなきゃ伝わらないと思うわよ。』

浴槽に浸かりながらリエルと相談していた。

シズク「私……言える自信ないな……」

シズクは下を向いた。

リエル『シズク……あなたはカケルの事いつから好きなの？』

シズク「／／／／わからないよ……物心がついたときからカケルがいて……ずっと好きだったから／／／／／／」

シズクはリエルの方を向くと顔を真っ赤にして答えた。

リエル『そこまで思っているなら言えるでしょ。』

シズク「言えないよ／／／／／」

リエル『どうして？』

シズク「カケルが私の事…嫌いだったら……」

リエル『１００％無いわよ！』

リエルの鋭いツッコミが決まった。

シズク「冗談だよエル……でも今さら好きって伝えるのはちょっと恥ずかしい／／／／／／」

リエル『このまま言えなくて何の進展も無いまま5年、１０年と時がたって2人は別々の人生を歩んで行くのね……』

リエルは先を見据えたように言った。

シズク「そんなこと無いもん……」

リエル『そうなるわよ。』

シズク「その頃には告白してるもん。」

リエル『どっちらがしたのかしら?告白?』

シズク「／／／／／／／／／／カケルかな?」

シズクは視線をリエルからそらしながら言った。

リエル『ホントに別々の人生を歩む事になるわよ。』

シズク「カケルが告白しないって決まって無いもん／／／／／／」

リエル『カケルに告白して貰うのは難しいわよ。』

シズク「ど、どうして？／／／／／／」

リエル『カケルはシズクの事を妹として見ている事が多いから……
……恋愛対象としてあなたを見るか…』

リエルは天井を見ながら言った。

シズク「み…見るも……ん／／／／／／」

リエル『シズク？…どうしたの？』

リエルはシズクの不自然な言葉が気になり視線を戻すと……

シズク「／／／／／／／／／／／／」

シズクは完全にのぼせたらしく顔を真っ赤にして気絶していた。

リエル『シズク！どうしたの！しっかりして！……どうしよう…
……カケル！カケル！カケル～！』

リエルは慌ててカケルを呼びに言った……

リエル『カケル！カケル！』

リエルは慌ててカケルの部屋に入ってきた。

カケル「リエル？どうした？そんなに慌てて？それより今日の戦闘データを調べてわかったけど以前より技の発動速度が上がっていてよかったよ。シズクにも伝えといて、それと……」

リエル『そんなこと後でいいから早く来て！シズクがお風呂でのぼせた見たいなの！意識も無いし……早く来て！』

カケル「！わかった。じゃあリエルは氷水とタオル用意して、ベルは団扇…何てあったかな？とにかく扇げそうな物持ってきて！」

リエル『わかったわ。』

ベル『承知した。』

リエルとベルは準備しに向かった。

カケル「……何やってんだか……」

カケルはあきれながらもお風呂に向かった……

数十分後……

シズク「……あれ？ここどこ？」

シズクが気がつくとカケルの部屋のベットで寝ていた。

リエル『シズク！気がついたのね……ホントによかった……』

ベル『全くだ……』

カケル「シズク、よかった気がついて……水分をとった方がいいよ、はい。」

コップに入った水を差し出した。

シズク「ありがとう？……！私、何で下着しか身に付けてないの！？／／／／／」

シズクはコップを受けとる為に上半身を起こしたときに下着姿なのに気づき毛布で体を隠した。

リエル『覚えてないの？あなたお風呂でのぼせちゃったのよ。』

シズク「お風呂……そうだエルと話してて…そしたら何か意識が遠くなって……」

カケル「ホント運ぶのが大変だったよ。」

シズク「！カケルが運んだの……」

カケル「ほかに誰がここまで運ぶの？」

シズク「／／／／／／／／／私もうお嫁に行けない／／／／／」

気絶している間にあったことを考えるとシズクの顔が真っ赤になった。

カケル「別に大衆に見られた訳じゃないんだから……」

シズク「カケルに見られたもん！触られたもん！気絶してた時に何されたかわからないもん！バカ！アホ！変態！スケぇ……」

シズクは叫んでいたが突然ベットから倒れそうになった。

カケル「あんまり無理しないでよ。まだ体調悪いんでしょ。」

カケルは倒れそうなシズクを支えた。

シズク「……う…ん。」

カケルはシズクをベット座らせた。

カケル「パジャマ着れそう？」

シズク「……無理…」

カケル「仕方ないな……」

カケルはシズクに服を着せ始めた。

シズク「／／／

シズク「ごめん……」

カケル「気にしなくていいよ。」

カケルは絞ったタオルをシズクの頭に乗せながら言った。

シズク「ありがと……カケルは……どこで寝るの？」

カケル「ソファーで寝るから気にしなくていいよ。」

シズク「……だったらさ…久しぶりに一緒に寝よ／／／／／／」

カケル「……わかった。けどもう少しシズクを看病してから寝るよ。先に寝てて……」

カケルはシズクのつらそうな顔を見たら断れなかった……

シズク「……うん。」

シズクは返事をしたがすぐに眠ることが出来ずカケルとずっと話していた……

ちなみにウィザードの2体は2人の邪魔にならないようにハンターVGの中に戻っていた。

数時間後……

シズク「カケルも寝たら？」

時間もたちシズクの体調はすっかり良くなっていた。

カケル「……そうさせてもらうよ……」

カケルはシズクと一緒のベットに入った。

シズク「こうしてカケルと寝るのも久しぶりだね。」

カケル「そうだね……（シズクが元気になってよかった……

……）」

カケルはすぐに眠りについた……

シズク（昔はいつも一緒に寝てくれたのにいつの間にか一緒に寝てくれなくなったな……）

シズクはゆっくりとカケルに近づくとカケルを抱きついた。

カケルは寝ていたため気づかなかった。

シズク（言わなきゃ伝わらないか……）

シズクはミソラの言葉を思い出していた。

するとカケルがシズクを抱き枕のように抱き締めて来た。

シズク「／／／／カ、カケル？／／／／」

カケル「……」

シズクはカケルが寝ている事を確認した。

シズク「……甘えん坊だねカケル……変わってないな……／／／／」

シズクは少し考えると嬉しそうにカケルを抱き締めた。

シズク「まだ言わなくてもいいよね……♪」

シズクは小声で呟くお互いに抱き締めあう形で眠りについた……

……

幼馴染み3（後書き）

スバミソじゃ出来ない事をしようとしたら恥ずかしい話になりました。（笑）

今回のような話を作ると自分が作ったキャラクターの特徴が改めてわかって面白いですね……

書いていて面白い……これが小説を書く理由ですよね。

私はこの思いを忘れずに頑張っていこうと思います。

ＷＡＸＡの休日（前書き）

感想、アドバイス、一言をお待ちしてます。

WAXAの休日

AM6：00
～WAXA宿舎～

カケル「（何だろう……温かくて……妙に落ち着く）……？」

カケルは自分が今感じている温もりが何なのか気になり目を覚ました。

カケル「……／／／／／／／／」

カケルは自分の状況を確認すると顔が真っ赤になった。

抱き締めあっていた……

一言で言うとそうなる。

2人で抱き締めてあっていてカケルの顔とシズクの顔はとても近かった……

数分後……

カケル（放れないと……）

カケルはシズクを抱き締めるのを止めてシズクが起きないように放れた。

カケル「1時間くらいしたら起こすから。」

カケルはそう言い残すとリビングに向かっていった。

約1時間後……

カケル「シズク起きて、シズク！」

シズク「……カケル？」

カケル「そろそろ起きてシズク、この宿舎の食堂はやってる時間が決まってるの知ってよね。」

ここＷＡＸＡの宿舎の食堂の営業時間は、

朝食　ＡＭ５：３０～ＡＭ８：３０
昼食　ＡＭ１１：００～ＰＭ２：００
夕食　ＰＭ５：３０～ＰＭ８：３０
夜食　ＰＭ１１：００～ＡＭ２：００

となっている。

これ以外の時間は営業していない。

シズク「……了解。」

シズクは眠そうに目を擦りながら自分の部屋に向かっていった。

カケル「……大丈夫かな？」

カケルは少しシズクが心配だったがシズクを待つことにした。

待っていると……

玄関のブザーがなった。

カケル「は～い……ツカサ君、おはよう。」

カケルは玄関を出るとツカサが立っていた。

ツカサ「おはようカケル君、良かったら一緒に食堂に行かない？」

カケル「ごめん。今シズクを待たないと行けないから先に行ってて。」

ツカサ「わかった。ジャックを誘って先に行ってるね。」

ツカサはカケルと別れ隣のジャック・クインティアの部屋に向かっていった……

15分後……

シズク「カケル、行こう♪」

カケル「うん。（やっぱり女子の準備は長いな……）」

2人は部屋から出ると食堂に向かっていった。

食堂に着くと夜勤が終わった職員やこれから仕事の職員で溢れていた。

シズク「……多いね。」

カケル「ひとまず並ぼう。」

シズク「うん。」

2人は仲良く並んだ。

数分後……

ウィザード1『ご注文は?』

この食堂はウィザードが営業している。

ちなみにメニューは500種類を越える……

食べたいおかずを組み合わせて注文するのが普通である。

カケル「う~ん……」

カケルは迷っていると……

シズク「ウィザードさんにお任せします。」

カケル「……僕もお願いします。」

シズクがすぐに決めたのを見てカケルも同じにした。

ウィザード1『わかりました。すぐ出来ますので向こうでお待ちください。』

ウィザードの誘導通りに2人は進んだ。

1分後…

ウィザード2『お待たせしました。』

2人に渡されたのはとてもしっかりした朝食セットだった……

……1分で作れる品数ではない。

カケル（いつも思うけど…どうやって作ってるんだろ……）

シズク（美味しそう♪）

このあとカケルがお金を払ったあと2人でツカサを探した。

数分後…

カケル「ツカサ君、隣いい？」

ツカサ「もちろん。」

2人はツカサの前の席に座った。

カケル「あれ？ジャックは？」

呼びに行ったはずのジャックがいなかった。

ツカサ「ジャックはね……」

～回想～

カケル・シズクの部屋を出たツカサは隣の部屋のジャック・クインティアの部屋のブザーを鳴らした。

数秒後……

ジャック「はい……ツカサかどうした？」

ツカサ「良かったら一緒に食堂に行かない？」

ジャック「……悪い今日はねえちゃんが料理の練習の処理に付き合ってんだ……だから今日は食堂に行けそうにない。」

ツカサ「クインティアさんが料理？」

ジャック「ああ。昨日テレビで手料理が出来ると未来の旦那が喜ぶだなんだの言いやがってお陰でこっちは……」

ジャックがブツブツ文句を言っていると……

クインティア「誰が来てるの？」

キッチンの方から声がするとエプロン姿のクインティアがやって来た。

ツカサ「おはようございます。クインティアさん。」

クインティア「おはよう…ツカサ君。何かジャックに用かしら？」

ツカサ「ジャックを朝食に誘おうと思ったんですけど……無理見たいですね。」

クインティア「ジャックは私の練習に付き合ってもらってるの……」

ツカサ「ジャックから聞きました。がんばってください。」

クインティア「ありがとう……そうだツカサ君、良かったらお昼にでも私の料理を食べて感想を聞かせてもらえないかしら？」

ツカサ「別に良いですよ。」

ジャック「そうしてくれるかツカサ。」

ツカサ「？」

ジャックがなぜか喜んでいたがツカサには理由がわからなかった。

ジャック「だったらカケルや天野にも食べて貰おうぜ。」

クインティア「そうね……そうして貰おうかしら……」

ツカサ「だったら僕が伝えてますか？２人とは一緒に朝食を食べる事になってるんです。」

クインティア「じゃあお願い出来るかしら？」

ツカサ「はい。」

回想終わり……

ツカサ「って訳なんだ。」

カケル「そうだったんだ……」

シズク（未来の旦那か／／／／）

シズクはそんなことを思いながらカケルを見ていた。

ツカサ「2人とも予定は大丈夫？」

カケル「僕達は大丈夫だよ。」

シズク「大丈夫だけど……クインティアさんは誰か好きな人がいるのかな？」

カケル・ツカサ「「知らないの？」」

シズクの発言に2人は驚いた。

シズク「知らないよ…」

カケルとツカサは顔を合わせると笑った。

ツカサ「暁さんだよ。」

シズク「暁さんなんだ……」

カケル「ジャックやヨイリー博士達に聞いた暁さんとクインティアさんの話をしてあげるよ。」

カケルとツカサはみんなから聞いた。シドウとクインティアの話をした。

命がけでディーラーを抜けたこと、

助ける力を手に入れるために当時危険とされた人工ウィザードとの電波変換したこと、

電波変換の影響で体がボロボロになっても戦い続けたこと、

みんなを助けるために自爆する敵と共に身を投げたことを……

……

それが愛する女性のためだったことを……

（流星のロックマン3内容です。）

ちなみにWAXAニホン支部の職員はみんな知っています。

数十分後……

シズク「暁さんて凄いね……」

カケル「今はもう電波変換での問題は解決してるからわからないけど凄いよ……暁さん。」

ツカサ「ホントに凄いね。」

3人でシドウの凄さを改めて感じていると……

暁「どうしたお前ら？何が凄いんだ？」

カケル・シズク・ツカサ

「「「暁さん！！！」」」

突然現れたシドウに3人は驚いた。

暁「どうした?そんなに驚いて……」

シズク「今ですね暁さんの武勇伝を聞いていたんです。」

暁「へ〜、武勇伝ってどんな?」

シズク「暁さんがク…!」

カケル「暁さんが遊撃隊、隊長としての今までの活躍を話していたんですよ。」

カケルは突然シズクの口を手で塞ぎ変わりに喋った。

暁「なんか恥ずかしいな…俺そんな大したことやってないぞ?」

ツカサ「そんなこと無いですよ、暁さんはとても凄いですよ。」

カケル「そうです。暁さんは凄いですよ。」

暁「そうか？」

カケル・ツカサ「「そうでよ。」」

暁「お前らも休める時に休んどけよ。いつ敵が攻めてくるかわからないんだからな。」

カケル・ツカサ「「はい！」」

シドウは食器を戻すと部屋に戻って行った……

カケルはシドウが戻って行くのを確認するとシズクの口を塞ぐのをやめた。

シズク「ぷは！……カケル…どうして口を塞いだの！」

カケル「暁さんの前でクインティアさんとの恋愛については話しちゃだめだよ。」

ツカサ「クインティアさんの前でも暁さんとの恋愛の話はしないでね。」

シズク「どうして？聞きたいじゃん。」

カケル「ダメだよ。２人の関係については聞いてはいけないってみんなで決めたの。」

ツカサ「正確には前に聞いたけど話を別の話題に変えられて何も聞けなかったからもう聞かないことにしたんだよね。」

シズク「そうなんだ……」

カケル「だから２人には聞かないこと……わかった。」

シズク「は～い。」

このあと３人はいろいろ話したあと自分の部屋に戻って行った。

ＷＡＸＡの休日（後書き）

この日常の話はまだまだ続きます。

ＷＡＸＡの休日２（前書き）

書いていたら話が長くなり予想より長くなってます。

２じゃ収まらないな……

ＷＡＸＡの休日２

～ＷＡＸＡの宿舎～

部屋に戻ったカケルとシズクは３時間かけてシズクの持ってきた荷物を整理を終えた。

シズク「終わった……」

カケル「シズク……荷物が多いよ……」

シズク「どれも大切な物なんだもん、これ以上減らせなかったの。」

２人はシズクのベットに座り話していた。

カケル「これからどうする？ツカサ君が言ってた集合時間まで時間あるけど……」

ツカサはＰＭ０：００にジャック・クインティアの部屋の前に集合と言っていた。

それまでまだ３０分ほど時間に余裕がある。

シズク「荷物を整理して疲れたからマッサージして♪」

カケル「やだよ、僕も手伝ったんだから……」

シズク「マッサージして♪」

カケル「やだ。」

シズク「して♪」

カケル「……」

シズク「……カケルが朝、私を抱き締めて寝た事許してあげるから。」

カケル「！……シズク……起きてたのか……」

シズク「あんなに強く抱き締められたら起きちゃうよ／／／／／／／／／／」

今日の朝、シズクはカケルよりも早くから起きていた……

カケル「／／／

シズク「カケル、はい♪」

シズクは仰向けになると腕を広げた。

カケル「……」

シズク「立たせて♪」

カケル「……これでいい？」

カケルはシズクを抱き締めて持ち上げて立たせた。

シズク「うん／／／

数分後……

玄関のブザーを鳴らすとジャックが出てきた。

ジャック「みんな入ってくれ。」

3人【お邪魔します。】

カケル、シズク、ツカサの3人はジャックとクインティアの部屋に入った。

3人はキッチンにいたクインティアに挨拶をすますとリビングのテーブルに座った。

カケル（クインティアさんの料理か……今まで聞いたことないな……）

ツカサ（どんなのが出てくるのかな?）

シズク（楽しみ♪）

それぞれの思いを胸に料理が出来るのを待った。

数分後……

クインティア「ジャック、運ぶの手伝って……」

ジャック「わかったよ、ねえちゃん。」

シズク「私も手伝います。」

シズクが立ち上がるが……

クインティア「手伝わなくていいわ、シズクちゃん…お客さんなんだから……」

シズク「わかりました……」

シズクは再び席に着いた。

ジャックとクインティアが運んで来た料理はどれも美味しそうだった。

運び終わるとクインティアは再びキッチンで料理を作り始めた。

ジャック「じゃあ食べようぜ。」

カケル「クインティアさんは食べないんですか？」

クインティア「私はまだ作る料理があるから……」

カケル「そうですか…」

ジャック「……」

４人【いただきます。】

４人はまず近くの料理を食べた。

３人【……美味しい！】

カケル、シズク、ツカサの３人は美味しさに言葉を漏らした。

クインティア「口にあってよかったわ……」

クインティアは嬉しそうだった。

カケル（クインティアさんは頭もいいし、料理も出来るのか……すごいな。）

シズク（……私もがんばらないと……）

ツカサ（暁さんは幸せだね。）

ジャック（……）

このあと4人は会話しながら美味しそうに料理を食べ続けた……

1時間後……

4人【……】

4人は言葉を失っていた…

クインティア「……どうしたの？みんな……」

クインティアはそう言いながら料理を置いた…

カケル「……まだ作るんですか、クインティアさん……」

クインティア「……練習だからもう少し作ろうと思ってるんだけど……どうかしたの？」

４人【……】

４人は１時間、料理を食べ続けたがクインティアが料理を凄いスピードで作り続けていた。

４人の胃袋は限界だった……

料理はまだ残っている。

シズク「もう練習はいらないと思いますよ。とても美味しいですもん。」

ツカサ「クインティアさんの料理は一級品でしたよ。」

ジャック「ねえちゃん、ホント、もう作らなくていいって。」

カケル「美味しかったです……」

クインティア「そう……わかったわ。練習はここまでにしようかしら……」

４人【た、助かった…】

４人がそう思っていると……

クインティア「デザートもあるから良ければ食べてね。」

クインティアは笑っていた。

カケル（気持ちは嬉しいが……多いな……）

ツカサ（残したら失礼だよね……）

シズク（もう限界だよ……）

ジャック（４人でも処理できないか……）

４人には余裕がなかった。

カケル「クインティアさんは食べないんですか？」

クインティア「私は味してたからもう食べられない……」

カケル「そうですか…」

４人【（食べるしかないか（よね）……）】

４人はがんばりながら料理を食べ続けた……

ＷＡＸＡの休日２（後書き）

クインティアさんの料理の腕って原作ではどうなんでしょうね？

りんごをシドウの病室で剥いていたので包丁は使える事はわかってたのですが……

味はどうなんでしょう……

クインティアさんは頭が良く万能なイメージがありますがどうなんでしょう……

ＷＡＸＡの休日３（前書き）

今回のお話でやっと書きたかった事が書けました。

WAXAの休日3

さらに1時間後……

3人【お邪魔しました。】

カケル、シズク、ツカサ、ジャックの4人はジャックとクインティアの部屋を出た。

ジャック「俺1人じゃ食べきれなかった……ホントにありがとな。」

ジャックはホントに感謝していた。

ジャックに見送られ3人は自分の部屋に戻っていった……

シズク「苦しいよ……カケル……」

カケル「横になって……大丈夫だから……」

カケルはひとまずシズクをソファーに寝かせた。

シズク「……産まれそう……」

カケル「何がだよ！」

シズクのボケにカケルがツッコミを入れていると…

♪～♪～♪～

ハンターＶＧが鳴った。

カケル「！……電話か……ヨイリー博士からだ。」

カケルはすぐに電話に出た。

するとハンターＶＧからモニターが現れた。

ヨイリー「もしもしカケルちゃん、今大丈夫かしら？」

カケル「はい。大丈夫です。」

ヨイリー「実は今ディーラーから押収した兵器を改造してるの。けどなかなかコントロールがうまく出来なくてね……手伝って貰えないかしら？」

カケル「わかりました。今から向かいます。」

ヨイリー「お願いね。」

ヨイリーとの電話が切れた。

カケル「シズク、用事が出来たから出掛けてくるね。」

シズク「そんな……私とお腹にいるこの子はどうなるの？」

シズクは軽くお腹をさすった。

カケル「そのボケ……まだ続いてたんだ……」

シズク「本当に行っちゃうの？」

カケル「そこまで遅くはならないと思うから。」

そう言い残すとカケルはＷＡＸＡニホン支部に向かっていった。

シズク「……はぁ～」

リエル『どうしたの？シズク。』

シズクの溜め息に反応するようにリエルが出てきた。

シズク「だって～カケル全然一緒にいてくれないんだもん……寂しいじゃん。」

リエル『仕事以外は一緒にいてくれてると思うけど……』

シズク「……幼い頃はもっと一緒にいてくれたもん。」

リエル『いつから一緒にいてくれなくなったの？』

シズク「……あれは2年くらい前かな……お父さんの転勤でアメロッパに移住した時にかな……」

シズクは2年前の事を話始めた。

2年前……カケルとシズクはシズクの父親の仕事の都合でアメロッパに家族で引っ越す事になった。

アメロッパのニホン学校に編入するさいに受けた試験でカケルは電波に関するテストで異常とも言えるほどの結果を出した。

ニホンにいた頃は科学に詳しい子供ぐらいにしか思われていなかった……

学校の先生の紹介で大学に紹介されたカケルの研究が始まった。

幼い頃から読みあさった両親の研究データを元に新たな理論を完成させていった。

そして研究を続けていたカケルは運命的な出会いを果たす。

ヨイリー博士との出会いだった。

ヨイリー博士はカケルの才能に驚きヨイリー博士はカケルを試す事にした。

当時完成したばかりのウィザードとの電波変換技術。

ヨイリー博士は開発したばかりのアシッドの設計図をカケルに見せた。

当時人工ウィザードとの電波変換では体に大きな負担がかかった。

ヨイリー博士はカケルに

ヨイリー「負担を無くすためにどうすればいいか考えてみてくれないかしら。」

この一言でカケルの研究に没頭した……

3ヶ月後……

カケルはヨイリー博士の想像を越えた事をしていた。

カケルは人工ウィザードとの電波変換で発生する負担無くし2体のウィザードの設計図を完成させていた。

その内の1体はデータ不足で不完全だったが電波変換出来るまで完成させていた（ベルセルクです）。

それを見たヨイリー博士はカケルを遊撃隊にスカウトした。

カケルはウィザードの開発に足りないデータを提供することを条件に遊撃隊に参加を決めた。

カケルは来年からの入隊が決まりヨイリー博士から提供してもらった水属性ウィザードのデータを元にもう1体のウィザードを完成させた（リエルです）。

この2体のウィザードは四大属性を扱う事を目的に開発されており単体でもかなりの戦闘能力を持つが力を合わせる事で最大の力を発揮する。

完成させたウィザードは幼馴染みに合わせて作られておりシズクにプレゼントした。

カケルはこのあとも研究を続け、コダマ小学校の入学式に合わせてニホンに向かうことになった。

カケルは研究中は大学に泊まる事も増えシズクと一緒にいる時間は減っていった……

話終わり……

シズク「昔は一緒に寝るなんて当たり前でカケルは良く私に抱きつ

いてきたな～……はぁ～……」

リエル『……アメロッパにいた頃はそんなに寂しそうにしてなかったじゃない。』

シズク「あの頃はカケルが約束通り、1日1回電話してくれてたもん。エルも知ってるでしょ。」

リエル「何で今は数時間、会えないだけでそんなに寂しそうにするの？」

シズク「近くにいればいるほど会えない時の寂しさが辛くなるの……カケル早く帰って来ないかな……」

リエル（これは重症ね……）

シズクはカケルの帰りを待った。

5時間後……

～ＷＡＸＡニホン支部～

ヨイリー「ありがとうね、カケルちゃん。あなたのお陰でかなりコントロール出来るようになったわ。」

カケル「ですが完全にコントロールするにはもう少しかかりそうですね。」

スタッフ（男）「でも君のお陰でかなり破壊衝動に歯止めがかかったよ。」

カケル「戦力にはなりますが特定の敵のみを攻撃するようにしないと実戦には使えませんね……」

スタッフ（女）「それは私達が調整するわ、休日なのに呼び出してごめんね。」

カケル「大丈夫です……しかし……ウォーロックには言ってあるんですか？」

ヨイリー「もちろん言ってあるわ。ロックちゃん、子分としてこき

使ってやるっていってたわ。」

カケル「ウォーロックらしいですね……じゃあそろそろ失礼します。」

ヨイリー「気を付けてね。」

カケル「はい。」

カケルは宿舎に戻っていった……

スタッフ（男）「……しかし彼はホントに小学生ですか……信じられない…」

スタッフ（女）「我々が思い付かないような方法でコントロールをほぼ可能にしました……」

ヨイリー「私達大人が負けてられないわね。残りの作業は私達でやるわよ。」

スタッフ「「はい。」」

3人の作業は続いた。

ＷＡＸＡの休日３（後書き）

今回のお話でカケルの過去が書き終わりました。

やっと書けましたって感じです。

ディーラーから押収した兵器が何なのかみんなわかったかな？

今後のお話で出てきます。

ＷＡＸＡの休日４（前書き）

感想、アドバイス、一言を皆さん気軽に書いて下さっていいですよ。

貰えると自分の小説が読者目線でわかるので書いて下さると助かります。

お待ちしてます。

ＷＡＸＡの休日４

ＰＭ７：３０

～ＷＡＸＡ宿舎～

カケル「ただいま～」

シズク「お帰り、カケル！」

リビングの方からやって来たシズクはカケルに抱きついた。

カケル「！行きなり抱きつかないでよ……」

シズク「いいの♪」

シズクは嬉しそうだった。

カケル「食べ過ぎの方は大丈夫みたいだね。」

シズク「うん。」

カケル「……」

シズク「♪」

カケル「……いつまで抱きついてるの？」

シズク「運んで♪」

カケル「やだ。」

シズク「……朝…私を抱き締めてた甘えん坊さんは誰だったかな～？」

少し笑いながらシズクは言った。

カケル「……どこまでですか？」

シズク「リビングのソファーまでかな♪」

カケル「了解。…ちょっと失礼。」

カケルはシズクをお姫様抱っこで持ち上げた。

シズク「／／／／／／／／／／／／／／」

シズクは顔を真っ赤にした。

2人はリビングに向かった。

カケル「ここでいいの？」

シズク「うん／／／／／／／／」

カケルはシズクをゆっくりとソファーに下ろした。

カケル「これからどうする？食堂行く？僕はお昼の食べ過ぎでちょっと食べれないんだけど……」

シズク「私もちょっと食べれないな……」

シズクもお昼の食べ過ぎで食べれないようだ。

カケル「これからどうする？」

シズク「そうだね……！カケル、久しぶりに一緒にお風呂入ろう

よ。」

カケル「ダメだよ。」

シズク「何で？日本にいた頃はほぼ毎日一緒に入ってたじゃん。」

カケル「そう言う訳じゃ無いけど。僕達はサテラポリスの一員何だからいつ呼び出しがかかるかわからないから、お風呂に一緒に入ってたら召集に2人とも遅れるたら大変でしょ。」

シズク「わかるけど……昨日のぼせたからから……恐いな…」

泣きそうな目でカケルを見つめた。

カケル「…一理あるな…」

シズク「だから一緒に入ろ♪」

カケル「だめ……シズクなら1人で入れるから大丈夫……自分に自信を持って。」

カケルはシズクの目を見て優しく言った。

シズク「……わかった……」

シズクはカケルの説得に納得したようだ。

カケル「それに小学6年生にもなって異性と一緒にお風呂に入ってる人なんていないだろうし……」

シズク「もしかしたら身近にいるかも知れないよ?」

カケル「もし身近にいたらシズクが一緒にお風呂に入って欲しいときに一緒に入ってあげるよ。」

シズク「本当?」

カケル「うん。いないと思うけど……」

シズク「よし、月曜日から学校で聞き込みよ!」

シズクの目に火が灯るが…

カケル「恥ずかしいからそんなことしないで……」

シズク「それじゃ見つけられないじゃん。」

カケル「だから約束したの。」

シズク「カケルのケチ！減るもんじゃ無いんだからいいじゃん！」

カケル「そのセリフは女の子が使うようなセリフじゃないよ……」

シズク「へへ、お父さんの真似してみた♪」

カケル「僕の研究を覗く時におじさんよく言ってたな……」

カケルは昔を思い出した。

シズク「そんなことより早くお風呂に入ろ♪」

カケル「うん……じゃないだからダメだって！」

シズク「ケチ……」

そう言い残すとシズクは服を取りに部屋に向かった。

カケル「見つけられたらいいよ。」

カケルは笑顔で言った。

シズク「見つける方法が無いもん……カケルのバカ！」

怒りながらとお風呂場に向かって言った……

カケル（…怒らせちゃったかな？）

カケルにはシズクが気持ちがよくわからなかった……

……そして知らなかった…身近に一緒にお風呂に入ってる人がいることを……

その頃……

～スバルの家～

スバル「ヘックション！」

部屋にいたスバルは何の前触れもなく、くしゃみをした。

ミソラ「スバル君……風邪？」

スバル「何だろう？別に寒気は無いけど？」

ミソラ「私がいない時に何かしてたの？」

今日、ミソラは朝から仕事だった。

ミソラは仕事を減らしたあとでも休日と平日の1～2日は仕事が入っている事が多い。

スバル「別に何もしてないんだけどな……今日は早めにお風呂に入って寝ようかな？」

スバルが呟いていると……

ミソラ「だったら早くお風呂に入ろ♪」

スバル「……」

スバルは困った顔でミソラを見るが……

ミソラ「入ろうよ♪スバル君♪」

最高の笑顔でスバルを見た。

スバル「／／／／／うん。」

またしても断る事が出来ずにミソラとお風呂に向かって行った……

～ＷＡＸＡ宿舎～

カケルはシズクがお風呂に出たあと入れ替わりにお風呂に入った。

出たあと2人はリビングにいたが……

カケル「……」

シズク「……」

カケル「シズク？」

シズク「……」

無視された。

カケル「シズク…怒ってる？」

シズク「……」

無視された。

カケル「…僕……何かした？」

シズク「……」

無視された。

カケル（ヤバイな……完全に怒ってるな……気まずい……非常に気

まずい……何とかして機嫌直さないと……）

シズクとは長い付き合いのカケルはシズクが無視する時はかなり怒っている事を意味している事を知っている……

カケル「シズク……僕に出来る事なら何でもするから許してよ……」

シズク「……何でも？」

シズクは少し反応した。

カケル「うん。可能な事なら……」

シズク「……じゃあ今日も一緒に寝て。」

カケル「……わかった、別にいいよ。」

シズク「じぁあ寝よ（やった♪）。」

カケル「どっちの部屋で寝るの？」

シズク「カケルの部屋でいいよ。」

カケル「わかった。」

シズク（またカケルと一緒に寝れる♪）

シズクの心の中でとても喜んだ。

2人は今日も一緒に寝る事になった……

ＷＡＸＡの休日４（後書き）

これで今回の話が終わりになります。

なぜカケルとシズクを取り上げたか疑問に思っている人もいるかも知れませんが意味があります。

その意味がわかるまでお楽しみに。

次回、

奴が動きます。

そしてついにＲの正体が……

お楽しみに……

スバル君……（前書き）

今、活動報告を使って皆さんと意見交換をしたいと思っています。

流星のロックマン
シャイニングオブダーク
とは関係ないです。

気軽に書いて意見交換してくれると嬉しいです。

現在の話題は
「流星のロックマンのヒロインは誰?」です。

僕はミソラちゃんだと思います。

理由は活動報告をご覧ください。

多くの人が書いてくれたら2、3と新たな話題を出して行こうと思います。

皆さんのコメント、お待ちしてます。

意見交換しませんか?

スバル君……

数日後……

～月内部データベース前～

月内部にはRとブルース（データを届けたあと戻ってきた。）がいた。

カーネル「三基のサテライトの制圧、終了したぞ……R。」

三基のサテライトを制圧したカーネルとアイリスは月に戻っていた。

R「ありがとう、カーネル、アイリス。セレナードもデータが集め終わってペガサスに向かったよ。フォルテはやっぱり時間がかかりそうだね。」

セレナードは数時間前に戻り１０体のネットナビ（市販のネットナビ）を連れてペガサスに向かっていた。

カーネル「これからどうするんだ……R？」

R「僕達の目的を妨害するサテラポリス遊撃隊と本部があるＷＡＸＡニホン支部を攻撃する。」

ブルース「遊撃隊のメンバーはどこにいるんだ？」

R「データによるとコダマタウンに遊撃隊のメンバーのほとんどがいるらしい。そしてロックマンも……」

アイリス「……誰が行くの？」

R「新しく出来たプログラムを二つほど試したいんだ……だから新しくメンバーに行って貰うよ……データベースアクセス！」

Rが唱えると２０体のネットナビが現れた。

R「これだけいると名前をつけるのが大変だね。」

Rは

水色のリングがあり黄色と宇宙柄のボディを持つネットナビ
コスモマン・R

コウモリの様な翼を持つ吸血鬼の様なネットナビ
シェードマン・R

青い翼を持つ人形ネットナビ
スワローマン・R

ピンク色で頭に黄色の帯をつけたネットナビ
ロール・Ｒ

黄色いでゴツいボディのネットナビ
ガッツマン・Ｒ

赤いボディで頭の上に炎を灯したネットナビ
ファイアマン・Ｒ

水色で肩に飛行機のエンジンをつけたネットナビ
ウインドマン・Ｒ

背中に雷神の太鼓をつけて頭に避雷針のネットナビ
サンダーマン・Ｒ

歯車が体に無数ある強靭なネットナビ
メタルマン・Ｒ

大木の様なボディを持つネットナビ
ウッドマン・Ｒ

ジャンク（ゴミ）が集まって出来たネットナビ
ジャンクマン・Ｒ

頭がコンピュータのネットナビ
ナンバーマン・Ｒ

鎧に身を包んだ大型のネットナビ
ナイトマン・Ｒ

暗殺者のナビだった忍者のネットナビ
シャドーマン・R

カエルの様なネットナビ
トードマン・R

体かマグネットで出来た磁力を操る赤いネットナビ
マグネットマン・R

紫色で砲撃重視のネットナビ
ナパームマン・R

黄色でヘリコプターに変形できるネットナビ
ジャイロマン・R

白いナース姿のネットナビ
メディ・R

世界を何度も救った伝説の青いネットナビ
ロックマン・R

と名前をつけた。

Rは名をつけ終わるとロックマンの前に立ち向き合った。

二人の伸長は全く同じだった……

R「……昔を思い出す……人間を信じていた……哀れな自分を……」

ロックマン「？何のことR君は……」

ロックマンは喋るのを止めた……

R「……君は喋らなくていい……」

R・ロックマン「「君の力は僕が使うから。」」

ロックマンはRと全く同じ事を喋った。

R「（やっぱりブルースを操った時よりしっくり来る……けど戦うには…）……みんなロックマンにソウルを！」

全員（ロックマン以外）【はい。】

全員（ロックマン以外）が返事をするとロックマンにソウルを与えた。

ロックマンは

ロールソウル
ガッツソウル
ファイアソウル
ウインドソウル

サンダーソウル
メタルソウル
ウッドソウル
ジャンクソウル
ナンバーソウル
ナイトソウル
シャドーソウル
トードソウル
マグネットソウル
ナパームソウル
ジャイロソウル
メディソウル
ブルースソウル
カーネルソウル
を手に入れてソウルユニゾンが可能になった。

R「戦場じゃどの力が必要か使うかわからないからね……あの力を持っていくか…データベースアクセス！」

Rが唱えると二つのデータを産み出した。

1つはサーチソウル……もう1つはダークチップ…

ロックマンはさらに
サーチソウル、ダークチップを手に入れてカオスユニゾンが可能になった。

R「（これだけのプログラムを手に入れても今の僕は届かないか…

……そんなことより……）君達には２つほど新しいプログラムを搭載しているんだ……１つは電波世界でも長時間入られて１００％の力を出せるプログラム……もう１つは一定量のダメージを受けると内部のデータチップごと自爆する自爆プログラム…もうデータチップを心配しながら戦わなくていいから安心してね。」

全員【安心？】

全員、戦いに安心を求めて良いのかわからなかった。

Ｒ「今から呼ばれたナビはサテライトを経由してウイルスを連れてＷＡＸＡニホン支部に向かってね。」

Ｒは
シャドーマン
ジャンクマン
ナイトマン
コスモマン
ナパームマン
ナンバーマン
を呼んだ。

Ｒ「作戦は頭にインプットさせるから集まって。」

Ｒの近くに六体が集まり作戦を頭に入れた。

R「残りのナビにも作戦をインプットさせるから集まって。」

残りのネットナビ（ロックマンを除く）も集まった。

R「作戦は今から五時間に開始するあの妙な力を使う敵に気を付けて、隊長の命令は聞くことわかった？」

全員【はい。】

シャドーマン「行くぞ！」

最初にＷＡＸＡニホン支部を攻撃する５体は隊長（シャドーマン）の掛け声と共に向かっていった。

ロックマン（Ｒ）「僕達も行こう。」

次に遊撃隊メンバーを攻撃する残りのネットナビが隊長（ロックマン）の掛け声と共に向かって行った。

ブルース「俺達は何をすればいいだ。Ｒ？」

Ｒ「君達はソウルを集めるために来てもらっただけだよ。今は待機してて。」

アイリス（……私、関係ないな……）

アイリスが心で思っていると……

R「関係ない事はないよ。この戦いの戦闘データを元に君達には１２０％の力を出せるようになる特別製を作って渡すつもりだからそれまで待っててね。」

アイリス「！……わかりました……」

会話が終わると3人は光となって離れて行った……

R「今回の戦いであの妙な力についてわかるはずだ……そして君の実力も……君に会うのも久しぶりだね…スバル君……」

Rは1人呟いていた。

スバル君……（後書き）

今回のお話でロックマンエグゼ6に出たソウルユニゾン以外は全て出てきました。

大規模の戦いが起きそうです。

スバル達の運命は……次回に続きます。

Rの正体皆さんとわかりましたか？

もう少ししたら名前を言うと思います。

感想、アドバイス、一言、活動報告のコメントをお待ちしてます。

遊撃隊の危機（前書き）

前回の前書きで書いた意見交換の話ですが……

皆さん沢山の意見ありがとうございます。

読んでいて共感出来る内容も多く読んでいて面白かったです。

ですが活動報告だと皆さんの貴重な意見が増える後とに最初の意見が読みにくくなる事に気づきました。

なので今日からは意見交換の内容を前書きか後書きに書くので皆さんの意見を
「感想」に書いて送って下さい。

無論強制では無いです。

お題は新しくしてみます。
「ロックマンエグゼ、流星のロックマンで一番思い出に残っているキャラクターは誰?」です。

私はアイリスです。

最初に見たときはネットナビだと全く思いませんでした。

清楚な感じで新しいヒロインだなと思っていました。

最後に熱斗君に思いを伝えなかった彼女を見たときに涙が止まりま

せんでした。

エグゼ６の最後は悲しかった……

書いてくださるととても嬉しいです。

皆さんの意見をお待ちしてます。

遊撃隊の危機

約五時間後……

ＰＭ２：００頃……

～ＷＡＸＡニホン支部～

アシッド『！』

アシッドが突然ハンターＶＧから飛び出した。

暁「！どうしたアシッド？行きなり飛び出すなよ……仕事中だぞ。」

アシッド『シドウ、今すぐ長官に連絡を……敵です！』

暁「！……わかった、今すぐ連絡する。数は？」

アシッド『……ウィルス？のような存在を１０００体以上感じます……電波体が５？…いや６体……この反応はネットナビです！』

暁「本格的にここを潰しに来たか……」

クインティア「シドウ？どうしたの？」

シドウとアシッドが真面目に話している2人を見て近づいてきた。

暁「どうやら敵が攻めて来たようだ。俺は今から長官に伝えてくる、クインティアは非戦闘員の避難と遊撃隊に連絡を頼む。」

クインティア「わかったわ。」

クインティアはほかのサテラポリスのメンバーに伝えるため離れていった。

暁「俺達も行こう……敵の到着までの時間は？」

アシッド『上空から約8分ほどで到着します。』

暁「8分か……アシッドはリアルウェーブシールドを展開の準備に向かってくれ長官のところには俺だけで行く。」

アシッド『わかりました。5分後に戻ります。』

暁「ああ。」

2人は別れそれぞれの向かう場所に向かっていった。

その頃……

～コダマタウン～

現在、五時間目の授業中…スバル達のクラスは体育で校庭でドッチボールをしていた。

現在コートの中に残っているのは、
（赤白でチームを分けてある。）

赤
スバル
ミソラ
ツカサ

白
カケル
シズク
委員長
ジャック

となっている。

何故メンバーが残っているかと言うと……

スバル、カケル、ツカサ、ジャックは運動神経がいいので当たらず。

ミソラ、シズクは現在クラスのアイドル的な立場にあり男子から攻撃はされず、女子から攻撃されてもスバル、カケルの近くにいるので当たらない。

委員長は……恐くて男子は誰1人と委員長は狙わず女子からの攻撃は自分で取っていた。委員長は運動神経もよかった。

ボールは今ジャックが持っている。

委員長「ジャック、スバル君を狙いなさい！」

後方で委員長からの激が飛んだ。

どうやらスバルとミソラがいつも近くにいるのが気にくわないらしい……

ジャック「！……スバル！悪いが消えて貰うぜ！」

ジャックは少し考えたあとスバルに向かってボールを投げた。

スバル「よっと！……僕だってまだ消えたくない！」

スバルはボールを捕るとジャックに投げ返した。

ジャック（これは捕れる！）

ジャックはボールを捕るために前に出るが……

ピピ！

ジャック「！」

突然ハンターＶＧが鳴るとディスプレイが現れた。

ジャックはディスプレイに気を取られボールがお腹に直撃した。

ジャック「……ねえちゃんのせいで当たっちまった……」

クインティア「何を言っているの？」

通信してきたのはクインティアだった。

当然クインティアには言葉の意味がわからない。

周りを見ると遊撃隊のメンバーのハンターＶＧからディスプレイが飛び出していた。

スバル「遊撃隊メンバー全員に通信何て何かあったんですか？クインティア先生。」

クインティア「先生は入らないわ。現在ＷＡＸＡニホン支部にウィルスやネットナビが向かって入るわ……遊撃隊メンバーは、直ちにＷＡＸＡニホン支部に向かって欲しいの。」

ツカサ「クインティアさん、数はどれくらいですか？時間は？」

クインティア「アシッドによるとウィルスが約１０００体以上、ネットナビが６体らしいわ……約５分後に攻めてくるわ。」

カケル「わかりました。今すぐ向かいま……！」

突然学校の一部が爆発した。

ゴン太「な、何だ！？」

シズク「みんな、空を見て！」

全員【！】

空を見ると良くは見えないが実体化したネットナビが約１０体がいた。

カケル「クインティアさんこちらにもネットナビが約１０体ほど来てます。僕達はこいつらをかだつけてから向かいます。」

クインティア「わかったわ……気をつけてね。」

遊撃隊メンバー【はい！】

クインティアとの通信が切れた。

育田「みんな、体育館に避難するんだ！」

育田先生の一言でクラスのメンバーは体育館に避難し始めた。

悲鳴があちらこちらで聞こえる。

委員長「何が起きてるの？」

ミソラ「ルナちゃん、避難してここは私達が守るから。」

キザマロ「委員長、早く避難しましょう。」

委員長「……わかったわ、みんな気をつけてね。」

委員長はそう言い残すとキザマロと体育館に向かっていった……

ウォーロック『久しぶりに暴れてやるぜ！』

ウォーロックが突然ハンターＶＧから飛び出した。

スバル「！行きなり飛び出さないでよ。」

ウォーロック「行くぞ、スバル！」

スバル「聞いてないし……（ロックらしいか……）みんな行くよ！」

全員【うん。（おう。）】

全員【トランスコード！】

スバル「シューティングスターロックマン！」

ミソラ「ハープ・ノート！」

カケル「ベルセルク・ビー！」

シズク「リエル・フェザー！」

ツカサ「ジェミニ・スパーク！」

ジャック「ジャック・コーヴァス！」

ゴン太「オックス・ファイア！」

7人は電波変換をした。

上空で見ていたロックマンは……

ロックマン（R）「7人か…予定より1人多いけど問題ないな……学校を攻撃するはずだった、ウインドマンとジャイロマンが攻撃してくれ、残りは予定通りに決められた敵と戦ってね。」

ネットナビ達【はい。】

ロックマンを除く１３体は先に地上に降りていった。

ロックマン（Ｒ）「スバル君は僕達を止められるかな？」

ロックマンも追いかけるように降りていった。

遊撃隊の危機（後書き）

この戦いは長くなりそうです。

しっかり戦況を書けるか少し心配です。

伝えられるように頑張ります。

意見交換、感想をお待ちしてます。

遊撃隊の危機2（前書き）

寝てしまって更新が遅れました。

遊撃隊の危機2

～ＷＡＸＡニホン支部～

暁「クインティア、どうだった？」

敵が来る予想３分前にクインティアは外に出た。

外にはシドウを始め戦闘員であるサテラポリスのメンバーが約３０人、ウィザードが約５０体が展開していた。

クインティア「コダマタウンにもネットナビが現れたらしいわ……増援は期待できないわ。」

暁「そうか……避難の方は？」

クインティア「ほとんどの人は避難し終わったわ。けどヨイリー博士を筆頭に数人の科学者が残ってあの兵器の調整を続けてるわ。」

暁「あれか……間に合うのか？」

クインティア「わからないわ……けど私達で敵を全て倒せば必要ないわ。」

暁「そうだな……」

シドウとクインティアが話していると……

サテラポリス１「敵の接近を確認！戦闘員は配置に着いてください……リアルウェーブシールド展開！」

入り口付近にあるリアルウェーブシールドのプロジェクターから巨大なシールドが展開された。

そしてウィザードや戦闘員は配置に着いた……

暁「皆はＷＡＸＡニホン支部を防衛しつつ敵を殲滅してくれ！俺達２人はウェーブロードからネットナビを狙う……皆、健闘を祈る。」

全員【了解！】

暁・クインティア「「トランスコード！！」」

暁「アシッド・エース！」

クインティア「クイーン・ヴァルゴ！」

隊長のシドウが話したあと2人は電波変換した。

暁「行くぞ！」

クインティア「わかったわ。」

アシッド・エースとクイーン・ヴァルゴは光となって上空のウェーブロードに向かって行った……

上空から降りていたシャドーマン達にも敵が見えた。

シャドーマン「（Rが言っていた2体か！）ウイルスどもは2体に構わずＷＡＸＡニホン支部に突撃し破壊しろ！」

ウイルス軍団【グォォォォォォォォォォォォ！】

大量のウイルスの叫び声が響いた。

ウイルスはネットナビ達より先にＷＡＸＡニホン支部に向かって行った。

ナパームマン「俺とナンバーマンは作戦通りに行くぞ。」

シャドーマン「お前は作戦の要だ。ウイルスに紛れて配置に向かえ、ナンバーマンは……正面で爆弾を適当に投げて注意を引いてろ。」

シャドーマンはナパームマンに期待しているように言ったがナンバーマンには適当に言った。

ナンバーマン「何で私には投げやりな言い方をするのですか！」

シャドーマン「さっさと行け！」

シャドーマンに言われ2体はウイルスに紛れて別々に降りていった。

シャドーマン「コスモマン、2体が来たら注意を引いてろ。先手を取る。」

コスモマン「わかった。」

シャドーマン「……」

シャドーマンは突然その場から消えた。

コスモマン「お前らも手伝え。」

ジャンクマン「わかったぜ。」

ナイトマン「わかった。」

3体はアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴが来るのをまった……

暁「バトルカード・エアスプレッド！」

クインティア「バトルカード・ネバーレイン！」

向かってくる大量のウイルスを攻撃しながら2人は進んでいた。

暁「俺達は狙ってないのか？」

クインティア「やはりＷＡＸＡを……」

ウイルス達は2人を無視してＷＡＸＡニホン支部に向かって言った。

暁「ネットナビの場所はわかるか、アシッド。」

アシッド・エースは攻撃しながらアシッドに聞いた。

アシッド『ウィルスの大軍の後方に3体、ほかの3体はウィルスに紛れているのか発見できません。』

暁「そうか……ココロフォース！」

アシッド・エースは光に包まれるとブルースフォースの姿に変わった。

暁「まずは後方の3体を狙う、突っ込むぞクインティア背中に捕まれ。」

そう言いながらアシッド・エースは背中に光の翼を展開した。

クインティア「えっ／／／／／／／／／／／／／／」

バイザーでよく見えないがクイーン・ヴァルゴの顔が少し赤くなった。

暁「どうした？急ぐぞ。」

アシッド・エースは背中を向けていたのでクイーン・ヴァルゴの顔が赤くなっている事に気づかなかった。

クインティア「わ、わかったわ／／／／／／／。」

クイーン・ヴァルゴはアシッド・エースの背中に抱きついた。

暁「離れるなよ！ネオウイングブレード！」

アシッド・エースは猛スピードでウイルスの大軍に突っ込んで行った……

数十秒後……

暁「……もうすぐウィルスの大軍から抜ける、ネットナビに狙われる可能性がある注意してくれ。」

クインティア「わかったわ。」

暁「クインティア……気を付けろよ。」

クインティア「シドウも気を付けて……」

この会話の直後にウイルスの大軍から抜けた……

コスモマン「来たか！コスモプラネット！」

コスモマンの背後の空間が歪みそこから黄色い球体が無数に飛び出した。

ジャンクマン「ボルトミサイル！」

ジャンクマンの周りに無数のボルトが現れて敵に放った。

ナイトマン「キングダムクラッシャー！」

ナイトマンの手に巨大な鉄球が現れて敵に放った。

3体の大量の攻撃はアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴに向かって行った。

暁・クインティア「「バトルカード・インビジブル！！」」

2人はインビジブルを使った事で攻撃を当たらないくなり攻撃をすり抜けた。

あと2人は別れ左右から攻めようとしたが……

ジャンクマン「やはりそう来たか、バトルチップ・ブラインド！」

ジャンクマンがバトルチップを使うと強力な光が発生させた。

暁・クインティア（（何(だ)!?この技……目を！））

2人は今までにこの技を見た事が無くもろに当たってしまった。

光が当たったことでインビジブルが解け一定時間何も見えなくなった。

クインティア「くっ……アクアヴェール！」

クイーン・ヴァルゴはすぐさま水のバリアを周囲に展開し守りを固めた。

暁「くっ……（一定時間、何も見えなくする技か。）頼むぞ、アシッド！」

アシッド『わかりました……』

アシッド・エースがアシッドと話していると……

一瞬でアシッド・エースの背後を取ったネットナビがいた。

シャドーマン（貰った……ヤミウチ！）

シャドーマンは背中の刀を抜きアシッド・エースを背後から斬った

……

ガキン！

……はずだった。

アシッド・エースが左手にソードを展開して攻撃を受け止めていた。

暁「お前が４体目か……」

シャドーマン「……なぜ止められた？見えていないのだろう。」

暁「相棒がいるからな！」

アシッド・エースとシャドーマンは一旦距離を取った。

アシッド『見えるようになるまで私の言う通りに動いて下さい。』

暁「わかってる。」

アシッド・エースは右手に持つブラスターと左手のソードを構えた。

シャドーマン「（奴は今、私が見えていない……近距離戦をするなら今だ……）バトルチップ・バリアブルソード！」

シャドーマンは右手をソードに変えた。

シャドーマン「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

シャドーマンは突っ込んだ！

アシッド「来ます。正面！」

暁「ああ！」

アシッド・エースはソードを出すとアシッドによって位置をわずかに調整され、シャドーマンの攻撃を防いだ。

この後、2人の激しい斬り合いが続いた……

ナイトマン「キングダムクラッシャー！」

クインティア「きゃぁ！」

ナイトマンの技はブレイク性能があるためクイーン・ヴァルゴの水のバリアを貫き攻撃が当たった。

クイーン・ヴァルゴは後方に吹っ飛んだ。

ナイトマン「やはりあいつには私の技が有効のようだ。ウイルスを少し連れていくぞ、あいつは私が仕留める。」

コスモマン「私とジャンクマンとシャドーマンでアシッド・エースを狙う、奴はあの妙な力を持っているからな。」

ナイトマン「わかってる。」

そう言うとナイトマンはウイルスを少し連れてクイーン・ヴァルゴを追いかけて行った。

ジャンクマン「シャドーマンの奴、あいつには遠距離攻撃で戦えと

Rが言っていたのに……」

コスモマン「シャドーマンとの斬り合いが終れば遠距離攻撃を中心に3人であいつを殺るさ。」

ジャンクマン「そうだな。」

2人はシャドーマンとアシッド・エースの斬り合いが途切れるのを待った……

遊撃隊の危機2（後書き）

戦闘が各地で起きるので書くのが難しそうですが頑張ります。

感想、意見をお待ちしてます。

遊撃隊の危機3（前書き）

最近、更新が日に日に遅くなってる……

……気を付けなくては…

遊撃隊の危機3

～コダマ小学校～

ロックマン（R）「僕が敵を孤立させるから皆は指示された敵と戦ってね。」

敵に向かって降下しながらロックマンは言った。

ネットナビ達【了解！】

全員の返事を聞くとロックマンはマスクを着けた。

ロックマン（R）「バトルチップ・スプレットガン×3！プログラムアドバンス！ハイパーバースト！」

ロックマンはハイパーバーストをスバル達に目掛けて放った。

スバル達【！！！！！！】

カケル「みんな飛べ！」

ベルセルク・ビーが叫ぶとスバル達は各自いろんな方向に飛びその場から離れた。

そしてすぐにハイパーバーストが地面に着弾し大爆発を起こした。

ロックマン（R）「今だよ！」

ロックマンが言うと、

ハープ・ノートにはロールとメディ

オックス・ファイアにはガッツマンとメタルマン

ジェミニ・スパーク―Wとジェミニ・スパーク―Bにはサンダーマンとマグネットマン

ジャック・コーヴァスにはスワローマンとシェードマン

ベルセルク・ビーにはファイアマンとウッドマンとトードマン

リエル・フェザーにはウインドマンとジャイロマン

が向かって行った。

ロックマン（R）「僕も行くかな……」

ロックマンもマスクを解除してSSロックマン（これからスバル君の方にはSSを着けます。）に向かって飛んで行った……

ＳＳロックマン視点…

スバル「危なかった……」

ＳＳロックマンは学校の校門上空のウェーブロードに移動していた。

ウォーロック『油断するなスバル、来るぞ！』

ウォーロックには向かってくる敵にすぐに気づいた。

ＳＳロックマンの前に１人の敵が降り立った。

スバル「！…君は…ロックマン……」

ＳＳロックマンは目の前に着地した敵の姿に驚いた。

ロックマン（Ｒ）「久しぶりだね、スバル君……」

ロックマンの言葉にＳＳロックマンは動揺したが……

ウォーロック「騙されんなスバル、奴は復元された偽物野郎だ。」

ウォーロックが動揺を無くそうとしたが

ロックマン（R）「確かに体は復元された偽物だけど中身は本物だよ。」

ロックマンがウォーロックの言葉を訂正した。

スバル「中身は本物？何を言っているんだ！」

言っている意味がわからず聞き返した。

ロックマン（R）「アシッド・エースは知っていると思うよ。同じ方法でブルースを操った事があるからね。」

スバル「……！」

SSロックマンは少し考えるとシドウの報告内容を思い出した。

シドウは戦闘中にブルースの人格が一定時間Rに乗っ取られた事を報告していた。

もちろんスバルの耳にも入っていた。

スバル「Rがロックマンの訳がない！嘘をつくな！」

SSロックマンはバスターを構えた。

ロックマン（R）「もう少し君とは話がしたい……場所を変えないか？ここで離れて戦うのはスバル君にとってもいい話だと思うよ。」

スバル「……わかった。」

スバルは学校を見て少し考えると移動することにした。

学校が戦いに寄って壊れる心配がない場所に移動した方がいいと考えたからだ。

ウォーロック「学校を離れていいのか？スバル。」

スバル「学校の被害を少なくしたいし、みんながいるから大丈夫だよ。」

ウォーロックの言葉に自分の考えを話した。

ロックマン（R）「場所はスバル君に任せるよ。」

スバル「……こっちに来て……」

ＳＳロックマンは警戒しながら委員長の住むマンションの屋上に向かった。

着くとスバルは大きなアンテナの前に立った。

スバル「電波転送！スカイウェーブ！オン・エア！」

ＳＳロックマンは光になって世界各地に繋がるスカイウェーブに向かって行った……

ロックマン（Ｒ）「この先かな？」

ロックマンも光になってＳＳロックマンを追いかけた……

ハープ・ノート視点……

ミソラ「凄い爆発だったね……」

ハープ・ノートは爆発を避けたあと再び校庭に戻っていた。

ハープ『みんなと離れちゃったわね……』

2人が話していると……

ロール「ロールアロー！」

メディ「カプセルボム！」

上空から声が聞こえた。

ミソラ「！」

ハープ・ノートはすぐに後ろに飛んで避けると地面に矢が数本刺さり、同時に落ちてきたカプセルが爆発した。

ロール「外したみたいね……」

メディ「これで勝負が着いてもつまらないけどね。」

そう言いながらロールとメディがハープ・ノートの前に降りてきた。

ミソラ「あなた達が私の相手ね。」

ハープ・ノートはギターを構えた。

ロール「Rから聞いてるわ。あなたは遊撃隊で一番戦うことが苦手な事。」

メディ「私達2人に勝てるかしら?」

ロールとメディも構えた。

ミソラ「……以前の私なら無理だったかも知れないけど今は違うよ……ココロフォース!」

ハープ・ノートが叫ぶと光に包まれてロールフォースの姿に変わった。

ロール・メディ「「!」」

それを見たロールとメディは後ろに下がり距離をとった。

メディ「これってRが言ってた力じゃないの?」

ロール「どうなっているの？」

2人は予定外の事に驚いていると……

ミソラ「来ないならこっちからいくわよ！ショックノート！」

ミソラが叫ぶと周りに9個のコンポ現れショックノートを乱射した。

ロール・メディ「「！」」

ロールとメディは左右に飛び2手に別れた。

メディ「2人で戦えば負けないわ、行くわよ！ロール！」

ロール「ええ！」

ロール・メディ対ハープ・ノートとの戦いが始まった。

オックス・ファイア視点…

ゴン太「……くらっちまうところだったぜ……」

ゴン太はみんなのようにすぐに動けずなんとか避けたが爆風で体育館前に吹き飛ばされていた。

オックス『もう少し動けるようにならないとな……』

自分の機動力について考えていると……

メタルマン「こいつを倒せばいいのか。」

ガッツマン「やってやるでカス。」

上空からメタルマンとガッツマンが降りてきた。

ゴン太「！……どんな敵でもやってやるぜ！」

オックス・ファイアは気合いを入れた。

オックス『いくぞゴン太！』

オックス・ファイアは構えた。

メタルマン「やるぞガッツマン！」

ガッツマン「わかったでガス。」

メタルマンとガッツマンも構えた。

ゴン太「オックスタックル！」

ゴン太は敵2体に突っ込んで行った……

遊撃隊の危機3（後書き）

句切りが悪くてすいません

これから気を付けます。

遊撃隊の危機４（前書き）

昨日から忙しくて更新が遅れました。

各地で戦いが起こってますがあと何話で戦いが終わるかわかりません（笑）。

長くなりますが書き終わるまで頑張ります。

遊撃隊の危機４

ジェミニ・スパーク視点…

サンダーマン「おかしい……ここら辺にいたはずだが……」

マグネットマン「私も見た間違いない……」

２人は上空でジェミニ・スパーク達をを見つけ、屋上まで来ていたが見失っていた…

ヒカル『そろそろ暴れようぜ、ツカサ。』

ツカサ「そうだね。」

エレベーターの影からジェミニ・スパーク達が同時に飛び出した。

サンダーマン「どこに行ったんだ?……」

ヒカル『エレキソード！』

ジェミニ・スパーク―Bは右手にソードを展開して背後から斬りかかった。

マグネットマン「！サンダーマン後ろだ！」

サンダーマン「！ぐぉ…」

背後からの攻撃にサンダーマンは避けられず、攻撃をくらい痺れた。

ツカサ「ロケットナックル！」

ジェミニ・スパーク―Bが横に飛ぶとの背後からジェミニ・スパーク―Wの左手が飛んできた。

サンダーマン「…くそ…」

サンダーマンは痺れていたため動けず攻撃をもろにくらった。

マグネットマン「サンダーマンから放れろ！マグミサイル！」

マグネットマンから2つのU字型の磁石のミサイルが飛びジェミニ・スパーク達に曲がりながら飛んでいくが、

ジェミニ・スパーク達は後方に下がりながらマグミサイルを避けた。

サンダーマン「不意討ちとは卑怯な……」

ヒカル『卑怯?知ったことか!戦いは勝てばいいんだよ!どんな手を使ってもな!』

ツカサ「ヒカル、それじゃあ僕たちが悪者みたいだよ……」

ジェミニ・スパーク―Bの言葉にあきれながら言った。

ヒカル『いいじゃねえか、俺達は一度は世界を滅ぼそうとしたじゃねーか。』

ツカサ「そうだけど……今は地球を守る遊撃隊の一員なんだから……」

2人が話してると……

サンダーマン「……バトルチップ・ドールサンダー!」

サンダーマンの手がカカシに変わり口から雷を前方に飛ばした。

ヒカル『!バトルカード・バリア!』

雷はジェミニ・スパーク―Bを狙ったがバリアで防がれた。

ヒカル『……やる気か……いくぞツカサ！』

ツカサ「うん！」

ジェミニ・スパーク達対サンダーマンとマグネットマンの戦いが始まった。

ジャック・コーヴァス視点……

ジャック「ペインヘルフレイム！」

ジャック・コーヴァスはすでに上空で激しい空中戦を繰り広げていた。

スワローマン「スワロードライブ！」

スワローマンは燕の姿になり炎を避けながら突撃した。

ジャック「バトルカード・ファイアスラッシュ！」

ジャック・コーヴァスは燕姿のスワローマンにカウンターを決めて弾き飛ばしたが大して効いていないようだ。

スワローマン「ぐっ…やるな……」

ジャック「お前もな……」

スワローマンとジャック・コーヴァスは強い敵と戦っているのが楽しいようだ。

シェードマン「私も参戦しますかね。」

シェードマンはスワローマンが1人で殺ると言っていたので戦っていなかった。

スワローマン「邪魔をするなシェードマン、こいつは俺が殺る。」

シェードマン「2人で殺れば確実でしょう。さっさと殺りますよ。」

2人が言い合っていると……

ジャック「構わないぜ。２人で来いよ。」

ジャック・コーヴァスが２人を挑発した。

シェードマン「敵もそう言ってますし２人で殺りますよ。」

スワローマン「……わかった。」

シェードマンとスワローマンは構えた。

ジャック「いくぜコーヴァス！」

コーヴァス『おう！』

ジャック・コーヴァスとスワローマン・シェードマンの戦いが始まった。

ベルセルク・ビーの視点…

ベルセルク・ビーはコダマタウン上空のウェーブロードにいた。

カケル「僕だけ敵が多いな……」

ベルセルク・ビーは三体の敵に囲まれていた。

ファイアマン「貴様の強さに対抗するにはこのくらいいないとな……」

ウッドマン「悪いが消えてもらうぞ……」

トードマン「消えてもらう……」

カケル「……スバル君は1体だったのに……」

ベルセルク・ビーは遠くからSSロックマンと敵がスカイウェーブに移動するのを見ていた。

ベルセルク「来るぞ！」

カケルが考えてるうちに3体は突っ込んだ。

3体「「「はぁぁぁぁぁ！」」」

3体はバトルチップを使い近距離戦闘しようとしたが……

カケル「ココロフォース！」

ベルセルク・ビーが叫ぶと光に包まれてPトライブの姿に変わり衝撃波を発した。

3体「「「！！！」」」

3体は衝撃波を受け突っ込むのをやめた。

ファイアマン「これほどとは……」

ウッドマン「このくらい無いと3体で戦う意味がない。」

トードマン「Rに戦い方を教わっているから負けないよ」

3体は構えた。

カケル（戦い方？）

Pトライブは疑問を抱きながらも3体との戦いが始まった……

リエル・フェザー視点……
学校の上空……

ジャイロマン「学校を空爆するだけだったのにな～～まさか戦う事になるなんて……面倒くさいな。」

ウインドマン「面倒くさがるな、学校を破壊するだけなんて退屈なだけだろう。」

ジャイロマン「面倒よりいい。」

ウインドマン「わがまま言うな！」

2体が話をしていると……

シズク「フロストミサイル！」

リエル・フェザーは目の前で話していた2体に鋭い氷の塊を飛ばし攻撃した。

ウインドマン・ジャイロマン「「！」」

2体すぐに反応したが間に合わずに直撃した。

シズク「戦う気が無いなら帰りなさい！迷惑よ！」

杖を振りながらリエル・フェザーは言った。

リエル〔かっこいいわよ、シズク。〕

シズク〔へへ、ありがとう、エル。〕

自分の前に来たわりに無視していた敵にリエル・フェザーは攻撃していた。

ウインドマン「ぐっ……敵も少しはやるようだ……行くぞ！」

ジャイロマン「……了解。殺ってやる……」

ジャイロマンとウインドマンは構えた。

シズク「あなた達なんかに負けないわよ！」

リエル『カケルに教えて貰った戦い方を実践するわよ。』

シズク「了解。」

先日の日曜日にカケルからリエル・フェザーでの戦い方の指導を受けていた。

カケル言うにはハープ・ノートとの戦いではリエル・フェザーの力を十分に出せていなかったらしい……

シズク「行くよ！エル！」

リエル『ええ。』

リエル・フェザー対ウインドマンとジャイロマンの戦いが始まった。

遊撃隊の危機４（後書き）

次回はＷＡＸＡニホン支部からです。

遊撃隊の危機5（前書き）

この忙しさ……

なんとかならないかな……

遊撃隊の危機5

～ＷＡＸＡニホン支部～

アシッド・エース視点……

アシッド・エースとシャドーマンの斬り合いが続いていたが……

暁「はぁ！」

シャドーマン「ぐっ……」

時間がたち目が見えるようになるとアシッド・エースはシャドーマンを弾き飛ばした。

暁「バトルカード・ギザホイール！」

アシッド・エースは右手のブラスターからギザホイールを出しシャドーマンを切り裂いた。

シャドーマン「がっ…ぁ…「ボン」」

暁「！」

ギザホイールて切り裂かれたシャドーマンが突然煙りのように消えた。

暁「……後！ソニックブーム！」

アシッド・エースは背後にに左手のソードから産み出した衝撃波を放った。

すると背後から向かってきていた手裏剣を弾き飛ばした。

シャドーマン「流石だな、カワリミシュリケンを防ぐとは……やはり1人で貴様を倒すのは難しいか…」

シャドーマンは何事も無かったように再び現れた。

暁「こっちは早くＷＡＸＡを守らないといけないんでね…そろそろ決めさせて貰う！」

アシッド・エースはソードをシャドーマンに向けた。

シャドーマン「……貴様の敵は私1人ではない。」

アシッド『シドウ！』

暁「！」

コスモマン「バトルチップ・スペースユラ！」

ジャンクマン「バトルチップ・バルカン！」

突然の攻撃だったがアシッド・エースは左手をソードからシールドに変えて攻撃を防ぎながら下がった。

ジャンクマン「俺達がいることを忘れるな。」

コスモマン「シャドーマン、Rが言った通りに殺りますよ。」

シャドーマン「わかった。」

3体は構えた。

暁〔アシッド、敵のデータ解析を開始しろ。終わり次第、攻撃に移る。〕

アシッド〔わかりました…時間を稼いでください。〕

暁「わかった。」

アシッド・エースはブラスターを構えた。

シャドーマン「遠距離攻撃を中心に攻める……行くぞ！」

アシッド・エースの戦いはまだまだ続いた。

クイーン・ヴァルゴ視点…

クイーン・ヴァルゴはナイトマンと数十に体のウイルスと戦っていた……

クインティア「バトルカード・ネバーレイン！」

クイーン・ヴァルゴはウイルスを倒しながらナイトマンマンに攻撃するが……

ナイトマン「効かんな！バトルチップ・アースクエイク！」

ナイトマンは技をくらう前に体を灰色に硬化させてダメージを軽減させた。

そのあとナイトマンは硬化をとき小さな球体をクイーン・ヴァルゴの上空に投げた。

クインティア（やはり攻撃時に硬化を解くのね……それにしても何を投げたの？）

クイーン・ヴァルゴはナイトマンの攻撃を見ながら行動を観察していた。

ナイトマン「落ちろ！」

クインティア「！」

ナイトマンが投げた球体がクイーン・ヴァルゴの頭上て巨大な銅像に変わった。

クイーン・ヴァルゴはすぐに横に飛び攻撃を避けた直後に銅像が落下しウェーブロードに穴が空いた。

クインティア「（またブレイク系の技を……アクアヴェールを使わせないつもり…）ハイドロドラゴン！」

クイーン・ヴァルゴはすぐに杖を降りハイドロドラゴンを呼び出し攻撃するが…

ナイトマン「遅いな…」

ハイドロドラゴンは直撃するがナイトマンは再び硬化してダメージを軽減した。

クインティア「また……（やぱり近づいてブレイク系の技を当てるしか…）」

クイーン・ヴァルゴは考えるとすぐに移動しナイトマンマンの背後をとった。

クインティア「バトルカード・ドリルアーム！」

クイーン・ヴァルゴは片手をドリルに変えて攻撃しようとしたが……

ナイトマン「ロイヤルレッキングボール！」

クインティア「！くっ……」

ナイトマンは持っていた鉄球を自分の周囲に一回転させて背後のクイーン・ヴァルゴに攻撃した。

攻撃を受けてクイーン・ヴァルゴは弾き飛ばされた。

ナイトマン「やはりRが言った通り私の技はこいつに有効だな。」

クインティア「ゴットレイン！」

吹き飛ばされたクイーン・ヴァルゴは体勢を立て直すとすぐに技を放つが……

ナイトマン「無駄だ！」

攻撃が当たる瞬間に体を硬化させてダメージを軽減した。

クインティア（もっと早く技を出せないとダメージを当てられない……どうしたら……）

クイーン・ヴァルゴは考えながらナイトマンと距離をとった。

ナイトマン「貴様では私は倒せん。このまま作戦成功まで戦っていて貰うぞ。」

クインティア「作戦？」

ナイトマン「大した事ではない、ＷＡＸＡニホン支部の破壊とあの力を使うもの……アシッド・エースとベルセルク・ビーの殺害と２人のウィザードの回収だ。」

クインティア「！（シドウを……殺す？）」

ナイトマンの言葉にクイーン・ヴァルゴは驚いた。

ナイトマン「あの力を解析するためにな。」

クインティア（あの力？……ココロフォースの事？）

クインティアはナイトマンの会話から意味を読み取っていた。

ナイトマン「遊撃隊メンバーは作戦成功まで足止めか殺害しろと言われている。私の足止めに向いているから殺しはしない……仲間がアシッド・エースを殺して加勢が来るまでな。」

ナイトマンは鉄球を構えた。

クインティア「……シドウは殺らせない……あなたを倒してシドウを助ける！」

……強い思い確認……

…ココロフォース…発動…

…アクアフォース…発動！

クインティア・ナイトマン「「！」」

クイーン・ヴァルゴは光に包まれた……

遊撃隊の危機5（後書き）

感想をお待ちしてます。

遊撃隊の危機６（前書き）

意見交換しませんか？

以前行った意見交換で意見を書いていただきありがとうございます。

共感できる意見が多くとても面白かったです。

そして今度の意見交換の内容は「エグゼ、流星で一番戦いにくかった敵は誰ですか？」です。

私には沢山いましたが代表するならエグゼのバブルマンと流星のウルフ・フォレストですかね。

バブルマンはほとんど岩の後ろ隠れて泡を出し続ける戦法で本当に戦いずらかったです。

当時ウットカスタムの自分はチャージショットのコガラシが届かずかなり苦戦しました。

ウルフ・フォレストは素早くてなかなか攻撃が当たらず苦戦しました。

エグゼのビーストマンくらいやクイックマンぐらい速かったですね……

ホントに戦いにくかった。

皆さんの意見を感想に書いてください。

お願いします。

遊撃隊の危機6

光と消えるとクイーン・ヴァルゴの姿が変わっていた。

赤かった部分の色が白くなり、持っていた杖の先端がアクアマンの頭のような形になった。

そして水が周りに浮いていた。（ほかにも少しアクアマンに似たところもありますが皆さんのご想像にお任せします。）

クインティア「……これが私のココロフォース……凄い……使い方が頭に流れてくる……」

クイーン・ヴァルゴは杖を構えた。

ナイトマン「！……キングダムクラッシャー！」

ナイトマンはクイーン・ヴァルゴの姿が変わったことに驚いたが構わず鉄球で攻撃したが……

クインティア「ネオアクアヴェール！」

クイーン・ヴェールが唱えると前方に水のバリアが現れ鉄球を防いだ。

ナイトマン「何！（ブレイク系の技だぞ……）」

ブレイク系の技をネオアクアヴェールは完全に防いでいた。

クインティア「アクアショット！」

クイーン・ヴァルゴの周りに浮いていた水が無数のつぶてになりナイトマンに飛んでいった。

ナイトマン「！（速い…）」

無数の高速で飛ぶつぶてが硬化前のナイトマンに直撃した。

ナイトマン「……何だ……この威力は……」

ナイトマンは鉄の散弾を受けたのかと錯覚するほどの威力だった。

クインティア「今の私は水を自由自在に操れるわ、だから水を極限まで圧縮すれば威力は桁違いよ。アクアチャージ！」

クイーン・ヴァルゴが頭上で杖を回すと杖の先端から水が吹き出し再び水を周囲に浮かせた。

ナイトマン（守りを固めなければ……）

ナイトマンは体を硬化させた。

クインティア「硬化してたら負けることは無いと思ったら大間違いよ！」

そう言いながらクイーン・ヴァルゴが突っ込んだ。

ナイトマン「お前の技では硬化した私にダメージは与えられんぞ。」

クインティア「それはどうかしら……アクアスライサー！」

クイーン・ヴァルゴは杖の先端から高出力で水を吹き出しながらナイトマンを切り裂いた。

ナイトマン「！…馬……鹿な…」

クインティア「水を使って物を斬る方法もあるの……覚えておいた方がいいわ。」

ナイトマン「…こ…こまでか……ぐぉぉぉぉぉ！」

突然ナイトマンが光だし爆発した。

クインティア「！」

クイーン・ヴァルゴに被害は無かったが突然の爆発に驚いた。

ナイトマンのいた場所には何も残っていなかった……

クインティア「？ネットナビを倒すとデータチップが現れると聞いてたのに……」

クイーン・ヴァルゴは以前シドウから聞いたこと違かったため疑問に思っていると……

クインティア「！」

突然、地上で大爆発が起こった……

少し前の
ＷＡＸＡニホン支部前……

サテラポリス２「多くのウィルスを攻撃出来るバトルカードを使うんだ！」

腕についている銃を使いウイルスに攻撃しながら叫んだ。

全員【了解！】

サテラポリス１「バトルカード・シンクロフック！」

サテラポリス３「バトルカード・ネバーレイン！」

サテラポリス４「バトルカード・ピラニアキッス！」

サテラポリス５「バトルカード・ゼンメツメテオ！」

サテラポリス６「バトル……」

サテラポリスの人達は一度に多くのウイルスに攻撃可能なバトルカードをウィザードに送りながら戦いを繰り広げていた。

ウィザード１『何て数だ……』

ウィザード2『ひるむな！』

懸命な戦いが続くがウイルスは手強くなかなかデリートされない。

さらに一体のネットナビが邪魔をしていた……

ナンバーマン「サイコロボム！」

ウィザード3『ぐぁぁ！』

ナンバーマンのボムが爆発してウィザード3が消えていった。

サテラポリス7「！よくも、バトルカード・アンガーファイヤ！」

ウィザード4『はぁぁぁ！』

仲間が殺られ反射的に放った炎弾はナンバーマンに直撃した。

ナンバーマン「ぎゃぁ～！……や、やりますな……」

ナンバーマンは炎弾をくらうととても辛そうな顔をした。

その姿を見ていたサテラポリスのメンバーは気づいた。

サテラポリス７「あなた…もしかしてメチャクチャ弱い？」

ナンバーマン「ギクッ！…そんなことない、私は強いですよ！バトルチップ・メガキャノン！」

ナンバーマンはサテラポリス７に攻撃したが……

サテラポリス８「バトルカード・バリア！」

ウィザード５『了解。』

ウィザード５が間に入りメガキャノンを防いだ。

サテラポリス８「こいつを倒すなら手伝うぞ！」

サテラポリス９「俺も手伝います！」

サテラポリス７の周りに２人とウィザード２体が集まった。

サテラポリス７「わかったわ。３人で殺りましょ。」

３人は自分の前にウィザード、４、５、６を配置した。

ナンバーマン「……何人集まったところで私は負けませんよ！」

ナンバーマンは突っ込んでいった……

数分後……

ナンバーマン「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ～」

ナンバーマンはこの数分間、一方的に攻撃を受け爆発してデリートされた。

サテラポリス９「……ずいぶんと弱いネットナビでしたね。」

サテラポリス８「気を抜くな、まだまだ敵はいるんだ……行くぞ。ウィザード５。」

ウィザード５『了解！』

サテラポリス７「！ウィルスが来るわよ。バトルカード・フラッシュスピア！」

ウィザード４『はぁぁぁ！』

サテラポリス達の戦いは続いていたが……

崖の上……

ナパームマン「ナンバーマン……弱すぎるだろ…」

ナンバーマンが殺られるのを見て思わず声が漏れた。

ナパームマン（お前が敵を引き付けたお陰で作戦がやり易いがな。）

ナパームマンはそう思いながらある物に狙いを定めていた。

ナパームマン「一撃で破壊してやるぜ！ナパームボム照準……ナパームボム発射！」

ナパームマンの頭部の砲台から強力なボムが発射され、リアルウェ

ーブシールドに直撃した。
そしてボムは大爆発を起こしリアルウェーブシールドが一撃で破壊された……

サテラポリス１「馬鹿な…以前よりパワーアップしたシールドを一撃で……」

ウィザード７『ＷＡＸＡにウィルスが……』

リアルウェーブシールドが無くなった事でウイルスがＷＡＸＡニホン支部に取り始めた。

サテラポリス１１「全てのウィルスを倒すんだ！」

取りついたウイルスにも攻撃は始めた。

サテラポリス１２「！崖の上にネットナビがいるぞ！ウィザード８、９、１０行くぞ！バトルカード・ロングソード×３！」

ウィザード３体『『了解！』』

ウィザード３体がナパームマンがいる崖の上に移動し、ナパームマンに斬りかかったが……

ナパームマン「ファイアボム！」

ウィザード3体『『『ぐぁぁぁぁぁぁ！！！』』』

ナパームマンが放ったボムが爆発しウィザードを吹き飛ばした。

ナパームマン「俺も参戦するか！」

ナパームマンは崖から降りてＷＡＸＡニホン支部に再び攻撃を始めた……

遊撃隊の危機６（後書き）

今回のサテラポリスの人とウィザードの名前の横の番号は出てきた順に番号をつけています。

この番号は戦い、話が終われば数はリセットされます。
前と同じ番号だから同じ人だと限りません。

ご理解をお願いします。

……ナンバーマン…商人とは言え弱すぎる。

遊撃隊の危機７（前書き）

ＷＡＸＡニホン支部の戦いの様子が気になるかも知れませんが、今回はコダマ小学校で起きている戦いです。

遊撃隊の危機7

あれから少し時間がたった
～コダマ小学校～

ハープ・ノート視点……

ハープ・ノート、ロール、メディの3人はソードを展開し激しい斬り合いが起こっていた。

ハープ『ミソラ、複数との近接戦闘はさすがに部が悪いわ。』

ミソラ「くっ……わかってる……」

ハープ・ノートはロールとメディの2人の攻撃に押されていた。

ロール（私達の攻撃に予想以上についてきてる……）

メディ（決めきれない！）

2人は予想以上に攻撃についてくるハープ・ノートに驚いていた。

ミソラ「（今だ！）バトルカード・トルネードダンス！」

ロール・メディ「「きゃぁ～」」

ハープ・ノートは2人の隙をつき回転ダンスをして風を起こして2人を吹き飛ばした。

ミソラ「フォーメーション！1・0・8！」

ロール・メディ「「くっ……！」」

引き飛ばされた2人は体勢を立て直すと自分の周りにコンポが4つ囲むように浮いていることに気づいた。

ミソラ「行くよ！ショックノート！」

ハープ・ノートがギターを弾くと2人の周りのコンポがショックノートを乱射した。

ロール「（これを避けるのは難しいわね……）　バトルチップ・インビジブル！」

ロールは技が避けられないとわかるとすぐに守りに入ったが……

メディ「コンポを破壊すればそれまでよ！……バトルチップ・バ

ルカン！」

強気のメディはバルカンでコンポを破壊し始めた。

ミソラ「（一人は消えちゃたか……）サイレンス！」

ハープ・ノートはすぐに後方のコンポでサイレンスを鳴らして敵２人を盲目状態にした。

メディ「！これじゃ見えない……きゃあ！」

メディは周りが見えなくなりバルカンがコンポに当たらなくなり逆に三方から来る攻撃に当たり始めた。

コンポは１つしか壊されていなかった……

ミソラ（これで決める！）

ハープ・ノートはロールを見失い放置状態だったコンポ４つをメディの頭上に並べた。

ミソラ「スーパーショックノート！」

メディ「きゃあああああああ～」

上空からスーパーショックノートが放たれメディは爆発してデリートされた。

ミソラ「よし。」

ハープ・ノートはメディを倒した事を確認するとインビジブルで消えているロールを探し始めた……

ロール（メディをよくも殺ったわね……）

インビジブルで消えているロールはハープ・ノート周りを移動し隙を伺っていた。

ミソラ「……」

ハープ・ノートは目を閉じた……

ロール（目を閉じて何のつもり？……もう少しでインビジブルが解けるし……これで決める！）

ロールは背後に回り込んだ瞬間にロールのインビジブルが解けた！

ロール「ビッグハー…！」

ミソラ「バトルカード・タイボクザン！」

ロール「……えっ…」

ハープ・ノートはまるでロールが背後から攻撃してくるのがわかっていたようにソードを使いカウンターを決めた。

ロール「……どうして……わかったの……」

深々と斬られダメージを受けてフラフラのロールがつぶやいた。

ミソラ「今の私はどんなに小さな音でも聞き取れるの、だからあなたの足音で背後から近づいてくるのがわかったからガードのつもりでソードを振っただけだよ。」

ハープ・ノートはソードを解除しながら言った。

ロールがもう戦えたいことがわかったようだ。

ロール「……そう……だったんだ……」

ロールはそう呟くとハープ・ノートの手を掴んだ。

ミソラ「……えっ！？」

ロールの行動の意味がわからず驚いていると……

ロール「私と…一緒に……消え…て…」

ハープ『ミソラ！離れて！』

ハープはロールの中で電波の乱れを感じ離れるように言ったが……

ミソラ「！」

離れる暇もなくロールはハープ・ノートを掴んだ状態で自爆した…

……

オックス・ファイア視点…

こちらでも激しい戦いが起きていたが……

ガッツマン「バトルチップ・ガッツインパクト！」

ゴン太「アンガーパンチ！……ぐぉ！」

2人の拳がぶつかるが威力に負けてオックス・ファイアが押し負けた。

メタルマン「メタルミサイル！」

ガッツマンから離れたオックス・ファイアにメタルミサイルは容赦なくミサイルを乱射した。

ミサイルは学校にも当たり瓦礫などか降り注ぐ。

オックス『ぐっ……まずいぞゴン太、学校が……』

ゴン太「ぐっ……学校にも攻撃をしやかって……オックスタックル！」

オックス・ファイアはミサイルにひるまずメタルマンに突っ込むが、

メタルマン「ふっ…メタルフィスト！」

ゴン太「！……ぐぉぉぉぉぉ～」

メタルマンは突っ込んでくるオックス・ファイアに拳で合わせカウ

ンターを決めて殴り飛ばした。

殴り飛ばされたオックス・ファイアは体育館に突っ込んだ。

オックス・ファイアが突っ込んだことで体育館に衝撃が走り中から悲鳴が聞こえた。

ゴン太（体育館の中には避難した委員長や学校の先生やみんなが避難してるんだった……）

オックス・ファイアは何とか立ち上がった。

メタルマン「この程度か！バトルチップ・メガキャノン×3！プログラムアドバンス・ギガキャノン！」

ガッツマン「これで終わりでガス。バトルチップ・ウェーブアーム×3！プログラムアドバンス・パワーウェーブ！」

2人の技はオックス・ファイアにほぼ同時に放たれた。

ゴン太（やべ……後ろには体育館が……中には委員長やキザマロ達がいるんだ……守るんだ……みんなを！）

……強い思い……確認……

…ココロフォース…始動…

…ヒートフォース…発動！

オックス・ファイアが光に包まれると同時に2人の技が直撃した……

ハープ・ノート視点……

ハープ『……危なかったわね……』

ミソラ「うん……オウエンカを使わなかったら危なかったよ……」

ハープ・ノートは離れられないとわかると後方のコンポでオウエンカを鳴らして爆発からか身を守っていた。

ハープ『……みんなの加勢に行きましょ。早く倒してＷＡＸＡに向かわなきゃ。』

ミソラ「そうだね……でも少し休ませて……疲れちゃった……この

まま行っても足手まといになっちゃうし……」

ハープ『……そうね。』

ハープ・ノートは少し休む事にしていた……

遊撃隊の危機7（後書き）

予想より長くなってます。

遊撃隊の危機が全部で何話になるかわかりません。

感想、アドバンス、一言をお待ちしてます。

遊撃隊の危機８（前書き）

さすがにこれだけのネットナビが出てくると技を調べるだけで凄く時間が取られます。

ただでさえ遊撃隊メンバーの技の名前を調べたり、オリジナル技を考えるのに時間がかかるのに……

戦いはまだまだ続きます。

遊撃隊の危機8

オックス・ファイア視点…

メタルマンとガッツマンの攻撃はオックス・ファイアに当たり大爆発を起こした……

爆発によって大量の土煙が舞った。

メタルマン「……終わったか……」

ガッツマン「……これからどうするでガス？」

メタルマン「ほかのナビ達の加勢に行こう、苦戦している奴もいるはず……」

ゴン太「まだ……終わってないぜ！」

メタルマン・ガッツマン
「「！」」

突然煙の中から声が聞こえ2人は驚いた。

煙が晴れるとヒートフォースで姿が変わったオックス・ファイアが

立っていた。

オックス・ファイアの体に黄色で炎が描かれ、体の両手、両足、背中からも炎を出すことが出来るようになっていた。

特に背中の部分は強力な炎を出せるようになっていた（他にもヒートマンに似た変化をしていますがご想像にお任せします）。

ガッツマン「あの攻撃を受けて……信じられないでガス。」

メタルマン「……いや、奴はかなりのダメージを受けている、恐れる事はない。」

オックス・ファイアをよく見るとかなり傷ついていた……

ゴン太「（……これがココロフォースか……こいつはすげぇ……）行くぜ！ネオオックスタックル！」

オックス・ファイアはメタルマンに突進したが、速さはオックスタックルと対して変わらなかった。

メタルマン「何がネオだ！何も変わって無い！バトルチップ・ゴールドフィスト！」

メタルマンは向かってくるオックス・ファイアにカウンターを決めるために構えた。

メタルマンの右手が金色に輝きだす、

ガッツマン「ガッツマシンガン！」

ガッツマンは援護しながら下がった。

ガッツマシンガンはオックス・ファイアに当たっているがひるまない。

ゴン太「加速！」

オックス・ファイアが叫ぶと背中の部分から炎を出して一気に加速した。

メタルマン「！」

突然の加速に驚きながらも何とが拳を振るったがオックス・ファイアは今までと桁違いの速さはメタルマンに突っ込んだ。

そしてメタルマンの拳を弾いてタックルが決まった。

メタルマン「がっ…バカな……」

オックス・ファイアはメタルマンを貫通した。

メタルマンはバラバラになり爆発してデリートされた。

オックス『あと一体だゴン太。』

ゴン太「おう！」

オックス・ファイアは両手前方に出して炎を吹き出しブレーキを掛けた。

そしてさらに両足の底から炎吹き出すと上空に飛び上がった。

ガッツマン「そ、空を……」

ガッツマンはオックス・ファイアの巨体が空を飛んでいる事に驚いた。

ゴン太（やべ……ホントに飛べた……）

オックス・ファイアは両手両足から炎を出してバランスを取りながら飛んでいた。

オックス『浮かれてないでさっさと決めるぞ！』

ゴン太「ああ……ヒートスタンプ！」

上空からガッツマンに向かって加速しながら落下した。

ガッツマン「ぐっ…バトルチップ・ガッツ……」

ゴン太「うぉぉぉぉぉ～！」

炎の加速と重力落下でオックス・ファイアの巨体が凄まじい威力でガッツマンに落下した。

余りの速さにガッツマンはバトルチップを出せなかった……

ガッツマン「がぁ……」

オックス・ファイアに押し潰され叫ぶと暇もなくガッツマンは爆発してデリートされた……

爆風で土煙が舞ったが煙が晴れるとオックス・ファイアが立っていた。

ゴン太「へへ……勝った……ぜ…」

オックス・ファイアが呟くと突然ココロフォースが解けてその場に倒れた

オックス『……攻撃のくらいすぎた。』

オックス・ファイアはプログラムアドバンス二発と爆風をくらいかなりのダメージを受けていた。

ゴン太「……動けね……」

オックス・ファイアは助けが来るまでそのままだった……

ジェミニ・スパーク視点…

こちらでは2対2の戦いが続いていた。

ヒカル『行くぜ！ツカサ！』

ツカサ「うん。」

ジェミニ・スパーク達は近づくとお互いの片手を合わせた。

マグネットマン「（強力なのが来るな……）サンダーマン俺の後ろに下がれ。」

マグネットマンはジェミニ・スパーク達の周りの磁気の乱れから強力な一撃が来るのを悟った。

サンダーマン「わかった。」

サンダーマンはすぐにマグネットマンの後ろに下がった。

ツカサ・ヒカル「『ジェミニサンダー！』」

ジェミニ・スパーク達は2人で合わせた手から強力な電撃を発射した。

マグネットマン「マグネットシールド！」

マグネットマンは当たる直前にバリアを周りに展開してジェミニサンダーを受け止めた。

ツカサ「！ジェミニサンダーを止める何て……」

ヒカル『あの程度のバリア、破壊してやるぜ！』

ツカサ・ヒカル「『はぁぁぁぁぁぁぁ！』」

ジェミニ・スパーク達はさらに技の威力を上げた。

ピキッ……

ジェミニサンダーを受け続けていたバリアにひびが入った。

マグネットマン「ぐっ……（何て威力だ……）」

徐々にバリアにひびが広がって入ったが……

サンダーマン「サンダーボルト！」

マグネットマンの後方をいたサンダーマンがジェミニ・スパーク達に向かって落雷を放った。

ツカサ「ヒカル、上！」

ヒカル『くそ！』

ジェミニ・スパーク達はジェミニサンダーを撃つのを止めて左右に飛んだ。

マグネット（これ以上はやばかったな……）

マグネットマンはそう思いながらバリアを解除した。

左右に飛んだジェミニ・スパーク達は着地してすぐに攻撃に移った。

ツカサ・ヒカル「『バトルカード・マッドバルカン！』」

ジェミニ・スパーク達は走りながら敵を左右で挟むように攻撃した。

サンダーマン「左右から…ぐっ…煙で周りが見えない……」

ジェミニ・スパークの攻撃の爆風で視界が悪くなっていた。

マグネットマン「マグネットシールドは……ぐっ……まだ無理か……」

シールドを張るのに必要なパワーのチャージが足りず展開出来なかった。

サンダーマン「どうする?ぐっ……このままでは……」

ジェミニ・スパーク達の攻撃はまだ続いている。

マグネットマン「左右に飛んで煙から出るぞ…ぐっ…このままくらい続けるのはまずい……」

サンダーマン「ぐっ…わかった。」

マグネットマン「行くぞ！」

サンダーマンとマグネットマン同時に左右から煙から出ると……

マグネットマン「？……いない……どこだ！」

右から出たマグネットマンは周りを見たがジェミニ・スパーク達がどこにも見当たらなかった。

ツカサ・ヒカル「『エレキソード！』」

サンダーマン「！何……」

突然煙の向こうから声が聞こえた……

マグネットマン「しまった向こうか！」

マグネットマンが徐々に晴れてきた煙を見るとジェミニ・スパーク達とサンダーマンが見えてきた。

ジェミニ・スパーク達はソードを展開していて、サンダーマンは2人に斬られた後だった……

サンダーマン「ぐおおおおおおお～」

そしてすぐにサンダーマンは爆発してデリートされた。

ヒカル『……次はテメーだ。』

ツカサ「悪いけど君も倒させて貰うよ。」

ジェミニ・スパーク達はマグネットマンに向かっていった。

マグネットマン「これはヤバイな……」

3人の戦いは続いた……

遊撃隊の危機8（後書き）

最近、更新を2日に1回にしています。

これ以上遅くならないように頑張ります。

遊撃隊の危機9（前書き）

最近忙しくて更新が不安定になっています。

更新は絶対に止めないので読んでくれたら嬉しいです。

これからも頑張ります。

遊撃隊の危機9

ジャック・コーヴァス視点……

上空で3体の激しい空中戦が続いていた……

ジャック「フェザーシンク！」

シェードマン「ブラッククロー！」

ジャック・コーヴァスは自分の翼を鋭く変化させシェードマンに攻撃したが、

シェードマンは自分の爪を使い受け止め競り合いになった。

ジャック「チッ……」

シェードマン「この程度では私達を倒せませんよ。」

シェードマンがジャック・コーヴァスを挑発していると……

スワローマン「スワローカッター！」

スワローマンがジャック・コーヴァスの後に回り込むと衝撃波を放

った。

コーヴァス『ジャック！』

ジャック「！くっ……」

ジャック・コーヴァスはシェードマンから離れると衝撃波を回避した。

シェードマン「よそ見はいけませんね……レッドウイング！」

シェードマンは翼から小さな黒いコウモリを呼び足しジャック・コーヴァスを追いかけた。。

コーヴァス『あの技、俺達を追いかけてるぜ。』

ジャック「だったら振り切るだけだ！」

ジャック・コーヴァスは上空を素早く飛んでコウモリを振り切ったが……

スワローマン「スワローダイブ！」

燕の姿になったスワローマンが猛スピードで突撃してきた。

ジャック「チッ……エアロダイブ！」

それを見たジャック・コーヴァスもスワローマンに猛スピードて突っ込んだ。

ジャック・スワローマン「「ぐっ……」」

2人の体がぶつかりお互いに衝撃が走った。

ジャック・コーヴァスはこのあとすぐに離れて技を放った。

ジャック「グレイブクロー！」

スワローマンに手形の紫の炎を6発放った。

スワローマン「この程度……」

スワローマンは燕の姿になると炎の避けながらジャック・コーヴァスから距離を取った。

ジャック「くそ……当たらね……」

ジャック・コーヴァスがスワローマンに攻撃していると……

コーヴァス『ジャック！後だ！』
突然コーヴァスがジャックに叫んだ。

ジャック「！……な」
ジャック・コーヴァスはすぐに後を向こうとしたが遅かった……

シェードマン「遅いですね……」
シェードマンがジャック・コーヴァスの背後に掴まった。

ジャック「離れろ！」
ジャック・コーヴァスは暴れて離そうとするがシェードマンは離れない。

シェードマン「クックックッ。あなたの生き血、いただきますよ……シェード・ドレイン！」
シェードマンはジャック・コーヴァスの首に噛みつきＨＰを吸い始めた。

ジャック「がぁ……テメェー……俺の力を……離れろ！バトルカー……」

ジャック・コーヴァスは激痛に襲われながらもシェードマンに攻撃しようとしたが……

シェードマン「まだ動けますか……ならさらなる痛みを死ぬまで与えてあげますよ！」

シェードマンは一度噛みつくのを止めて話すと再び噛みついた。

ジャック「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

ジャック・コーヴァスにさっきとは比べ物にならない程の激痛が全身を襲った。

スワローマン「やはり複数で戦うのは詰まらん……」

スワローマンは動かずジャック・コーヴァスを見ていた……

HPを吸われているジャック・コーヴァスの声が徐々に小さくなり始めた。

ジャック（ぐっ…意識が……）

ジャック・コーヴァスの全身から力が抜け、意識が遠くなり始めた。

コーヴァス（ヤベェぞ……ジャック……）

コーヴァスの方も意識が遠くなり始めたようだ。

ジャック（くっ…俺は……こんなところで……死ねるかよ！）

……強い思い……確認……

…ココロフォース…始動…

…キラーフォース…発動！

ジャック・スワローマン・シェードマン「「「！」」」

突然ジャック・コーヴァスの体か光に包まれた。

シェードマン「ぐぁぁぁぁぁぁぁ……」

シェードマンはジャック・コーヴァスに掴まっていたので光に包まれると同時に出た衝撃波に吹き飛ばされた。

スワローマン「これは……Rが言っていた力……」

スワローマンはRの言葉を思い出していた……

光が消えるとジャック・コーヴァスの姿が変わっていた。

頭の炎の色が白くなり体の装甲が増えていて装甲の色が紫に変化していた。

特に特徴的なのは目の形をした装甲が両方の肩に着いていた。

そして両手には刃が赤い一本の巨大な鎌が握られていた（他にもキラーマンに似た変化をしていますが皆さんのご想像にお任せします。）。

ジャック「これが…ココロフォースか……悪くねえ……」

ジャック・コーヴァスは巨大な鎌を構えた。

シェードマン「……あなたの力はかなり吸いとりました……今のあなたがいくらパワーアップしても私には勝てない！クラッシュノイズ！」

シェードマンは翼を広げるとジャック・コーヴァスに広範囲に超音波を放った。

ジャック「……隙だらけだぜ。」

ジャック・コーヴァスがそう呟くとその場から消えて攻撃を避けた。

シェードマン「！…どこに行った！」

シェードマンは周りを見回したがジャック・コーヴァスは見当たらない。

ジャック「……楽にしてやるよ……」

突然ジャック・コーヴァスの声が聞こえるとシェードマンの首には巨大な鎌の刃が背後から突きつけられていた。

シェードマン「！……バカな……こんな事が……」

シェードマンは完全に気配を消して背後を取っていたジャック・コーヴァスに驚いた。

ジャック「死ね！」

ジャック・コーヴァスが巨大な鎌を引きシェードマンに止めを指した。

シェードマンは止めを指された後、爆発してデリートされた。

ジャック「！……爆発しやがった。」

ジャック・コーヴァスは止めを指した後、すぐにシェードマンから離れていたため爆発には巻き込まれなかった。

ジャック・コーヴァスは爆発を見たあとスワローマンと距離を取りながらの正面に移動した。

スワローマン「面白い戦いになりそうだ。」

スワローマンは構えた。

ジャック「……1つ聞きて……なぜもう一体の加勢をしなかったんだ？」

ジャック・コーヴァスは巨大な鎌を構えながら気になっていた事を訪ねた。

スワローマンはシェードマンを助ける為の攻撃を一度もしなかった。

スワローマン「簡単な事だ……俺は強い奴と戦いたい、あいつがいると邪魔なんだよ……戦いのな！」

スワローマンは今までのスピードより速く飛びジャック・コーヴァスに突っ込んだ。

ジャック「おもしれぇ！……こっちも行くぜ！」

ジャック・コーヴァスもスワローマンに突っ込んで行った……

遊撃隊の危機9（後書き）

ジャック・コーヴァスとスワローマンの戦いはまだまだ続きそうですね。

次回はベルセルク・ビー視点からの予定です。

遊撃隊の危機１０（前書き）

話が上手くまとまらず更新が遅れました。

すみません。

遊撃隊の危機１０

ベルセルク・ビー視点…

こちらでは3対1の戦いが続いていた。

カケル「カイザーデルタブレイカー！」

Pトライブはαを剣で描きウッドマンに放った。

ウッドマン「……頼むぞ！ファイアマン！」

ファイアマン「おう！」

Pトライブが放った技を見てウッドマンの近くにファイアマンがやって来た。

カケル（？何をする気だ…）

このままではファイアマンも攻撃をくらってしまうので2人の行動を疑問に思った。

ファイアマン「バトルチップ・ヘルズバーナー×3！プログラムアドバンス・ワイドバーナー！」

とファイアマンはウッドマンの前に立つと強力な炎を放ちPトライブの技と衝突した。

カケル「！……そう言うことか……」

Pトライブが放った技ファイアマンの放った技と相殺した。

ファイアマン「その技は炎属性を打ち消せない、調査済みだ！」

カケル（いろいろ調べられているみたいだな……）

Pトライブのカイザーデルタブレイカーは炎、木、電気属性の技なので水属性が無く木属性が含まれているので炎属性の余り相性が良くない。

トードマン「ショッキングメロディー！」

トードマンは鳴くと♪の形の音符が飛び出しPトライブに向かう。

カケル「！…サンダースラッシュ！」

Pトライブはすぐに攻撃に気づくと電気の斬撃を飛ばして音符を破壊した。

トードマン「くっ…このくらいの技じゃ通用しないか……」

トードマンは自分の技があっさりと防がれたことを見ていると……

カケル「遅いよ！」

Pトライブが一瞬でトードマンの背後に移動した。

トードマン「！」

トードマンも背後にPトライブが来たことに気づいたがその場から動く余裕がない。

カケル「サンダーボルトブレイド！」

背後からPトライブが強力な一撃を放つが……

ウッドマン「伏せろ！トードマン、バトルチップ・ガイアブレード！ステルスマイン×４！」

ウッドマンは叫びながら近づきソードを展開した。

ウッドマンの言葉を聞きトードマンはすぐに伏せた。

Pトライブとウッドマンの剣とソードがトードマンの頭の上で激し

くぶつかった。

カケル「！…何だ……このパワーは……」

Pトライブは剣をぶつかった際にウッドマンのソードから尋常じゃない力を感じた。

ウッドマン「このガイアブレードは後に選んだバトルチップの力を吸い取る……ステルスマイン４つ分のパワーを！」

ステルスマインの威力はバトルチップの中でもトップクラスの威力を持つ……
４つ分の力が合わさったガイアブレードの威力は桁外れの物だった。

カケル「ぐっ……（サンダーボルトブレイドが……）」

ウッドマン「はぁぁぁぁぁ！」

ウッドマンはサンダーボルトブレイドを打ち破りPトライブを弾き飛ばした。

カケル「ぐっ……木には炎だ！ジェノサイドブレイザー！」

弾き飛ばされたPトライブはすぐに体勢を立て直して左手のダイナ

ソーから強力な炎を放った。

ウッドマン「！（まずい…早く守りを……）」

ウッドマンは炎に弱いのですぐに守りを固めようとしていると……

トードマン「僕に任せて、バトルチップ・ワイドショット×３！プログラムアドバンス・スーパーワイド！」

今まで伏せていたトードマンが立ち上がりＰトライブの技に水属性の攻撃をぶつけた。

ベルセルク『相性がまずいぞ！カケル！』

カケル「わかってる……」

トードマンが放った技は炎を打ち消しながらＰトライブに直撃した。

カケル「ぐぁぁぁぁぁぁ～「ボン！」」

トードマン・ウッドマン「「！」」

攻撃が当たったはずのＰトライブは煙のように消えた。

トードマン「カワリミかな?」

ウッドマン「どこに行った?」

2体が探していると……

ファイアマン「トードマン、ウッドマン、上だ!」

2体から離れたところにいたファイアマンが叫んだ。

トードマン・ウッドマン「「!」」

トードマンとウッドマンが上を見ると3人に分身していたPトライブがいた。

カケル「フウマシップウジン!」

3人のPトライブは手裏剣を大量に投げが……

ファイアマン「バトルチップ・ファイアパンチ×3!プログラムアドバンス・フレイムフック!」

ファイアマンが技を使うと巨大な炎の拳が2つ現れ全ての手裏剣を弾き飛ばした。

炎の拳はそのままPトライブに向かってくる。

カケル「！…2人とも頼むよ。」

分身の2体は炎の拳に突っ込んで行った。

分身2体「「……サンダーボルトブレイド！！」」

分身2体は炎の拳に技を放ち2つの拳を爆発させたが爆発の衝撃で分身2体は消滅してしまった……

カケル（徹底的に僕の技を防いで来るな……）

Pトライブはこれからどう攻めるか考えていると……

ファイアマン「貴様の今まで使った技は全て対策積みだ！」

ウッドマン「Rの言った通りだったな。」

トードマン「諦めろ！」

三体が叫び再び攻撃を開始しようとした。

カケル「……じゃあ新技を試してみようかな……」

Pトライブはそう呟くと学校の上空に飛んで行った。

3体「「「待て！」」」

それを見たウッドマン・ファイアマン・トードマンはPトライブを追いかけて行った……

リエル・フェザー視点……

リエル・フェザーとウインドマンとジャイロマンの戦いはほぼ決着が着いていた……

シズク「この程度なの？」

リエル『ここまで一方的になるとは思わなかったわ……』

ジャイロマン「……データが無いとはいえこれほどやられるとはね……」

ウインドマン「……」

リエル・フェザーが圧倒的強さで2体を退けていた。
ジャイロマンとウインドマンのボディーはあちらこちら凍りつき自由な動きを奪っていた。

ジャイロマン「でもこの程度で動きを完全に止めるのは不可能だよ……ジャイロエアフォース！」

ウインドマン「全くだ……バードクラッシュ」

ジャイロマンは上昇するとヘリに変形して大量の爆弾を投下した。
ウインドマンは鳥形の物体を3つだしてリエル・フェザーに向かって放った。

二ヶ所から同時に攻撃がリエル・フェザーに襲いかかる。

シズク「……凍って！アイスワールド！」

リエル・フェザーが少し集中して技を唱えた。

ウインドマン「？何だ……」

ウインドマンは用心のために距離をとった。

するとリエル・フェザーを中心に半径１５メートルあるものを全て凍らせた。

爆弾や鳥は凍りついたため機能を失い地上に落下して行った。

ジャイロマン「何だ？……くそ……凍ったか……はぁぁぁぁぁ！「パキン！」」

ジャイロマンは１５メートル以上離れていなかったため体が凍りついたが表面しか凍っていなかったので無理やり砕きヘリからもとの姿に戻った。

リエル『シズク、その技はまだ使いこなせて無いんだから使わないの！』

シズク「日曜日にせっかくカケルが教えてくれたんだもん使わなきゃ。」

リエル・フェザーが使ったアイスワールドはリエル・フェザーが一定時間の間決められた空間の水の温度や動きを自由にコントロール出来るようにする技で、空気中の水分を使って全てを凍らせていた。

リエル『無差別に凍らせるだけじゃ使えないって言われたでしょ。』

カケルの考えでは自由自在に目標だけを凍らせたり、壁を作ったりなどが出来る空間を作るはずだったがまだ空間内の物を全て凍らせることしかできない。

発動時間まだ１０秒ぐらいと短くまだまだ未完成である。

シズク「防御や接近してきた敵を凍らせたり出来るもん！」

リエル『戦いで未完成の技を使うなんて危ないわよ！』

シズク「そんなこと無いもん！」

２人が言い合いをしているが始まってしまった……

ジャイロマン「……あいつ何やってるんだ…？」

ウインドマン「わからんが……攻撃がさせてもらう！プロペラボム！」

ウインドマンが唱えると周りにプロペラが着いた爆弾が複数現れリエル・フェザーに向かっていくが……

カケル「ダイナキャノン！」

ウインドマン・ジャイロマン「「！」」

突然現れたPトライブが炎を放ち全ての爆弾を撃ち落としていった

……

遊撃隊の危機１０（後書き）

突然、リエル・フェザーの前に現れたPトライブ……

目的は？新技とは？

次回まとめます。

遊撃隊の危機１１（前書き）

予定では１０で遊撃隊の危機を書き終わそうと思ったが超えてしまった……

予定通りに行かないものですね（笑）。

遊撃隊の危機11

シズク「カケル……」

リエル『突然現れてなんのつもりかしら……』

向かってきていた爆弾を撃ち落とそうとしていたリエル・フェザーは突然現れたPトライブに驚いた…

カケル「……」

Pトライブが後ろを確認するとウッドマン・ファイアマン・トードマンがウェーブロードを使いながら追いかけていた。

カケル「……追い付かれる前に一体は倒すか…！」

Pトライブが呟き前を見るとウインドマンとジャイロマンを確認するとジャイロマンに突っ込んだ！

ウインドマン「突然割り込んできて何のつもりだ！バトルチップ・スーパーバルカン！」

突然現れ、ジャイロマンに突っ込んで行くPトライブにバルカンを乱射した。

カケル（やっぱり最初に戦っていた三体と違って僕の事をあんまり知らないようだな……）

Pトライブはバルカンを避けながらも減速する事なくジャイロマンに突っ込んで行く。

ジャイロマン「（速い……）来るんじゃねえ！トルネードアーム」

ジャイロマンはPトライブに向けて竜巻を一直線上に放つが……

カケル（軌道が読みやすい……）

Pトライブは竜巻を避けると竜巻を沿うように一気に近づいた。

ジャイロマン「何！」

スピードをそのままに避けたPトライブに驚いた。

カケル「斬り捨てごめんね！」

Pトライブはスピードを落とす事なく右手の稲妻剣でジャイロマンを両断した。

ジャイロマン「がぁ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ジャイロマンは斬られて数秒後に爆発した。

カケル（やぱりあの3体以外は僕への対策が出来てないな……！）

爆発したジャイロマンを見ていると……

ウインドマン「貴様！よくもジャイロマンを……ウォォォォォォォ！」

カケル「！何だ……この風は……」

突然、学校全体に暴風が吹き始め、竜巻があちらこちらで発生し始めた。

シズク「えっ……何？……この風……キャア！」

突然の暴風にリエル・フェザーは吹き飛ばされた。

ベルセルク「カケル、シズクが吹き飛ばされてるぞ……」

カケル「この風じゃ仕方ないさ。」

Pトライブが呟くとリエル・フェザーに近づいた。
そして左手のダイナソーを解除して手に戻すとリエル・フェザーを掴み抱き寄せた。

シズク「カケル……ありがとう……」

リエル・フェザーとPトライブは体勢を立て直して近くのウェーブロードに着地した。。

カケル「ごめん、シズク…一体倒したらもう一体が急に暴風を起こしちゃって……」

シズク「別に構わないけど……それよりカケルはどうしてここにいるの？」

カケル「実は僕が戦っている敵がかなり僕の技の対策をしててね……普通に戦ったら倒すのに時間がかかりそうだから手伝って……」

シズク「良いけど……あの敵はどうするの？」

ウインドマン「ウォォォォォォォォ！」

ウインドマンを確認するとその場から動くことは無く暴風と竜巻を発生させている。

カケル「今は動かなそうだし…もし襲ってきたら僕が守るよ。」

シズク「カケル／／／／／」

カケルの守るの一言にシズクの顔が赤くなった。

カケル「？……シズク、どうし……！」

突然、Pトライブはリエル・フェザーを左手で抱き抱えるとすぐに飛び上がった。

そのあとすぐにいた場所から炎の柱が上がった。

ファイアマン「フレイムタワーを避けたか……」

トードマン「風のせいで追い付くのが遅れちゃったね。」

ウッドマン「この技はウインドマンが起こしているのか……」

Pトライブを襲っていた三体が追い付いてた。

カケル「もう追い付いてきたか……行くよ！シズク、新技で決めるよ！」

Pトライブは抱き抱えていたリエル・フェザーを降ろしてリエル・フェザーを見た。

シズク「新技って……日曜日に2人で練習したあれ？」

カケル「うん。」

シズク「あれね……」

リエル・フェザーは日曜日の事を思い出した……

回想……

日曜日のこと

シズク「合体技？そんなこと出来るの？」

カケルとシズクはＷＡＸＡのトレーニングルームを借りて戦いの練習をしていた。

カケル「うん。僕がベルとリエルを作ったときに２人で協力する事である技を出せるようにしてあるんだ。」

シズク「どんな技なの？」

カケル「ベルとリエルが持つ四属性を合わせた技だよ。すぐに出来ると思うからそしたらシズクの新技の練習をしようね。」

シズク「わかったけど……どうやるの？」

カケル「これから僕の言う通りに動いてね。」

シズク「了解。」

このあと技の出し方をシズクに説明して実際に技を出したり、シズクに新しい技を教えたりと２人のトレーニングは続いた……

回想終わり……

ファイアマン「2人まとめて燃やしてやるぜ！行くぞウッドマン！」

ウッドマン「わかった！」

ファイアマン、ウッドマンはウェーブロードを使ってPトライブとリエル・フェザーに近づいた。

カケル「迎え撃つよ！」

シズク「了解！」

Pトライブとリエル・フェザーは近づいてお互いの腰に手を当てて抱きつくとPトライブは右手の稲妻剣、リエル・フェザーは左手に持ち変えた杖を敵に向けた。

ウッドマン「自ら一ヶ所に集まるとは……バトルチップ・コーンショット×3！プログラムアドバンス・コーンパーティー！」

ウッドマンは木属性の爆炎をPトライブとリエル・フェザーの前に大量に産み出した。

ファイアマン「まとめて燃え尽きろ！バトルチップ・ヘルズバーナー×3！プログラムアドバンス・ワイドバーナー！」

ファイアマンが放った炎はウッドマンが放った木属性を爆炎を飲み込みより強力な炎となってPトライブとリエル・フェザーに襲いかかる。

カケル「行くよ！シズク！」

シズク「……うん！」

2人は剣と杖を使って◇の形を描くと赤、青、緑、黄の四色に輝き始めた。

カケル・シズク「「エレメントブレイカー！！」」

2人の掛け声と共に剣と杖を振り放たれた一撃は前方の炎を打ち消しながらファイアマンとウッドマンに直撃した。

ファイアマン「！バカな威力は上がっているはず……」

ウッドマン「ここまでか……」

ウッドマンとファイアマンは技をくらい消滅していった……

トードマン「ファイアマン、ウッドマン！」

トードマンは2人から離れていたため助かっていた。

シズク「やったね♪カケル。」

カケル「実戦で使うのは初めてだけど凄い威力だったね。」

2人は技を出し終わりお互いに相手の顔を確認した。

カケル・シズク「「（近い……）／／／／／／／／／／」」

2人は相手の顔がとても近いことに気づき2人とも視線をそらした。

カケル「残りの敵を倒すよ……僕は暴風を起こしている奴をやるから……シズクは残りをよろしく。」

シズク「了解……」

2人は離れるとPトライブはウインドマン、リエル・フェザーはトードマンに突っ込んで行った……

遊撃隊の危機１１（後書き）

合体技をやってみました。

複数で行う技でダブルヒーロー、ツインリーダーズ、ジェミニサンダー見たいな技だと思ってください。

ちなみにウインドマンの暴風はロックマンエグゼ４でもあったウインドマンの暴走時に出たものと同じです。

遊撃隊の危機１２（前書き）

話の区切りを良くしようとしたら長くなってしまいました。

今回はＷＡＸＡニホン支部のお話です。

遊撃隊の危機１２

更に時間が経過した
～ＷＡＸＡニホン支部～

アシッド・エース視点…

アシッド・エースと３体の激しい戦いは続いていた。

暁「アシッド、敵の解析はまだか……」

アシッド『まだです。あと３分です。』

アシッド・エースは敵のデータを取り解析はながら戦っていた。

コスモマン「コスモプリズン！」

コスモマンが叫ぶと空間が歪みそこから黄色い球体が９個が現れアシッド・エースに向かって行く。

暁「ウィングブレード！」

アシッド・エースは背中に光の翼を展開して空を飛び攻撃を避けたが球体は全てアシッド・エースを追いかけてくる。

コスモマン「その技は避けられんぞ！」

コスモマンは笑いながら呟いた。

暁「なら！」

アシッド・エースは移動を止めてソードを構えた。

するとアシッド・エースの体が一瞬光と高速で移動して向かって来ていた球体を全て切り裂いた。

コスモマン（くそ、止められたか……）

暁「トランスムーブ！」

アシッド・エースが技の名前を言った途端に球体は全て爆発した。

ジャンクマン「バトルチップ・ジャスティスワン！」

ジャンクマンがバトルチップを使うと突然上空に巨大な拳が現れた。

暁（！でかい……何だあれは……）

拳の大きさにアシッド・エースは驚いた。

ジャンクマン「避けられるか？」

巨大な拳は徐々に加速しながらアシッド・エースに向けて落下し始めた。

暁（まずい……避けたら地上に……）

アシッド・エースは避けようと思ったが地上に落下した際の被害を考えると避けられなかった。

アシッド『シドウ！』

アシッドが心配そうに声をかける。

暁「アシッドは解析を続けろ！あれは……破壊する！ネオウィングブレード！」

アシッド・エースが叫ぶと背中の翼の光が強くなった。

そして凄いスピードで巨大な拳に突っ込んで行った…

そして向かってくる拳に猛スピードて衝突した。

暁「ぐっ……はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

衝突した際にかなりの衝撃を受けたがなんとが拳をクロスに切り裂き破壊した。

シャドーマン「あれを止めるとはさすがだが……隙だらけだ！」

シャドーマンはアシッド・エースの背後をとった。

アシッド『シドウ、後ろです！』

アシッドが叫んだが……

暁「ぐっ……（止めたときのダメージが……）」

アシッド・エースは落下する拳の衝撃をもろにくらっていたためかなりのダメージを受けていた。

そのためか体がなかなか動かず行動が遅れた。

シャドーマン「バトルチップ・パラディンソード！」

シャドーマンは右手にソードを展開してソードでアシッド・エースの首もとを切り裂……

クインティア「ネオアクアヴェール！」

暁・シャドーマン「「！」」

こうとしたが突然現れた水のバリアにソードが阻まれた。

クインティア「間に合ったみたいね。」

ウェーブロードを使ってクイーン・ヴァルゴが近づいてきていた。

暁「クインティアか……」

姿が変わっていることに少し驚いていたがアシッド・エースはバリアが消える前にシャドーマンから離れて距離をとった。

シャドーマン「あいつがいると言うことはナイトマンがやられたか……」

シャドーマンも右手を元に戻すとアシッド・エースから離れた。

コスモマン「よくも作戦の邪魔を……コス……」

コスモマンは技を出そうとしたが……

クインティア「ハイドロドラゴン×１０！」

クイーン・ヴァルゴはコスモマンが技を出す前に一瞬で水のドラゴンが１０体出現した。

今回の技の発動に杖は使っておらず呼び出した途端にクイーン・ヴァルゴの周りの水は消えただけだった。

コスモマン「…モバス…！バカなこれほどの数を……おぉぉぉぉぉぉ！」

コスモマンは４体の水のドラゴンに襲われ爆発してデリートされた。

シャドーマン「コスモマン！…くっ！…こっちもか！ボディガード！」

シャドーマンの方にも３体の水のドラゴンが襲いかかるが大量の手裏剣を投げてドラゴンを破壊しながら回避した。

ジャンクマン「バトルチップ・ドリームオーラ！……くっ……」

ジャンクマンにも３体の水のドラゴンが襲いかかるが自分の周りにオーラを張り攻撃を防いだ。

アシッド『シドウ、解析が完了しました。』

ようやく解析が終わりアシッドが呟いた。

暁「わかった！」

アシッドの言葉を聞くとアシッド・エースはジャンクマンに突っ込んだ。

ジャンクマン「（今度はこっちか！）ボルトミサイル！」

ジャンクマンは突っ込んで来るアシッド・エースに放つが……

暁「遅いな……」

アシッド・エースは一瞬で技を避けるとソードを構えた。

ジャンクマン（ドリームオーラで問題ない！）

ジャンクマンはまだドリームオーラが消えていなかったので技を受けても問題ないと思ったがあまかった……

暁「デルタレイエッジ！」

アシッド・エースが一瞬光るとジャンクマンの周囲をΔの形に高速で周りの3回斬りつけた。

1回目でドリームオーラを切り裂き、2回目で背後を切り裂き、3

回目で正面から切り裂いた。

ジャンクマン「ぐっ……あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ジャンクマンはかなりのダメージを受けたため爆発してデリートされた。

ジャンクマンを倒し、爆発を見ていたアシッド・エースのところにクイーン・ヴァルゴが合流した。

クインティア「無事でよかったわ……シドウ。」

クイーン・ヴァルゴは安心したように名前を呼んだ。

暁「何とかな……それより地上の方がどうなってるかわかるか？結構前に爆発が聞こえたんだか……」

アシッド・エースは3体との戦闘に集中していたので地上の状況がよくわかっていなかった。

クインティア「その事なら大丈夫、心配いらないわ。あの兵器が完成したから……」

暁「そうか、あれが……」

クイーン・ヴァルゴはそれしか言わなかったがアシッド・エースには伝わったようだった……

地上のＷＡＸＡニホン支部前…

ナパームマンの一撃でリアルウェーブシールドが破壊された事により先勝はネットナビ側に傾くと思われたがそうはいかなかった……

ナパームマン「くそ！何なんだこいつらは！バルカンアーム！」

ナパームマンは手と形と同じバルカンを地上に展開して攻撃を続けていたがＷＡＸＡの流れは止まらなかった。

地上には大量のあるウィザードのコピーが展開していてまだ建物の中からコピー達が続々と出てきていた。

コピーは全てウォーロックの容姿にそっくりだった。

（ウォーロックコピーはこれからロックコピーと呼びます。）

ヨイリー「間に合ってよかったわ。コピーちゃん達、がんばってウイルスとネットナビを倒してちょうだいね。」

突然、ヨイリーの声がスピーカーを使ってウォーロックコピーに伝わった。

ロックコピー達【了解しました。】

ヨイリーの声を聞いた途端ロックコピーは攻撃を開始した。

ロックコピー達【ウォォォォォォォ！】

ウイルス達【ギャァァァァァ！】

ウォーロックコピー達はビーストスイングなどを駆使してウイルスを攻撃し始めた。

サテラポリス１「俺達も行くぞ！」

サテラポリス達【了解！】

このあとサテラポリスとウィザード、ロックコピー達によってウイルスは次々とデリートされていった……

アシッド・エース視点…

シャドーマン「困ったものだ……上空は私以外全滅か……」

シャドーマンは水のドラゴンを破壊したあとゆっくりとアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴに近づいてきていた。

暁「地上もほとんど制圧したようだ。諦めたらどうだ?」

先ほどアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴの元に連絡が入り地上はほとんどのウィルスをデリートして今はネットナビと残りのウィルスと戦っていると連絡が入ってきていた。

シャドーマン「ふっ…地上も壊滅したか……だがそんなことは関係ない!俺は一人でも作戦を続けるだけだ!」

シャドーマンは構え再び戦闘に始めようとしたが……

R（シャドーマン……）

突然、シャドーマンの頭にRの声が響いた。

シャドーマン「何のようだR？」

暁・クインティア「「！……R？」」

突然独り言を呟きだしRの名前を出したことに驚いた。

R（作戦は成功した。プラグアウトして帰還してくれ。）

シャドーマン「待て……あの力についてわかったのか？」

R（それについてはみんなが戻ってから説明する。戻るんだ……）

シャドーマン「わかった……悪いが失礼させてもらう……」

暁「！待て……」

アシッド・エースが叫ぶ前にシャドーマンは光となって去っていった……

クインティア「逃げられたわね……」

暁「そうだな……」

このあと地上にいたナパームマンも光となって去っていったと連絡を受けた。

残された2人は地上に戻りコダマ小学校に向かわせる部隊を編成したり、被害の確認などを行っていた……

遊撃隊の危機１２（後書き）

ひとまずＷＡＸＡニホン支部での戦いは終わりました。

次回は時間を戻してＳＳロックマン視点からのスタートです。

Ｒは作戦は成功したと言っていましたが皆が戦っている間にＲとＳＳロックマンに何があったのか……

スバル君は無事なのか？

次回をお楽しみに。

Rの提案（前書き）

皆さんにお知らせです。

この作品の前半部分に修正を加えたいと思います。

基本的には行数やセリフを少し修正をします。

その間に作品の前半を読むと行数が不自然になったりして大変だと思いますが皆さんのご協力をお願いします。

Rの提案

～スカイウェーブ～

時は戻り
ＳＳロックマン視点……

ロックマンとＳＳロックマンはスカイウェーブに移動し、２人はウェーブロード上に立っていた……

ロックマン（Ｒ）「あるほど……ここなら誰にも邪魔されないね。」

ロックマンが周りを見渡すと何もなくウェーブロードの下には雲が広がっていた。

スバル「…君は……本当にロックマンエグゼなのか……」

ＳＳロックマンはロックマンに訪ねた……

今回の事件の首謀者であるＲがあのロックマンエグゼであることを信じられなかった……

ロックマン（Ｒ）「その名は捨てたんだ……僕の名はＲ……最後の存在……」

スバル「！」

突然、ロックマンの周りか異様な力を感じ、ＳＳロックマンは半歩後に下がった。

ロックマン（Ｒ）「……戦う前に１つ提案があるんだけどいいかな？」

ロックマンから異様な力が消えるとＳＳロックマンに話しかけてきた。

スバル「……」

スバルは無言でロックマンを見つめた。

ロックマン（Ｒ）「スバル君、僕の仲間にならないかい？」

スバル「！」

ＳＳロックマンは話の内容に驚いた。

ロックマン（Ｒ）「スバル君は熱斗君と同じように絆の大切さを知っている……他の人間とは違って生きる資格がある……スバル君……一緒に行こう。」

ロックマンは右手を差し出した。

スバル〔……やだ…〕

ＳＳロックマンは小声で呟いた。

ロックマン（Ｒ）「どうして？もちろんウォーロックやスバル君の友達も一緒に来ていいよ？スバル君の友達なら絆の大切さを知っていると思うし……それなら……」

ロックマンは再び話をしてＳＳロックマンは説得しようとしたが……

スバル「やだ！」

ＳＳロックマンは否定した。

ロックマン（Ｒ）「どうして……」

ＳＳロックマンに否定されたのが信じられないように言った。

スバル「だっておかしいよ！２００年前にあった君は熱斗君と一緒に多くの人を助けるために頑張っていたし、君は突然現れた僕達を助けてくれた……それなのに君が人間を抹殺しようだなんて……いったい君に何があったんだ！」

ＳＳロックマンは強く訪ねた。

少しの沈黙が続きロックマンが答えた。

ロックマン（Ｒ）「……僕は１００年前に気付いただけだよ……人間は自分達の事しか考えていないって……だからあんな事をするんだ……」

ロックマンは悔しそうに言った。

スバル「あんな事？」

ＳＳロックマンはわからず聞き返した。

ロックマン（Ｒ）「全ネットナビのデリートだよ……」

スバル「えっ……」

ＳＳロックマンはとても驚いた。

１００年前にそんな事があった事を今までに聞いたことがなかったからだ。

ロックマン（Ｒ）「１００年前、人間はインターネット技術を応用

して電波技術の発明させた……人類は技術を切り替える際に当時問題になっていたオペレーターを持たないネットナビの犯罪を問題視した科学省の上層部は全てネットナビの使用を禁止して回収と破壊を開始したんだ……もう必要ない存在だと決めつけてね。そのためネットナビは持つことは罪となり人々は指示通りにインターネットに送りネットナビは集められた……そこで何があったと思う？」

スバル「……」

ウォーロック『破壊か……』

スバルが答えようとしなかった事を見かねてかウォーロックが現れ変わりに答えた。

ロックマン（R）「その通りだよウォーロック、科学省はインターネット封鎖してネットナビの逃げ場を封じてあるものを放った……ゼロウイルスを……」

スバル「ゼロウイルス？」

今までに聞いたことがない単語に疑問に思った。

ロックマン（R）「科学省がウイルスを元に産み出した知能は持たず目標をデリートするまで止まらない殺戮プログラムだよ……ウイルスを元に作られているため数に限りがなく一体一体が強く、ネッ

トナビは次々とデリートされていった……僕も同胞を助けるために戦ったけど……助けられなかった……僕は……みんなを……」

ロックマンの声は震えていた……

スバル「ロックマン……」

ＳＳロックマンから思わず声が漏れた。

ロックマン（Ｒ）「スバル君ならわかってくれるよね……オペレーターから切り離されたネットナビの気持ちが……大切な人がいなくなった時の悲しみが……だから決めたんだ……人間に復讐する事をネットナビ達が受けた苦しみを人間達にもあじあわせる事を！」

スバル「待って！気持ちはわかるけど人間に復讐することは間違ってるよ！ロックマン！君ならわかるはずだ！こんな事をしても誰も喜ばないって！何にもならないって！」

ＳＳロックマンはロックマンの考えを否定した。

復讐からは何も生まれない事をジャックやクインティア達から学んでいたから……

ロックマン（Ｒ）「確かに復讐からは何も生まれない……」

スバル「だったら……」

ロックマン（R）「……けど僕はやらなくてはならない……みんなの思いは僕が晴らす！邪魔をするならスバル君でも容赦はしない……スバル君、最後のチャンスだ……僕の仲間になれ！星河スバル！」

ロックマンは強い口調でSSロックマンに訪ねた。

スバル「断る！今の君は間違ってる！人類を滅ぼそうとしている君に協力はできない……僕に出来ることは君の目を覚まさせる事だ！」

SSロックマンは左手にバスターに変えるとロックマンに構えた。

ロックマン（R）「……残念だよ。またスバル君と戦う事になるなんて……けど僕は止まるわけにはいかない……ネットナビとの絆を忘れたら人類に裁きを下す……それが僕のやるべき道だ！」

ロックマンの口にマスクがかかると、周りから黒いオーラが吹き出した。

ウォーロック（何だ……このまがまがしい電波は！）

ウォーロックはロックマンの周りから出た黒いオーラから放たれる電波に驚いた。

スバル「ロック、最初から全力で行くよ！」

ウォーロック『当たり前だ！』

ウォーロックは姿を消しＳＳロックマンの中に戻った。

ロックマン（Ｒ）「（借り物の体では出せる力は限界があるが……）僕は負けない！」

ロックマンも構えると２人は睨みあった。

少しの沈黙のあと２人は同時に動いた。

スバル「ノイズチェンジ！……」

ロックマン（Ｒ）「ソウルユニゾン！……」

２人は光に包まれて行った……

Rの提案（後書き）

次回、ロックマンとＳＳロックマンの戦いが始まります。

今回の話でロックマンＥＸＥの過去に触れましたが時が来たら確りと書くつもりです。

ちなみに今回の話しに出てきたゼロウイルスはアニメに出てきたのと同じデザインです。

設定が違いますが同じような奴です。

次回の更新は遅れるかも知れませんが宜しくお願いします。

感想をお待ちしてます。

VSソウルユニゾン（前書き）

何とか修正が終わりました。

前半部分を中心に行とセリフを少し変えています。

機会があれば読み返して見てください。

いろいろ変わってます。

（別に読まなくても大丈夫です。（笑））

VSソウルユニゾン

スバル「…キグナスノイズ！」

ロックマン（R）「…ガッツソウル！」

2人から光が消えると、

SSロックマンには翼が生え、アーマーの色が濃い青に変わりキグナス・ウイングに似た姿に代わった。

ロックマンは全体的にアーマーが増えて色が黄色に変わりガッツマンに似た姿に代わった。

スバル「！姿を変えた……」

SSロックマンはロックマンの姿が変わったことに驚いていると……

ロックマン（R）「…バトルチップ・スーパーバルカン！」

ロックマンは右手をバルカンに変えるとガッツソウルの効果でパワーアップしたバルカンを連射した。

スバル「……！」

ＳＳロックマンは少し動きが遅くなったが勢いよく飛び上がりバルカンを避け始めた。

ロックマン（Ｒ）「戦いは始まっているんだよ！」

そう言いながらロックマンはＳＳロックマンにバルカンを撃ち続けるが、

ＳＳロックマンはロックマンの周りを旋回しながらバルカンを避け続け続けた。

ウォーロック『避けるだけじゃ何にもならねえぞ！』

スバル「……わかってる！…フェザーショット！」

ＳＳロックマンは一瞬で飛ぶ向きを変えて技を出せる体勢を作ると翼から羽を飛ばして攻撃した。

ロックマン（Ｒ）「よっと！」

ロックマンは当たる前に横飛びして攻撃を避けた。

避けた際にバルカンの狙いがそれた。

スバル「（今だ！）メテオライトバレッジ！」

SSロックマンは両手でエネルギーを溜めるとロックマンに向けてエネルギー弾を大量に乱射した。

ロックマン（R）「！（……直撃は…）あれか！バトルチップ・センシャホウ×2」

ロックマンは両手に巨大な砲台を二つ展開すると直撃する直撃する二発のエネルギー弾を破壊した。

残りのエネルギー弾がロックマンの周りに直撃した。

スバル「なっ……」

ウォーロック『防ぎやがった！』

二人がロックマンの動きに驚いていると……

ロックマンが乗っていたウェーブロードが衝撃で崩壊した。

ロックマン（R）「！（足場が…なら！）ソウルユニゾン・ウインドソウル！」

ウェーブロードが壊れ落下するロックマンが光に包まれると全身のアーマーが水色の風をモチーフにした姿に変わりウインドマンに似た姿に代わった。

スバル「ノイズチェンジに似た力なのか……」

ＳＳロックマンはソウルユニゾンについて考えていると……

ウォーロック『来るぞ！』

ロックマンは浮き上がるとＳＳロックマンいる同じ高さまで上昇した。

ロックマン（Ｒ）「以前よりも強くなっているね、スバル君。」

スバル「ロックマンこそ……」

ロックマン（Ｒ）「今度はこっちの番だよ！スイコミ！」

スバル「！」

ウォーロック『なっ！』

突然強風が吹きロックマンの入る方に吸い込まれていく。

ロックマン（Ｒ）「バトルチップ・フウアツケン！」

ロックマンはソードを右手に展開すると向かってくるＳＳロックマンを迎え撃つ。

ウォーロック『くそ！止まらねぇ！』

何とかロックマンの方に吸い込まれないようにしようとしたが出来なかった。

スバル「……なら！バトルカード・エドギリブレード！」

ＳＳロックマンは止まれないとわかると左手に刀を展開してロックマンに突っ込んだ。

２人のソードと刀が激しくぶつかりあうが……

ロックマン（Ｒ）「はぁぁぁぁぁぁぁ！」

スバル「ぐっ……」

ロックマンがソードを振ると同時に突風が発生してＳＳロックマンは吹き飛ばされた。

吹き飛ばされたＳＳロックマンの勢いは止まらず近くのウェーブロードに叩きつけられた。

ウォーロック『くそ！気流を乱されて空中戦は無理だ！』

スバル「ぐっ……ならあのスイコミを利用するよ！ノイズチェンジ・オックスノイズ！」

ＳＳロックマンが光に包まれると全身のアーマーが赤くなり角が生えてオックス・ファイヤに似た姿に代わった。

ロックマン（Ｒ）「飛んでなくても吸い込めるよ！」

ロックマンはＳＳロックマンのいるウェーブロードの先に移動すると吸い込みを始めた。

ウォーロック「耐えろ！スバル！」

スバル「わかってる！」

強力な吸い込みに耐えながらＳＳロックマンは構えて炎を産み出していく……

ロックマン（Ｒ）「！」

スバル「アトミックブレイザー！」

ＳＳロックマンは強力な火炎放射をロックマンに放った。
強力な炎はスイコミにより加速しながらロックマンに向かっていく。

ロックマン（Ｒ）「！（しまったスイコミを…）バトルチップ・カースシールド×３！プログラムアドバンス・エンドレスカーズ！」

ロックマンは前方に三枚の手と顔があるシールドを展開して炎を受け止めるが……

ピキ…ピキ…

シールド三枚に亀裂が入り始めた。

ロックマン（Ｒ）「少し受けきれないか…ソウルユニゾン・ファイヤソウル！」

ロックマンが光に包まれた瞬間にシールドが壊れて炎がロックマンを包んだ。

スバル「やった……？」

炎を放ち終わりＳＳロックマンはロックマンがいた所を見ていると……

ロックマン（R）「バトルチップ・ファイヤパンチ！」
突然ロックマンの声が聞こえたが……

スバル「……？」

前方から攻撃は全然来ない。

ウォーロック「下だ！スバル！」

スバル「！」

ウォーロックの声にすぐに横に飛ぶとSSロックマンがさっきまでいた地面から炎の拳が飛び出した。

SSロックマンは隣のウェーブロードに着地した。

ロックマン（R）「よく避けたね。」

ロックマンがいた所の炎が晴れると全体的に赤色になり頭から炎が上がるファイヤマンに似た姿に代わったロックマンがたっていた。

ロックマンはジャンプしてSSロックマンのいるウェーブロードに移動した。

スバル「あれを防ぐなんて……」

ＳＳロックマンが見る限りロックマンにダメージはほとんど無かった。

ロックマン（Ｒ）「このくらいで驚いたら駄目だよ！ファイヤアーム！」

スバル「！ヒートキャノン！」

ロックマンが放った火炎放射にＳＳロックマンが放った火炎放射をぶつけた。

２人の炎が交わり合い爆発を起こした。

２人の視界の間に煙が立ち込めた。

スバル「（至近距離なら…）ノイズチェンジ・ジェミニノイズ！」

ＳＳロックマンが光に包まれると右腕は黒、左腕は白、体は黄色の姿に変わりジェミニ・スパークに似た姿に代わった。

ロックマン（Ｒ）「ソウルユニゾン・メタルソウル！」

ロックマンは全身のアーマーが増えて歯車が特徴的のメタルマンに似た姿に代わった。

2人は同時に変身が終わり、2人の視界を奪っていた煙が丁度晴れた。

2人はにらみ合い駆け出した。

スバル「バトルカード・スタンナックル！」

ロックマン（R）「メタルフィスト！」

SSロックマンは左手を電気の拳に変え、ロックマンは右手を巨大化させた。

スバル・ロックマン（R）
「「はぁぁぁ

VSソウルユニゾン（後書き）

SSロックマンとロックマン（R）との戦いはまだまだ続きます。

VSソウルユニゾン2（前書き）

寝てしまった……

VSソウルユニゾン2

スバル「ぐっ！」

2人の拳がぶつかったことで発生した衝撃波でSSロックマンは吹き飛ばされた。

SSロックマンは吹っ飛んで背中からウェーブロードに倒れた。

ロックマン（R）「ブレイク系の技に正面からぶつかるとはね……」

ロックマンは右手を戻しながらSSロックマンのいる方に駆け出した。

スバル（立たないと……）

SSロックマンはすぐに立ち上がろうとしたが……

ロックマン（R）「この技は本当は振り降ろす技なんだよね！メタルフィスト！」

ロックマンが今度は左手を巨大化させながら目の前にやってくると拳をSSロックマンに向けて振り降ろすが…

ウォーロック『ビーストスイング！』

突然、ＳＳロックマンの前にウォーロックが現れ鋭い爪を振り切った。

ロックマン（Ｒ）「！ぐっ…」

ロックマンはいち早く反応すると攻撃を止めて左手でビーストスイングをガードしたが勢いは殺せず、

横に飛ばされたがロックマンは隣のウェーブロードに着地した。

技を出すとウォーロックは消えた。

スバル「ありがとう、ロック。」

ウォーロック『気にすんな！それより一気に攻めるぞ！』

スバル「うん！バトルカード・ライメイザン×２！」

ＳＳロックマンが立ち上がると両手に二本の電気のソードを展開して隣のウェーブロードに移動した。

ロックマン（Ｒ）「（ソードか……）ソウルユニゾン・カーネルソウル！」

ロックマンは再び光に包まれると全体的に黒くなり、片手にソードが展開した姿になりカーネルに似た姿に代わった。

ＳＳロックマンは着地するとすぐにロックマンに斬りかかったが……

ロックマン（Ｒ）「バトルチップ・ソード・ワイドソード・ロングソード！プログラムアドバンス・ドリームソード！」

ロックマンは３つのソードを合わせて一本のエネルギーのソードを作り出し、ＳＳロックマンのソードを受け止めた。

そして２人の斬りあいが始まった。

お互いに激しい攻めと防御を繰り返していたが……

ロックマン（Ｒ）「はぁ！」

ロックマンはＳＳロックマンに向けて正面からソードを振り降ろす。

スバル「くっ！」

ＳＳロックマンは反応してソードをクロスさせて受け止めたが…

ピキ…ピキ…

ＳＳロックマンのソードにヒビが入り始めた。

スバル（ジェミニノイズでパワーアップしてるはずなのに……）

ジェミニノイズの効果で電気属性のバトルカードの威力は上がっていたが徐々に押され始めた。

ロックマン（R）（今だ！）

ロックマンはソードにヒビが入った瞬間にソードを切り返してソードを横に振り切った。

スバル「！」

SSロックマンは反応して後ろに飛びながら二本のソードで受け止めるが、

二本のソードは砕け散った。

スバル「ぐぁぁ…ぐっ！」

SSロックマンは斬りつけられて後ろに吹っ飛んだが体勢を立て直して着地した。

ロックマン（R）「…浅いか。」

ロックマンはSSロックマンが後ろに飛びながら受けたために攻撃

が余り効いていない事に気づいていた。
ソードもソード同士のぶつかり合いによりパワーをかなり消費していた。
そのためドリームソードは形を保てなくなり消えてしまった。

スバル「危なかった…」

ＳＳロックマンは少しアーマーが欠けただけで大きな傷は無かった。

ウォーロック「スバル、ノイズ率がかなりの数値まで上がってる。ファイナライズで一気に行くぞ！」

ロックマンとＳＳロックマンが何度も攻撃をぶつけ合ったことでノイズ率が９００％台のレベルまで跳ね上がっていた。

スバル「わかった……！ファイナライズ！ブラックエース！」

ＳＳロックマンが今までと違う光に包まれると黒と灰色のアーマー身に付け黄緑のボディーラインは入り、背中から赤い光を放つ翼が展開された。

ロックマン（Ｒ）「…今までとは違うな……スクリーンディバイド！」

ロックマンはＳＳロックマンに警戒しながらソードを振ってＳＳロ

ックマンに斬撃を飛ばすが……

スバル「……」

ＳＳロックマンは無言で右手を黒いソードを展開すると斬撃に合わせてソードを振って斬撃を弾いた。

ロックマン（Ｒ）「……面白い！」

ロックマンが叫ぶと体から吹き出していた黒いオーラの量が増加した。

それを見たＳＳロックマンはソードをロックマンに向けた。

スバル「君を…破壊する！」

ＳＳロックマンが呟くと体中の物が何かに共鳴するように疼いた。

ウォーロック・ロックマン（Ｒ）『「！」』

ウォーロック（何だ…体が熱い……）

スバルは気づいていないようだったがウォーロックは体の異常に気がついた。

ロックマン「！…少し様子を見させてもらうよ。」

ロックマンもＳＳロックマンから何かを感じ、すぐに行動に移った。

ロックマン（Ｒ）「ソウルユニゾン・サーチソウル！」

ロックマンは光に包まれるとアーマーの色が緑になり右手はライフルに変化した姿になりサーチマンに似た姿に代わった。

ロックマンは変身が終わるとすぐに後方に飛んでＳＳロックマンから離れ始めた。

スバル「……」

ＳＳロックマンは無言でロックマンを見つめている。

ロックマン（Ｒ）「スコープガン！」

ロックマンは後方に下がりながらスコープガンを五発を連射してＳＳロックマンの顔、両肩、胸、両足の五ヶ所をピンポイントで狙撃するが……

スバル「……効かないよ。」

ＳＳロックマンは傷１つ付いていなかった。

ロックマン（R）「……もうチャージショットじゃ効かないか……」

ロックマンはそう呟きながら後方に下がり続ける。

スバル「今度はこっちから行くよ！」

SSロックマンは飛び上がるとロックマンに向かって飛んでいく。

ロックマン（R）「バトルチップ・サークルガン×3！」

ロックマンは向かってくるSSロックマンに向けて下がりながら狙撃をするが……

SSロックマン（遅い！）

SSロックマンは加速と減速を繰り返し、素早い動きで攻撃を回避していく。

ロックマンは下がりながら攻撃を続けるがSSロックマンは凄い速さで距離をつめていく。

ロックマン（R）「（もう近すぎで狙撃できない……）ソウルユニゾン・トマホークソウル！」

ロックマンは立ち上がると光に包まれ、片手にトマホークが展開されてた、黄緑のアーマーで頭の羽の飾り物が特徴的な姿になりトマホークマンに似た姿に代わった。

ロックマンは向かってくるＳＳロックマンをギリギリまで引き付けると……

ロックマン（Ｒ）「トマホークスイング！」

片手のトマホークを振り切った。

スバル「！」

ＳＳロックマンは斬りかかるトマホークが来た瞬間に上昇してトマホークを紙一重で回避し、ロックマンの頭上を通り過ぎる瞬間に攻撃を放った。

スバル「バトルカード・プラズマガン×３！」

ＳＳロックマンは左手をプラズマガンに変えると電気の弾丸を３連射した。

ロックマン（Ｒ）「ぐっ……動きを……」

攻撃をしたばかりのロックマンは避けることができずに直撃した。

そのためプラズマガンの効果で麻痺状態になり動きを封じられた。
ＳＳロックマンはロックマンの頭上を通り過ぎるとロックマンの背後に着地して左手をバスターに変えた。

スバル「ロックバスター！」

ＳＳロックマンはロックマンに向けてバスターを連射した。
動けないロックマンにバスターの直撃が続きダメージをあたえ続ける。

ロックマン（Ｒ）「ぐっ……！バトルチップ・ドリームオーラ！」

数秒後、麻痺状態が無くなり動けるようになったロックマンはすぐにオーラを展開して一定より弱い攻撃のダメージを受けなくなった。

スバル「ロックバスターが効かない……なら！」

ロックマンに攻撃が効いてないことがわかるとＳＳロックマンはウォーロックアタックで一瞬で近づいた。

ロックマン（Ｒ）「！」

スバル「バトルカード・ウィンディアタック！」

ＳＳロックマンは左手を団扇に変えるとロックマンをオーラごと吹き飛ばした。

ロックマン（Ｒ）（ドリームオーラを一瞬で……）

吹き飛ばされたロックマンは空中で体勢を立て直して離れたウェーブロードに着地した。

ロックマン（Ｒ）「……その力……流石だよスバル君。」

ロックマンは呟きながらＳＳロックマンを見つめた。

スバル「……」

ＳＳロックマンは左手を元に戻しながら無言でロックマンを見つめた。

ロックマン（Ｒ）「……君に対抗するためにこちらも更なる力を見せてあげるよ……カオスユニゾン・…」

スバル「！」

ロックマンは今までと違う邪悪な光に包まれていった……

ＶＳソウルユニゾン２（後書き）

今回、ノイズ率の上げ方を変えてみました。

技がぶつかった衝撃で上がるようになっています。

ＶＳカオスユニゾン（前書き）

最近書いてて思ったのですが決めゼリフを考えるのはやっぱり難しいですよね。

セリフを考えるのにかなり時間がかかってしまいました（笑）。

VSカオスユニゾン

ロックマン（R）「…メディカオス！」

ロックマンから光が消えると背中に背負っていたものが変わりメディに似た姿に代わったがカラーリングがメディと全く違っていた。

そしてロックマンから出ていた黒いオーラの量が更に増加した。

ロックマン（R）「どうかなスバル君、これが闇をコントロール可能にする姿だ。」

ロックマンが呟きSSロックマン見つめると……

スバル・ウォーロック「『！』」

再びSSロックマンの体内の何かが共鳴するように疼いた。

今度はスバルも気づいたようだ。

スバル「なんだ……この違和感……」

ウォーロック（くそ…まただ…体が熱い……）

数秒ほどで異常は治まったが2人は原因がわからなかった。

ロックマン（R）「……そうだったのか。スバル君の中にも切っ掛けがあるんだね……」

ロックマンは何かに気がついたように呟いた。

スバル「切っ掛け……？何の事だ！」

ロックマン（R）「いずれわかるさ……ダークリカバリー！」

ロックマンはSSロックマンの質問に答えず技の使った。

スバル「！」

ウォーロック『バカな、あの傷を一瞬で……』

SSロックマンはロックマンが使った技を見て驚いた。

今までの攻撃で傷だらけでボロボロだったロックマンの全ての傷が一瞬で治り、体力も回復した。

スバル達の使っている回復技より回復速度や回復量ともに優れていた。

ロックマン（R）「闇の力をコントロールすれば最高の力を与えてくれる。今の君に勝てるかな！カオスユニゾン・ナパームカオス！」

ロックマンは再び異質な光に包まれると両肩に砲台が付き、ナパームマンに似た姿に代わったがカラーリングがナパームマンと違う色をしていた。

スバル「闇の力……」

ウォーロック『スバル！余計なことを考えるな！今の俺達は最高レベルのファイナライズをしてるんだ！負けるはずはねえ！』

スバル「うん！」

少し怖じ気づくスバルにウォーロックは声をかけ、ＳＳロックマンは飛び上がりロックマンに向かっていった。

ロックマン（R）「ダークメテオ！」

それを見たロックマンは技を放った。

放つと上空からＳＳロックマン目掛けて隕石が大量に高速で落下していた。

ウォーロック『スバル！』

スバル「！」

ＳＳロックマンは隕石を避けるため高速で旋回した。
すると隕石がＳＳロックマンを追いかけるように落下していった。

ウォーロック『何て威力だ！当たるなよスバル！』

ＳＳロックマンが高速で移動しているため隕石があちらこちらに落下してウェーブロードを砕け散っていた。

スバル「わかってる！」

ＳＳロックマンは回避を続けながら徐々に近づいていく。

ロックマン（Ｒ）「ファイヤバルカン！」

ロックマンは近づいてくるＳＳロックマンに炎のバルカンを連射したが……

スバル「バトルカード・オーラ！」

ＳＳロックマンはオーラを周り展開して一定より弱い攻撃でダメージを受けなくなった状態で一気に近づいた。

ファイヤバルカンではＳＳロックマンにダメージを与える事はできない。

ロックマン「なら！ナパームボム！」

ロックマンはバルカンを撃つのを止め、肩の砲台から強力な一撃を放ちＳＳロックマンに攻撃した。

ウォーロック『避けるなスバル！突っ込むぞ！』

スバル「うん！」

ＳＳロックマンは避ける事なくナパームボムに突っ込んだ。

そしてナパームボムが直撃し、周りに展開いたオーラが消し飛んだがＳＳロックマンは止まらない。

スバル「エレメンタルサイクロン！」

ＳＳロックマンが回転を始めると周りに大量の葉っぱが現れＳＳロックマンを周りを回り始めた。

まるで草の竜巻がロックマンに突っ込んでいく。

ロックマン（R）「（直撃前に全てを燃やすのは無理か…なら！）カオスユニゾン・トードカオス！」

ロックマンは後ろに飛びながら異質な光に包まれると蛙の被り物をしていてトードマンに似た姿に代わったがカラーリングが違っていた。

変身が終わると竜巻が目の前にやって来ていた。

ロックマン（R）「（間に合え！）ダークワイド！」

ロックマンはすぐに竜巻に向けて水の技を放ち直撃させた。

ウォーロック『そんなんで止められるかよ！』

SSロックマンの技は止まらずにロックマンに構わず突っ込んでいく。

ロックマン（R）「それはどうかな？」

スバル・ウォーロック「『！』」

SSロックマンの周りを回っていた葉っぱに大量の水が直撃した事により葉っぱが濡れて重くなり全ての葉っぱが地面に落ちてしまった。

そのためＳＳロックマンの周りには何も無くなってしまった。

スバル（こんな方法でエレメンタルサイクロンを止めるなんて……）

ＳＳロックマンは回転を止めてロックマンから距離をとろうとしたが……

ウォーロック『スバル！』

スバル「！」

ロックマン（Ｒ）「遅いな！」

ロックマンは隙を作らずエレメンタルサイクロンを破ったあとすぐに前方に跳ぶとＳＳロックマンを腹を殴って吹っ飛ばした。

スバル「がは……ぐっ！」

ＳＳロックマンは重い一撃に意識が飛びかけたがすぐに空中で体勢を立て直して距離をとった。

ロックマン（Ｒ）「この程度の技じゃ僕は倒せないよ。」

ロックマンはウェーブロードに着地してＳＳロックマンを挑発した。

スバル「……ならこれならどうだ！」

ＳＳロックマンが右手を天に向けると黒い光が発生し、右手をロックマンに向けた。

するとロックマンの近くにブラックホールが現れた。

ロックマン（Ｒ）「！」

ロックマンは一瞬でブラックホールに吸い込まれた。

そしてＳＳロックマンは右手にソードを展開した。

スバル「ブラックエンドギャラクシー！」

ＳＳロックマンは高速でブラックホールに近づくとブラックホールを切り裂こうとするが……

ロックマン（Ｒ）「カオスユニゾン・ブルースカオス！」

スバル「！」

突然ロックマンの声が聞こえるとブラックホールが縦に両断されブラックホールが消滅した。

そしてブラックホールからロックマンが飛び出してきた。

ロックマンは右手にソードを展開し、ブルースに似た姿に代わっていたがカラーリングが違っていた。

ロックマン（R）「ダークソード！」

ロックマンはそのままの勢いでSSロックマンに突っ込み2人のソードが激しくぶつかった。

スバル「くっ！」

SSロックマンは力に負けて後方に弾き飛ばされた。

ロックマン（R）「バトルチップ・エアシューズ！」

ロックマンはバトルチップの効果で空中を地面のように蹴って加速し、再びSSロックマンに斬りかかった。

ウォーロック『スバル！』

スバル「僕は……負けたくない！」

SSロックマンは体勢を立て直し、斬りかかるロックマンのソードをソードで受け止めた。

空中で2人は競り合いになったが……

ロックマン（R）「！」

スバル「うぉぉぉぉぉ！」

ロックマンはSSロックマンの力に負けて後方に弾き飛ばされた。

ロックマン（R）「何！（今の僕が押し戻された？）」

後方に飛ばされながらもロックマンは空中を地面のように蹴り体勢を立て直した。

スバル「負けられない！人々に危険をもたらす今の君に！」

……強い思い……確認…

…ココロフォース…始動…

VSカオスユニゾン（後書き）

スバルもココロフォース発動か？

次回決着？

VSカオスユニゾン2（前書き）

最近忙しい！

VSカオスユニゾン2

エラー！エラー！エラー！

異物干渉…ココロフォース

…不安定……思い不十分…

……フォース５０％発動！

スバル・ロックマン（R）・ウォーロック「「『！』」」

突然ＳＳロックマンの周りから白と黒の二種類のオーラが吹き出した。

ウォーロック『これは……ココロフォースが発動したのか？』

スバル「確かに不思議な力を感じるけど……姿は変わってないよ……？」

ＳＳロックマンはココロフォースを発動したがなぜか姿は変わらず、二種類のオーラが出ているだけだった。

ロックマン（R）「あれは…熱斗君のココロプログラム。どうしてスバル君が……！そうか…そうだったのか……」

ロックマンはＳＳロックマンがココロプログラムを持っていたことに驚いたが少し考えると全てを理解した。

ロックマン（Ｒ）「スバル君がもう１つのココロプログラムのオリジナルを持っているなんてね……君の仲間が使っているあの力もココロプログラムを真似たものか……」

ロックマンは空中を蹴りＳＳロックマン近づきながら話しかけた。

スバル「もう１つ？」

ロックマンが言った一言にＳＳロックマンは思わず聞き返した。

ロックマン（Ｒ）「知らないの？……いいよ教えてあげるよ。」

ロックマンは一瞬笑うと再び話し始めた。

ロックマン（Ｒ）「熱斗君が開発したココロプログラムは元々は２つを１つとして扱う事で完全な力を発動するプログラムなんだ。」

スバル「！」

ロックマンの一言にＳＳロックマンは驚いた。

ロックマン（R）「今から約１５０年前、熱斗君は自分の持つ全てを知識を注ぎ込みココロプログラムを開発した…が余りにも強大な力のため２つに分けた。そして１つは僕に預けた……このプログラムは元々僕のために作られた究極のプログラムだからね。」

スバル「ココロプログラムは元々ロックマンのために作られた物なのか……」

ＳＳロックマンは思わず呟いた。

ロックマン（R）「このプログラムは心を持っていないと使用できない……エクサメモリによって心を持ったネットナビである僕しか使えないんだ。」

ロックマンエグゼにはエクサメモリと呼ばれる特殊な圧縮プログラムに光彩斗のＤＮＡデータを人格データに変換したものが組み込まれているため心を持っている。

心を持ったネットナビはロックマンエグゼしかこの世に存在しない。

ロックマン（R）「もう１つはどこかに隠したって聞いていたけどスバル君に渡していたなんてね……確かに人間の君ならそのプログラムを使えるからね。」

ウォーロック『なるほど…これで謎が解けたぜ。』

スバル「謎？」

ウォーロックの言葉の意味がわからずスバルは聞き返した。

ウォーロック『なぜ１００年前にロックマンだけが生き残れたかだ。奴は恐らくココロプログラムの力を使って生き残ったに違いね！』

ウォーロックは今までの話から仮説を導きだした。

ロックマン（Ｒ）「確かに僕はココロプログラムによって当時ネットナビ最強の存在だった……あの力が無かったら僕はデリートされていたよ……でももう１つのココロプログラムを持っていたらきっとみんなを救えていた。更なる力があれば……」

ココロプログラムは１つでも凄い力を発揮する。

２つ合わされば今までより桁違いの力が発揮されるだろう……

ロックマン（Ｒ）「今のスバル君はココロプログラムを完全に使えていない……返してくれないか……」

ロックマンは悲しそうな声を出しながら徐々に近づいてきたが……

スバル「……それは出来ない！」

ＳＳロックマンは再び攻撃体勢に入った。

ロックマン（Ｒ）「……」

近づいて来ていたロックマンは動きを止めた。

スバル「この力を正しく使って欲しい……これが熱斗君が残してくれたメッセージだ！今の君は間違ってる！だから僕がこの力を正しく使って見せる！」

わずかだがＳＳロックマンの吹き出す二種類のオーラの量が増加した。

ロックマン（Ｒ）「……いい答えだ……」

ロックマンはＳＳロックマンに聞こえないくらいで呟いた。

スバル「この力で君を倒す！」

ＳＳロックマンはロックマンに突っ込んだ。

ロックマン（Ｒ）「偽りの体の今はココロプログラムが使えない……が闇を操る僕に勝てるかな！」

ロックマンは空中を再び蹴って高速で移動しながらＳＳロックマンに斬りかかる。

数秒後、２人のソードがぶつかり激しい斬り合いが始まった……

５分後……

ロックマン（Ｒ）「……このブルースカオスのスピードに着いてくるなんてね！」

ロックマンは空中を蹴り高速で移動して全ての方向から斬りかかっていたが…

スバル（見える！）

ＳＳロックマンは全ての攻撃に反応して激しい斬り合いが続いていた。

ロックマン（Ｒ）「…ダークソード！」

スバル「！」

ロックマンは残りの手にも新たなソードを展開して二本のソードで攻撃が続く。

スバル「くっ……」

激しい攻撃にＳＳロックマンは徐々に押され始めた……

ロックマン（Ｒ）「どうしたスバル君！君の力はこの程度か！」

ウォーロック『スバル！』

スバル「僕は……こんな所で負けられないんだ！」

ＳＳロックマンはソードに思いを乗せて振りきるとロックマンの二本のソードもろともロックマンを切り裂いた。

ロックマン（Ｒ）「ぐっ……」

ソードを折られて深くと斬られたロックマンは体勢を崩した。

ウォーロック『これで決めるぞ！スバル！』

スバル「うん！」

ＳＳロックマンは飛び上がり再び右手のソードを解除して手を天に向けて黒い光を放ち始めた。

ロックマン（Ｒ）「……さすがだよスバル君……今からでも遅くはない…僕の仲間になるべきだ……」

スバル「……お断りだ！」

ＳＳロックマンは右手をロックマンに向けるとブラックホールが現れた。

ロックマン（Ｒ）「ぐっ……スバル君……も力が覚醒すればわかるさ……自分はこちら側の存在だと！…」

ロックマンは叫ぶとブラックホールに吸い込まれていった。

それを見たＳＳロックマンは右手をソードに展開して斬りかかった。

ロックマン（Ｒ）「今度は…本当の力で…戦わせてもらうよ……」

ロックマンの声がわずかだがブラックホールから聞こえた。

スバル「ブラックエンドギャラクシー！」

ＳＳロックマンはロックマンをブラックホールごと両断し、ロックマンとブラックホールは爆発し、デリートされた……

～月内部データベース前～

ロックマン・Ｒが殺られたことでＲの意識は月に戻っていた。

Ｒ「ココロプログラムか……彼を覚醒させる事が当分の目的になりそうだね。」

Ｒはそう呟くと今まで戦っていたネットナビを月に戻るように連絡していった……

～スカイウェーブ～

スバル「ロックマン……」

爆発した場所を見ているとウォーロックが隣に出てきた。

ウォーロック『まだ奴は死んでいなねぇ……今度こそ決着を着けてやるぜ！』

スバル「そうだね……」

ウォーロック『コダマ小学校に戻ろうぜ。』

スバル「うん。」

ウォーロックが中に戻るとＳＳロックマンは地上に戻っていった……

VSカオスユニゾン2（後書き）

今回、エクサメモリと呼ばれる特殊な圧縮プログラムを出しましたが、

実際にゲームで出てきています。

ちなみに光彩斗君は幼くして心臓の病気で亡くなった熱斗君の双子のお兄さんです。

この2つを覚えていた人はかなりのエグゼをやり込んだ人ですね……

僕もですけど（笑）

みなさんも覚えておきましょう。

遊撃隊の危機１３（前書き）

今回で遊撃体の危機シリーズは終わりです。

遊撃隊の危機１３

～コダマ小学校～

現在、コダマタウンはウインドマンの影響で暴風が吹き荒れていた……

ハープ・ノート視点…

ミソラ「何で急に嵐になるのよ！」

ハープ・ノートは少し休んだあと他のメンバーの援護に向かっていたがが突然激しい風に音が書き消されどこにいるのかわからなくなっていた。

ミソラが呟いているとハープが隣に現れた。

ハープ『ネットナビが起こしてるのかしら?』

ミソラ「これじゃあみんながどこにいるかわかんないよ……」

ハープ・ノートは困りながらも探していると……

ハープ『ホントね……待ってミソラ、あの赤いのって……』

ミソラ「？」

ハープが示す方を見てみると……

ゴン太「……」

オックス・ファイヤが仰向けに倒れていた。

ミソラ「ゴン太君、大丈夫？」

ハープ・ノートはオックス・ファイヤに近づき声をかけた。

ゴン太「ミソラちゃん！…大丈夫だぜこのくらい……」

オックス・ファイヤはハープ・ノートが来たことに驚きながらも自分の情けない姿を見せないように立ち上がるが……

ゴン太「ぐっ……」

オックス・ファイヤは体勢を崩し膝を地面につけた。

ミソラ「待ってて傷を直すから……ヒーリングパルス！」

ハープ・ノートはギターを構えるとオックス・ファイヤに治癒能力

を持つ音波を放った。

音波を受けたオックス・ファイヤは暖かな光に包まれると傷が治っていった。

ゴン太「！傷が治ってく…ありがとうミソラちゃん！」

オックス・ファイヤは傷が治ると立ち上がりハープ・ノートにお礼を言った。

ミソラ「友達なんだから当然だよ。」

ハープ・ノートとオックス・ファイヤが話していると……

〔〔ジェ…ニ……ダー〕〕

風に書き消されてよく聞こえたかったがどこからか声が聞こえた。

ミソラ「ねぇゴン太君何か聞こえなかった？」

ゴン太「いや？……何も聞こえな……」

マグネットマン「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ミソラ・ゴン太「「！」」

突然マグネットマンが学校の屋上の柵を突き破り、上空で爆発してデリートされた。

ハープ・ノートとオックスファイヤが屋上を見ると2人組の姿があった。

ヒカル『俺らに勝とうなんて１００年早いんだよ！』

ツカサ「僕達の勝利だね。」

ジェミニ・スパークが倒したネットナビに何かを叫んでいるようだったがハープ・ノートとオックス・ファイヤにはよく聞こえない。

ゴン太「ツカサ君の奴ネットナビを倒したのか。」

ミソラ「そうみたいだね。」

このあとジェミニ・スパークの2人もこちらに降りてきて合流した。

ジャック・コーヴァス視点……

ジャック・コーヴァスとスワローマンは嵐の中激しい空中戦を繰り広げていた……

スワローマン「どうした！この程度か！」

スワローマンは片手をソードに変えた状態でジャック・コーヴァスの持つ大鎌と競り合っていた。

ジャック「そんな訳ねぇだろ！」

ジャック・コーヴァスが叫ぶとスワローマンのソードを鎌で弾くと鎌で斬りかかる。

スワローマン「いいぞ！お前の力を見せてみろ！」

スワローマンはソードで受け止め斬り合いになる。

ジャック（くそ……力が…）

ジャック・コーヴァスはココロフォースを発動していたがスワロー

マンは引きをとらない程の戦闘能力を見せつけていた。

スワローマン「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ジャック「ぐっ……」

ジャック・コーヴァスは斬り合いに負けて弾き飛ばされた。

スワローマン「残念だ……シェードマンに力を吸いとられなければもっといい戦いが出来ただろうに……」

ジャック「ふん、敵に同情される覚えはねえぜ。」

ジャック・コーヴァスは体勢を立て直すと言い返した。

スワローマン「強がりを！バトルチッ……」

R（……スワローマン。）

スワローマン「！…Rか…何の用だ。」

ジャック「……？」

スワローマンが何か喋っているようだったが風で書き消されてジャック・コーヴァスには聞こえたかった。

R（作戦は完了した。今すぐ戻って。）

スワローマン「……わかった。」

スワローマンは手のソードを解除してジャック・コーヴァスに呟いた。

スワローマン「また戦えることを願っている。」

ジャック「何を言ってるんだ！」

ジャック・コーヴァスは叫んだがスワローマンは答えずに光となって去っていった。

ジャック「……逃げられたか……」

コーヴァス『悔しいが負けそうだったぜ。』

ジャック「そんな事はなねぇ。次に会ったときは必ず倒す！それだけだ。」

ジャック・コーヴァスはしばらくその場から動かず決意を固めていた……

リエル・フェザー視点…

リエル・フェザーはトードマンとウェーブロード上で戦いを行っていた。

シズク「これで終わりよ！マジシャンズフリーズ！」

リエル・フェザーが唱えるとトードマンを中心に立っていたウェーブロードにペガサスの紋章が浮かび上がる。

トードマン「体が凍りついてて動けない……」

トードマンは避けようとしたが体のあちこちが凍りつき動けなかった

数秒後、巨大な氷柱が突き出しトードマンを襲った。

トードマン「がっ……人間…何…か……に……」

トードマンは氷柱の中で完全に凍結して動かなくなった。

シズク「これで私の勝ちね♪」

リエル・フェザーが勝ったことに喜んでいると隣にリエル現れた。

リエル『勝ったからって浮かれないの！』

シズク「別に浮かれていよ…それよりカケルは大丈夫かな……」

リエル・フェザーは周りを見渡すとコダマタウン全体が大嵐になっていた。

シズク『行っても風が強すぎて安定して飛べなから行っても足手纏いになっちゃうわよ。』

シズク「わかってるけど……」

リエル・フェザーは心配そうに呟くとコダマタウンの方を見つめていた……

ベルセルク・ビー視点…

Pトライブとウインドマンはコダマタウン上空で激しい戦いを繰り広げていた。

カケル（こいつ……）

ウインドマン「ウォォォォォォォォ！」

ウインドマンは周囲に竜巻が現れてPトライブに向かって飛んで行く。

カケル「……試してみるか！」

Pトライブは全ての竜巻を避けると一気に近づき右手の稲妻剣で斬りかかる。

ウインドマン「ウォォォォォォォォ！」

ウインドマンが叫ぶとウインドマンの周りに巨大な竜巻が発生して

ウインドマンを包んだ。

カケル「やはりか……」

Pトライブはまるでわかっていたようにウインドマンに斬りかかるのを止めて離れた。

カケル「オートで自分を守るようになってるのか……なら！」

Pトライブは稲妻剣を使って六芒星を描いた。

ウインドマン「ウォォォォォォォォ！」

ウインドマンはPトライブから力を感じたのか周りの竜巻を前方に集めた。

カケル「守りを固めたか……けど無駄だけどね。ネオカイザーデルタブレイカー！」

3属性の攻撃がウインドマンに向けて放たれた。

ウインドマン「ウォォォォォ……」

ウインドマンは前方の竜巻で受け止めようとしたがネオカイザーデルタブレイカーは全てを貫いた。

竜巻もウインドマンも……

ウインドマンは爆発してデリートされた。

その瞬間にコダマタウンを襲っていた嵐は消えてしまった。

カケル「……どうやら戦えるネットナビはもういないようだね。」

Pトライブは敵を倒したあと周囲の電波体を調べたが強いネットナビの反応がなかった。

ベルセルク『カケル、連絡があった。ＷＡＸＡを襲っていたネットナビも撤退した、すぐにサテラポリスをコダマ小学校に向かわせるそうだ。』

カケル「わかった……みんなの元に戻ろう。」

Pトライブはコダマタウンに向かっていった……

このあとサテラポリスが到着して被害を調べたり、デリートされていないトードマンのデータを解析したりと大変そうにしていた。

ちなみに学校の被害が大きく数日間の休校が決まった……

遊撃隊の危機１３（後書き）

実は近々学校のテストが始まるため当分の更新が出来ません。

なので区切りもいいので皆さんの感想、質問を募集します。

Ｒの正体を知ってどう思いましたか？

長い戦いの話でどう思いましたか？

気になっている事はありますか？

これまでのお話をどう思いましたか？

何か期待している事はありますか？

この話のどこどこが良いくてどこどこが悪い。

など何でもいいので感想、質問を募集します。

ネタバレにならない程度にお答えします。

テストのため更新が当分の出来ませんが必ず続きを書きますので待っていてください。

ノイズアウト？（前書き）

テストも終わったので更新を再開します。

この作品よりよくするために皆さんの感想、意見をお待ちしています。

今までに感想を書いたことない人でも大歓迎です。

よろしくお願いします。

ノイズアウト?

数時間後……

～月内部データベース前～

Rの命令によりネットナビが戻っていたが……

R「しかし20体も送ったのに3人しか戻れないなんて……」

戻ってきたのはシャドーマン、ナパームマン、スワローマンの三体のだけだった。

スワローマン「殺られた奴らは弱かった……それだけだろう。」

ナパームマン「それよりよR、作戦が成功したって言っていたがどういう事なんだ?」

ナパームマンは気になっていた事を質問した。

作戦は妙な力を使う電波体のウィザードを捕獲すると言うものだったがナパームマンは何もしていない。

シャドーマン「確かに……私が見る限りウィザードを捕獲できたようには見えないが……」

シャドーマンが見る限りウィザードいない……

R「その事なら大丈夫。今情報を頭に入れるから……」

そう言うとRは全てのネットナビにココロプログラムに関する情報を与えた。

シャドーマン「なるほど…しかしR、これから何をするんだ?再び遊撃隊を攻撃するのか?」

シャドーマンは次の作戦が気になり質問した。

R「いや、これ以上の戦力を削るのは得策じゃないから遊撃隊への攻撃はもうしない。」

ナパームマン「じゃあこれから何をするんだ?戦いの準備が出来るまで待機か?」

R「違うよ。これからは特定の人物にしか攻撃しない。」

スワローマン「特定の人物……誰だ?」

Rの言う特定の人物と言う言葉にスワローマンは気になり尋ねた。

R「現代のロックマンかな。」

Rは少し考えるとゆっくりと答えた。

ナパームマン「ロックマン?そいつを攻撃して何になるんだ?そんなに強いのか?」

ナパームマンはなぜSSロックマンを攻撃するのかわからなかった。

R「強いから攻撃するわけじゃないよ。彼を攻撃して覚醒に導く……それが当分の目的かな。」

シャドーマン「覚醒?ココロプログラムの力の事か?相手を強くしろと言うことか?正気か?」

シャドーマンは相手の力を引き出そうとしている事が信じられなかった。

R「うん。彼らはココロフォースと読んでたけど彼の力を覚醒させる、危険かも知れないけど必ず僕らの役に立つ……必ずだ。」

シャドーマン「……そうか、お前が言うなら信じよう。」

強く言うRにシャドーマンはRを信じる事にした。

スワローマン「しかしどうやって覚醒させるんだ?ただ攻撃していれば覚醒するのか?」

覚醒させる方法を知らないためRに尋ねた。

R「闇雲に戦っても彼は覚醒しないよ。方法はこれから考える。君達は今は休んでいてくれ、傷が酷いものはアイリスに治してもらってくれ。」

三体「「了解。」」

三体は返事をすると光となってその場から離れていった……

R「……今回の戦闘データのお陰で完全な電波化プログラムが出来る。これで僕も戦える……」

Rは呟きながらデータベース内部に消えていった……

ネットナビの襲撃……

コダマタウンで起きた今回の事件はメディアに大きく取り上げたがサテラポリスは電波ウィルスが大量発生したために起きたこと世間に説明した。

その際にネットナビの事は一切触れずに説明は終わり世間にはネットナビとの戦いについては知られていない……

そして数日後……

～ＷＡＸＡニホン支部～

ＷＡＸＡニホン支部では数日に渡りデリートせずに残ったトードマンの解析が行われていた。

トードマンは凍結により内部もかなり損傷していたため記憶などは取り出せなかったが色々な事がわかった為遊撃隊のメンバーが集められていた……

ヨイリー「それじゃあ解析結果を伝えるわね。」

現在この場所にいる遊撃隊のメンバーはスバル、ゴン太、ツカサ、ジャック、シズクの５人が集まっていた。

シドウとクインティアはコダマタウンで仕事で来ていない。
ミソラも学校が休みになったのでアイドルとしての仕事が沢山入ったため仕事に追われている。
カケルはここにはいないが近くでウィザードの修復やリアルウェーブシールドの修復を行っている。

ヨイリー「解析したネットナビには自爆プログラムと体を電波世界でも活動できるようにする特殊なプログラムが組み込まれていたわ。」

シズク「自爆プログラム何て持ってたんだ……」

シズクはネットナビを破壊していなかったので自爆する危険を知らなかった。

ヨイリー「他にもネットナビが見たり聞いたり考えたりした情報をどこかに伝えるプログラムも組み込まれていたわ。」

ジャック「じゃあ俺たちの戦闘データを取っていたのか？」

戦闘データを取ることで相手の戦闘力などがわかってしまうため余り良いことではない。

ヨイリー「それもあるかも知れないけど恐らくRが監視しているんだわ。」

スバル「監視ですか？仲間なのに？」

仲間を監視している理由がわからずスバルは聞き返した。

ヨイリー「あくまで推測だけど全てのネットナビを同時に操るのは不可能だわ。だからネットナビに命令して独自に作戦をこなさせていると思うの……その際に勝手な行動をとらせないようにする保険だと思うの。」

ツカサ「R以外のネットナビはこの戦いをどう思ってるんだろうね？」

ツカサの質問を答える事ができる人はおらずしばし沈黙が続いた……

しかしそんな中1人違う空気を出している人がいた……

ゴン太（……腹減った～）

ゴン太……がんばれ。

ゴン太は気にせず話を進めよう。

ヨイリー「ところでスバルちゃん。戦いの最中に周りのクリムゾンに異変はあったかしら？」

スバル「クリムゾンですか？……とくにありませんけど……」

２人が言うクリムゾンとはノイズ集まって出来る赤い結晶の事でノイズを吸収する働きを持っているが吸収量が限界を越えると爆発し、吸収量の数十倍の量のノイズを発生させる性質を持っている。

ロックマンとの戦闘の際にもかなりの数が発生していた。

ヨイリー「そう……それならいいけど……」

ヨイリーはとても心配そうな顔をしていた。

スバル「どうかしたんですか？」

ヨイリー「スバルちゃんが戦っていた場所のノイズ率を調べたんだけど短時間でノイズ率が急激な上昇を繰り返していたでしょ。」

スバル「はい。一度ファイナライズをしてノイズ率は０にしたんですけどすぐに戻ってしまって……」

ファイナライズは周りのノイズを吸収しながら変身するためノイズ

率は０％になったがロックマンの攻撃ですぐに高い数値に戻っていた。

ヨイリー「ノイズ率の急激な上昇を繰り返しているとノイズアウトと呼ばれる現象が起こる危険があるわ。」

４人（ゴン太以外）【ノイズアウト？】

４人が聞きなれない言葉に聞き直したがゴン太は……

ゴン太「何だそれ……食えるのか？」

１人だけ言葉の捉え方が違っていた。

ゴン太……しっかりしよ…

話を戻します。

ヨイリーの説明が始まった。

ノイズアウトは……

ノイズ率の急激な上昇が続くと発生するもの。

ノイズによって生まれたクリムゾンによって周りのノイズ率が減少する。

しかし再びノイズ率が急激に上がることでクリムゾンの吸収量が限界を越えて爆発する。

爆発したクリムゾンにより吸収した量の数十倍のノイズが発生し、ノイズ率が急激に上昇する。

発生したノイズにより周りにクリムゾンの発生と爆発を繰り返す。

何度も繰り返すことで空間に負荷がかかり限界を越えると空間にノイズの裂け目、ノイズウェーブの入り口が大量に発生する。

発生した裂け目は空間に存在する電波やノイズなど分解しながら無差別で全て吸い込む現象である。

ヨイリー「実際に起きた例が少ないから細かいことがわからないけどとても危険だから気を付けてね。」

スバル「わかりました。」

このあともネットナビに関する話が続いたがやはりゴン太はやはり上の空だった……

ノイズアウト？（後書き）

ノイズアウトと呼ばれるオリジナル設定を追加しました。

実際のゲームではこんな設定はありません。

誤解なさらないようよろしくお願いします。

個人的にゴン太は普段から周り人の話を余り聞いていない気がする……

何故だろう？

調べよう（前書き）

やっぱり日常のお話は難しいですね……

話を繋げるために少し強引に話をしてしまった（笑）。

調べよう

数時間後……

ヨイリー「これで話を終わりにするけど最後にスバルちゃんの報告を元にロックマンエグゼの事を調べたけど……」

ヨイリーは困った顔で話を始めた。

戦いの後スバルはヨイリーにRの正体がロックマンエグゼであることを伝えていた。

ヨイリー「余りここにもデータは残ってなかったけどロックマンエグゼは全てのネットナビが廃止になった際に一緒にデリートされたとなっていたわ。」

スバル「でも確かに……」

スバルは戦闘の際にロックマンエグゼだと確信していた。

ヨイリー「Rの正体は深く考えない方が良いわ。まだ直接あってもいないんだから。」

スバル「わかりました。」

ヨイリー「じゃあ今日は解散ね。」

４人【はい。】

スバル、ツカサ、ジャック、シズクはすぐに返事をしたが……

ゴン太「……！おう。」

ゴン太だけ返事が遅れていた……

そのころ……

ＷＡＸＡのニホン支部の外では……

カケル「リアルウェーブシールドの修復はこれで完了な……」

カケルが修復したリアルウェーブシールドを数人の科学者が確認していた。

科学者1（以前より防御力が上がってる……この子供本当に凄いな……）

科学者の1人が驚いていると……

カケル「修復と同時に少し中の構築プログラムを書き換えたんですけど……大丈夫ですか？」

何も言わない科学者に心配してカケルが訪ねると……

科学者2「ええ、問題ないわよ。ありがとう助かったわ。」

もう人の科学者が問題ないと答えた。

カケル「そうですか……」

カケルが返事をしていると……

シズク「カケル～会議終わったよ！」

カケル「！」

突然声が聞こえたので振り向くと今までに会議に出ていた5人の姿があった。

シズク「仕事中に声をかけて大丈夫だった？」

カケル「大丈夫だよ。今、仕事が終わったところだから。」

カケルは喋りながらみんなの元に移動した。

ジャック「もうリアルウェーブシールドの修復が終わったのか……早かったな。」

ジャックも作業の早さに少し驚いていた。

カケル「どうしたのジャック？これくらいならジャックだって直せるできるじゃないか？」

驚いているジャックにカケルは尋ねた。

ジャック「お前ほど早くは出来ねえよ。」

ジャックはディーラーにいた頃に受けた教育のおかげ？でそこら辺の科学者より頭が良い。

ツカサ「カケル君はもうネットナビの解析結果はもう聞いたの？」

会議に出ていなかったカケルを心配してツカサは尋ねた。

カケル「みんなが集まる前に資料は貰ってたから全部わかってるよ。そう言えばスバル君、Rがロックマンエグゼの可能性があるって本当？」

少しの沈黙……

スバル「……僕は確かに聞いたんだ。」

スバルは聞かれた際に何って答えれば良いか困ったが自分の考えを言うことにした。

カケル「世界の危機を何度も救ったロックマンエグゼが首謀者……信じられないな。」

カケルはRの正体がロックマンエグゼであることが信じられないようだ。

スバル「僕だって信じられないよ……いったい彼に何があったんだろう……」

5人【……】

スバルの疑問に答えることが出来る人はこの中にいるわけもなく沈黙が続いていると……

暁「どうしたお前らこんなところで？」

スバル達が話しているとシドウがクインティアと数人のサテラポリスを連れて戻ってきた。

6人【！】

突然話しかけて来たので6人はとても驚いた。

カケル「暁さん、学校の方はもういいんですか？」

暁「ああ、調査と修復の方は終わったんだ。」

ツカサ「じゃあ学校が再開されるんですか？」

ツカサの質問に答えたのはクインティアだった。

クインティア「まだ数日はお休みよ。まだ学校のノイズ率が高いの……」

今回の戦闘の影響でコダマ小学校全体のノイズ率が上がっていた。
下がるまではまだ時間がかかるようだ。

暁「休めるときにしっかり休んでおけよ。いつ敵が襲ってくるかわからないからな。」６人【わかりました。】

シドウは６人の返事を聞いた後、クインティアとサテラポリスのメンバーを連れてＷＡＸＡニホン支部に入っていった。

スバル「見送りはここまでで良いよ、ありがとう。」

シドウ達を見送った後スバルはみんな（ゴン太を除く）に言った。

この後スバルとゴン太はみんなに挨拶を済ませるとウェーブライナーに乗るために駅に向かっていった……

～ＷＡＸＡ付近の駅～

スバルとゴン太は駅に着くと話ながらウェーブライナーが来るのを待っていると……

カケル「スバル君〜」

なぜかカケルが1人で駅までやって来た。

スバル「カケル君？ごめんゴン太、ちょっと待ってて。」

ゴン太「おう。」

スバルはゴン太に言い残すとカケルの元に向かった。

スバル「カケル君どうしたの？何かあったの？」

追いかけてきたカケルにスバルは質問した。

カケル「いや、何でもないよ。ただ少しスバル君の事が気になってね。1つ聞くけど……ロックマンエグゼについて知りたい？」

カケルからの突然の質問に少し戸惑ったがスバルは答えた。

スバル「知りたいけど……」

カケル「じぁあ明日、僕の部屋に来て。ＷＡＸＡのデータベースのロックマンエグゼに関することを閲覧させてあげるから。」

スバル「えっ…良いの？」

スバルはカケルの言葉に驚いた。

ＷＡＸＡのデータベースは普段、スバル達では詳しく見ることが出来からだ。

カケル「スバル君、ヨイリー博士の言葉だけじゃ信じられなかったんでしょ？実際に調べてみようよ。」

スバル「……うん。」

カケル「じゃあ明日の午後１時にＷＡＸＡの宿舎の前に来てね。」

カケルは言い残すとＷＡＸＡに戻っていった……

スバル「明日か……ロックマンについてわかるのかな？……どう思うロック？」

スバルは呟きながらハンターＶＧを取りだしウォーロックに尋ねた。

ウォーロック『……』

ウォーロックから反応が無い……いやこれは……

スバル「寝てるし……」

スバルはウォーロックに呆れながらハンターＶＧを戻すとゴン太の元に戻っていった……

この後スバルとゴン太は数分後についたウェーブライナーに乗ってコダマタウンに戻っていった……

調べよう（後書き）

最近、ゴン太の使い方がワンパターンな気がする……

調べよう2（前書き）

今回は少し短いです。

調べよう2

次の日……

～スバルの家～

スバルは昨日のカケルとの約束でＷＡＸＡの宿舎に向かおうとしてたが……

ミソラ「私も付いてっていいでしょ？」

仕事が休みで家にいたミソラに呼び止められていた。

スバル「せっかくの休みなんだからミソラちゃんはゆっくりしてて。」

スバルはそう言いながら玄関に向かっていく。

ミソラ「私をおいて遊びに行くんだ……酷いよ。」

ミソラは追いかけながら寂しそうにスバルに話しかけている。

スバル「別に遊びに行くわけじゃないよ。用事があるんだ……行ってきます！」

スバルはそう言い残すと家の外に出ていってしまった。

ミソラ「あっ……」

ミソラはスバルが出ていった玄関を見つめていると……

ハープ『行っちゃったわね……』

ハンターＶＧの中からハープがミソラに話しかけた。

それを聞いたミソラはハンターＶＧを取り出した。

ハープ『これからどうするの？おとなしく休んでる？』

ハープがミソラに尋ねるとミソラはすぐに答えた。

ミソラ「見つからないように追いかけるよ。」

ミソラはすぐに行動に移るのであった……

玄関から出たスバルはウェーブライナーの駅に向けて移動しようと思っていると……

ウォーロック『スバル、今日はウェーブロードを経由していかねぇか？』

突然ハンターＶＧからウォーロックが話しかけてきた。

スバル「どうしたのロック？いつもは電波変換を移動に使うなって言ってるのに……」

ウォーロック『ちょっと気になる事があってな……』

スバル「？……わかった。今日はウェーブロードを使って行くよ……トランスコード！シューティングスターロックマン！」

ウォーロックが何を考えているかわからなかったがスバルは言われた通りにすることにした。

ＳＳロックマンに変身したスバルはＷＡＸＡニホン支部に向かうため（ＷＡＸＡの宿舎はＷＡＸＡニホン支部の敷地内にある）コスモウェーブに向かっていった……

～ニホンのコスモウェーブ～

ＳＳロックマンはＷＡＸＡニホン支部に向かっているとウォーロックが尋ねてきた。

ウォーロック『スバル、この前の戦闘でココロプログラムが発動仕掛けただろ、何でばーさんに言わなかったんだ?』

実はスバルはココロプログラムが発動しかけたことを報告していなかった。

スバル「だってみんなと違って不完全だったし、戦闘の時に感じた違和感の事もよくわからなかったから……」

スバルはロックマンとの戦闘の際に何回も体に違和感を感じていた。どうやらそのことを心配をかけたくなかったようだ。

ウォーロック『……プログラムを発動しかけた時に同時にプログラムに関する情報が頭に少し入ってきたがあの違和感に関することはなかったぜ。』

ココロプログラムが発動するとそのプログラムに関する情報が送られるようになっている。

スバル「何なんだろ……」

ウォーロック『ただあのプログラムは戦いながら力の発動率が上がっていた……強大な力のツケって奴じゃねぇか？今は何ともねぇだろ。』

実はＳＳロックマンは最初の発動率は５０％だったが戦いながら数値が上がり９０％まで上がっていた。

ちなみに２００％を越えると完全に発動する。

スバル「ツケか……そうかもしれないね。」

ウォーロック『わからねぇことを考えても仕方ねぇ。早く目的地に行こうぜ。』

スバル「うん。」

ＳＳロックマンは移動速度を上げてＷＡＸＡ宿舎に向かっていった……

数分後……

～ＷＡＸＡ宿舎～

カケル「早かったね。」

ＳＳロックマンがＷＡＸＡ宿舎に着くとカケルが入り口で待っていた。

スバル「もしかしてずっと待ってたの？」

電波変換を解きながらスバルは尋ねた。

カケル「違うよ。ベルにスバルが近づいてきたら伝えるように言っておいたんだ。」

ベルセルクはアシッド程ではないが広範囲の電波を探知できる。

ベルセルク『電気の力を上手く使えばこのくらいは簡単だ。』

カケルのハンターＶＧからベルセルクが飛び出した。

カケル「まあ立ち話も何だから2人とも中にどうぞ。」
カケルは中に誘導しようとしたがスバルはある異変に気づいた。
スバル「2人？」
スバルはここまで1人で来たはずだが……
カケル「どうしたの？」
カケルが間違えたようには思えないと思ったスバルが後ろを向くと
……
ミソラ「スバル君、お言葉に甘えさせて貰おうよ♪」
ミソラが当然の如く後ろに立っていた。
スバル「ミ、ミソラちゃん！？」
ミソラの突然の登場にスバルは驚いた。
カケル「何でそんなに驚いてるの？響さんから連絡を受けてるよ。
ロックマンエグゼに前にお世話になったから私も調べたいって。」
ミソラはカケルには連絡を済ませているようだ。

スバル「ミソラちゃん……いつ追いついたの？」

スバル困りながらも尋ねると……

ミソラ「数分後……のところかな。」

どうやらＷＡＸＡ宿舎に着く寸前に追い付いたようだ。

スバル「……一緒に行くの？」

スバルは少し考えるとミソラに尋ねた。

ミソラ「うん♪」

ミソラは嬉しそうに返事をしていた。

カケル「？……まあ…早く行こう。シズクも待ってるし……」

カケルは２人の会話がよくわからなかったがとにかく３人は中に入っていった……

調べよう2（後書き）

また忙しくなってきた……

調べよう3（前書き）

皆さんこんにちは

最近忙しくて更新が遅れ気味の青い光です。

最近、自分が小説を書き始めてからあと8日ほどで4ヶ月になることに気づきました。

早いですね……

最初は悪戦苦闘しながら書いていましたが今はかなり慣れました。

書き始めたころは全くなかったこの小説のお気に入り登録数や感想、ポイントなども着々と増えていて嬉しいです。

ポイントは作品に足りないものがわかって、参考になるのでつけてくれると嬉しいです。

感想をお待ちしてます。

調べよう3

～カケル・シズクの部屋～

スバルとミソラとカケルが玄関を開けると……

シズク「いらっしゃい♪」

シズクが明るく出迎えてくれた。

スバル・ミソラ「「お邪魔します。」」

スバルとミソラが一緒に挨拶をして3人は中に入った。

4人はひとまずリビングに移動した。

するとミソラが周りを見て呟いた。

ミソラ「シズクちゃんとカケル君はここで暮らしてるんだ……良いな～」

ミソラはどうやら二人暮らしが羨ましいようだ。

シズク「そうかな……」

ミソラ「そうだよ、2人暮らしなんて羨ましいよ。まるで新婚さんだね。」

シズク「新婚さんか／／／／」

シズクは今までカケルと一緒に住んでる状況が新婚さんみたいだと改めて考えると顔が赤くなった。

カケル「シズクは妹みたいなもんだからそんなんじゃないよ。」

ミソラの言葉を聞いたカケルが否定すると……

ミソラ（カケル君はシズクちゃんの気持ちがわかってないんだ……）

シズク（カケル……酷い…）

女子2人からカケルに向けて哀れみと悲しみの視線が送られた。

カケル「！……何か変なこと言ったかな……？」

カケルは視線に気づき数秒間考えたが視線の意味がわからず2人に聞こえないようにスバルに尋ねた。

スバル〔えっ！？……特に変なことは言ってないと思うけど……？〕

スバルもカケルに送られている視線の意味がわからず困惑した。

男子2人が話していると……

シズク「……カケルはスバル君と調べごとをしてて……私、ミソラちゃんに相談があるから……」

カケル「えっ…でも…」

シズクはカケルの言葉を聞く前にミソラを連れてシズクの部屋に入ってしまった……

カケル「どうしよう……完全に怒ってるよ……」

カケルは戸惑いながらスバルに問いかけると……

スバル「今は調べごとをしよう……シズクちゃんの事はミソラちゃんに任せよう。大丈夫だから。」

スバルはカケルを落ち着かせた。

カケル「そ、そうだね……じゃあ僕の部屋に行こう。」

スバルとカケルの2人はカケルの部屋に入っていった……

～カケルの部屋～

スバルとカケルが部屋に入ると直ぐにカケルはパソコンを起動させた。

スバルはひとまずカケルのベットに座った。

カケル「今からWAXAのデータベースのレベル4までの情報でロックマンエグゼについて調べるね。」

カケルは少し暗いがスバルに話すと……

スバル「レベル？」

スバルは聞きなれない単語に疑問を覚えた。

カケル「知らなくて当然だよ。普段アクセスする機会は無いだろうし……ＷＡＸＡのデータベースについて説明するね。」

ＷＡＸＡのデータベースに保存されている情報には重要な情報などに高いレベルが付けられる。

レベルは５から０までに別けられる。

レベル０にはホームページや一般に公開しても大丈夫なＷＡＸＡの情報や今までのＷＡＸＡの歴史や過去の活動などの情報が含まれている。

レベル１には職員の名前や通信記録などの電波を管理する情報などが含まれている。

レベル２には事件の資料や容疑者などのサテラポリスが使う情報などが含まれている。

レベル３にはトランスコードや今までのＦＭ星人、ＡＭ３賢者、ムー大陸、メテオＧなどの電波変換、電波体に関する情報などが含まれている。

レベル４はアシッドやジョーカー設計図やウォーロックコピーの情報など電波体の細かな情報などが含まれている。ココロプログラムもここに含まれている。

レベル５は……不明。

レベル１以上の情報を見るためにはＷＡＸＡの関係者のハンターＶＧにインストールされているアクセスコードを提示しなければなら

ない。

アクセスコードにはランクがあり高ければ高いほど重要な情報を閲覧できる。

簡単に表すと

レベル0…アクセスコードは不要。

レベル1~3…アクセスコードCが必要。

レベル4…アクセスコードBが必要。

レベル5…アクセスコードAが必要となっている。

ちなみにスバルは一様最低ランクのアクセスコードCを持っているが使った試しがない。

カケルは研究をしやすいようにとアクセスコードBにして貰っている。

カケル「こんな感じだけど必ずそのレベルに情報があるとは限らないから僕が調べられるレベル内のロックマンエグゼに関する情報を集めて見るね。」

カケルはそう言いながらハンターVGをパソコンに接続してアクセスコードBをパソコンに読み込んだ。

スバル「レベル5にはどんな情報があるの？」
スバルさっきの説明で不明になっていたレベル5の情報が気になり質問した。

カケル「僕は見たことないけど限られた人しか見れないらしいよ。主な内容は……知らないな……」

レベル5の情報はカケルも知らないようだ。

2人が話していると……

ベルセルク『カケル、データを集め終わったぞ。』

パソコンからベルセルクの声が聞こえた。

スバルとカケルが話しているとデータの収集が完了したようだ。

カケル「ありがとう、ベル。」

カケルはそう言いながらパソコンに集まったロックマンエグゼに関する情報を整理した。

カケル「これがＷＡＸＡに残っているロックマンエグゼに関する情報だよ。」

カケルの言葉を聞いてスバルも立ち上がりパソコンの画面を覗いた
……

～シズクの部屋～

シズクとミソラはシズクのベットに座ってお菓子を摘まみながら話し合っていた……

シズク「カケルにはもう少し乙女心をわかって欲しいよ……」

シズクはそう言いながらお菓子を悲しそうに食べていた。

ミソラ「カケル君もスバル君と同じで鈍感なんだね。」

ミソラもそう言いながらお菓子を食べた。

シズク「スバル君も何だ……でもミソラちゃんとスバル君は付き合ってるんでしょ？カケルより鈍感じゃないよ。」

ミソラ「いや……私が告白しなかったらスバル君とは友達のままだったと思うな……」

ミソラは告白をしていなかったらどうなったか考えると何の進展も無いまま時が過ぎていった気がした。

シズク「……友達のままか……このままだと私とカケルはただの幼馴染みのままなのかな……」

シズクはこのまま何も無ければ何の進展も無く幼馴染みの関係で終わってしまうと考えると落ち込んだ。

ミソラ「そんなことないよ。カケル君ならしっかりとシズクちゃんの思いを受け止めてくれるよ。」

ミソラは落ち込んだシズクを励ました。

シズク「……そうかな…」

ミソラ「そうだよ、自信を持って。」

シズク「……うん。ありがとう、ミソラちゃん。」

このあと少し元気になったシズクはミソラにスバルと付き合ってよかった事を聞くとミソラは顔を赤くしながら話していた……

調べよう3（後書き）

また短いかな……？

調べよう４（前書き）

活動報告の事ですが皆さんの意見を参考に決めました。

ずばり新しいタイトルは

流星のロックマンＦ
ＳＨＩＮＩＮＧ　ＤＡＲＫ
～シャイニングダーク～

です。

日曜日にでも変えようと思います。

調べよう4

～カケルの部屋～

カケル「こんな所かな……」

最初はパソコンの画面にはロックマンエグゼに関する情報が大量に表示されていたがカケルは情報を綺麗にまとめられていた

ロックマンエグゼの資料…

ロックマンエグゼは今から約２００年前に光祐一郎氏によって開発されたネットナビである。

ロックマンエグゼはオペレータである光熱斗氏と共にＷＷＷ、ゴスペル、ネビュラなどの悪の組織から何度も世界を救った英雄として今でも多くの人に知られている。

ネットバトル大会でも多くの大会で優勝しており特に光熱斗氏が中学生時代に開かれた大会では浦川まもる氏のネットナビ、セレナードとの激戦は多くの人を魅了したそうだ。

その後光熱斗氏が大学卒業、科学省に就職。

ロックマンエグゼも科学省で光熱斗氏と一緒に科学の進歩に貢献していった……

そして約４０年の時たち、光熱斗氏が科学省を定年で退職する頃にロックマンエグゼに転機が訪れる。

当時問題になり始めたオペレータを持たないネットナビの犯罪、暴走を減らすために科学省がある部隊を設立した。

インターネットの問題、危険を無くすためにネットナビによって構成された部隊である第１７精鋭部隊にスカウトされたのだ。

ロックマンエグゼは光熱斗氏の勧めもありスカウトを受けた。

それを気に自立型ネットナビになったロックマンエグゼは精鋭部隊の一員となってインターネットの多くの問題を解決に導いて行った……

そして更に約３０年の時がたちインターネットは普及し始めてから１００周年を迎えた。

これを記念して科学省は今までインターネットで開発、誕生した全てのデータを一ヶ所にまとめることを決定した。

がそのデータは人類の宝と言っても過言ではないほど貴重であり危険なデータだったので保管場所は秘密で行われた。

その作業を行ったのは数人の科学者と当時力を見せつけ隊長にまで出世していたロックマンエグゼひきいる第１７精鋭部隊であった。

この作業は５年程で完了したがその５年後に科学省の上層部はある決定を下した。

ネットナビなどのインターネット社会を破棄し更なる科学の進化の求め電波社会に変更することを決定したのだ。

この決定に最初は多くの人が反対したが出たが数年の歳月を掛け科学省はより良い社会の為に説得し電波社会への以降が完全に決定した。

ニホンの決定に促され世界各地が電波社会への変更が決まっていった……

このためこの決定に納得できないネットナビが問題、暴走を起こす事件が増加していった……

電波社会の以降のためのプログラムなどの開発が始まり更に5年程の月日を掛け現在の電波社会の礎を作り上げた。

そして徐々にインターネットから電波への切り替えが始まり全てのシステムを電波社会に切り替える際に不要とされたネットナビはインターネットに集められ回収されてデータを集められた。

この時にロックマンエグゼも回収されデータを提供し消えていった事になっている。

ここで集められたデータは電波社会に使われる予定だったが科学省であの事件が起こったため使われる事はなかったがネットナビがいなければ電波社会が成り立つ事は無かったであろう……

情報終わり。

スバル・カケル「「……」」

ロックマンエグゼの資料を見終わった2人は黙っていた。

スバル（ロックマンが言っていた事が何も書かれていない……どうなっているんだろう……）

スバルはロックマン戦った際に色々な事を聞いたがその事が一言も出なかった。

スバルはロックマンが言っていた事が本当か嘘かわからなくなった。

カケル「何か気になったことはある？」

カケルがそう呟くとスバルは考えながら尋ねた。

スバル「いろいろあるけど……最後の科学省に起きた事件って何？」

スバルは最初にロックマンエグゼから聞いた事と違うことについて聞こうと思ったが報告していなかったので聞かなかった。

カケル「わかった。すぐに調べるね。」

カケルがそう言うとＷＡＸＡのデータベースから情報を集めた。

科学省で起きた事件……

ネットナビからデータを集め終わってからすぐに起きたコンピューターなどの機材が大量に爆発を起こした事件の事である。

原因は不明。

この爆発により上層部の5人と数人の科学者が死亡、多くの怪我人をだした。

機材の全てが爆発したため機能失った科学省は当時、電波社会を造る為の人工衛星の開発などでデータのほとんどを共有していた世界宇宙観測・開発連合ニホン支部に吸収さる形で場所を設け、何とか機能を保ち電波社会への変更を完了した。

この世界宇宙観察・開発連合は今のＷＡＸＡニホン支部の元になる組織である。

因みに宇宙観察・開発連合とは電波社会の設立に必要な三基のサテライトの開発、設置の為に作られた連合である。

情報終わり。

スバル「そうだったんだ……」

スバルはわからなかった事がわかり納得していた。

カケル「完全な三基のサテライトの開発と設置にはかなり十数年の月日がかかったそうだよ。」

カケルは少し豆知識を呟いた。

スバル「へぇ～」

カケル「もう調べられる事も無さそうだしパソコンを閉じるよ。」

スバル「うん。」

カケルはスバルの返事を聞くとパソコンを閉じ始めた。

スバル「……写真？」

スバルは特にやることが無かったので部屋を見回してみると2つの写真立てを見つけた。

1つはディスプレイタイプだったがもう1つは特殊な紙に印刷されたタイプだった。

今どき紙を使って写真を残してるのは珍しかった。

今はほとんどがディスプレイで残すのが主流である。

カケル「見る？」

カケルはそう呟くと２つの写真立てをスバルに渡した。

１つは紙に印刷されていて３人が写った写真で幼いカケルとカケルの両親が写っていていた。

もう１つはディスプレイに表示されていて４人が写っていて今のカケルとシズク、シズクの両親が写っていた。

スバル「今どき紙に印刷してあるなんて珍しいね。」

カケル「両親がそう言うのが好きだったんだ。」

カケルは懐かしそうに呟いていた。

スバル「カケル君のご両親は今はアメロッパにいるの？」

スバルの質問に少し間をおいてカケルは答えた。

カケル「……事故で死んだんだ。この写真を撮った１ヶ月後…５年くらい前にね。」

スバル「ごめん……」

スバルは自分の不用意な発言に思わずカケルに謝った。

カケル「別に謝る事は無いよ……それにシズクの両親が僕を本当の子供のように育ててくれたしね。」

スバル「そうだったんだ……」

スバルはカケルの過去を知って少し驚いていた。

カケル「そろそろ部屋から出よう。もしかしたらシズクの機嫌も直ってるかも知れないし。」

スバル「そうだね。」

2人はひとまず部屋を出てリビングに向かった……

調べよう4（後書き）

調べようの話の中で色々なオリジナル設定を作っています。
他の作品には無い設定なので気を付けてください。

まもる君を話に入れたのはあの約束を守って欲しかったのからです。
因みにまもる君のネットナビがセレナードになっていますが通説を使ってみました。

確証はありませんが僕はそう思っています。

調べ終わって…（前書き）

タイトルを宣言通りに変更しました。

因みにFはファイナルと4などを意味しています。

調べ終わって…

カケルとスバルが部屋を出ると……

どうやらミソラとシズクも部屋から出てきていた。

ミソラ「出てきたよシズクちゃん。」

シズク「待ってたよ♪」

しかもシズクの機嫌が凄く良くなっていた。

カケル（シズクの機嫌は直ったみたいだね。）

カケルは声には出さなかったがシズクの機嫌が直ってほっとしていた。

スバル「こっちはロックマンについては調べ終わったよ。」

スバルはひとまず用事が終わったことを伝えた。

ミソラ「じゃあ後で教えてね。」

スバル「うん。」

スバルとミソラが話していると……

シズク「カケルは約束は必ず守ってくれるよね♪」

突然のシズクからの問いかけに疑問を持ちながらもカケルは答えた。

カケル「？…今までに僕がシズクとの約束を破った事無いでしょ。必ず守るよ。」

カケルは今までにシズクとの約束を破った事はなかった。

正確に言うと出来ないことや不可能なことは絶対に約束をしないのだ。

シズク「よし。じゃあミソラちゃんから発表があります。」

シズクは嬉しそうにミソラを呼んだ。

ミソラ「実はカケル君に伝える事があります。」

改まって言うミソラにカケルは答えた。

カケル「響さんとスバル君が付き合ってる事？その事なら誰にも言

わないよ？」

カケルは思い当たる事が無かったので適当に聞き返すが……

ミソラ「そう言う事じゃなくて……言いにくいんだけど……」

カケル「？」

ミソラは少し間を置くと言いきった。

ミソラ「わ、私とスバル君はよく一緒にお風呂に入ってます／／／／／／／／／／」

スバル「なっ／／／／／／／／／／」

ミソラの発言と同時に2人の顔は真っ赤になった。

カケル「！……なぜ行きなりこんなカミングアウトを……」

突然の発言にカケルは少し驚いた。

シズク「ミソラちゃん、ありがとう♪大丈夫、この部屋は完全防音だから私達以外には聞かれてないから安心して。」

ミソラ「……流石に恥ずかしかったな／／／／／」

顔を真っ赤にしたミソラをシズクが慰めていた。

カケル「しかしスバル君と響さんがね……もし響さんのファンに知られたらもうスバル君には会えないかもね。」

カケルは笑いながら言ったが……

スバル「だよね……」

ミソラは国民的アイドルでありコダマ小学校にも沢山のファンが入る。

もしこの話が広かったらスバルに明日は無いだろう。

そのためスバルの顔はすぐに真っ青になった。

カケル「だ、大丈夫だよ。若気の至りって奴だよ、大丈夫だから。」

顔を真っ青にしたスバルをカケルは必死に励ました。

5分後……

スバルとミソラはカケルとシズクの励ましにより落ち着きを取り戻

していた。

カケル「で、何で急にそんなことを言ってきたの？」

４人はソファーに座りカケルは聞きたかった事を尋ねた。

因みに席は

カケル　スバル

～　テーブル　～

シズク　ミソラ

となっている。

スバル「確かに、カケル君達に言わなくても……」

スバルもミソラの行動の意味がわからず尋ねた。

ミソラ「実はシズクちゃんの部屋で話してたら言っちゃったんだよね。」

ミソラはそう言うがカケルとスバルはますます意味がわからなくなった。

カケル「シズクに言ったのはわかったけど何で僕に言ったの？余り人には言わない方がいいと思うけど……」

カケルがそう言うとシズクが呆れながら言った。

シズク「カケル、忘れちゃったの？ＷＡＸＡの休日４を読み返して。」

シズクの発言に読み返してと変な言葉があったが気にせずその頃の事を思い出してると……

カケル「……あっ…」

カケルは少し考えると思い出した。

まず誰もいないと考えて言ったあの約束を……

シズク「約束は必ず守るでしょ♪偉いね、カケル♪」

嬉しそうにシズクはカケルを誉めた。

カケル「まさかこんな身近に一緒にお風呂に入ってる人が入るなんてな……」

カケルは肩を落とし信じられないように呟いた。

スバル「えっ？どう言うこと？」

スバルはカケルが落ち込んでいる意味がわからずミソラとシズクに尋ねた。

シズク「実はね……」

シズクはスバルに数日前にカケルと約束で同じ年で異性と一緒にお風呂に入っている人がいたら一緒にお風呂に入ってあげると約束していたことを説明した。

スバル「そうだったんだ……ゴメンね、カケル君。」

スバルはカケルが落ち込んでいる理由がわかり、申し訳ない気持ちになった。

カケル「いいんだよスバル君、僕の考えが甘かっただけなんだから……」

カケルは謝るスバルと話していると……

ミソラ〔……じゃあシズクちゃん、後は頑張ってね。〕

ミソラがカケルとスバルに聞こえないように呟いた。

シズク〔えっ！？〕

突然のミソラの発言にシズクは戸惑った。

ミソラ「スバル君、そろそろ帰ろ♪」

ミソラはそう言うと立ち上がった。

スバル「えっ？……そうだね、時間も時間だしそろそろ帰ろっか、ミソラちゃん。」

スバルはミソラの突然の発言に驚いたが時間を確認するとＰＭ４：００を過ぎていたので帰る事にした。

ＷＡＸＡニホン支部からコダマタウンまでウェーブライナーで帰る際はそれなりに時間がかかる。

カケル「えっ？電波変換で帰ればまだまだ大丈夫でしょ？」

カケルが言うように電波変換で帰れば後一時間は入れるのでカケルは呼び止めたがそこにシズクは話の間に入った。

シズク「（ありがとう、ミソラちゃん。）カケルはわかってないな～帰りは時間をかけて２人っきりで帰りたいんだよ。」

シズクはミソラに感謝しながら言った。

カケル「なるほど……ゴメンね2人とも呼び止めて。」

スバル「えっ？僕はそんなつも……」

ミソラ「気にしないでいいよ。行こ♪スバル君♪」

ミソラはスバルが言い切る前に連れていってしまった。

シズク「じゃあね、スバル君、ミソラちゃん♪」

カケル「じゃあね……（ずいぶん強引だったな……見間違いか？）」

シズクとカケルは部屋を出るスバルとミソラを見送った……

少しの沈黙……

シズク「……約束♪」

カケル「はい……約束。」

シズクは嬉しそうに呟くとカケルは過去の約束をしなければよかったと後悔していた……

調べ終わって…（後書き）

やはり日常は難しい……

次回でまとめなければ……

スキンシップ（前書き）

今回で日常は終わりです。

少し強引だったかな？

スキンシップ

～ウェーブライナー～

スバルとミソラはウェーブライナーに乗ると席に座った。

スバル達が乗ったＷＡＸＡニホン支部が経由するウェーブライナーは普段は使う人はあまりいないため周りには誰も乗っていたかった……

スバルはひとまず今日調べたロックマンエグゼに関する事をミソラに全て話した。

ミソラは真面目に話を聞いていた……

ミソラ「つまりロックマンがＲの可能性が高いけどＷＡＸＡの情報だともうこの世にはいない事になってるの？」

ミソラは今までの話を簡単にまとめてスバルに聞き返した。

スバル「うん。でも僕がＲと話した時にロックマンって名乗っていたんだ……どういう事なんだろう……？」

スバルは考えていた。

Ｒがロックマンエグゼなら隠されたデータベースの場所やスバルの事を知っていた事や説明がつく。

がＷＡＸＡの情報では消えた事になっている。

ＷＡＸＡの情報が間違っていてロックマンエグゼが生き延びていたとしても彼がどんな理由があろうとも地球を脅威にさらそうとしている事が信じられなかった。

スバルが２００年前に会ったロックマンエグゼは人とネットナビの未来を考えていた。

彼が何故……こんなことをしているのか、スバルにはわからなかった……

スバル「……」

スバルが考えていると……

ミソラ「……でもさ、何でネットナビが廃止になったのかな？確かに問題があったのはわかったけどそれって人間がネットナビを捨てたからだよ？」

ミソラの言うことは正しかった。

１００年前に問題になっていたオペレータのいないネットナビの増加や暴走、ネットナビによる犯罪の増加などは人間がネットナビを捨てたことに問題があった。

スバル「ミソラちゃんはネットナビが廃止になったのは他に原因があると思ってるの？」

スバルが尋ねるとミソラは少し考えてから言った。

ミソラ「……そうかも、だって今の私達がお世話になっているウィザードと何が違うの？」

ウォーロック『俺やハープは宇宙人だけどな。』

ミソラの言葉にいち早く答えたのはハンターＶＧから実体化したウォーロックだった。

スバル「そうだね。」

ウォーロックの言葉にスバル笑って答えたが……

ハープ『……』

それを見たハープはハンターＶＧから実体化すると無言でウォーロックを睨んだ。

ウォーロック『！』

ハープの視線から感じる殺気にウォーロックは固まった。

ウォーロックは何も言わなかったが実体化をやめハンターＶＧに戻った。

ハープ『ポロロン……ゴメンね。邪魔しちゃって。』

ハープもそう呟くとハンターＶＧに戻っていった。

ミソラ（ロック君には悪いけど……ありがとうハープ♪）

スバル（ハープ……怖いな。）

２人はそれぞれ別の事を思っていた。

ミソラ「……で、スバル君はどう思う？」

話がウォーロックに邪魔されたがミソラはスバルにもう一度尋ねた。

スバル「ネットナビとウィザードの違いか……何だろ？」

スバルは考えたがミソラの質問に答える事ができなかった。

ウィザードは電子機器に連動した人格を持ったプログラムである。

ネットナビも同じである。

ウィザードは電波体として実体化出来たが今のネットナビもそれが出来る。

わずかなウィザードは電波変換やファイナライズなどが出来るがとても限られている。

２つのプログラムの違い……

それは何も無い、ウィザードはネットナビのデータを参考にＦＭ星人やムーの電波体などのデータを合わせ作られた存在なのだから……

何故ネットナビを捨てた人類が再びウィザードを作り、使っているのか……

ネットナビを捨てた……これが世界を破滅へと導く原因だとは誰も知らなかった……

このあとスバルとミソラはウェーブライナーに揺られながらコダマタウンに戻っていった……

時がたち……

～ＷＡＸＡ宿舎～

カケル「……はぁ～」

シズク「どうしたの？」

ため息をしたカケルにシズクは尋ねた。

カケル「何で一緒にお風呂入ってるんだろ……」

今、カケルとシズクは一緒に浴槽に浸かっている。

シズク「約束だからだよ♪」

シズクは嬉しそうに言い返した。

カケル「約束か……しなきゃよかった……」

カケルの後悔は続いていた。

シズク「カケルはそんなに私とお風呂に入るのが嫌なの？」

カケル「嫌じゃないけど……いい歳なんだし洗いっことかしなくてもよかったんじゃないの？」

カケルがため息をする前にシズクに言われ髪や背中などを洗ったり洗われたりしていた。

シズク「スキンシップは大切だってお父さんが言ってたよ。」

カケル「スキンシップね……シズクは僕以外ともするの？」

カケルがそう言うとシズクは慌てて言った。

シズク「しないよ！カケルはその……幼馴染みだから……特別かな？」

シズクはそう言うと少し恥ずかしそうにしていた。

カケル「幼馴染みか……」

カケルはそう呟くと何かを考え始めた。

シズク「それにこうしてカケルとお風呂に入るのは楽しいよ♪」

シズクは嬉しそうに言っていた。

カケル「……1つ聞いていい？」

それを見たカケルは考えるのをやめてシズクに尋ねた。

シズク「どうしたの？」

カケル「……遊撃隊に入っていて後悔してないか？」

シズク「えっ？」

カケルからの予想もしていなかった内容にシズクは思わず言葉が漏れた。

カケル「リエルを任せた事でシズクに戦いに参加する切っ掛けを作っちゃったし、それにリエルは完全じゃない……心配なんだ。」

カケルは心配そうにシズクに言ったが……

シズク「心配しすぎだよカケル。カケルが作ってくれたエレメントＰＧＭがあれば大丈夫だよ。まだココロフォースは発動してないけど私、戦えるから。」

シズクはカケルの心配をよそに明るく言っていた。

カケル「でも、今回の戦いで思ったんだ……シズクを危険な事に巻き込みたくない……」

カケルは少し恥ずかしそうに言っていた。

シズク「／／／／／／／／／／」

カケルの言葉を聞いたシズクの顔は赤くなっていた。

カケル「シズク？どうしたの顔が赤いけど……！まさか、のぼせた！？」

カケルは前の事もありかなり慌てた。

シズク「ち、違うの！その……ありがとう、心配してくれて／／／／／／／／／」

シズクは恥ずかしそうに言っていた。

カケル「……幼馴染みとして当然だよ。」

カケルは優しく言うとシズクは少し嬉しそうにしていた。

シズク「じゃあ私も♪」

シズクはそう言うとカケルに抱きついた。

カケル「ちょっ……！」

いきなりだったのでカケルは慌てた。

シズク「幼馴染みとのスキンシップも当然だよね♪」

カケル「当然じゃない！」

このあとカケルはシズクを引き剥がそうとしたがなかなか離れずこのままの状態が続いたそうだ……

スキンシップ（後書き）

シズクのＰＧＭを書くのが遅くなりましたがエレメントＰＧＭです。

エレメント？と思った人もいると思いますが合ってますからね。

狙いは……

数日後……

～月内部データベース前～

ブルース「R……R！」

ブルースが呼ぶとデータベースからデータが飛び出すとRの形を作り出した。

R「どうかしたの？」

データベースから出てきたRはブルースに尋ねた。

ブルース「サテライト・ドラゴンから連絡が入っているぞ。」

ブルースはそう言うとRの目の前にディスプレイが映し出された。

そこはゲートマンが映っていた。

ゲートマン「R、問題が発生しました。」

R「問題？新しく設置したウイルス製造機に何か問題でもあったの

？」

ＲはＷＡＸＡを攻撃したあとに新たに４７台のウイルス製造機を制作していた。

その内の２７台は各サテライトに設置し、ウイルスを作り出していた。

残りの２０台は設置場所がまだ出来ていないので月内部でウイルスを作っている。

ゲートマン「いいえ、修復中のラ・ムーの事です。」

ゲートマンはそう言うと話を続けた。

ゲートマン「ラ・ムーの復元は８０％以上終わったのですが肝心のコアとなるデータが復元出来ない事がわかりました。このままではラ・ムーは復元出来ても起動しません……」

ゲートマンは困っていた。

ラ・ムーのコアはオーパーツであり、流星のロックマン２でオーパーツはムー大陸と共に海中深く沈んでしまっているからだ。

ラ・ムーのように巨大で重いものならその場からあまり動かず見つけることは可能だったがオーパーツは海流によってながられてしまっているので見つけ事はまず不可能だった。

R「それはこまっな……ラ・ムーの電波体を作り出せる技術はこの後の戦いには必要になる。コアか……！ちょっと待って。」

Rはそう言うと各地のＷＡＸＡ支部から集めた情報を確認した。

ゲートマン「どうかしましたか？」

突然、待つように言われたゲートマンは訳がわからず困っていた。

数十秒後……

R「あるじゃないか、コアとなるオーパーツが……それに……彼は使える。」

Rはそう呟くとゲートマンに尋ねた。

R「ゲートマン、作ったウイルスの総数はわかるかい？」

Rは今までデータベース内部にいたので外の情報を何も知らなかった。

ゲートマン「ウイルスですか？このサテライトではウイルスが約６万体です。他のサテライトや月にいるウイルスを合わせれば３０万体は越えると思われます。」

ゲートマンは突然の質問で困惑したがしっかりと伝えた。

R「３０万か……わかった。ラ・ムーの事はこちらで何とかする。次の連絡を待ってて。」

ゲートマン「わかりました。」

ゲートマンがそう言うとディスプレイが消えていった。

R「ブルース、今、月にいるのはナパームマンとセレナードを合わせて４人だけだったよね？」

ブルース「そうだが……それがどうかしたのか？」

現在、月には４人しかおらずカーネル、アイリス、スワローマン、シャドーマンは月から離れている。

カーネル達はウイルス製造機の設置場所を作るために廃棄された人工衛星や宇宙ステーションを探しだしアイリスの能力を使ってコントロールを奪っていた。

R「確認しただけだよ。じゃあブルースはナパームマンを呼んできてくれるかな？」

ブルース「わかった。」

ブルースはナパームマンを呼びに移動していった。

R「……ナパームマンが来るまでにカーネル達と連絡を取らないとな。」

Rはそう呟くとカーネルと連絡を取り始めた……

～とある人工衛星～

カーネル達はウイルス製造機を設置できる場所作るために人工衛星や宇宙ステーションのコントロールを奪う作業を続けていた……

カーネル「アイリス、あと何％だ？」

アイリス「６０％……」

シャドーマン「これが終わればあと2基か……」

能力を使っているため戦えないアイリスを2人は護衛していた。

スワローマン「スワローカッター！」

ウイルス「！」

スワローマンは人工衛星付近の邪魔なウィルスを片っ端から刈っていた。

スワローマン「弱い、弱すぎる……」

スワローマンがそんなことを呟くなかカーネルに声が聞こえてきた。

R（カーネル、聞こえる？）

カーネル「！……すまないが静にしてくれ、Rからの通信だ。」

カーネルはそう言うと意識をRの声に集中した。

R（今、何基目の人工衛星を奪ってるの？）

カーネル「今ので１８基目が終わるところだ。」

Ｒ「わかった。なら君達は作業を続けてくれ、あとコントロールを奪った人工物にはウイルス製造機を持たせたネットナビを向かわせるから……」

カーネル「わかったが何か始めるのか？」

突然の連絡に疑問を覚えたカーネルは質問した。

Ｒ（うん。ある用事を済ませてくるけどまだ君たちの力はまだ借りないから気にしないで大丈夫だよ。けど用事が終わったらある作戦を始めたいから今から１０時間以内に作業を終わして月に戻っていてね。）

カーネル「了解した。」

カーネルがそう言うとＲからの連絡は終わったようだ。

シャドーマン「カーネル、Ｒから何の連絡だ？」

シャドーマンには話が聞こえなかったのでカーネルに尋ねた。

カーネル「あと１０時間で作業を終わして月に帰還しろとの事だ。」

シャドーマン「そうか……どうしたアイリス？」

シャドーマンはアイリス異変に気づき尋ねた。

アイリス「また戦いが始まるんだね……」

アイリスは1人悲しそうな顔をしていた……

狙いは……（後書き）

次回はまたR視点で話が進みます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5503u/

流星のロックマンＦ　ＳＨＩＮＩＮＧ ＤＡＲＫ

2011年11月10日06時10分発行